E.M. 3-1-69

PL
787
U7
1929
v.2

Utsubo monogatari
Utsubo monogatari

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

顧問　井上通泰先生
　　　山田孝雄先生
　　　新村出先生

正宗敦夫　編纂
　　　　　校訂

日本古典全集

うつぼ物語　第二

PL
787
U7
1929
v.2

LIBRARY
MAR 28 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

うつほ物語

第二

うつぼ物語　第二目次

梅の花笠（一名春日詣）……二二七
吹上（上）……二五七
祭の使……三〇三
吹上（下）……三五一
菊の宴……三七七
あて宮……四四三

凡例

一、宇津保物語は、編輯者正宗敦夫氏の委囑によつて、藤田德太郎の校訂する所である。

一、校訂に當つて、底本としたものは、正宗敦夫氏の所藏本である。本書は、刊本に、靑朱墨の三色を以つて寫本との異同を書き加へた校本であつて、橡樟園、林氏圖書、東園文庫、勝安房の四種の藏書印が押されてあり、刊本はもと二十卷三十册本たるべきを、表紙を改め、二十册に綴ぢかへた改裝本である。奥書は、文化四年に校合したる旨の奥書が墨で概ね各卷の終に記され、また文化十二年に本居氏藏書を以つて校合したる旨の、橡樟園の奥書が、靑色で殆んど各卷全部の終に記されてゐる。猶、此の本に就いては、附錄の小論に解說する所があるであらう。

一、本文の文章は刊本の本文に從つて、明白なる誤字脫字をも改める所なく、嚴密に本のままとした。

一、校異の部に於て、㊀と記せるは、底本に書き加へてある異本の校合である。此の校合は前述の如く、靑朱墨の三色でなされてゐて、三種の異本を以つて校合を加へたものであり、その中、墨色は文化四年の校合にかかり、靑色は文化十二年の校合にかかり、朱色はこれを審かにするを得ないが、多分、以上兩種の寫本の何れかに既に加へられてゐた校合と思はれる。此の三色の校異はその差別の分明ならざるものがあり、或ひは、校合を加へる際、他色を以つて誤り記せるのではあるまいかと思はれる箇所さへあるので、暫く、

何れも同一符號の[イ]を以つて記したが、後、矢張り原本のままにした方がよいと思つたので、青色を[イ]、墨色をイ、朱色を異の符號を以つて現す事とした。此の符號は、祭の使の卷以下に用ゐられてゐる。但し、原本、校異を青色で記しながら、その下に加へられたる「イ本ニ」等の語句を、墨色で記したりして、兩者色を異にする場合がしば／＼あるので、これらは便宜上、校合の色を以て、符號を記す事とした。

一、校異の部の、[玉]は細井貞雄の宇津保物語玉松に出でた校異を全部取り入れたもの、これは國文註釋全書本によつたが、誤寫または誤植と思はれる箇所があつて、しば／＼從ひ難い所を見出す。次に、[友]と記せるは、友朋堂文庫本の本文の異れる箇所である。これは、同書が、從來の活版本中最も本文校訂の研究が行き屆いてゐると思はれるから、これを取り入れたものである。次に、[友]考異と記せるは、有朋堂文庫本の頭註に加へられた考異で、同書の緒言によれば、その中には、村田春海校正本、宇津保物語新治、久米幹文本、帝國圖書館藏古寫本二本が用ゐられてゐると云ふ。

一、以上の校異は、先づ底本の校合を第一としてあげ、それに見えざる異所を玉松によつて記し、更に、それらになき箇所を友朋堂文庫本、またはその考異によつて記す事とした。

一、底本にある校合は全部記した。時として本文の方宜しく、此の校合の方が寧ろ誤と思はれる箇所もあるが、總べて原本のまゝとした。また、同一文字に對する校異が二種以上ある場合も細大となく幷せ記しておいた。

一、本文は、讀み易きやう、多く漢字を宛て、歴史假名遣に改めたが、なるべく、底本の面影を殘すやうにつとめた。但し、刊本に附せる句讀點には從ひ難いものが多いので、句讀點は別に新に記し、行を改め段落を設けた如きも、刊本にはなき所である。

一、本文の文字の左傍に黒圏のあるのは、校異の部に、その異れる文字、又は、他の寫本にその字のなき旨が記されてゐる符號である。異本に文字の無き場合には、校異の部に、ただナシ。又は何字ナシと云ふやうに記した。

一本文の文字の左傍に△印のあるのは、明かに誤字、又は衍字と思はれる文字で、校異の部に、その正しい文字、又は他本に、その文字の無き旨が記されてゐる。但し、本文が明かに誤字であるけれども、他の寫本によつて、その正しい文字の求められざる場合、或ひは、他の寫本によつて二三種の異れる文字が求められ、その何れに從ふべきか判明しないやうな場合には、△印の代りに黒圏を付した。

一、本文の（ ）内の文字は、刊本になく、異本によつて補ひ、新に加へた文字である。これは校異の部に、何字[イ]ニヨリテ補フと云ふやうに、その出所が記してある。此の（ ）内の文句は必ずなければ意味の通じない故に、今補入したものであるが、時に、校合の便宜上取り用ゐた所もある。

一、他本との校合に於て、異本にある字句が、刊本の本文にはなく、且つ、その字句はあつてもなくても、餘り意味の上に差支へないやうな場合には、本文には別に補入せず、また何の符號も加へないで、ただ、校

異の部に、何々アリと云ふやうに記した。これも、異本の方が寧ろ衍字で、本文の如く無い方がよいと思はれる場合もあるが、細大となく掲げ記した。

一、すべて以上の校合は、本文の相當箇所に記せる番號と、校異の部の番號とによつて引き合はさるべきである。

一、本文の中、〔○…〕印のある中の字句は、何れも今校訂者の加へた註記である。

一、對話の箇所にある、「　」は何れも今新に加へた。

一、書詞と思はれる箇所は、［書詞］と記して行を改め、二字下げて記して、本文と分つた。

一、挿繪は刊本に有る物を全部挿入した。

一、校訂上の責任はすべて校訂者が負ふべきで、本文の假名に宛てた文字、註記等に關する責任も亦校訂者にある。但し、膨大なる此の物語を、早急の中に校訂し考異を加へて行く仕事であるから、時として誤謬なきを保し難い、大方の示教を得たいと思ふ。また校正上の誤として、誤植や、符號の付け違ひ等が間々見える。これは校訂者が校正に當つたわけではないが、矢張り指摘して頂けば幸ひである。

一、最後には、桑原やよ子の「宇津保物語考」を、帝國圖書館本及び水戸彰考館本によつて、藤田德太郎が校訂したものを收め、更に、校訂者の宇津保物語に關する研究の一端及び意見を草した「宇津保物語小論」を附載する積りである。

昭和五年四月七日

藤田德太郎記

梅の花笠　一名春日詣

かゝる程に年月過ぎて、その時の帝も退り居給1ふ。東宮國知り給ひて、年頃世2中たひらかに3國榮えてあり。かゝる程に、4右大將56男女御子源氏におはしませど、母方源氏におはします、内に御願ありて、春日に詣り給はんとて、いそがせ給ふ。御供に仕うまつるべき7う8るゐ、下仕への裝束調せさせ、の9も〔○衞〕府の靑色よりはじめ、隨從舞人らの裝束、臨時の祭の樣なり。馬の事を調へ、人のかたちなどを擇らせ給ふ事かぎりなし。童10べはしやう四十人11をとゝのへ、12男隨從四十人、舞人13は十人、はしり馬十疋。舞人は殿原の君達、殿上人、若14御君達よりはじめて、世の中に名高き遊物の者どもを15んな、裝束童隨從にも殿上童をなんした16りける。かくて女は、17なとた四十人、う18ろゐ廿人、下仕へ廿人。大人下仕は、大人19は靑色の唐衣、童は赤色に綾の20袴21の下仕へは靑丹22し〔○靑鈍カ〕御輿着たり。

校異　1内ひ。2國のアリ。3不ナシ。4内左。5國のアリ。6内男子も女子も、内男子女子。7三字不審。8一字不な。9不り。10不隨從。11不かたちアリ。12内大人。13不八。14内き。15不なん。16不まひ。17不お。18不た。19内ナシ。20不表のアリ。21不ナシ。22不に、内考異ナシ。

へ廿歳のうち、童十五歳のうち、童下仕へ、丈ひとしく姿ひとしく撰びたり。かくて、二月廿日になん1詣で給ひける。御車、絲毛十、檳榔毛十なり。絲毛十には、宮よりはじめ奉りて、女御子達數多2の北3方あなたこなた合せて九所。女御の君4よくらみ給へれば止り給ふ。御裝5かく〔〇束〕赤色の6香の御衣に羅の摺7、萌黄8の色の織物の御小袿9させたり。檳榔毛十に10、一つに四人づゝ乘りて、うなゐはびづら結ひて馬に乘れ11も。下仕へは徒歩よりあ12らん。ひすまし六人、青丹の表の衣着て歩み13、御車の御前、四位十八人五位卅人六位五十人。馬の毛下襲の色とゝのへたり。世の中にありとある上達部親王達よりはじめ奉りて、山臆14足まで、今日の御供に仕うまつらぬなし。大宮の大路より下り給ふ。かくて御社に15詣で著き給ひて、色々16 17幄より打ち渡して、御車18おり給ふ。男君達著き並み給ひぬ。辰の時ばかりより、19樂はじまりて、申の時ばかりに20出でぬ。舞人21女の裝束一22よそひづゝ賜23ふ、陪從には櫻色の綾のほそ〔〇細〕長一かさね、袷の袴一24具づゝ賜25ふ。垣下におはしたる人々に、綾裏の女の裝束一26具づゝ、五位より下は、白き打袴をなん賜ひける。殘る數なくかづき27あたるを見れば、花を吹き散ら

校異 1〔イ〕詣。2〔イ〕ナシ。3〔因〕のアリ。4〔イ〕子孕、〔国〕は孕。5〔イ〕ぞ。6〔イ〕康。7〔因〕裳アリ。8〔国〕ナシ。9〔国〕率ら。10〔イ〕はアリ。11〔イ〕り。12〔国〕ゆむ、〔因〕考異よむ。13〔イ〕ぬアリ。14〔イ〕ナシ、〔因〕考異ら。15〔イ〕詣。16〔イ〕のアリ。17〔イ〕あげばり、〔イ〕あてはり、〔因〕考異幄ども。18〔イ〕よりアリ。19〔イ〕神樂。20〔イ〕果て。21〔国〕にアリ。22〔因〕領。23〔因〕ひ。24〔因〕くだり。25〔イ〕へる。26〔因〕くだり。27〔イ〕わ。

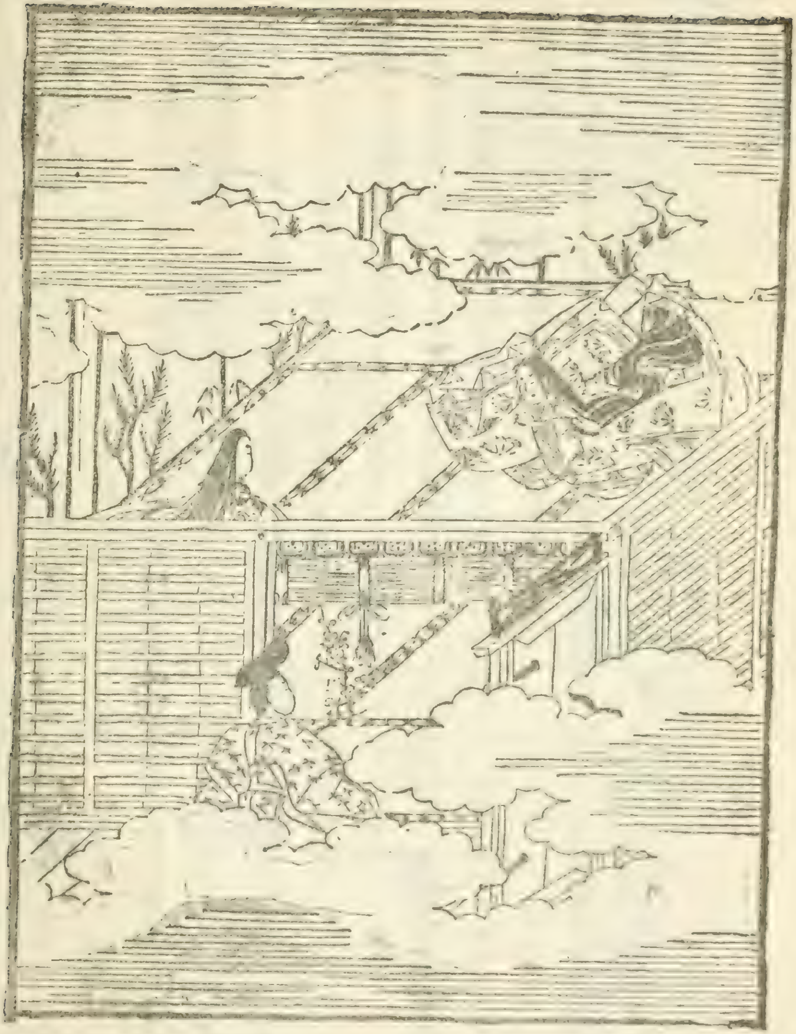
したるやうになん見え1ける。かゝる2に、大殿人々に、一樣しく所々見給3ふるに、面白く興ある所は、この御社になんある。同じ4く5木木の姿6を、此所のは情ありて面白くなん見ゆる」と宣ふ。兵部卿7宮、「げにさおはします8定なり。この宮に9さで給ふ事、10こそたみなり。そが中にも、今年は11怪しく訛急ぎて、遲き花12とて咲き、同じく開けたる花も、萌え出づる木の芽など13、心ことなる年になん」など宣ふ。宰の大殿うち笑ひて、「正頼、この宮に14詣で侍る年なれば、まさに15木山も心づくろひせざらんやは」など宣ふ。かゝる程に、兵部卿の親王面白き梅の16花を折らせ給ひて、沈の男遣らせ給ひて、花の雫に濡れたるに、かく書き17付けて、あて宮の御許18へ奉れ給ふ。

「立ち19はれば梅の花笠匂ふ20野をわび人はこゝ21ち濡れけり

さるは、二葉にもと思ひ給へつるものを」とて奉れ給22ひて、あて宮見給ひて、蓑蟲つける花23折らせ給ひて、それが下に筆者せたる24ふのども立てゝ、かく書きつけ給ふ。

濡れたる三笠の山の蓑蟲は花の降るをや濡るといふらん

〔校異〕1 イたる。2 イにはどアリ。3 國へ。4 イき。5 イ大草、國考異草木。6 イも。7 國のアリ。8 イ宵。9 因詣、國詣。10 國十與、國幾多。11 國三字ナシ。12 イ疾く、國ども。13 國さへアリ。14 イ詣。15 イ木草、國考異草木。16 イ枝。17 國つ。18 イに。19 イよ。20 イに。21 イら。22 イふ。23 イをアリ。24 國子。



かくて、御司の少将1仲頼に宣ふ、「風の事心につくゞるになんある。たゞにやはあらん。和歌の道にすべき事すこし撰り出で給へ」と宣ふ。仲頼「仕うまつりにくき事。3必らず」と言ひて書き出だす。「あはれ今日は春の半ば4 5月、ねま6ろを昨日と云ひて、花の匂ひを7さそふ霞の袖を江へ、旅に8春の暇9の私10同じく、渺11津の鴨の伴をつらね12て、木の芽の春(〇張るカ)霞13(日)の西にわた14り15給へり。か16くれば、花の葉枝に17けら18む、松の帰雁に19(時雨れ、春をさとる草人に)鶯き、山20種時にのぞめり。春の黄白21わづかに22と柳の絲を結べり。23(春の雨色に24出でゝ25見え、花の26枝具27に失ふ)朝の菅28(み)どりの衣なり、夕べの曇貫なる鶴なり。山邊に冬若く、野邊29の春老いたり。30今日を見31か近き野邊32は33らな(〇花)をうらやみ、34北所を隠く遠き山35は雪の峰をうつす。雪の36ゝた37ゝさ(〇下草)38生ひ霜の上39の40花盛りなり。木41のみの緑42ほのかに、紅の梅43透くめり。春の岸に雪消え、

校異 1(イ)なが。2(イ)日。3(イ)かな、など。4(イ)のアリ。5(国)ナシ。6(イ)き、(イ)ちの月。7(国)いざな。8(国)はアリ。9(イ)ながれアリ。10(イ)をなして。11(国)べ。12(イ)ナシ。13一字(イ)ニヨリテ補フ。14(国)考異らそ。15(イ)三字ナシ。16(国)か。17(国)ぶ。18(国)ひ。19十一字(国)ニヨリテ補フ。20(イ)のアリ。21(国)はつ。22(イ)ナシ、(国)て。23十七字(国)ニヨリテ補フ。24(国)三字ナシ。25(国)考異二字ナシ。26(国)ナシ。27(国)遅し、かき(〇一字、垣穂の梅おとろふナドノ語脱セルカ)。28一字(イ)ニヨリテ補フ。29(国)に。30(国)鐸。31(イ)る。32三字(国)考異若菜。33一字(イ)は。34(国)雲、(国)考異岡。35(イ)にアリ、(国)考異べにアリ。36(イ)し。37(イ)く。38(国)老い。39(国)考異ナシ。40(国)落。41(イ)米、(イ)の葉、(国)の芽。42(国)はつ。43(イ)進、(国)咲く。

石の火に氷1解く。2垣穂去らぬ松、春をかさぬる花、野邊にしづかなる人、山にさわぐ鹿、風になびける枝、雨にしたがふ草、春を惜しむ花、夏をもよほす蟲3は、秋を待つ木の葉、冬をいなぶる鳥、4（まどるに足らぬ月5、漏れたる月6〇）」と書き出だして、兵部卿の親王に奉る。御覽じて、「わきもの月」を、

昨日7こそねまちもせしか春の夜の今宵の月をいかゞ見るらん

と書きて中務の親王に奉り給ふ。中務の親王、「花8を9いざなふ」

我が宿に移してしがな野邊に出でゝ見れども飽かぬ花の匂ひを

10兵部卿の親王、「鶯を迎ふ」

里に咲く花にうつらで奥山11に松におくなる鶯の聲

左の大臣、「雁の列」

古里に友12も13このさず14來しよりはこゝにて15雲を過ぐさざらめや

左大將「河1津の鴨」

水鳥のつらねて17うつる〔〇浮ぶカ〕春日河織るなる綾は今日や著るらん

校異 1〔岡〕閉づ。2〔刊〕時を覺。3〔刊〕ナシ。4十三字〔国〕ニヨリテ補フ。5〔図〕を思ひアリ。6〔図〕をめづるアリ。7〔刊〕より。8〔図〕の匂ひアリ。9〔図〕さそ。10〔国〕民、〔図〕式。11〔刊〕の。12〔国〕し。13〔刊〕殘。14〔刊〕行く雁。15〔刊〕春。16〔刊〕べ。17〔図〕考異た。

右大将「木の芽の春」

松の根にふす山人は野邊を見る今日ぞ柳の葉にも知るらん

民部卿源1慣正、「春日の宮」

内裏人のまどゐる今日は春日野の松にも藤の花ぞ咲くらし

左衛門の督藤原2清正、「花の鶯」

枝ごとに嫌3背つら4ぬる鶯の囀をせばみ花ぞ散りける

中納言平の正明、「松の蟬」

松風の聲にくらぶる琴の音を5すなるゝ蟬6は調べざらめや

左大辨源の7貞純、「春をさと8る草」

琴の音に春の草木の驚くはおのれを人やひくゝとなるべし

9右衛門10同じき師純、「時にのぞめる櫻」

11(佐保姫の住のかに染むる櫻には12よびさし13匂むる藤ぞ嬉しき)

14左近中將同じき輔15朗、「わづかなる藤」

校異 1国のアリ。2国のアリ。3イを。4イな。5イ時雨。6国に。7イ忠。8イの。9国右兵衛の佐。10イはアリ。11廿六字国ニヨリテ補フ。12国矢。13国添ふ。14国右。15国純。

松よりもはひこぼるゝぞ藤の花今ひとしほのあかず見ゆるは

同じき中將在原の元行、「結べる柳」

花咲かぬ枝にも蝶はむつれけり柳の糸も結ぼほるらし

宰相實忠、「春の雨1降出でゝ」

花をのみ村濃に染むる春雨は常磐の松2はつらく見ゆらん

宰相直正、「3 4風おそく」

佐保姫や物憂かるらん春の野に花の笠縫ふ枝の見えねば

とて、向ひたる人の四位よりはじめ5物人に賜ふ。賜はりて左中將實頼、「おとろふ梅」

6さほ姫のほのかに染むる櫻にはよびさしそなる藤ぞ嬉しき

白妙の衣7に似たる梅の花日に8めすくもおとろふるかな

9右近少將源10な11りよ12り〔○仲頼〕、「朝の霞繰なり」

鶯の羽風を寒み春日山霞の衣今朝はたつ13とも

校異 1 国色に出でて、因色に見え、因考異色に見えて。2 国の、因や。3 団花のアリ。4 団風遅し、国風に失ふ花。5 国殿、因の、因考異人との。6 廿六字団ナシ。7 団とたど。8 団み。9 国左。10 因のアリ。11 団か。12 団し。13 団か。

同じき少将元方、「雲の錦」

　大空に風の1織り布く錦をば谷より雲2ぞ3おち渡るら4し

同じき少将貫5正、「多若く春老ゆ」

　見渡せば雪ふる山もあるものを野邊の若菜の老いにけるかな

左6衛門の佐7純、「雪をうつす山」

　富士の嶺8は春日の春をよそに見て鹿の子の雪も今や消ゆらん

同じき行正、「雪の下草」

　雪の上に強ひて草木の萌ゆればや春日9に飛ぶ火あ10りといふらん

兵部11卿少将兼純、「霜の上の12菜」

　春日野の雪間に生ひし若菜をば野守は見13きゝ今日摘まんとは

侍従仲純、「14わづかなる木の芽」

　春を讀み野邊の木の芽もまだしきをいづこより摘む若菜な15りけん

16同じき侍従顔17忠正、「紅の梅」

校異 1 内折々。2 国の。3 内立。4 内老異む。5 国貫。6 国兵衛。7 内朝。8 内の。9 内の。10 内る。11 国の大輔。12 内花。13 内ゆ。14 内はつ。15 内ら。16 内三字ナシ。17 内のアリ。

春雨の花に降りおく紅に染めて染むらし春の佐保姫

侍従藤原の仲忠、「蕨に消ゆる雪」

雪と1づる春の蕨の萌ゆればや野邊の草木のけぶり出づらん

侍従兼時、「石の火に2明づる氷」

春わかずさゆる河邊の蘆の芽は石より出づる火にやもゆらん

侍従維風、「時をさとらぬ松」

見る人のよはひは千世のあたり3をや緑の松は春を待つらん

侍従元松、「春をかさぬる花」

ふたゝびや4うらの櫻は匂ふらん同じ花にも春を添ふれば

大夫親純、「野邊にしづかなる人」

春深み5みぎはの芹も老いぬらし今はものうし若菜つむ人

式部の丞清純、「山にさわぐ鹿」

萌えわたる草木もあらぬ春べには山邊6ぞいそぐ鹿ぞふむら7し

右8衛門の9尉顔純、「風になびける枝」

校異 1[イ]く。2[イ]解く。3[国]か。4[イ]こゝ。5[考]異川の小芹。6[イ]に。7[イ]ん。8[国]兵衛。9[国]丞。

霜の冬の1とぐらや春たてば風のなびかす柳なるらん

蔵人藤原2仲遵、「雨にしたがふ草」

春雨のふる3さる野邊の草木4とや秋の宿り5と蟲6は類まん

木工の助是元、「春を惜しむ花」

佐保姫はいくらの春を惜しめばか染め出だす花の八重に咲くらん

兵衛の尉藤原7朝正、「秋を待つ木の葉」

春若みほのかに見ゆる木の8かには秋こそいとゞ深く見えけれ

9右近の尉清原の松方、「夏をもよほす蟲」

春山の木の根の蟬は巣をせばみ夏の木の葉や結ひしかるらん

右兵衛10尉在原の時蔭、「冬をいなふる鳥」

冬山に巣くひし鳥も11は(○羽をカ)寒み春の里にや宿りとるらん

右兵衛12尉元輔、「まどるに13絶えぬ月」

我が友の野邊のまどゐにおくるゝは過ぎにけらしな春の望月

校異 1国ね。2国のアリ。3国なる、図岡。4国を、国に。5国の。6国の。7国のアリ。8三葉、国芽。9右近の尉清原の松方以下四十三字国兵衛の尉藤原朝正ノ前ニアリ。10国のアリ。11国帆、国冬。12国のアリ。13国足ら。

同じき尉平の維輔、「おくれたる1日に」

朝影に遥かに見れば山のはに残れる月も嬉しかりけり

などこれかれ賞ひて興ある夕暮に、女方の御前に、君達物の音掻き合せて遊ばす、中にあて宮、かの一條殿2のを3るはれたる4宮こ5風といふ琴6の聲に調べて、7九のめでた8といふ手9折り返し遊ばす。仲忠、こともなき御琴かな、少し末だ若くぞあんなる、如何ならん世に、我が手習はし奉らんなど、心地は空にて思ひたる程に、かの忠こその行ひ10ごと、かの11暗部山に、大いなる寺を造りて、父母12が御爲に、いかめしき經佛供養じ、人に物も言はで、たゞ佛の御事をのみ寢言にも口遊びにもしつゝ行ふ。かの説きし人は、かしこき智者にて、大法など盡くして受けた13りければ、それらを皆受けて、14暗部をば、さる僧15ぎしたる所にて、六十16餘國を廻り17て18うみに讀經奉りて、近き所19詣づるに、この春日にも詣でゝ、夜一夜、大般若20おほ21空に誦みつゝ奉りて、今は熊野にと思ひて出づるに、この御前に遊ばす御琴の音する方に向きて、疾き脚を出だして走る。遠くて見22なば、色々のあ23てばりを鰐の如24打ち渡して、立ち騒ぐ人うちまぜたる花の25事見ゆ。風にきほひて、千々の物の26音27まじりて、28かくは近く立ち寄りて聞

〔校異〕1国月に、因月。2因より。3団買。4国かたち。5因風。6団を五箇アリ。7国事、因曲。8国き。
9団をアリ。10団人。11国鞍馬。12団の。13団まはアリ。14国鞍馬。15国行。16団四。17因考異ナシ。
18団神、団こゝ、因佛神。19団にアリ。20団をアリ。21国ぞう。22団れ。23団げ。24因考異くアリ。25
団如、因考異如く。26団音。27団しき。28団聞ゆ、国聞ゆ。かくて。

くに、御隨身舎人ども、「これ1には2何ぞの行ひ人3ぞ。神事の所には出で來べきものか」など4制5た
のしれば、6忠かく言ひて立てり。

珍らし7く風の調ぶる琴の音を聞く山人は神もとがめじ

と云ふを仲忠聞きて、「いと興ある者かな」とて、袙を脫ぎて、かく言ひてかづく。

皆人8も衣脫ぎか9け惣風の10ひゞき知りたる人やあると11そ
うちかづけて、御前よりかの12宮こ13風を賜はりて、同じき14高麗の笛を手盡くして彈15ら。さ16うに手惜
しまず。御前にて、興ある節會などに、御手づから調べ17て賜ふをだに、辭し18逢19ゑて仕うまつらぬを、
かくすれば、聞し召す人のかぎり、いと珍らしう興ありと思す。兵部卿の親王、「侍從の朝臣は、仰せ言を20
だに21賜はりて給はぬを、行ひ人の爲めに22は23もて24こし25ふれざめ26り27ならし28（仲忠）一かたへは29
らち忘れ30にて侍るになん」など言ひて、31高麗の手ども彈き果つる32てども、33右大將の君、綾搔練の袿
一襲、萠黃色の小袿一襲、34給の袴一35具、御前より持て出でゝ、仲忠に賜36はりて、大殿行ひ人を召し出

校異 1 [イ]ナシ。2 [国]何、[因]考異な。3 [イ]にて。4 [イ]咎め。5 [イ]の。6 [因]考異ナシ、[因]忠こそ。7 [イ]き。8 [イ]の。9 [因]考異せ。10 [イ]千引。11 [因]て。12 [国]かたち。13 [因]風。14 [イ]五箇。15 [イ]く。16 [イ]ら。17 [イ]ナシ。18 [イ]申。19 [イ]し。20 [因]賜はりてアリ。21 [イ]請ばり、[因]考異承はり、[因]手觸れ。22 [イ]ナシ。23 [国]御手。24 [イ]う、[国]惜。25 [国]ま。26 [イ]る。27 [イ]らし、[国]いらへ。28 二字[因]ニヨリテ補フ。29 [イ]う。30 [イ]ナシ。31 [イ]五箇。32 [イ]三字ナシ。33 [国]左。34 [イ]赤色。35 [イ]重、[因]くだり。36 [イ]ふ。

でゝ見給ふに、御覧ぜし人に覺えたり。怪し1とて、昔見給ひつる人を思し出づるに、忠こそ2にお3（ほ）しなして、「怪し4く見奉りし心地するかな。正頼をば知ろし召した5るや」と宣ふ。行ひ人、「更に知り奉らず。誰にかおはしますらむ」大殿、「昔、上に藤原6君と名づけ7て侍りしなり。かくものし給8へば、9右10大い殿の思ひ君となん見11奉りたる。あないみじや。などかゝる御身とはなり給ひつ」12など宣ふ。年頃忠こそ、「今はかく鳥獣にまじりて、年久しくなりぬれば、御覧じ忘れにたらんとなん思ひ給へる。かゝる山伏になりてなん。吾が君は何の御位にかおはしますらん」大殿、「た13ち今はなご14ろ（○納言）になん侍る15あり。怪16（し）、年頃如何になり給ひにけんと申し侍りつるに、かく悲し17きにこそはものし給ひけれ。そもそも、如何なる御心にてかは、かく思し立ちつらん」行ひ人、「年五つにて、女親の手18さかり離れて、世の中に侍りしに、心憂く覺え侍りしかど、19さいて一人侍る子なり。親の20の21身22上を知らで侍らんやはとて、なほ交らひ侍りしに、心憂く侍りしかば、念じ餘りてなん、十四歳にてなん23さかり離りし。今年二十年になん侍りぬる。年若くてに24て（○忍辱カ、仁徳カ）の25袂に罷り後るゝ事、一生の悲しびに覺え侍りしかば、前生の罪業26重く滅ぼさん、かの27母とじをも28人等はんとて、29全く

校異 1 イみ。2 イと。3 一字イニヨリテ補フ。4 イナシ。5 宮り。6 宮のアリ。7 イナシ。8 イふ。9 イ故アリ。10 イのアリ。11 イ給へ。12 イると。13 宮だ。14 イん。15 イめる。16 一字国ニヨリテ補フ。17 イげ。18 イま。19 国ま。20 イ御、国ナシ。21 宮考異ナシ。22 イのアリ。23 イま。24 イにく、国とく。25 国おもと。26 イなも。27 宮考異おもとをし。28 宮佛の御國にさぶらはせ。29 イまゝ殺、国宮所羅。

1を2絶ちて行ひ歸り歩く」と聞え給へば、大將3君よりはじめ奉りて、ありとある人4はなし。大將の君、「5天の下は逆樣になるとも、かくなり給ふ世を見んずらんとなん思はざりし。世の中のかくはかな6ければこそ、怪しからぬ童の行く先思ひやられ7て、8〔う〕しろめたう覺え侍れ。大殿は、そこに物せずなり給ひにける又の日より、思し惑ひて、それ9御病ひ10はじまりて、早く空しくなり給11ふ。よき親に知られ奉り給ひてこそ、かゝる道には思し立たましか12、親すでに思ひに堪へ給はずなりにしかば、不13てう〔○孝〕の罪とやなるらんとなん」行ひ人、「世14中のせめて心憂き時は、親の御上15に知られぬものになむありける。親16知ろし召しなば、許さるまじく侍りしかば、山林に心急ぎて罷り出でにしなり」大將17君、「御18驗なと19ははくものし給ふらんかし。正頼は、怪しからぬ子どもの親になんなり20にて侍る。21一人にあたる女子なん内裏にさぶらふ。君達數多22生23のなどしたるを、爭ひきしろふ人々な24ん、許さぬ心など思ひた25なるなん懲りず26よびに27しかる交らひすへ〔○振えカ、總べカ〕て侍るめる、これなん思ひ苦しき。女はおしなべては延命息災を主として、事に分きては、心の中に咒詛の28かへ

[校異] 1[因]穀アリ。2[イ]保。3[因]のアリ。4[イ]ナシ。5[国]天。6[因]考異げな。7[国]ナシ。8一字[イ]ニヨリテ補フ。9[国]をアリ。10[国]とし給ひ。11[イ]ひに。12[因]どアリ。13[イ]け。14[因]のアリ。15[イ]も。16[イ]のアリ。17[イ]殿。18[イ]祭。19[イ]は强く、[イ]は母、[因]加はり、[因]は早や。20[イ]ナシ。21[国]一。22[国]生。23[イ]れ。24[イ]ど。25[国]るか、[因]る。26[イ]ま。27[国]ぞアリ。28[イ]かつ、[国]害。

〔〇伊豆カ、伊予カ〕な1き事2を祈願せさせ給へ」行ひ人、「命のさかり3は、人の咒詛なども出で侍らぬものなり。誰の誓ひある時なん物の崇などはあるものなる。さはありとも、慎み給ふなんよき事なれは、いとよく祈願し申し侍らん。たゞ今も熊野に籠り4移るなり。去年の八月より所々に精進5るなり。この御社にゐ6さて7き8でつるを、怪しく背次はりし物の音のし侍れば、身を覆へても魂9もりて侍りつらん承はりつけてなん、神の御徳に、晋が君に対面賜10へりぬる」大将、「正綱も、今日この御社に詣11こ事ら12せんとてなん侍13りつる。14(か)の方に得先賜はりて、年頃の物語りも聞えさせてしかな」行ひ15こと〔〇人〕、「熊野へ急ぎ16籠り17入る18 19なる。時は暑気になり20ぬれば、路も嶮しきに、四五月ばかりになん21まかり出づべき。たひらかに帰り帰るものならば必ずさぶらはん」と聞ゆれば、大臣、一年頃をばさるものにて、今日の22障のあかず心置き事。嵯峨の院にも、折あらば、今かくなんと奏せん。常に、昔浪き契りある仲なれき。正頼ばかりぞ聞き23出でんと、かしこく悲しび給ふを、かくなんと聞し召さば、如何に悲しび給はん」行ひ人、一あ24(な)かしこで院には、世の中にまだ侍りと聞えさせじ。許されざり

〔校異〕1 (イ)つアリ、(イ)へアリ。2 (イ)とアリ。3 (イ)ナシ。4 (イ)詣づ。5 (イ)りし。6 (イ)た。7 (イ)詣。8 (イ)ナシ。9 (イ)二字(イ)ナシ。10 (イ)は。11 (イ)引き。12 (イ)ナシ。13 (傍)異二字ナシ。14 一字(国)ニヨリテ補フ。15 (イ)ひ。16 (イ)二字ナシ。17 (イ)いか、(傍)考異いき。18 (イ)にかアリ。19 四字(傍)考異ぬれど。20 (イ)て聞し立たざるや。行ひ人(国)ごと〕、(考異)て。21 (イ)き。22 (国)為。23 (国)つら。24 一字(国)ニヨリテ補フ。

し暇を、1忍びて罷出て、やがて2罷出てやがて參らず侍りしかば、重き罪侍り3けん。それなん今にお4（そ）ろしく悲しき事5は侍る」6など言ふ。大殿櫻色の綾の細長一襲を持て出で給ひて、7かく宣ひて賜ふ。

8散る花をかくとゞち9つれど琴の音を調べてかへる風ぞ止まらぬ

と宣へば、忠10、

いにしへに今日をくらぶ11の山風は花の衣を吹き返12る13かな

と言ふ。夕暮に14花ぞ誘ふ風烈しくて、御15簾吹き上げたるより見入るれば、君達16九所、めでたく清らにておはします中に、あて宮こよなくまさりて見え給ふ。たゞ（〇忠君カ、忠こそカ）17かく有難き御18容貌どもの中に、こよなくまさり給へる19なる人なりなど思20ひに、年頃かけて思はざりつる昔思ひ21出られて、世中になほあらましかば、今は高き位にもなりなましなど思23ひ、24されど、またこゝ25ちの年頃、霧霜、草葛の根を26齋にしつゝ、ある時27には大蛇28の蜥蜴に呑まれんとす、佛の御事ならむ事をば日にまね

校異 1[国]強ひ。2[イ]六字ナシ。3[国]な。4一字[イ]ニヨリテ補フ。5[イ]に、[図]には。6[イ]と。7[国]かゝげ給。8[イ]咲く。9[イ]く。10[国]君アリ。11[国]る。12[イ]す。13[イ]がに。14[イ]すみを、[イ]かすみを、[国]花を。15[国]帳。16[イ]三。17[図]考異二字ナシ。18[国]子達。19[国]二字ナシ。20[イ]ふ。21[イ]出で。22[図]のアリ。23[イ]ふ。24[イ]た。25[イ]ら。27[図]供養。[イ]ナシ。28[イ]ナシ。

ばで、勤め１行ひつる佛の思さん事恐ろしくなど、思ひ返せども、せん方知らず覺ゆれば、散り落つる花瓣に、爪もとより血をさしあやして、かく書きつく、

憂き世とて入りぬる山２をありながらいかにせよとか今も侘しき

３水書きつけて、君達の御前の４後方の方に押しつけて立ちぬ。熊野へと思ひし心もなくて、いかでこの我が見し人見んと思ふ心深くて、５嘱部６山に返りて、思ひ嘆く事かぎりなし。かくて、７（大將殿８は）９（同じ月の）廿三日の未の時ばかりになん春日より10歸出給ひける。11との12（日）13還饗いかめしく、舞人14かづけ物、白き綾15の袷の袴16一具、17 18（べ）い〔〇結〕従にたゞの細長袴、わら19か〔〇童〕隨從20などにも賜ふ。

かくて三月のほどに、東宮より、柳に御文つけて、右近少將を御使ひにて、「しば／＼も聞えまほしけれど、聞ゆるゝはとか云ふなるうちにも、この頃参り給ふべきやうに21かありしかばなむ。いでや、

たのめこし春立ちしより青柳の糸やくるとも思ひけるかな」

〔校異〕１〔イ〕をアリ。２〔原〕は。３〔イ〕と、〔イ〕かく。４〔岡〕御アリ。５〔国〕鞍馬。６〔イ〕のアリ。７四字、原本虫蝕トシテ空白トセリ、今〔国〕ニヨリテ補フ。８〔岡〕ナシ。９四字〔岡〕ニヨリテ補フ。10〔国〕歸リ。11〔イ〕そ。12一字、原本虫蝕トシテ空白トセリ、今〔国〕ニヨリテ補フ。13〔イ〕日。14〔イ〕にアリ。15〔イ〕ナシ。16〔イ〕單、〔国〕一具、〔イ〕袴。17〔岡〕袴一具アリ。18一字〔イ〕ニヨリテ補フ。19〔イ〕は。20〔イ〕二字ナシ。21〔イ〕ナシ。

とて奉れ給へり。大殿見給ひて、「かしこ1くかく宣はするを、いかど2御返り聞えざらん。かくも聞えさせ給へ」とて、書き3續け給ふ、

春立てど身の數ならぬ青柳は花にまじらん事ぞ苦しき

とて、中の御殿に奉れ給4へれば、あて宮書きて奉ら5れ6給ふ。御使ひの少將綾羅の女の裝束一具7賜ふ。

源宰相かく聞え給ふ、

涙さへなき世なり8さば我が戀の身より出づるをいづち遣らまし

と聞え給9ひつれど、御返りなし。兵部卿10宮より、

「山彦もこた11らぬ室に泣くたづは天の河12原に一人臥すかな

この日頃、里住のかひなさに、内裏にのみなん」と聞え給へり。あて宮、

答へ憂く思ほゆるかなあしたづの13鶴てふ名をも一人なかれば

平中納言殿より、

水まさる淀の眞菰のおひの14世に深く物思ふ春にもあるかな

此度は御返15しなし。三の親王、かく人16の聞え給ふを見給ひて、

校異　1 [イ]し。2 [イ]はアリ。3 [イ]つ。4 [イ]ひつ。5 [イ]り。6 [因]考異り。7 [因]かづけ給ふ。8 [イ]せ。9 [因]へ。10 [因]のアリ。11 [イ]へ。12 [イ]邊。13 [因]考異田鶴。14 [因]せ。15 [イ]り。16 [因]に。

巣立つとも見ゑぬものから鶯の山のいろ／＼ふみも見るかな

と聞え給1ひつれ2ど例の答へ給はず。3（か）の仲忠の侍従、内裏の御使ひに、水の尾といふ所に4詣でて帰りに、をかしき松に面白き藤のかゝれるを、松の枝ながら折5もて持ていまして、花房にかく書きつく、

「奥山に幾6世経ぬらん藤の花隠れて深き色をだに見7で

かくなんとだに」とて、孫王の君に、「8誰々御覧ぜさせ給9はで、この花賜はりて置き給10ひつれば今ただ今」11とて、内裏に参りぬ。あて宮御覧じて、人々の中にこともなしと思す人なれば、かく12書きつけ13て賜ふ。

深しともいか14に頼まむ藤の花15懸らぬ山にはなしとこそ聞け。

孫王の君仲忠に見せ給ひけり。右近16少将17仲頼も、年頃いかで聞えんと思ひしかど、ついでなく思さ18れ19んものから、かしこ20きに思ひ忍び21て22なりし23を、この24賭弓の25御還饗にかい26ば見て後は、27伏

【校異】1 イ へ。2 イ ば。3 一字イニヨリテ補フ。4 イ 詣。5 イ り。6 イ 消、イ 日。7 イ ず。8 イ これ。9 イ ひて。10 イ へ、れ、聞、。11 イ せ。12 イ 花。13 イ 給。14 考異で。15 イ かか。16 イ のアリ。17 イ などか。18 イ ナシ。19 イ ば。20 イ さ。21 イ ナシ。22 イ あ。23 考異が。24 考異御アリ。25 イ ナシ。26 イ ま。27 イ ましてつ。

し沈み病ひになりてありしを、殿[1]の春日詣に、[2]辛うじて起き上りたりしに慰さ[3]みてあれど、猶えあるまじかりければ、をかしき棚の萠[4]し出でたりけるに、[5]書き[6]つけたり、

物思ひの枝に離れるものならばもえ渡るとも見せずぞあらまし

とて、[7]いつあこ君に、「これ[8]中の御殿に持て参り給へ」とて奉る。あて宮見給ひて、「あなむくつけ。見るまじきものかな」とて、引き結び[9]て捨て給ひつ。侍従の君、

人知れぬ涙の川と流るゝをいかで溜れる水と答へん

例の答へ給はず。行正かく聞えたり。

玉章の[10]終にと[11]くらぬものならば空しき身ともなりぬべきかな

御返[12]しなし。

[13][14]左大将殿桂に面白き所[15]、大いなる殿造りて、花盛り紅葉盛りなどに物し給ひて、心遣り給ふ所[16]あり。花[17]の盛なれば、この[18]頃中た[19]〔だ〕〔○忠〕の母北[20]の方を率ておはして、心遣り遊び給ふ。「怪しく、世の中忘られ[21]心ゆく所にこそありけれ。この春夏此所にて過ぐさん」とて物し給ふに、花の色を謐

校異 1 [イ]々。2 [イ]かかけ。3 [イ]め。4 [イ]え。5 [イ]かくアリ。6 [因]てアリ。7 [国]家、[イ]二字ナシ。8 [イ]にアリ。9 [イ]三字ナシ。10 [イ]露。11 [イ]まら、[イ]だ〻、[イ]どか。12 [イ]り。13 [因]かくてアリ。14 [国]右。15 [イ]にアリ。16 [イ]にアリ。17 [イ]ナシ。18 [イ]ナシ。19 一字[イ]ニヨリテ補フ。20 [国]ナシ。21 [国]てアリ。

くして咲き交り、1水は絲2亂れたるやうに3入りて4面白5し。主の大殿、「怪しく見所ある所かな。此所にてをかしき琴をして、上手どもの物の音を聞かせ奉らばや」と宣ふに、北の方、「6げに花7の散らぬ先8に、人々などして見せ給へ」と聞え給ふ。この大将もあて宮に文奉り給へど、御返り9もなき10を、11なほ12りこの雄よりも聞え給ふ。

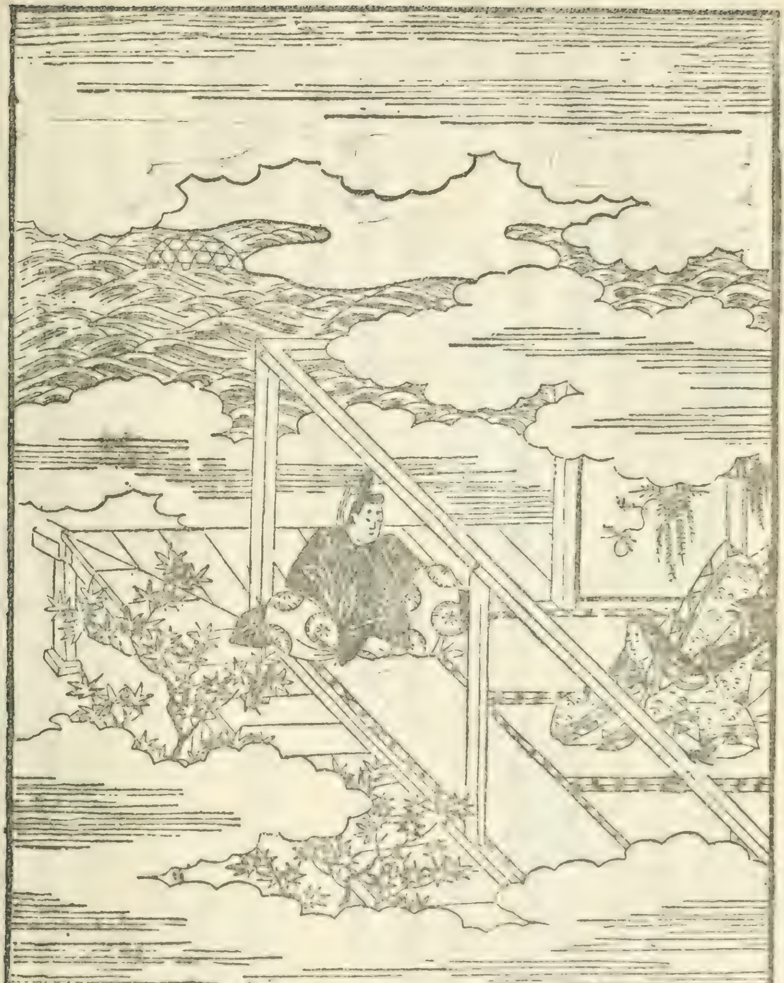
　鶯のふみも通はで年経るは花なき里と思13ふたるべし

あて宮、

　雄とて14鳴かざ15しなむ鶯は月のうちこそ隣は聞え16し

と聞え給ふ。大将の大殿見給ひて、「怪しく、末まだ若くおは17（す）る18御かたちよりはじめ、事も、あらまほしくものし給ふかな。いかでこの君もかな、我が君とひとしくてあらば、如何に人騒かん。いはゆるあて宮を率て19なほ20足ら21ぬは、この侍従の母こそまさるべけれ。ひとしきは珍らしきをこそ思ひきさ22め。心にくしやなどこそのゝしらめ。如何に23すぞあらん。嫁ら24 25給へかし」北の方、「げに

校異 1〔イ〕外し。2〔西〕のアリ。3〔イ〕流れアリ。4〔イ〕いとアリ。5〔イ〕く。6〔イ〕すアリ。7〔イ〕ナシ。8〔イ〕ナシ。9〔イ〕ナシ。10〔イ〕ナシ。11〔宮〕落異ナシ。12〔国〕も、〔西〕ナシ。13〔イ〕ひ。14〔国〕何。15〔イ〕ら。16〔イ〕め。17 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。18〔イ〕をアリ。19〔西〕もアリ。20〔イ〕絶え。21〔イ〕ぬ人、〔イ〕ぬべき、〔国〕ねば、〔西〕ぬは。22〔イ〕なし。24〔イ〕ナシ。24〔イ〕しアリ、〔イ〕思ひアリ。25〔国〕思ふべき、〔西〕考異思ひ給ふべき。26〔西〕のアリ。



あらば如何によ1うん。2まめやかに聞え給へかし。此所に、いかでさも3のし給は4なんとこそ思へ」
大殿、「一人にならひて、それも思ふ事あらじや。さもな宣ひそ」北5方「怪し。などてかさはあらん。數多6ありとも、ありか7らにこそあらめ。さあらでもこそありしか。忘れ給はずば何をか思8ふらん」大殿、「それは更なりや。思ひ出づれば、いと9つらしや」とて、涙10を落してかく宣ふ。

11聞き返12すかくのみありし古へをかけて聞くにもまして亂るゝ

とて、「世の中はよ心にもあらぬ物なり。さばかりいみじく思13ふながら、などさはありけん。いでや、これ14思へばこそ天下のあて15にも16思ひ聞え17けれ。昔、さる心ざしの年月に添へてま18たりしかばこそ、この19へ龍に20數多物し給ふ人々も、何れ心ざし深く思ひ聞えし。21さ數多に22へば〔○配〕りし心を、23一所になりたりかし。女一人24見る25憂きはなけれど、御代にこそかくてあれ。これぞ昔よりいみじかりし心ざしは見給へ」など聞え給ふ。北26の方、「いでや、それ27もかひなかりきや」とて、

諫めつ28く給29深くばかりありしかど靡きせ30ず落ちし我が涙かな

校異 1イから、イら。2イさ。3イもアリ。4イばアリ。5國のアリ。6イ二字ナシ。7イう。8イは。9イいみじ、イいといみじ。10國考異ナシ。11イ消え。12イり。13イひ。14イもアリ、國をアリ。15イ宮アリ。16國えアリ。17國憂アリ。18イさ。19イ一。20イ二字ナシ。21國かど。22イく。23イただアリ。24イかす。25イ時。26イナシ。27イナシ。28イつ。29イ濟ぐ。30イぬ。

と宣ふ。大殿、「道理や、吾1り佛。されど思ひ2遺らざりしをのみ頼みし」とて、

年を經て絶えず流れし瀬にも舟の浮かばぬ時はなかりき

と宣ひて、昔舊頭なかりし世3に、これもか4れも、物の折節ごとに思ひ集めたりし事どもを、左に言ひつつ、御簾のもとに出で居5て、琵琶6箏の琴和琴と7(も)を一つに調べ合せて、面白き手を8彈くよき聲ども9數多10して、11 12雖き物どもを數多盛りすゑ、清く清らなる御13衣を賭け渡して、出居14(の)童子には、大人廿人ばかり、濃き袿一襲、摺裳着たり。よき童四人、15あを16し17綺の袴、濃き袙など着て出で18入り、花の蔭に遊びて、いみじき昔語をし、哀れなる行末を契り19して居給へ20る。21夕暮の程に、内裏に大殿久しく參り給はぬ事を、帝、右の大臣に宣ふ、「22右大將久しく參らぬ23や」と宣へば、大臣、「桂川24わたりに、興ある所を持て侍り25たうぶ26せ、其所になん花見給へんとて、日頃侍り27たうぶた28り」帝、「29妻など30も何れを31か率て物すらん」大臣。「仲忠が32けをなん率て罷り33ける」34「それを思

校異 1[イ]が。2[イ]を絶え。3[イ]と。4[イ]な。5[国]給ひアリ。6[国]箏。7一字[国]ニヨリテ補フ。8[イ]彈いて、[イ]人々、[イ]人と。9[イ]をアリ。10[イ]立。11[イ]有りアリ。12[国]めでたき。13[イ]衣ども。14一字[国]ニヨリテ補フ。15[イ]な。16[国]地。17[イ]のアリ。18[国]居た。19[イ]ナシ。20[国]り。21[国]かくてアリ。22[イ]左。23[イ]かな。24[イ]のアリ。25[イ]給ふ、[国]たらう。26[イ]を、[国]ナシ。27[イ]給ふ、[国]たらう。28[国]る。29[イ]さば。30[国]は。31[イ]ナシ。22[イ]侍。33[国]つ。34[イ]上アリ。

1ひなく2り3な」大臣「たゞ今かれ一人をなん持て侍4るなる。本妻どもも皆忘れ侍りて」と5にこし給へば、「いと興ある（○以下脱漏アリ、国籍の村鳥ノ巻ト参照シテ訂ス）」（6事7な。まだかの大将の妻一人8も得たる9聞えず。三の宮を思ひし時も10十七八人はかり持てありしを、如何なれば、た11く一人には12ほりたらん。その親王を忘る13ばかりの心に14てさよ。仲忠15り昔には、昔より飽かぬ事なく聞え16し人ぞ17かし。いかで18見んと思ひしを、参らずなりにし人を一とて、上、「なほこの人憎ましにやらん」とて、聞かせ給ふ、

「月にだによらずなりにし白雲の谷に年経と聞くはまことかいと心強げなりしを、いかで19かくは」など書き給ひて、20（21右）近少将仲頼に、「これかの桂の家に物して、内の方に取らせよ」と仰せ給ふ。仲頼急ぎて出づる、22一つ車にて、行正、輔純の中将、仲純の侍従など乗りて、桂へ参うで給ふ。道のほど遊びて来る音聞し召して、「侍従の罷出つるにぞあたる。湯浦23の設け24せさせよ」と宣ふほどに、面白き花の枝に25文付けて、26使の少将参り給へば、あげ27たる御簾28う

校異 1[イ]ふなな、[国]なら。2[イ]ナシ。3[国]ナシ。4[国]り。5[イ]奏。6錯簡ノ所ニナシ。7[イ]かアリ。8[イ]持。9[イ]とアリ、[国]事アリ。10[国]女。11[イ]だ。12[イ]な。13[イ]るアリ。14[イ]こそは。15[イ]か。16[国]でアリ。17[イ]二字ナシ。18[イ]待。19[イ]二字ナシ。20一字[イ]ニヨリテ補フ。21[国]左。22[イ]二字ナシ。23[イ]ナシ。24[イ]ナシ。25[イ]御アリ。26[国]御アリ。27[イ]け。28[イ]二字ナシ。

ち下して、外に出で給ふ。1子達皆内に入りぬ。2かくて簀子に」〔○以上田鶴ノ村鳥ノ巻ト全同シテ、樓ニ示シタル箇所ヨリ此所ニ挿入シ、錯簡ヲ訂セリ〕3寝ぬ。御供の人4は花の蔭に据ゑたり。仲頼御文を内に入るれば、大殿いと見まほしく思さるれど、え入り給はず。北5方御文を見給ひて笑ひ6給ふ。さて7内より8いとど物参る。紫檀の折敷、沈の臺に据ゑて八つ、机いといかめし9うはあら10ぬ、か11(ら)〔○干〕物生物などして、よき髫髪どもかぎりなく装束かせて参らす。御土器度々になりて、御使ひの少将急ぎ給ふに、「などかくは急ぎ給ふ。花を見てこそ歸り給はめ」12とて、土器賜ふ13とて、

急ぐとも花にまかせん匂ふ色見つゝや人の歸るとも見ん

仲頼、「さ14るは」など言ひて、

花の香を尋ねて來つるかひもなくにほ15ひに飽かで我や歸らん

輔純、

かくながら散らず16と思17へ櫻花蔭にて千代をめぐらざらめや

〔○此ノ間ニ前ノ錯簡ノ文入レリ〕

校異 1[イ]御。2六字、錯簡ノ所ニナシ。3[イ]居。4[国]々アリ。5[図]のアリ。6[イ]御文。7[イ]打寄。8[イ]いとく、[イ]ていとく、[国]て皆。9[国]く。10[国]で。11一字[イ]ニヨリテ補フ。12[イ]二字ナシ。13[国]一字ナシ。14[国]らば、[イ]かば。15[イ]ふ。16[イ]ナシ。17[イ]はば。

仲純、

　この宿に匂へる花のいかなれば落つる雫も玉と見ゆらん

行正、

　松風の響き殘れる宿にしものどかに1來ける花の色かな

仲忠、中にて詠まずなりぬ。かゝるほどに、少將、「久しくなりぬ。いとかしこし」とて急げば、北2の方、內裏の3返し、

　白4露の宿るも嬉し谷と云へ5ど空にし月の影も見ゆれば

と聞え給ひて、綾搔練の袿一襲、袴具したる女の裝束一具かづけ給ふ。急ぎ參りぬ。6（こ）と人々7留め給ひて、遊び明して、つとめて歸り給ふに、同じやうなる女の裝束かづけ給ふ。

〔○以下刊本ニ三葉アルハあて宮ノ卷ノ卷末ノ文ガ攙入セルモノナリ。コヽニハ除キテ、ソコニ入ルベシ〕

　文化四年丁卯四月廿四日校合畢

同十二年乙亥二月以本居氏藏書校合畢興之

校異 1 〔イ〕咲。2 〔イ〕ナシ。3 〔イ〕御アリ。4 〔因〕雲。5 〔イ〕ば、〔イ〕ナシ。6 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。7 〔因〕はアリ。

かくて紀伊国牟婁郡に、神南備種松といふ長者、かぎりなき1満らの2王にて、たゞ今国のまつりごと人にて、かたち清げに3て心つきてあり。それが妻4にては源の常有と申しける大納言の女、上手取りなどしけるを、親もなく、里も5大殿も失ひて、世の中に住みわづらひたるを、種松たばかり6て、その腹によき女一人有りければ、内の蔵人仕うまつりけるが腹に、源氏一所生れ給ひけり。母生み置きて隠れぬ。祖父知ろしめさず、7とぞなりにけり。か8られど祖父国司9こふなり。吹上の浜の10わたりに、広く面白き所を選び求めて、金銀瑠璃の大殿を造り磨き、四面八町の内に三重の垣をし、三つの11陣を据ゑたり。宮の内12 13なりけしき、大殿十、廊14なんどして、紫檀蘇枋黒柿15唐杏など云ふ木どもを材木として、金銀瑠璃車渠瑪瑙の大殿を造り重ねて、四面巡りて、東16陣の外には春の山、南の陣の外には夏の蔭、西の陣の外には秋の林、北には松の林、表17を巡りて植ゑたる草木たゞの姿せず、咲き出づる花の色木の葉、この世の18中に似ず、栴19檀20うどんまじらぬばかりなり、孔雀鸚鵡の鳥遊ばぬばかりなり。種松昔

校異 1イ財宝。2異主。3国ナシ。4国もと。5イ夫。6異本考異てアリ、イ取りアリ。7イせ、国そ。8イか。9イこ歟、異本ふらひけ、異本考異侍ひを。10異本考異ほど。11イ陣。12五字異本考異宮殿を敷き。13一字イる。14イろうアリ。15イ柿。16イのアリ。17イナシ。18異本考異香。19国檀。20異本優曇華、イ曼陀羅。

皆は天の下の國になき所なし。新羅高麗常世の國まで積み藏むる財寶の王なり。その種松思ふ1ほど、若君は、我が女の腹に生れ給はざりせば、親王にもなり、帝にも知られ奉りて、都にてぞ生ひ出で給はまし、我がつたなき女の腹に生れ給へれば、かく知られぬ君2もあるなり、そのかはりに3も、4我が國の内にだに、我一人して、國王の位におとらぬ住ひせさせ奉らんとて、仕うまつ5る事かぎりなくめでたし。春は一二萬町の田に、苗代を蒔き苗を植ゑても、「これ我が君の御年の料に乏しかるべし」と歎き、二三十萬疋の綾、6紬綿を藏へ納めても、「御調りに乏しかるべし」といそぎ、上下7仕うまつる人、女三十人ばかり、男8よみ〔〇上〕下合せて百餘人ばかり、女は髮揚げて唐衣着では御前に出でず、男は冠し上の衣着では御前に出でず、あざやかに清らたる裝束をかへて著せん、ゆたか9〔に〕飽き滿10たんと11てする事、同じく作る田といへども、車の輪の大き12なる日七つ出で13て、年の内照すとも、一筋燒くべからず、天とひとし14き水たゝへて溢すとも、一筋流るべからず、山の末15嶺の上にも、種松が落せる種は、一つ16日〔〇種カ、拝カ、粒カ〕に一二17石取らぬはなし、寶飼をすれども、種松が蠶一つに、絲の十廿兩取らぬ18なし。

校異 1 國やう。2 國にて。3 國は。4 国王。5 國將異れアリ。6 國錦絵錦、国綾金。7 國にアリ。8 国か。9 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。10 國て。11 国ナシ。12 イさアリ。13 國將異ナシ。14 國く。15 国岩木。16 国ほ。17 国斗。18 國はアリ。

かく1て名あるかぎり2は召しを3 4て出でしゑし5作物所の人6々婦の7鍛冶8なら9 10を、11 12所々に多く据ゑて、世にありとある物の色を、有難く清らかに調じ設くる事かぎりなし。山を崩し海を埋めても、我が君の願ひ給はんものをつか13まつらんといそぐ。か14らつか15まつり歩16 17て、源氏の君のおはします18程に、この世に19は生れ生ひ立つ人20もあらず。顔かたちよりはじめ奉21るて、様心22才に至るまで当世なし。文を読み、遊びをし給へど、習は24すしは多くしまし給ふ。都の物の師といふかぎりは、迎へ取りつつ、かれが25まへをば習ひ取り、我が才をばかれに教へつゝ、かしこき琴の上26しゅおほやけを恨みて山に籠れるを迎へ取りて、さながら習ひ取りなどして経給ふほどに、廿一28なり29、御妻なし。よき人の女とも准れども、思ふ心ありて、30え婚はらず。

かゝる程に、右近の31尉清原の松方、32きんのし司の少将仲頼に、陣にて云ふ、「33世に松方は、いと興ある人に見給へつきて、31雅頼も参り侍らざりつる」少将、「何処なる人ぞ」松方、「紀のまつりごと人、甘南備の

校異　1〔イ〕たゞ。2 一字〔関〕の。3〔イ〕きアリ。4 三字〔イ〕纏ひて。5 上九字〔関〕綾、纈を盡くし、〔関〕考異物の師を率て下し畫師。6〔イ〕金剛、〔関〕金銀、〔関〕考異々京。7〔関〕考異内。8〔関〕ども、〔関〕考異なる。9〔イ〕ぬアリ。10〔国〕ばせ。11〔関〕選びアリ。12〔関〕考異選び。13〔イ〕うアリ。14〔イ〕う、〔国〕く。15〔イ〕うアリ。16〔イ〕きアリ。17〔国〕く。18〔関〕様、また、〔関〕考異やうは。19〔関〕ナシ。20〔イ〕にアリ。21〔イ〕り。22〔イ〕ばへ。23〔イ〕有り難き。24〔イ〕ずして、〔イ〕す師に。25〔イ〕才。26〔イ〕手。27〔関〕ナシ。28〔国〕にアリ。29〔国〕給ふまでアリ。30〔イ〕得給はず。31〔関〕尉。32〔国〕近衛の、〔関〕近衛。33〔イ〕ほど、〔イ〕には、〔国〕ほどに、〔関〕やう。34〔関〕内裏に。

補松と申す言ひ知らぬ財寶の王侍り。それが1婿に物し給ふ君なり。それ、かれよりしば／＼召しゝかども、宵仕へ急がしきうちに何かはとて、罷り下らざりしを、補松参う上り來て、切に傾み申しゝかば、まからさまにとて罷り下りしかば、いとこそめでたく侍りし2(か)。かの君の住み給ふ所は、吹上の濱のほとりなり。宮より東は海なり。その南面に、岸にそひて、大いなる松に並かゝりて、二十3町ばかり並み立ちたり。それにつ4けて檜楼一列並み立ちたり。それにそひて紅梅並み立ちたり。それにそひて、躑躅の木ども北に並み立ちて、春の色を盡くしてゐ5並み立ちたり。秋の紅葉西面、大いなる池面に6か7らのごと8並みおきそめ、色を盡くし所を定めて植ゑ渡し、花開時を分けつゝ、同じやうにしたり。宮の内9には世にも言はず。麗ましく見るかひある所になむ侍る。かの御かたち身の才など10う、11侍從の君とひとしき人にたん物し給ひし御覽、「いと興ある事かな。かの侍從とひとしき人の又あるよ。甘南備の藏人の面に生まれ給ふ」と聞きし君ぞかし。たゞ今の12中に、珍らしき人生ひ出で給ふ13なんど紀伊守の院に渡せし君にこそあれ。いかでさは生ひ出で給ふらむ。忍びてこれかれ行かばや。藏侍從は御隨ぞなかめる。御侍14從などして物せむ」御方、「いと興ある事かな。御年籠はらん。しか司の佐の君藏侍從の君良佐主の御遊びなどの、かしこ

【校異】1 婿、因孫。2 一字因ニヨリテ補フ。3 因考異丈。4 因ぞ。5 同立ち並み。6 五字因紺 紅のごと。7 一字闕く。8 因並み居、因渡み染。9 因をば。10 因で。11 因藤アリ。12 因世、因考異世の中。13 因となん。14 因ナシ。

き事語り申しゝかば、如何ならん世に對面賜はりて、御遊びども承はらんなど申さ1るなり。2きはいてへかと下り給ひなば、とみにやえ歸り給はざらん。かしこ見給ふるには、つたなき松方3たゞに、都の4（こ）と思ひ出でられずなん侍る。まして君達の物の音掻き合せつゝおはしまさむは、古里は思ほしかけてむや。怪しく見給ふるにかひある君になん物し5御す」仲頼、「忍びて必らず物せむ。侍從如何にたばかりて具して下らむ」松方、「忍びて誘ひ聞え給へかし。かの君ばかりぞ、源氏の君の御琴には對ひ物し給ふらん。聞し召し比べばや」仲頼、「6さきにせむやは7、仰せ言をだに承は8らぬ心は。さても騒がれなむ。今東宮には9きぬの御琴、若宮には琵琶仕うまつり給ふめれば、御暇ぞなかめる。我こそ安けれ。唐土に渡るとも、制し給ふ親もなく、許し給はぬ君もおはせねば」松方、「それも苦しげに物し給ふ時もあめりき」など言ふ。

かくて仲頼、罷出るまゝに、兵衛の司10立ち寄りて、「良佐主は此所に11、上に12候はぬ13は」と言ふ。行正出で來たり。仲頼、「久しう對面賜はらずなりにければ、そのかしこ14よりも聞えむとてなん」行正15は、「甚だかしこし。などか久しう參り給はざりつる」仲頼、「一日春日にて、こよなく食べ醉ひ16ける名殘り

校異 1〔内〕れたりき。2〔イ〕さば、率てやがて、〔内〕まいて人々。3〔イ〕ら、〔イ〕ナシ。4 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。5〔イ〕給ふ。6〔国〕さら、〔内〕まさ。7〔国〕なからんアリ。8〔国〕り給はねば。9〔イ〕琴。10〔国〕にアリ。11〔イ〕かアリ、〔イ〕はアリ。12〔イ〕と。13〔イ〕ナシ。14〔イ〕ま。15〔イ〕ナシ。16〔イ〕にアリ。

に、なほ苦しう侍れば、な1ほまことや、仲頼いと興ある事を承はりて、主に聞えんとてな2か」行正、「何事ぞや。君の御耳に入り給ふは、興もなき事ならん」少將、「3この紀伊國の源氏の御上を、松方が語り申しつるに、仲頼靜心なし。あからさまに罷り下らんとする4を、いざ給へ」行正、「甘南備の殿5への腹なり。いと有り難き君と聞き奉るぞ。行正も早くより承はりて、出で立ち侍るを、暇の侍らねばなり。必らず仕うまつらん。何時かは物し給ふ」仲頼、「廿九日ばかりにとなん」行正、「如何に藤侍從は物せむと宣ふや。必らずかの主をこそ率て下り給はめ」少將、「未だ申さ6ず。それをぞ思ひ侍る、御暇のなか7ふれば」8佐、「御暇なくとも、かの主は9いかで立ち給ひなん。いざ給へ、桂へ」とて桂10へむ行く。かくて桂殿にま11かでゝ、藤侍從を呼び出でゝ、この事を言ふ。仲忠、「いと嬉しき事な12しり。例の殿や勘當せむ。13やは申し給はぬ」と言ふ。仲頼14左大將の大殿に聞ゆ、「明後日ばかり、いと興ある所の侍るな15る、見給へに罷り出で立つを、侍從の君おはしまさせむとなん思ひ給へ立つを、如何ならむ」16左大將、「何處へぞ」「紀伊國吹上の濱のわたりへなり」あるじの主、「若し源氏の御許へか」仲頼、「さなり。今朝司のまつりごと人松方が語り申しつるに驚きてなむ、にはかに出で立ち侍る」主、「仲忠も常に物せむとて出で立つ所なり。されど、許し17宣はねば18、え19罷らざめるを、何かは、率て下り給へかし。一人はえ物せじ。人々も

校異 1 イむ。2 イり。3 底か。4 イナシ。5 イ人。6 イれアリ。7 イめ。8 イ良アリ。9 イ出。10 底殿へ、イへ。11 イう。12 イな、底ナシ。13 イ申しやはし。14 イ右。15 底り。16 イ右。17 底宣は。18 イなんアリ。19 底なむアリ。

1云ふなれば、いと後安かなり」5(仲)頼、「いと嬉しき事なり3と4申さむに、いとかしこしと思ふ給へるを2な」とて歸りぬ。

かくて仲頼、宮内丞殿に歸りて、「明後日ばかり、物6にあからさまに物せむと思ふを、如何に裝束なからむ」7女、8何時か物し給ふらん」少將、「近き所9なや。藏人侍從眞佐などして物すべき所ぞ」など言ふ。女、父母に、「明後日物10に物し給ふなるに、かの御隨身などを如何にせん」11など言ふに、父母、「いとやすきこと何せんにか12思ひ物し給ふ。物13にも物し給ひなんほど、この節會には佩き給ふ御佩しを質に置かん」女、「14あて正月の節會などには如何せむ」とみ15かくえ取り出でずもこ16とあれ17(父母)「あな18(あ)なし。19此多く出で來なば、いととく出だしてむぞ。20上に恥を見すや21」御佩刀取り出でゝ、大藏史生の家に、錢十五貫が質に置きにやりて、御供の人、道のほどの割籠などせさす。22も「(一)缺カ」「23御料など清げにせさせよ。便なき儀に惡くしたらば、恥しからん」あるじの主、「世間は同じ事。我が身の錢だに心靜め給はば、財寶を盡くしていたはる所に24も居給はで、我がかく貧しき所におはすれば、恥は隱れぬ」など言ふ。かくて皆出で立ちて、狩衣裝束をして、直衣裝束は持たせて、少將は眞佐25、藤侍從の住み給ふ積にまう

校異 1 イのし給。2 一字イニヨリテ補フ。3 國かくアリ。4 國りアリ。5 國など。6 イも、國へ。7 國ナシ。8 イ何處へ、宮何處ぞ。9 イなり、國ぞ。10 國へ。11 イとアリ。12 國二字ナシ。13 國へ。14 イさ。15 イに、イて。16 イそ。17 二字國ニヨリテ補フ。18 一字イニヨリテ補フ。19 イ位藏、國積、國游異藏。20 イゑ、國世。21 宮はアリ。22 一字イナシ。23 二字國食、宮游異食、國游異設けの。24 國は。25 イとアリ。

1づ。2なれより侍從やがて出で立ち給ふ。いとになく都の土産に何をせんと思ふに、彼處になき物なかるべし。昔所々に3あはれし琴の殘り、やどもり風と言ひしを、かの京極と言ひし所に埋みたりしを、母に問ひ聞きて、夜4密かに取りに、童一人を率ていまして、取り出でさせて、それをなほ持て下り給はむとする。大將殿出で立つ人に饗し給ふ。三所の君達に蘇枋の机四つづゝ立てゝ、隨身などにも樣々につけて賜ふ。かくて皆出で立ち給ふ。

紀伊國に到り給ひて、松方先づ吹上の宮に5はいらりて、君の御前に跪い6らる。君「あな珍らし。いと心もとなくて歸りものせられにしを、嬉しうも對面するかな」松方、「甚だかしこし。7候はむと思う給へしを、8手番の事など侍りしかば、それに障りてなん急ぎ參う上りにし。今日は司の源少將、粉河に詣で給へる9供になん候ひつる」あるじの君、「いと嬉しき事かな。このわたりに便りあらば、おはしまさせ給へ。御10馬など休め11きさせ奉らん」松方、「さやうになん思12ひて13は14うつり給15ふめる」あるじの君「畏まり16てうと申し給へ」など宣ふ。17あるじの君内にはひ18かり給ひて、よき裝束などし給ひて、南の端より下りて、客人達迎へて、寢殿の南の庇に四所19へき20つくこそ給ひぬ。かくて21先づ御饗仕うまつる。

校異 1[イ]でて。2[イ]そ。3[イ]散、[国]分た。4[イ]密。5[イ]は到、[イ]這ひ入、[因]はひ。6[イ]居。7[イ]來。8[イ]使ひ。9[国]御アリ。10[因]馬。11[イ]ナシ。12[国]う給へ。13[イ]ナシ。14[国]參り。15[国]へ。16[イ]てうべし、[イ]てと申し、[国]奏し申し、[因]申し。17[国]五字ナシ。18[イ]入、[因]ナシ。19[イ]着。20[イ]四字ナシ、[国]連ね。21[因]種松。

拍子など度々になりて、物の音など掻き合せつゝ遊び給ふに、少將良佐など、いと哀れにめでたき人の、かく籠り物1宜ひける2に、げに仲爲3のひとしき容貌なるを見るまゝに、めでたしと見る事かぎりなし。少將あるじの君4（に）聞ゆ、「仲賴多くは此所に5て參り來しなり。公方事のついでに籠り申しゝを承はりしに、異心なくて、夜を晝になしてなん急ぎ6 7罷り出來し。げにかひありて、思う給へし8かど對面賜はり9むるが嬉しき事。10ある君や、などかかくては籠りおはしますらむ。東宮の、たゞ今物の音珍らかに出だし（○賜ふカ）させ11いかで得むと宣ふを、如何に悦び聞え給はむ。京におはしまして、さやうの御宮仕へなどをもせさせ給へか12りし」あるじの君、「甚だかしこし。げにかくむつかしき所にのみ籠り侍れば、いとゞつたなき心地するを、京に上りて、宮仕へをも仕うまつらまほしう侍れど、かくて籠り侍りたる人の、にはかに交らひなど13をば、見苦しき事多く、興代りの事14いにもやならんとて、年頃をかくて過ぐし侍りつるを、15（16便りにこのわたりに17など18 19承はり20かしこまり申しつるを）21 22さして非吏に23 24承はれ25ば、とり申すかぎりにあらず、かしこまり申し侍る」少將、「甚だかしこし。怪しう26宜ふ27かな。

【校異】1国し給。2国よ。3国考異に。4一字国ニヨリテ補フ。5国え。6国考異〈〈アリ。7国参うで。8国君ごと。9国た。10国君が、国あり。11英人アリ。12国ナシ。13国せ。14国へ。15廿四字国ニヨリテ補フ。16国さらでも難見。17国侍るアリ。18国考異奏せし人の侍るをアリ。19国奏せし人の侍るをつたへ。20国てアリ。21三字国考異ナシ。22一字国之。23上六字国ナシ。24国とアリ。25国ナシ。26国もアリ。27国ものアリ。

都に侍る人は1などか侍る。田舍におはしませども、2我が君をこそ世の例には聞えめ。東宮、かくておはしますと聞し召して、いかで對面賜はらん。忌なき身なりせばそのわたりにこそは物せめ。」3るらん、さあるまじきを、上りやはし給はぬなど聞え給ひき」など言ふ。種松、三月三日の節供なおど、かばかり仕うまつれり。あるじの君、客人三所の御前に、銀の折敷金の臺4すゑて、花5ふ線に羅6の重ねて、長織7（物）、綾、線に羅重ねて打敷にし、8はすの銀の9臺盤10にだに据ゑて參11り。干く12さ〔〇栗〕物の花いと異なり。樺紅梅柳櫻一折敷、躑躅山吹一折敷、さては綠の松五葉す13みひろ一折敷、14卯花の色本の枝に咲きたる15におとらず。干物菓物餅など調じたる樣珍らかなり。山瀬河16しめ〔〇天〕の下にある物のなきなし。沈の臺盤17こ18つ、19いと優に羅重ね20て、21おもて22ちうを一尺二寸ばかりのからわ〔〇角輪カ、唐輪カ〕に、轆轤に挽きて、樣々に色どりて、威儀の食物參る。をさに紫檀の御折敷23少しづつして參る。御酒參る、都合24こついしき、盃などいと珍らしく異なり。客人達の御供の人は、少將の供の人に、まつりごと人松方、目春日の村蔭、府生25まの康26類、番の長大27宿の貞松、府生山の28人の貞業、

校異 1 [イ]何。2 [国]二字ナシ。3 [イ]かえ。4 [因]にアリ。5 [国]文。6 [イ]ナシ。7 一字[イ]ニヨリテ補フ。8 [イ]數。9 [因]臺。10 [因]考異に臺、[因]考異燕に。11 [因]れり、[因]考異る。12 [イ]だ。13 [因]考異ゑ。14 [因]その。15 [イ]ナシ。16 [イ]あ。17 [イ]三、[国]二。18 [因]よろひ。19 [因]おもてに、[因]考異置きて。20 [因]考異ナシ。21 [国]折り、[因]覆ひ。22 [因]沈。23 [因]四ッ。24 [国]二つ息、[因]考異四ついき、[因]考異二ついしき。25 [イ]鳥、[因]狛。26 [イ]敎。27 [イ]倭。28 [イ]部。

舍人1は人、武士舍人ども同じ數なり。これらは、物の2仔細人等あり、かたちあるもの撰びたり。御隨身

小舍人侍の人、かたちを撰3み裝束を調へて多かり。それらが前ごとに机ども立てゝ、いかめしき饗をし給ふ。かくて御土器はじまり4箸下りぬ。人々の御前の折敷どもを見給ひて、仲忠の侍從、花園の胡蝶に書き付く、

花園に朝夕わかず居る蝶を松の林はねたく見5ゆらむ

少將、林の鶯に書き付く、

常磐なる林にうつる鶯を6ひらの7花8もつらく聞くらむ

あるじの君、水の下の魚に、

底清く流るゝ水にすむ魚のたまれる淵をいかゞ見るらん

9ちう〔〇良〕佐、山の鳥どもに、

露しげる10嶺よりすだつ鳥どもゝ花の林に遊ぶ春かな

かくて仲忠の侍從、あるじの君にやど11（も）り貝を奉り給ふとて、「これ、昔所々に流れけるを、御料に12とこなん一つ殘して侍り13ける」14舞踏して取り給ひて、15樂一つ彈き給ふを聞きて、仲16く大きに喜

頭注 1 舍人。2 國し細ふばへ。3 圀び。4 圀御アリ。5 圀る。6 易ぐ。7 〔イ〕松。8 圀は。9 〔イ〕ら。10 〔イ〕嶺。
11 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。12 〔イ〕なんとて。13 圀つ。14 圀あるじの君アリ。15 宴曲。16 〔イ〕忠。

1ふ、「世の中に2有り難き御手なり。これは昔仲忠が親とひとしき人もの3宣ひける、その御傳へにこそあめれ」などかしこ4く驚く。あるじの君、「この御琴は、先づ試みさせ給ひてこそよからめ」仲忠、「さること仕うまつらで久しうなりぬれば、搔き鳴らさむ事なん思ほえず侍る」などつれなく言ふ。かくて、物の聲搔合せ、あるかぎり聲合せ調子合せつゝ遊びくらす。少將、「御前にて節會ごとに惜しむ手なく仕うまつる折々も、5殊6（に）かゝる物の音などは聞えぬを、いと珍らかにもあるかな。一所に遊ばす御琴の音に、多くの人の手なむまさりぬる」、行正、「左大將殿の、春日にてし給ひし遊びをなん珍らしき心地せし。それにも今日はこよなくまさりてなん思ほゆる」など言ふ。少將、かく面白き所に、あるかぎりの上7しゆ集ひて、明け暮れ遊びわたれど、心に思ふ事はなほ忘れぬまゝに、あるじの君にも聞ゆ、「かく面白き所に、など8心すごき住ひはし給ふらん。天下の物の興も、一人見るにはかひなき事なり。見る人ある時になん今少しまさるもの9（に）なん。此所を一所御覽ずるは、秋の池に月の浮ばぬ10は思ほされずやは」あるじの君、「げにいと住み11にくゝ思ほゆれど、かく深き蓬の住處を見すべき人もなければなん、心にもあらぬ住ひにて久しうなりぬるを、世中に不用なる人もなかりければ、このわたりまでは思ほえずなん」。少將「京に見給ふる12に、人の御覽ぜむ13も異なるか14たはなき女などは多かるものにこそ15あめれ。品卑しから

校異 1 [イ]び。2 [イ]かくアリ。3 [国]し給。4 [イ]み。5 二字[因]考異いと。6 一字[イ]ニヨリテ補フ。7 [イ]手。8 [イ]かはアリ、[国]かアリ。9 一字[イ]ニヨリテ補フ。10 [イ]に。11 [因]考異うく。12 [イ]ナシ。13 [関]に。14 [イ]どい。15 [イ]はアリ。

ず、心ある人の1女ども2などはいと多くて、男少なき所なれば、仲頼らが怪しからぬものに、よき女いと多くつきてなん時めかすめる。よき女といへど、一人あるは、悪しき二人におとりたるものなれば、我も我もと、男一人に女二人三人つきてなんある」と言へば、あるじの君、「いと3多かなる中にも、御司の大将、さては宮内卿殿の御む4（す）めども5なむ有難きかたち心になむ物し給ふ6承はる」。「宮内卿の女は7知らず、大将殿の君達はさ物し給ふなり。男8女9など、人にことなくまさり給へり。その中にも、男は七郎にあたり給ふ侍従、女の中には九にあたり給ふなむ、いとことよなく物し給ふ。かの女君をば、たゞ今の天の下の人ゝ聞き渡くし給はず、これかれ聞え給ふめれど、思ほしたる事あ10め11なれば、えあるまじと知りながら、なほ人々聞え給ふめる。げにいと怪しうおはしますなり。御かたちよりはじめて、御心なん父かゝるこそいと怪しけれ」仲忠、「12先づいと怪し13かなる14は、父の大殿の、ふどう「〇不動カ」の御命開きて、多くの時に花失ひ給ふなること15そはいと珍らかなれ。そ16れ17ら18中にも、この春春日にて遊ばしゝ19花園の節にこそ仲忠多く遅は落してしか。霞の遙かなる朝、松風の涼き響に、のどかなる聲を調べ合せ給ふには、鳥獣、

校異 1 ［異］御アリ。2 ［イ］二字ナシ。3 ［イ］言葉。4 一字［イ］ニヨリテ補フ。5 ［イ］二字ナシ。6 ［イ］とアリ。7 ［考異］いざアリ。8 ［異］もアリ。9 ［異］子も。10 ［イ］ナシ。11 ［異］ナシ。12 ［考異］二字ナシ。13 ［考異］う思へ。14 ［イ］も。15 ［異］と。16 ［イ］ナシ。17 ［イ］が。18 ［異］中。19 ［異］元。

山伏山人、耳振り立てぬはなかりき」少將「その中にも、源宰相の御氣色の、吾にもあらで聞き居給へりしを1見給へしにこそ、老の2世に物の哀れ知ら3れず侍るを、多く思ふ給へ知られにしか」。あるじの君「げに如何なる心地しけん。よそに4て承はるだにあるものを」と宣ふ。

【畫詞】5吹上の宮。南面大きなる野邊のほとり、松の林二十町ばかり丈ひとしく、姿同じやうな6る松7清く廣し。鹿雉子8かげ知らずあり。東面、濱のほとり、花の林二十町ばかりなり。花9の御垣のもとまで並み立ち、滿つ潮は、御垣のもとまで滿ち、干る潮は花の林の10東を限れり。潮滿11ちて12は、花の木は海に立てるごと見ゆ。砂うるはし。木の根13品14く見えず。いろ〳〵の小貝ども敷けるごとあり。宮より西、大きなる川のほとり二十町ばかり、紅葉の林の丈ひとしう數同じ。宮より北面、大きなる山のほとり、山より下まで常磐の木色を盡くしたり。町のほど木の數、南とひとし。宮の内四面廻りて、三15つの垣三つの陣の面ごとに、檜皮葺の御門三建てたり。16馬場殿、大なる池、大きなる山の中に、いかめしき反橋あり。池の廻りに花の木廻りて立てり。埒結ひたり。側に西東の御17廐別

【校異】1一字イニヨリテ補フ。2因考異身。3イナシ。4因考異ナシ。5国此所はアリ。6因り。7国のアリ、因邊アリ。8イ數、イ二字ナシ。9因は。10国外。11イナシ。12イば。13イしる、イ紫。14国なアリ。15因重。16因馬。17因厩。

當預りこと〴〵しう、御馬十づゝ。鷹屋に鷹十づゝ据ゑたり。御殿町1、檜皮葺の金銀瑠璃して造り磨きたる大殿渡殿、更にも言はず照り輝けり。住み給ふ御殿2うち3造り、御座所心異なり。客人三所、あるじの君に琴奉り給へり。あるじの君舞踏して賜はり給ふ。少將4箏の琴、良佐琵琶奉り給ふ。

かゝる程に、濱のほとりの花盛りになりぬ。君達、花御覽じに、林の院5に出で給ふ。その日の御設け、晴松が妻仕うまつり給ふ。今日の御裝は皆直衣の御衣ども御供の人例の上の衣櫻の下襲など6(7着)たり。皆徒歩より出でた8にひぬ。御前の物皆女の仕うまつり給ふなれば、賄よりはじめて、女の仕うまつ9り、沈の折敷廿、沈の轆轤挽の御坏ども、敷物打敷、心ばへ珍らかな10る青11い白橡の唐衣、綾の摺裳、綾の綟練12桂、袷の袴著たり。大人髮丈にあまり、色白くて、年廿歳よりうちの人十人。同じ青色に、蘇枋綟の袴、綾の搔練の袙一襲、袷の袴著たる童、髮丈とひとしくて、年十五歳よりうち、13なけひとしく姿同じき十人。男ども14に15は、御階の下まで16は十の御折敷を取り續きて立ち竝み、下仕へは御膳のもとまで取り次ぎ、童は御前に參り、大人四人は御前の事まかなひを17ば、童の手より次ぎて參ゝに・丈た18くへうるは

校異　1 [イ]のアリ。2 [因]のアリ。3 [イ]續け。4 [因]箏。5 [イ]へ。6 一字[イ]ニヨリテ補フ。7 [因]考異し。8 [イ]ま。9 [イ]る。10 [イ]り。11 [因]色。12 [イ]のアリ。13 [イ]なる、[イ]たけ、[イ]なる、丈、[因]考異なり、丈。14 [イ]15 [因]考異ナシ。16 [イ]ナシ、[国]に、[因]考異八。17 [因]す。18 [イ]かく、[国]から。

しき御物を四隅、折敷一にすゑて、遊1々より参るに、いさゝかなる過失せず。男君達の御前に立ち居仕うまつるに、めやすく労ある童べなり。かくて物の音など掻き立て、例の遊びなど振舞ひて、2歌つ3づりなどしつゝ4読み上げて、5きむ琴に合せて誦経に誦んじ給ふ。かゝる6に少将、かく面白き所に、あるかぎりの上手7と居て、世の一の琴8と吹き立て掻き鳴らしつゝ、清らを尽くして遊び渡れど、病ひにつき伏し沈みて具ひし事は、慰むべくもあらず歎き渡るに、花誘ふ風も心すごく吹9きても、10前を見渡し給ひつゝ、花は色を尽くしたゞ今盛りな11り、風にきほひて散りかひ、漕ぎ渡る小舟近く返る、花12一つに積きて見ゆれば、少将、

行く舟の花にまがふは春風の吹上の浜を13うげばなりけり

あるじの君、

春風の漕ぎ出づる舟に散りつめば藤14が花をよそに見るかな

侍従、

15ゆく舟に花の積ら千降り数けば我も手ごとに摘まむとぞ思ふ

良佐、

[校異]1 [イ]く。2 [前]漢詩。3 [イ]く。4 [イ]て。5 [イ]二字ナシ。6 [前]ほどアリ。7 [イ]集ひ。8 [イ]笛。9 [前]くに、[イ]きて。10 [イ]御前。11 [前]る。12 [前]とアリ。13 [イ]滑。14 [イ]の。15 [イ]夕暮。

風吹けばとまらぬ舟を見しほどに花も殘らずなりにけるかな

など宣ふほどに、宮より種松が1女君、合せ薫物を山の形に造りて、黄金の枝に銀の櫻咲かせて立て並べ、花に蝶ども數多すゑて、その一つにかく書きつく、

櫻花春は來れども雨露に知られぬ枝と2(3なる)ぞ悲しき

とて、よき童して、林の院4(に)奉れり。君達見給ひて、蝶ごとに書きつけ給ふ。侍從、

雨露5に木末6はわかずか7くればや花の枝とは人の知るらむ

少將、

春風の吹上に匂ふ櫻花雲の上にも咲かせてしがな

あるじの君、

櫻花雲に及ばぬ枝なれば沈める影を浪のみぞ見る

良佐、

櫻花染め出だす露の わかねばや底まで匂ふ8枝し見ゆらん

松方、

さくら狩濡れてぞ來にし鶯の都に居るは色の薄9さに

校異 1〔国〕妻。2二字〔イ〕ニヨリテ補フ。3〔因〕見。4一字〔イ〕ニヨリテ補フ。5〔因〕の。6〔イ〕も、〔因〕そ。7〔イ〕か。8〔イ〕色も、〔因〕考異枝も。9〔イ〕き。

近正、

人づてに聞き來しよりも櫻花怪しかりけり春の1風間は

時蔭、

白雲と見ゆる櫻もあるものを及ばぬ枝と思はざらなむ

種松、

なで生すかひもなきかな櫻花匂ふ枠にもあ2らずと思へば

など3いらひて、夜一夜遊び明かす。その日4かづけ物、種松が妻君よそ5(ひ)6出しつゝ、7様も物の色も珍らかに清らなり。

〔闕〕8そ9らどる10に11院12に、頭く面白き濱に、花の色を盡くして並み立てる中に、高く清らなる13男立てり。其所に君達並み居給へり。上の衣裝束の人14は十人15立ち續きつゝ、16人毎に17二人づゝ參る。君達御文作り給へり。あるじの君、紀博士の大學の助講師して讀みあぐ。君達琴に合せて誦じ給へり。侍從にも言はぬ18さらなり。かづけ物三箱持て出でたり。あるじの君取り給ひて、侍從より

校異 1眞川。2國は。3〔古〕言。4〔古〕ノアリ。5一字〔古〕ニヨリテ補フ。6〔古〕ひとへづゝ、〔古〕一具づゝ、〔國〕考異一くだりづゝ、支出でたり。7眞なべて。8〔臣〕こ。9〔古〕う。10國も。11上五字支此所は林の。12國も、〔國〕ナシ。13〔古〕御殿 14〔近〕は八、〔近〕八。15〔國〕ばかりアリ。16〔古〕一御前、〔國〕人賜ひ。17〔國〕考異ふさに續き。18〔近〕ず、〔國〕標。

はじめてかづけ給へり。

かくて三月十二日に、はじめの巳の日出で來たり。君達御1いらへ〔○誠〕しに渚の院に出で給ひて、網引2召し集へて、よき物かづかせ、村長召して大網引せかなど3〔し給ふ〕。その日の4折數、銀の折敷二十、打敷5唐の羅、綾の綺の襲したり。金の御坏どもして、御前ごとに參りたり。6う〔○對〕どもに蘇枋の机ども二つづゝ賜へり。かくて例の君達は琴彈き、7下部童笛吹きかは8す、遊び9暮して、夕暮に、大きなる釣船に、蜑の栲縄を一絡繰りおきて漕ぎ渡るを、少將見て「これかく見ゆとも、仲頼が心ざしよりは短からむかし」など言ふを、あるじの君うち笑ひて、

くる人の心のうちは知らねども絡まるゝかな蜑の栲縄

侍從、「此所まで參り10見る11におとらじかし」12もりて、

道遠き都よりくる心にはまさりしもせじ蜑の栲縄

少將、

こゝにくる長き心にくらぶれば名にや立つらん沖つ栲縄

と言ふ程に日傾きぬ。あるじの君、かく面白き所に、勢ひある住ひはし給へど、よき友達に會ひ給ふ事この度なれば、かくてのみおはしまさなんと思ほせど、さて物し給ふべき人々にもあらぬを思ほす程に、渚よ

校異　1〔江〕は。2〔要〕女アリ。3三字〔江〕ニヨリテ補フ。4〔江〕二字ナシ。5〔要〕考異香。6〔江〕ぞ。7〔要〕考異し〔く〕。8〔国〕し。9〔江〕かは。10〔江〕來。11〔江〕も。12〔江〕と。

浦島連ねて立つをりに、1いま2ひ（〇浦千）鳥の聲々鳴くを聞きて、あるじの君、

　浦島友を連ねて歸りなば3一人は濱に泣く〳〵や經ん

侍從、「4我が君をばまさに」などて、

　雲路をば連ねて行かん儀々に遊ぶ千鳥の友にあらずや

少將、

　浦島千鳥を雲に擴へてこそ讀めつと5えて君に取らせめ

行正、

　井間はなどいかに害へん濱に住む千鳥さそひに來し浦島

など6て7一夜遊び明かす。

[語釋] 8浦の院。大きに高き御殿、潮の干潟つ9よたに立てり。遊りはをかしき島ども數多あり。頭包みたるなども、選き集めて潮波みかけたり。鹽釜に10濃潮汲み入れ、11つるかなる釣の濱どももあまた、かけて干す12はつきつき〳〵13（し）14お15濃干したり。

三月中の十日ばかりに、藤井の宮に藤の花の16（17宴）し給ふ。君達出で給ふ。御装束18い晴儀の青き白橡、

[校異] 1囮はっ2囮ち。3囮千鳥。4囮君。5囮と。6囮とアリ。7囮夜アリ。8囮此所はアリ。9囮か。10囮潮。11囮はっ12囮手。13一字囮ニヨリテ補フ。14囮く。15囮ナシ。16一字囮ニヨリテ補フ。17囮宴。18囮に。

綾の上の衣、蘇枋の下襲、綾の上の袴、螺鈿の太刀、唐組の緒つけて1まつり、御馬添廿人、紫の衣、白緒の打衫着つゝ、四所に廿人づゝ仕うまつる。ま2う人の御3前4御所には、衛5らの駒ども6は、青色に柳襲着、あるじの君の御供には、宮の侍の人十人、青色の7松葉の上の衣8の柳襲着、9童四人、青色の上の衣、柳襲着たり。その頃の紀伊守は藏人より出でたる人なれば、この少將などの10したゝるを聞きつけて、吹上の宮に、國の司ども引き率て參うで給ひて、藤井の宮に渡り給ふ11に、かくて皆着き12わり給ふ。その日の御設け碩松仕うまつれり。君達四所國の守までに、紫檀の折敷二十、紫檀の轆轤挽の坏ども13、14數物、打敷、15 16(心ことなる錦綾なり。蘇枋の折敷、蘇枋の轆轤挽の坏17すゑて二つこ御供の人の前ごとに立て渡し、18土器はじまり、御膳下りて、19守の主少將に宣ふ、「下り給へりけるを、え承はらざりけるかな」少將「願作るを果さむと思う給へしかども、思ひ立20らず侍りしに、この吹上の宮を承はりてなむ、神の御もとにだに物還く侍りしを、にはかに出で立ちて侍りし。自らをと思う給へし程になむ、怠りにけ21る」22守の主「この宮に參り來ざりせば、え對面賜はるまじくこそありけれ。如何に京には何事かあらん。淺ましう前の守のし亂りける國に參うで來て、宮家の使ひども23の入り亂れてのゝしり、おほやけ事は緩む方もなき

校異 1〔イ〕たてアリ。2〔イ〕ら。3〔国〕まへ。4〔国〕二字ナシ。5〔イ〕府。6〔因〕まで。7〔因〕老異まつはし。8〔イ〕ナシ。9〔因〕十二字ナシ。10〔イ〕下りたる、〔イ〕物したる、〔国〕下る。11〔因〕ナシ。12〔イ〕廻、〔イ〕渡。13〔国〕してアリ。14〔因〕老異二字ナシ。15〔イ〕珍らかなりアリ。16廿七字〔国〕ニヨリテ補フ。17〔因〕どもアリ。18〔国〕御アリ。19〔イ〕守。20〔イ〕た。21〔イ〕り。22〔イ〕守。23〔因〕ナシ。

に、旦暮へわづらひて、いはゆる田舎人になむなりにて侍る。大将殿も平らかに1やはおはしますらん」少将、「たゞ今2は大将殿に3は平らかにおはしましき。京には異なる事なし。この国の前の守、愁をなん言ひのゝしる」など4云ひて、例の物の音ども掻き合せて、土器度々になりて、君達和琴遊ばす。「藤の花を折りて松の千歳を知る」と言ふ題を国の守の主、

藤の花かざせる春をかぞへてぞ松の齢5も知るべかりける

あるじの君、

春雨のにほへる藤にかゝれるを結ある松のたまかとぞ見る

侍従、

藤の花染め来る雨も降りぬれば玉の緒結ぶ6春7には8見えける

少将、

汀なる松にかゝれる藤の花影さへ深く思ほゆるかな

良佐、

まどゐして何れ久しと藤の花かゝれる松の末の世を見ん

国の権の守、

[illegible] 1 [illegible]字ナシ。2 図ナシ。3 図ナシ。4 国いらへ。5 図に。6 図松。7 図にぞ、国と。8 官名異あり。

藤の花かゝれる松の深緑一つ色に1ぞ染むる春雨

2•右近の3•將監松方、

紫のいとゞ亂るゝ藤の花4•うつれぞ5•水を人し結べば

6•右近の尉近正、

藤の花7•うつれる水の泡なれば夜の間に浪の織りもこそすれ

8•右近の尉時蔭、

藤の花色のがきりに匂ふには春さへ惜しく思ほゆるかな

國の介、

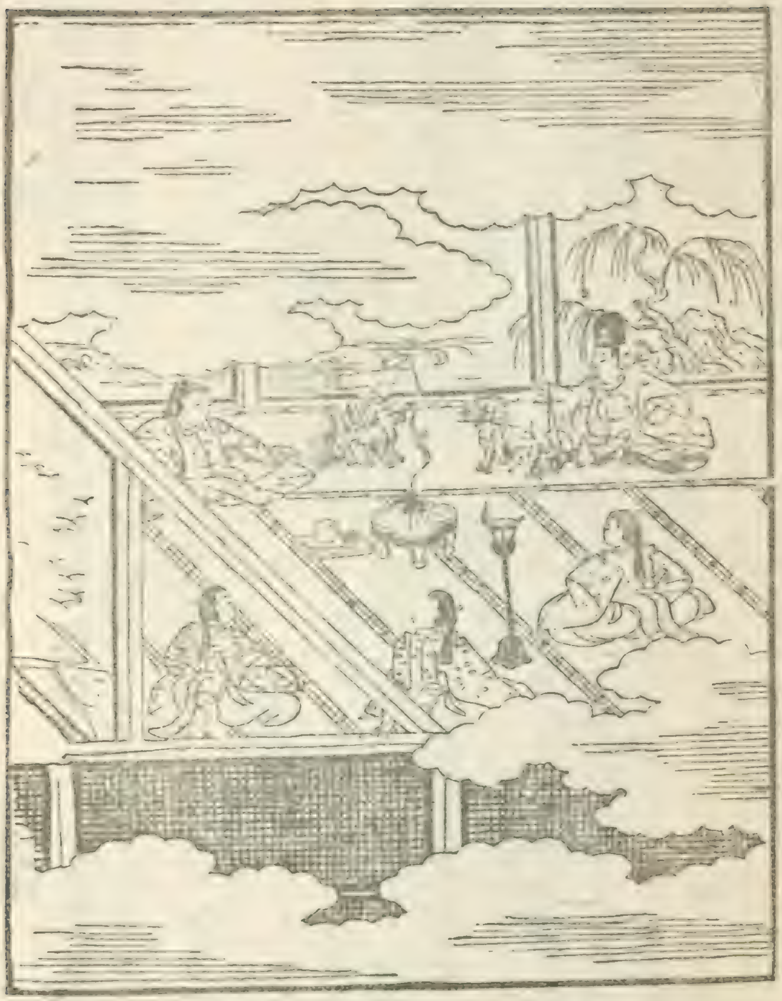
匂ひ來る年は經ぬれど藤の花今日こそ春をきゝはじめけれ

まつりごと人種松、

春の色の汀に匂ふ花より9•も底の藤10•の花と見えけれ

など11て遊び暮らす。その日のかづけ物やがて設けたり。君達四所12の、國の守13•と據の守まで、青き白橡の唐衣重ねたる、女の裝ひ14こと〔〇一〕15•具づゝ、衞府の尉どもよりはじめて、國の介には濃き紫の袷の細長一襲、袷の袴一16•重、それより下は單なる物など、賜はらぬ人なし。夜に入りて、種松參る。府丈三尺ば

〔頭注〕1 〔イ〕て。2 〔国〕左。3 〔国〕尉。4 〔図〕考異宿。5 〔イ〕松。6 〔国〕左。7 〔イ〕宿。8 〔国〕左。9 〔イ〕は。10 〔イ〕こそ。11 〔イ〕とアリ。12 〔イ〕ナシ。13 〔イ〕ナシ。14 〔イ〕ひ。15 〔図〕具。16 〔図〕具。



かりの銀の狛犬口あふ1(げ)2て3いすゑて、沈を唐の細組して續松にな4がくたひて、夜一夜燈したり。

〔繪詞〕5藤井の宮、大いなる巖のほとりに、五葉6百木ばかり、あるは川にのぞき立て7なに、面白き躰、木ごとにかゝりてたゞ今盛りなり。木の下の砂を敷きたる事麗はし。木の根8しかく見えず、池の廣き事9を海に10落して、水の清き事鏡の面におとらず。巖の立てる姿、植ゑたるものの如くして、11うけ〔○苔〕12置いたる事繁13し青し。その池の上に、麗し14う高き檜皮の御殿三立てり。廻りに藤かかれる五葉廻りて立てり。その御殿に藤の花の繪書きたる御屏風ども立て渡し、言ひ知らず清らなる面白き褥、上席敷き並べて、君達着き並み給へり。御殿の柱のすみ、藤の花かざし渡したり。御前15ごとに、折敷ども參り渡したり。藤の花、松の16枝、沈の枝17咲かせて、金銀瑠璃の鶯にくはせて、獸の腹背きて、種松參らす。君達御覽じて、土器取りて、和歌詠み給へり。

三月晦日になりぬれば、客人達歸り給ひなんとす。あるじの君、種松に宣ふ、「人々の歸り給ふべき程の近うなりぬるを、その事は物せらるや。もて遊び物などの、京18土産に19しつべからむなん奉らんとなん思ふを、御心留めてせられよ」種松、「思ほゆるかぎりは仕うまつらせ侍り。つたなき百姓20は、興ある筋をなん思ひよらず侍らん。しかありとも、我が君〔○若君カ〕の御曹司の筋侍らば、易くし思ひ至る事21けも侍らん」

〔校異〕1一字〔イ〕ニヨリテ補フ。2〔国〕たる、〔図〕て立てる。3〔イ〕八。4〔国〕したるを、〔図〕老異がくしたるを。5〔国〕此所はアリ。6〔イ〕桃の。7〔イ〕る。8〔イ〕しか、〔国〕高く、〔図〕品なく。9〔イ〕ナシ。10〔イ〕おとらで、〔国〕おとらす。11〔イ〕こ。12〔国〕生ひ。13〔図〕く。14〔図〕く。15〔イ〕ども。16〔図〕老異林、〔図〕老異森。17〔国〕にアリ。18〔国〕のアリ。19〔図〕もアリ。20〔イ〕らアリ。21〔イ〕を、〔イ〕ナシ。

など[1]、かくて種松調ぜさする[2]ほど、贈物に、一所に銀の旅籠一かけ、山の心ばへ組みすゑて、それに唐綾・羅など入れて、銀の馬に沈の結鞍置きて、銀の男に引かせたり。沈の旅籠一かけ、合せ薫物、沈を同じやうに[3]沈に[4]挽かせ、丁子[5]の薫衣香・麝香などを、瑠璃の[6]〔[7]壺〕ごとに[8]は入れ、薫り[9]の香などを、綾などの嚢にて入れて、沈の男に担はせたり。蘇芳の[10]折櫃一かけ、色々の[11]香の組を締めにしたり。よき綿どもを三十疋づつ入れて[12]より、蘇芳の馬に負せて、同じ男に引かせたり。海の形を[13]白う、銀敷らし[14]て、いはほ立て、合せ薫物を島の形にし、沈の枝に造花をつけて、島に植ゑ集めて、さやうの物を離島に造り据ゑ、いとをかしげにて大きやかなる黄金の籠ども、それに色々の絲を結び、袋に面白き物[15]結び据ゑて、[16]〔○香〕を包みて、綾して上を包みて他に[17]なし。沈の折敷に、銀の鋺を造り入れ、黄金[18]などの壺どもに、さやうの物を入れて、麝香ひなどして[19]瑠璃持たるにて、瑪瑙据ゑて[illegible]、三所に同じことしたり。御衣櫃一かけ、清らなる唐の御装束[20]ども、「三日に上り給ふべし。一日に一装束着給へ」とて三具、色々にしたり。かづけ物ども、女の装束一領づつ設けたり。引出物は、侍従に様々の白馬の丈八寸[21]ばかり、年六ばかりなる[22]走り[23]四、[illegible]の[24][illegible][25]、豹の皮の下鞍、[illegible]かけ[26]たる鞍置き、黒斑の牛四、生絹の組を白

〔校異〕1 図巾すアリ。2 図やら。3 図二字ナシ。4 図てアリ。5 図ナシ。6 一字図ニヨリテ補フ。7 図補。8 図ナシ。9 図ナシ。10 図[illegible]。11 図[illegible]。12 図二字ナシ。13 [illegible]白[illegible]。14 図たる洲浜に。15 図をアリ。16 図う。17 図[illegible]せたり。18 図[illegible]。19 [illegible]二字ナシ。20 図は。21 図[illegible]。22 図二字ナシ。23 [illegible]アリ。24 図[illegible]。25 [illegible]。26 [illegible]五字ナシ。

ながら繋ぎつけたり。鷹四すゑ1たり。白き組の大緒、青き白橡の結びたての總、鈴つけなどあり。鷹四つ、鷂いと珍らかなり。少將に黒鹿毛の馬、丈七寸ばかりた2り3赤き4馬四。5いかめしき犢牛四、鞍鞍同じ數なり。6(良佐にも7同じ)。これはあるじの君の御心ざし。種松が奉る物は、一所に鷹二かけ、いかめしき馬に負せたり。白絹入れたり。旅籠二かけに、道のほどの物入れて、よき馬に負せたり。御8調貢米、一所に二百石の船二船づゝ三所に奉る。

〔[illegible]〕9種松が牟婁の家、四10面廻りて町殿11一12たち13日八町ばかり、作り廻りてあり。14こし(○年)どもに預かけつゝ、男ども15を持ちて鋤く。笥の飯盛りつゝ食へり。離れて、いかめしき河、海のごと16して流れたり。家の内四17面八町、築18土築き入れたり。垣にそひて、一面に大なる檜皮葺の藏よそ19ら(○四十)づゝ建てめ20めり、百六十の藏なり。これは北21方の御私物。綾錦絹綿絲22紬など、棟とひとしう積みて取り納めぬる藏なり。これ23政所。家司24も三十ばかりあり。家ども。預り百人ばかり集まりて、今年のなりはひ、耕作すべき事定む。炭燒木樵25てなど云ふ者ども集まりて奉

【校異】1[イ]二字ナシ。2[イ]る。3国歩。4因考異ナシ。5因鞍鐙同じアリ。6六字因ニヨリテ補フ。7因考異またアリ。8[イ]粿。9国これはアリ。10[イ]方を。11[イ]人、[イ]へ。12因可。13[イ]田八、[イ]廾、因田廾。14[イ]う。15国をも。16国く。17因面。18[イ]土。19[イ]ぢ。20[イ]ぐ。21因のアリ。22[イ]秤。23[イ]にアリ、国はアリ。24国どアリ。25[イ]ナシ。

れ1り。2壁間3ばかり人〇の距カ〕4男ども五十人ばかり並み居て、、[illegible]立てゝ物食ふ。5たて主所。鍋6らくい桶7すきたど、日8次の釣楽れり。男ども集まりて、組たてゝ魚焼つゝる。魚の鳥に北9方の垣買とて盛る。陸国10よき馬二十づゝ、西東に立てたり。預りども居て手飼にす。側傍に數十ばかりすゑたり。牛屋11よき牛ども十五ばかり、衣着せつゝ並べて飼ふ。これは大い殿。廿右入る厩ども立てゝ、それぞれの[illegible]ども立てゝ飯炊ぐ。さきうき〇様の木カ、象の牙カ〕に、鐘の鞘つきたる精四立て並めて、皆品々たる物を入れたり。所々の番間ども13使14人、男に櫃持たせて、飯14盛り受けたり。15所一つに臼四立てたり。臼一つに女ども六人立16てり米搗けたり。これは御饌17。釒18[illegible]、掴じ柄して、北の方主の食物炊ぐ。御厨子所の[illegible]仕女19の汁20には〇[illegible]〕着てあり。衣着たる男21、油た22(ん)〇單〕着りたる物を[illegible]たる行器持たせて、食物受てる。上の[illegible]料のに、ますかへしの食物三斗、御料23入合、輪の食物24所々、苑井とて受くこれは御[illegible]。十右入るばかりの[illegible]、25形ばかりの[illegible]めて酒造りたり。陸續つ27〔〇[illegible]〕物皆同じことしたり。進物どもなどどもあり。これは作物所。細工28三十人ばかり居て、沈、紫29檀、れう〔〇[illegible]〕、黑柿30らして、御前(?)の數机どもなどいろいろに作る。

校異 1図る。2図[illegible]じ、図壮年。3図[illegible]り。4図収むアリ。5図さて致。6図[illegible]飼、図おいから、7図ひ。8図木。9図のアリ。10図にアリ。11図にアリ。12図のアリ。13図人。14図字異ナシ。15図ちて。16図ちて。17図屋アリ。18図のアリ。19図[illegible]、図字異ナシ。20図あ。21図にアリ。22一字ニヨリテ補フ。23図は、かうたい。24図一斗。25図[illegible]。26図廿。27図け。28図人アリ。29図[illegible]。30図ともの。

鏤鍛師ども居て、御器ども同じ物して挽く。机立てゝ物食ふ。盤据ゑて酒飲みなどす。これは鋳物師の所。男子ども集まり、踏鞴踏み、物の1子形鋳などす。銀黄金、白鑞などを沸かして、旅籠透[illegible]袋、2よみ(〇海)山鋪3月色を盡くして4果す。此所にも皆物食5はへり。此所は鍛冶屋。銀黄金の6鍛冶廿人ばかり居て、萬の物馬7へ8折櫃など造る。此所9に織物の所。綾物ども多く立てゝ、織手廿人ばかり居たり。色々の織物ども10を。11これは染殿12の御達十人ばかり、女子ども廿人ばかり、大きなる鼎立てゝ、染草色々に煮る。た13(ら)ひ(〇盥)ども14にだに据ゑ15て、手ごとに物ども16据ゑたり。槽どもに女の子ども下り立ちて、染草洗へり。これは打物の所。御達五十人ばかり、女の子ども卅人ばかりあ17り。砧前ごとに置きて、18とごとに19も擣きたり。いかめしき碓に男女立ちて踏めり。これは張物の所。廻りなき大きなる槽20皮屋。袙、21いかま(〇袴)着たる女ども卅人ばかりありて、色色の物張りたり。これは縫物22の所。若き御達卅人ばかり居て、色々の物縫へり。これは絲の所。御達廿人ばかり居て、絲繰り合せなど、手ごとにす。織物の絲、組の絲など、竿ごとに絆りかけたり。唐組23し新羅組たゞの組など、色々にしたり。これは寝殿。北の方居給へり。24朱の臺四25して、金の坏ど

校異 1 [因]御。2 [イ]う。3 [因]など、[国]ね。4 [イ]出だ。5 [イ]ナシ。6 [イ]くち。7 [イ]人。8 [因]考異折敷。9 [イ]は。10 [国]織る。11 [イ]織れば。12 [国]ナシ。13 一字[イ]ニヨリテ補フ。14 [国]人ごと。15 [イ]ナシ。16 [国]染め。17 [イ]や。18 [イ]手、[イ]ナシ。19 [イ]物。20 [因]皮。21 [イ]は。22 [国]ナシ。23 [イ]ナシ。24 [因]考異蘇枋。25 [因]二字ナシ。

もして物参る。御達十人五四人1つ2らへ四人あり。此所3に、所々の別當4の御達並み5て、狩りの事と
も申したり。此所6に7しの8大條り9の主い10そがり御前に男ども二百人ばかり居て、狩言ひなどす。
かくて吹上の宮には、御馬どもの試み給11うて、人々に乗り給はんと12て思して、忍びて野に出で給ふ。君達
四所は、赤13き白橡のむね摺14の草15の色に赫を染めて、彩木16の紋を織りつけたる綺の襖衣、折鶴の紋
の指貫、綾の掻練の袴、絹の袴、豹の皮の17尻鞘ある御佩刀帯りて、丈四寸18程どもばかり19ある赤き馬20
と、赤き蘇芳かけて乗り給ふ。御供の人は、青き白橡、葦毛馬に乗りて、御随身添へたり。御
随身は赤の狩、檜皮色どもの袍げにて持たせ給へり。かくて、御前の野に21ない22歩合せなどする程に、23そ
の後花の木24こきまぜに25鳥どもの立ち騒ぐ26ら27きて、君達えうち過ぎ給はで、主の君、

29入りぬれば狩の心も忘られて花の30おしく見ゆる春かな

少將、

春の野の花に心はうつりつゝ駒の歩みに身をぞまかする

侍從、

今日はたは狩場にならずむ花を見て心をやるもゆくにはあらずや

校異 1三字〔イ〕ナ仕。2〔イ〕か。3〔イ〕は。4〔ロ〕ども立ち。5〔イ〕居アリ。6〔イ〕は。7〔イ〕主。8〔ロ〕?。9〔ロ〕ナシ。
10〔イ〕す。11〔イ〕ひ。12〔イ〕ナシ。13〔ロ〕ナシ。14〔ロ〕ナシ。15〔イ〕消アリ。16〔イ〕ナシ。17〔ロ〕尻。18三字〔ロ〕ナシ。19
実な。20〔イ〕に。21〔イ〕は。22〔ロ〕たか。23〔イ〕関の。24〔ロ〕ども国。25〔ロ〕隠れ。26〔イ〕ナシ。27〔ロ〕、を見。28一字
〔イ〕ニコリテ補フ。29〔ロ〕散。30〔イ〕え惜しく。

良佐、

　１花散らす風も心あり駒並めて我が２身か野邊にしばしよ３きなむ

とて、御わ４か〔一〕籠」御參り、鳥すこし取らせて、玉津島に物し給ふほど、所々に設けしたる人多かり。玉津島に５入り給ひて、其所に遊び逍遙し給ひて、歸り給ふとて、少將、

　飽かず見てかくのみ歸る今日のみや玉津島てふ名をば知らまし

あるじの君、

　年を經て波の寄るてふ玉の緒にぬきとゞめなむ玉出づる島

侍從、

　關東な６立ち寄る浪のなかりせば玉出づる島といかで知らまし

良佐、

　玉出づる島にしあらば海神の浪７立ち寄せよ見る人ある時

など８て皆歸り９ぬ。

三月晦日の日になりて、君達吹上の宮にて春惜しみ給ふ。櫻色の直衣、躑躅色の下襲など著給へり。その日の御饗例のごとしたり。折敷など前々のにあらず。土器はじまりて遊び暮らす。水の上に花散りて、浮きた

校異１因心あらば花散らす風も。２イ見る。３イるかな。４イり。５イ參。６因考異打ち。７イ玉。８因とアリ。９因給ひアリ。

る洲濱に、「春を惜しむ」といふ題を書きて奉り給ふ。少將、

水の上の花の錦の1氷とは春のかたみに人むすべとか

侍從、

色々の花の影のみ宿りくる水2床よりぞ春は別るゝ

あるじの君、

3（いつかまた會ふべき君にたぐへてぞ春の別れも惜しまるゝかな）

良佐、

時の間に千度會ふべき人よりは春の別れを先づは惜しまん

松方、

ゆく春を留むべき方もなかりけり今宵ながらに千代は過ぎなむ

近正、

春ながら年は暮れつゝ萬代を君とまどゐば物も思はじ

時蔭、

いづかたに行くとも見えぬ春ゆゑに惜しむ心の空にもあるかな

校異 1国こぼるゝ。2国底。3歌詞国ニヨリテ補フ。

藤松、

　まどゐして惜しむ春だにあるものを一人歎かむ君はいかにぞ　4

な1むとて、今日のかづけ物は、黄色の小袿重ねたる女の裝束とて、御供の人3に同じ色の綾の小袿袴一襲5そへても遊び明かす。

かくて四月一日に君達歸り給ふ。吹上の宮より出で立ち給ふ。その日の饗當よりも心ことなり。君達、唐の花7ふ綾の綾の直衣、蘇芳の下襲、鬱金の青色の指貫、白銀の綾の綱長、一襲づゝ奉8(れ)り。かくて御折敷前ごとに參り、机十前ごとに立て並べて、十盃はじまり、9箸下りぬ。御前に舞臺結び、あげばり打ち10、かゝる程に、國の11守12主、今日出で立13り給ふなりとて、行く先に泊り給ふべき御設14とう(〇設)けしに遣して、自らは吹上の宮に、國の司引き率て參うで給へり。かくて物の音など惜しむ手なく掻き合せて遊ばしつゝ、日高くなり15ゆけば、急ぎ給ふをりに、あるじの君土器取りてかく宣ふ、

　語らはぬ夏16冬だにも17ある今日しもや契りし人の別れゆくらむ

少將、

[校異]1國とぞ。2國とぞ、國一くだり。3國人アリ。4國くだり。5三字國明はす、國明はす、かくて、國の異闘ひ(一本ふこ衣一宿。6五字國ナシ。7國紋。8一字國ニヨリテ補フ。9國御アリ。10國たりアリ。11國守。12國のアリ。13國ち。14國ま。15國けれ。16國ナシ。17國ナシ。

侍従、
1濡れども君を慕ふ2つき衣をや3されども夏は薄き袂を
立ち返り會はむとぞ思ふ夏衣綰るなる袖も乾きあへぬに
良佐、
夏衣今日たつ旅の侘しさは惜しむ涙も泄るゝなりけり
松方、「さき〴〵も侍りしかば」など4て、
このたびはまどひぬべくぞ思ほゆる涙はことに先に立てども
近正、
かくばかり飽かず侘しき別れ路は二つなきにもまどふべきかな
時蔭、
5夏蟬の羽に置く露の消えぬまに會ふべき君を別れてふかな
種松、
初聲に別れを惜しむ郭公今日を6にや今日を知るらん
とて、土器度々になりぬ。かゝる程に、贈物引出物、設けたる數のごと奉り給ふ。御馬ども飾り裝束させて、

頭註1[イ]更へつと、[囚]若異かふると。かふれど。2[イ]べ。3別着。4[国]とアリ。5[国]空。6[イ]と。

陪従の衣著たる御厩の人ども、馬一に二人つけつゝ、駒方先に立1てて、前遊びしつゝ出でゝ、次々に牽引き並べたり。か2くて3〳〵物負せたる馬どもは、遅れて出でゝ、かゝる引出物のをりごとに乱声し舞す。種松が北4方、作物三所に、帯調じて奉れり。銀の透箱四つゝ、黒方の塁一透箱、金の砂に銀黄金を5と帯にら6いた7る一8透箱9の上に歌一、やがて結び目に10は結付けさせたり。少将には、

今はとて立つとし見れば唐衣袖の裏までし11つ〔○濡〕の浦つかな

侍従12、帯入りたる箱に、

吾妹にかへる帯にに取り添ふる宮に13安くらん人をこそ思へ

良佐には、黄金の砂14つりた15るに、

汝がため思ふ心はありそ海の浜の真砂におとらざりけり

たど16一挙る。かづけ物は、赤色に二藍襲の唐衣17なか、袷の袴添へ18つゝ作り給ふ。馬どもに白張袴。かくて率りじて出で立ち給ひぬ。あるじの君、宮の人を引き率、19守の主20の中をこぞりて、21見送り22し給へり。23関24のもとまで。

〔註〕1 [illegible]ち。2 [illegible]二。3 [illegible]ナシ。4 [illegible]のアリ。5 [illegible]で、[illegible]ナシ。6 [illegible]し。7 [illegible]り。8 [illegible]つめアリ。9 [illegible]アリ。10 [illegible]断り、[illegible]。11 [illegible]に。12 [illegible]のアリ、[illegible]にはアリ。13 [illegible]待つ。14 [illegible]入り、[illegible]につけ。15 [illegible]り。16 [illegible]とアリ。17 [illegible]なる、[illegible]に、[illegible]。18 [illegible]て。19 [illegible]守。20 [illegible]中。21 [illegible]のもとまでアリ。22 [illegible]ナシ。23以下六字[illegible]ナシ。24の字[illegible]ナシ。

[前編] こ1らは吹上の宮。衣更して並み居給へり。馬ども引き出で、駒遊びして出で來たり。鵜どもすゑて、鳥の舞して出で來たり。銀の旅籠2ども箱に入れて、歩ませて引き出でたり。遣水に黄金の船ども漕ぎ連ねて、船遊びして、御衣櫃3蘇枋の4臺など5前に取り出でたり。透箱6も。これは君達直衣姿にて乘り連ねて出で立ち給へり。此所は關のもと。國の7守8主設けし給へり。君達に沈の折敷二十、御供の人に蘇枋の机ども立て並べて、物參りたり。かづけ物、女の裝ひ9襲づゝかづけ10て奉り、清らなる衣櫃一つに、衣入れ11つゝ奉り給ふ。

其所より12守の主歸り給ひなむとするをりに、都鳥遠き聲に聞ゆ。少將、

　名にし負13ふ關をも越えじ都鳥聲するかたを百敷にして

侍從、

　いとゞしく越え憂きもの(の)を都鳥關のこなたに聞くが嬉し14き

良佐こなた15惜しみて、

　夕暮にたなは16なれたる(へ)(つ)綱放れたるカ、棚橋渡るカ」駒よりも涙の川ぞ早くゆきける

主の君、

[校異] 1 [イ]こ。2 [因]馬のなかに。3 [因]考異海がた。4 [国]洲濱。5 [イ]をアリ、[因]御アリ。6 [国]ども取り出でたり、[因]どもあり。7 [イ]守。8 [イ]のアリ。9 [因]くだり。10 [イ]ナシ。11 [国]て。12 [イ]守。13 [イ]はゞ。14 [イ]さ。15 [国]をアリ。16 [因]考異しり。

行く人の駒も留めぬ棚橋は惜しみ1取りたるかひもなきかな

2守の主、

泣きたむる涙の川の瀬つ瀬も急ぐ駒には遅れぬるかな

など左右に惜し3とかはして、関より別れて、京の人は上り、田舎の人は帰り給ふ。かくて四月四日ばかり、夜更けてなん内侍殿におはし4おちう5たりける。宮内卿の主御6饗よろしうし給へり。君達には黒柿の机二つ、贄の衣、馬どもには朴の木の机7賜ひて、8ようしきあるじの主土器取りて、「如何に濱のほとりの貝甲9しに、山里の草木を聞し召しけらふらん」少将、「されどこれをのみなむ」とて、

山里にこのめを置きて別れては濱のほとりに見ずやなかりし

宮内卿の主、

木すく10ち〔○晴〕ス二つと切らぬ枝なれば飽かずあはれと思ふこのめぞ

など聞ゆ。少将、宮内卿の主に、お11り〔○花〕のわ12か〔○槲〕胃牛など奉れ給ふ。侍従良佐など心ざし寄して、侍従は雑殿へ、良佐など散れぬ。かくてこの人々、紀伊国より持ていましたる物、頭あるは人々に奉り給ふ。少将13は、14黄金の鍔は内裏に、銀の鍍釦鞘は15右大将殿に、お16か〔○劍〕龍は宮内卿に、北17方に

[校異]1 国取り。2 イ守。3 イみ。4 イ下り、国著て。5 イ立ち。6 イあふ。7 国すゑ渡し。8 四字国ナシ。9 イ甲。10 国ら。11 イん。12 イり。13 国ナシ。14 五字国ニヨリテ補フ。15 国左。16 イり。17 国ノアリ。

は透箱よりはじめて若干の細げ1の物、皆取らせ給ふ。侍従、銀の馬は父大殿に、割籠は嵯峨の院に、透箱よりはじめて細げ2の物は北3方に、船とかづけ物の中に清らなる物は、思ふ心ありてまだ持たり。良岑は、妻も子も親もなければ、船は東宮に、旅籠馬は嵯峨の院に、割籠は后の宮に、透箱よりはじめ細げ4の物まだ持たり。かくて5右大将殿には、大殿中の御殿に渡り給ひて、あて宮に箏の御琴弾かせ奉り給ひ聞し召し、御方々の君達渡り給ひなどしたるをりに、「6右衛門の尉の7君、少将仲頼さぶらふ」と聞8え給ふ。大殿「久しう音せざりつる、遊び腐しつべかめり。9この三人10 11この好者ども何12方物したりつらん、この一月ばかり見えざりつるは」など宣ひて、「此所にて13あらんかし」とて、簀子に御座敷かせて、「なほ此所に」と召し入れて會ひ給へり。「日頃内裏にも參り給はず、このわたりにも14まだ物し給はざりつれば、いぶかり申しつるになむ」少將、「甚だかしこし。粉河に15少し願果さむと思う給へて、紀伊國の方に罷りたりしを、怪しき人に見給へつきて、え參う上り來ざりつるを、辛うじてなむ昨夜參う上り來し」大殿、「16や、誰ぞや。など聞えぬ」仲頼、「かの國のまつりごと人17(に)侍りつる18甘南備の種松と云ふ19男20孫に物し給ふ源氏、たゞ粉河の道のほとりになん住み給21ひけり、其所に司のまつりごと人松方が侍りしを見つけ侍り

校異 1 〔イ〕ナシ。2 〔イ〕ナシ。3 〔西〕のアリ。4 〔イ〕ナシ。5 〔国〕左。6 七字〔国〕左兵衛佐行正、侍従仲忠。7 〔イ〕君。8 〔国〕ゆ。9 四字〔西〕ナシ。10 〔イ〕はアリ。11 〔イ〕ナシ。12 〔イ〕ら。13 〔西〕曾は。14 〔イ〕今は、〔国〕又、〔西〕君達參り。15 〔国〕ナシ。16 〔イ〕ナシ。17 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。18 〔国〕甘。19 〔西〕男。20 〔西〕のアリ。21 〔西〕ふ。

て、罷り帰りて侍りしに、かの君、一1日二月2ふたり、日3ら3(4し)〔○生〕も飼ひ休めて参5上5りなど留め給ひしかば、罷りて日暮へしに、いはゆる西方浄土に生まれたるやうになん。四6面八7町の所を、金銀瑠璃硨磲瑪瑙を磨き、鴛りには仙潮の8様殊かす、孔雀9ある10らむ〔○鸚鵡〕鳴か11すばかりにてなん住み侍り12給ふ。なり申さむ方も顔にえずなん侍りしかば、たゞ後徳の様いさゝか御覧せさせむとて、神嵐の使ひにて侍13る」とて御覧ぜさす。大殿、「いと興ある事かな。14さ聞き15(きこ)。16神南備の種17べの国に生まれ給ふ君ありとは18。かの貫人19いとすけたかく徳ありし人なり。父こそ下20人なれ、子は有職にて、いと心にくかりし者21なり22と23聞24か25ぞりつる。如何やうにか56おはして給ひたる」仲頼、「いと不便なる人頼み、仲忠の朝臣とやとしくなむ、かたち心身の才侍る」大殿、「琴ばかりはことなた28(か)らかり29に」仲頼、「これも嫁ぎたる手侍るなり。侍従の朝臣と糸竹べして、それをなお弾き侍らずなりにし」大臣、「二一かの物せられたりし」仲頼、「仲忠、行正、近正、時蔭、村蔭、康頼、貞臣、左30右の司31官人、武士32どもの中にも、調びてなお降り下りて侍りし」大殿、「あるかぎりにこそはあなれ。なほかし

校訂 1四字説ナシ。2区ほか。3一字図ニヨリテ補フ。4図ど。5図れ。6図而。7図まち。8図隆。9三字図並び。10図や。11図め。12図隠。13図り。14四字図ささく。15一字図ニヨリテ補フ。16国人。17図人。18図聞きしてアリ。19図いとすけ高く、図はとすけたかく、図はことなく、図見異いと気高く。20図時。21図おの。22図この。23図みえ、図ナシ。24図ナシ。25図た。26図生び川で。27図なしアリ。28一字図ニヨリテ補フ。29図ナシ、図ぞ。30図右門。31図のアリ。32図しアリ。

こき心ざしありて物せられたるにこそありけれ1な。さる所に、かゝるどち集はれて、如何なる事ありけむ。國の内には、國王こそ2思しき住ひはし給ふらめ。それだにかくてはえおはしまさじを、有難き人に3物し給ふべきかな」仲頼、「種松は、十六4大國よりはじめて、粟散國に至るまで、財寶を貯へて侍るものなり。それ5 6ましゝ事は、種松が財寶を、この君に盡くし奉りてむとするに、一つの7物を盡くして8は、二三千9へ、えして出で來。山の末君の上にも、この君の10御爲めに落せる種は、一つに一二斗づゝなん取り侍るとなん申し侍る。かの君の、11國のとぼそに12賜へるもの御覽ぜさせん」とて、13ぐとて御馬二、鷹二、銀の馬旅籠負せながら、な14る〔○中〕に入入れて歩ませて御覽ぜさす。大殿、旅籠馬をいと興ありと御覽じて、方々御車の君達譜じ15出で奉りて、御子どもの君達16眺め据ゑ奉り見せ給ふ。少將、「それは彼より賜はれる物の、千17人が一つなり。かやうの船、瑠璃、透箱などして、この三人の人になん賜へりし。これらを18ばさる物にて、19さめやかなる物など侍りき。何心もなく罷り出で立ち侍りて、思ほえぬ長者になり侍りてなむ參う上り來たる20を」と21、うち笑ひ給ひて、「衛府司に22て參うでゝ見ばや」など宣ふほどに、侍從、良佐などは、23東宮嵯峨の院などに、これら御覽ぜさせに參るとて、使ひしてなむ。行正、24右大辨

校異 1囨ナシ。2圀考異を入。3囨もアリ。4囨のアリ。5囨がアリ。6圀申。7囯木の枝を盡くし、圀木の枝を造り。8圀も。9囨えして、囯の枝の、圀の枝。10圀御。11囯京の土産。12囯とてアリ。13囨入して、圀具したる、圀考異具したるとて。14囨か。15囯入れ。16囨並。17囯分。18囨ナシ。19囨ま。20囨ナシ。21圀申す。大殿アリ、圀考異大殿アリ。22囨ナシ。23囯内裏アリ。24囯左。

の君よりはじめ奉りて、馬牛1小鷹一つ2奉りたり。透綺大宮の御方に、かづきたりし女の装どもはあて宮の御方の人々に、箱にた3（た）み入れ4つゝ5か（〇書カ）い付け6しぞおこせた7り。下仕へばらには、縫はぬ衣など人ごとに8こせたり。仲忠9大殿に車牛二、馬二、侍従の君に騮斑なる馬の丈八寸ばかりなる一、瑠口の衣箱10一に、あるが中に清らなる女の装一11具畳み入れ、一には麗しき細襪など入れて、孫王の君に心ざし、黄金の錨に物入れながら、かく聞えてあて宮に奉る、

荒るゝ浦12に汀13も知ら14ぬ浮舟に浪の静けき浦もあらなむ

とて奉り給へり。15さて宮君達など、「有難く興ある物かな」とて、のゝしりて見給ふ。かくて集まりて見のゝしりて、「持たらばやと思へど、わざとある音16くしき物なり」とて、使ひに17か白張一襲、袴一18具賜ひて、かく宣ひて遣はす、

浪たて19る寄らぬ汀もなき舟に風の静まる浦やなからむ

とて返し遣はしたれば、仲忠いと心憂しと思ひて、「かう聞えて御返事も賜はらで来20ぬ」21（とて）奉る。

さもこそは嵐の風22は吹きたゝめつらき名残りにか23かる舟かな

【校異】1圀二つ。2囮づゝアリ。3一字囯ニヨリテ補フ。4圀ナシ。5囯文アリ。6圀てぞ、囮して。7圀る。8囮裏ら。9囮はアリ。10圀二つ。11圀くだり。12圀め。13囮ナシ。14囮れアリ。15圀あ。16圀々、囮ら。17圀考異は、囮ナシ。18圀具。19囮ば。20囮ね。21二字囮ニヨリテ補フ。22囮め。23囮へ。

とて奉れ1り。使ひ歸りぬれば情なきやうにもありとて、返し給はず。君達集まりて讃め給ふ事かぎりなし。女御の君よりはじめ奉りて、小君達まで、壺折櫃袋一2（つ）づゝ奉り給ふ。かゝるついでに大殿、3入道に、「源宰相に久しう對面せぬかな」4入道、「この三月一日頃に、御前の花見給へむとて罷り出でゝ、夜更けて罷り歸り給へりしより、惱み給ふ事ありて、罷り歩きもせず、5殿より召あれど、え參らで、6侍7る所になむ籠8り侍ふ9」大殿、「いとほしき事かな。え承はらざりけり。この頃見え給はねば、古里にや物し給ふらんとなむ思ひ侍10る」などて、仲賴に女の裝一11具、馬引き鷹据ゑたる人に白張袴賜ひ、仲忠行正ら12使ひにも祿賜ふ。北の御殿に河霧持て參れる行正が使ひに、摺裳一襲賜ひなどす。仲賴は内裏に急ぎ參りぬ。

文化四年丁卯六月八日按合畢

同十二年乙亥三月十三日以本居氏之藏書校合畢　橡樟園

[校異]1[イ]つ、因考異りて。2一字[イ]ニヨリテ補フ。3国宮。4国宮。5国内裏。6因一。7[イ]ナシ。8国れりと聞き。9因考異と聞えつれアリ。10因りし。11因くだり。12国がアリ。

かくて殿より祭の使出1で立ち給ふ。2兵衛府の使には中将君、内蔵寮の使には3内蔵頭兼けたゞ4り行正、右馬寮の使には式部卿の宮の5右馬の君6と出で立ち給ふ。主の大殿7の三所の使を劣り出だし給ふ。皆出で立ち給ふに、父大殿使の中将8かざし奉り給ふとて、

二葉なるまつ9ら葛と見し物をかざし折るまでなりにけるかな

使の中将、

もと見れば高き葛も今日よりや枝劣りすと人のいふらん

とて10(出で)給ふに、桂より11左大将12主、よき御馬二つ、一つは飾り、一つは設13御馬にて、舎人卅人、えも言はず装束かせて、14取物せさせて、金の枝に小さき壺を付け15て、それに桂川の水を入れて、仲忠して、

「かざし取る袖の濡るゝは白波の桂川より折れる〔○折れば力〕なりけり

これにさへ惜しう。」と宣へり。使の君かく聞え給ふ。

「みなかみにかざしつるかな桂川今日ひとなみの心地のみして

[illegible]1国だし立て。2国近衛。3国蔵人の。4国る。5国考異詞子アリ。6国そ。7国ナシ、国此の。8国にアリ。9国りカ、イはカ。10二字イニヨリテ補フ 11国右。12国のアリ。13国のアリ。14耕乗。15国ナシ。

今日は暮1にのみなむ。」と聞えて出で立ち給ひぬ。大宮使の君2へ給はんとて、車十ばかりして出で立ち給ひぬ。

[異同] 大将殿の南の御殿に、使三所附き給へり。3垣下に御子四所、上達部五所、四位五位合せて六十人ばかりあり。御馬ども引き立て、手振ども立ち並みたり。

[異同] 一條の大路に、物見車ども数知らず。殿の御車ども物した4る。桟敷ども立てつゝ、四位五位撒き散らしたること立て5る。

かくて物御覧じて帰り給6ひつるに、春宮より聞え給へり、

今年より摘むべきものか千早ぶる賀茂の祭にかざす葵は

と聞え給ふ。

例の常用、三月ばかりに「まろにこそ宣はざらめ、君だちと物宣ふを7だに聞かせ給8へ」など切に宣ひければ、近き所に率ゐて、御琴弾かせ奉り、物言はせ奉りなどしけるを聞きてより、思ひ入りて臥しにしまゝに、物覚えねど、かく聞えたり。

「奥山の苔葉を出でゝ時鳥祈り9に年ぞあまた経にける

吾が君、や10かてだに、今は11え聞え12ますまじきこそいみじけれ。」など聞えたり。あて宮、

[校異] 1イて。2イ見。3国垣。4国り。5国り。6国へ。7二字異ナシ。8異ふ。9国し。10国斯り。11国ナシ。12国さ。

夏ばかり初立すなる郭公巣には返らぬ年1もあら2じな

兵部卿の宮より、

ぬるみゆく板井の清水手に汲みてなほこそ頼め底は知らねど

あて宮、

あだ人のいふにつけてぞ夏衣薄き心も思ひ知らるゝ

平中納言、

いつとてもわびしき物を時鳥身をうの花のいとゞ咲くかな

あて宮、

かひもなき巣を頼めばや時鳥身をうの花の咲くも見ゆらん

仲忠、空蟬の身にかく書き付けて奉る、

「言の葉の露をのみ待つ空蟬3も空しきものと見るがわびし4き

ましていかならん。」と聞えたり。あて宮、

「言の葉のはかなき露と思へども我が玉章と人もこそ見れ

と思ふになん聞えにくき。」と聞え給へり。紀伊國の吹上の君の御許より、いかでと思ひけるを、人さへ語り

校異 1 巣は、因にも。2 因るか。3 困は。4 因さ。

聞かせ給へれば〔〇暮ればカ〕、しづ心1もなく覚えければ、あるが中に才ある童して、かく聞え奉る。

「暮遠ないかで心をつくば横の2さす波なしと聞くなるらん

かつに濡をしくなむ。」と聞え給へり。大将の大殿見給ひて、「たゞ今のゝしる人にこそ3あ4らんめれ。上達部になりぬべき君なめれば、補なく言ひ5て6消〔〇惜カ〕したるなめりかし」など宣ひて、御返しなし。

三の御子、

ながめする五月雨よりも晴きつゝ月日のふる7に袖は濡れけ8る

と聞え給へり。御返9言なし。仲頼、

思ふことなすこそ神もかたからめ嘗し10慰む心つけなむ

行正、

言ふごとに答へぬ人はつらか11して思ひそめたる身をぞ恨むる

と聞え給へ12ら。五月五日早朝、13長く白き根を14見15（て）、侍従の君聞え給ふ。

菖川沼の菖蒲引く時は人知れぬねのあらはるゝかな

と聞え給へ16ど聞入れ給はず。侍従の君、「かく思ひしたるを、思ふやうなる得心と慰安けれ17ど、返す〴〵思

〔頭〕1 宮本異ナシ。2 図ま。3 イはアリ。4 一字図ナシ、二字図ナシ。5 且く。6 イた、図出た。7 図そ。8 衣り。9 図し。10 図本異忘るゝ。11 図ら。12 国れども〔国ナシ〕御返しなし。13 図菖蒲のアリ。14 国面へ。15 一字イニヨリテ補フ。16 図れアリ。17 国ば。

ひ忍ぶれど、えあるまじければこそ、死ぬる身と思1ひ給2へて聞ゆれ。3 4ところに聞えたらんことは、人の知るべくもあらぬを、いみじ5うこそおはすれ」と泣く〳〵聞え給へば、あて宮うち笑ひ給ひて、「など、かくのみは宣ふ6に。誰と思したるぞ」など宣ふ。

かくて、その日の御7節供、よき御8座ある國々の受領に宛てられたり。女君御子達、9さては近江守、中の大殿には伊勢守、北の大殿は紀伊守、御10聟な11く〔〇七〕所の御前には大和山城の守、あなたの北の12御前には播磨介、男君達の御前には備前介、臨時の13祭には丹波守と14めてられたり。その日になりて、まづ西の大殿に近江守、淺か15ら〔〇香〕の折敷二十づゝ、例のごとして、二十人のまうち16君達取りて參る。髮丈に餘り、17御う〔〇裝〕束鮮かなる下仕、釵子元結して、二十人出で來て御前に參る。赤色の上の袍の袴著たるうなゐ子に、綾襲の襲したる大人參り18よ〔〇摒〕19ふ。御子達の御前ごとに參り20侍る藥、21廿人の童を出して興ある藥玉を賜ふ。廿人のまうち君達、御階のもとに立ちて舞踏したり。かくて方々男君達22にも前ごとにま23は〔〇參〕りた24ち。かくて御前近く四25さち〔〇町〕26と表馬27場、池のほとりにあ28る29宮、西、東として、別當、預、寄人ども多くて、大30御馬ども十づゝ立てゝ飼はせ給ふ。今日御覽ぜむとて、

校異　1 因う。2 国ふべく。3 イふれアリ。4 国心、因こゝ。5 図く。6 イぞ。7 因節。8 イ庄。9 国まで。10 図息。11 図な。12 因方のアリ。13 国客人。14 図宛。15 イう。16 因君。17 イさ。18 イす。19 国ゆ、因う。20 因据う。21 因二十づゝ又アリ。22 国の御。23 イゐ。24 イり。25 図ま。26 図通りて。27 図の。28 因り。29 国御廐。30 因ん。

騎事よりはじめて乗尻装束して、御馬左1右と率かせて参りたり。2大臣3一男ともに遣りて試みよ」と宣ふ。御禊どもの儀のごとおはします。君達聞え給ふ。「この御馬ども、同じくは手番4にして比べばや」と宣ひて、一番に5式部卿宮右の大臣比べ給ふ。大臣勝ち給ふ。二番に6(なかつ)かさ(○中務)の親王右の大将。7(大将)勝ち給ふ。三番に三の御子、8式部卿9の皇子勝ち給ふ。四番に四の御子左衛門督。10 11右勝ち給ふ。五番に五の御子宰相。御子勝ち給ふ。六番に六の御子12右大弁13に勝ち給ふ。七番に兵衛督右衛門佐の君。督の君勝ち給ふ。八番に兵衛佐兵部14少輔。佐勝つ。九15に式部丞侍従16勝ち給ふ。十番に大夫の君右衛門尉17に君勝つ。かゝる程に、18殿19右の馬寮の允20し給21ふ。「明日御禊の手22(つ)がひ(○番)な23り、24いらへ(○競カ、童カ、比カ)の宮人ごとに25興ふべき御馬の胸26しう御覧ぜ27ん」とて、御馬ど28(も)を率かせて、馬の頭亮下29つら、30右近の中将少将物の節ら、率きて参りたり。大殿「興ある業かな。31切に聞召さましかばなど思ひつるに」などて、鞭ども打ちて、頭よりはじめて、次中32少将馬の頭亮さ並み、馬寮の御馬に、33右近尉よりはじめて、還乗りつゝ、馬弓仕うまつる。馬弓果てゝ、舎人ども駒方34 35附きて舞ひ遊ぶ。主の大殿、大いなる珠を舎人どもの中に投げ出し給ふ。舎人ども錦杖を持ちて遊びて打

〔校異〕1 西行。2 [イ]なみ。3 [イ]ナシ。4 [イ]ナシ。5 [国]民。6 二字[西]ニヨリテ補フ。7 二字[実]ニヨリテ補フ。8 [国]民。9 [国]に御。10 [イ]のアリ。11 [国]督。12 [国]左。13 [西]御子。14 [国]大。15 [イ]番アリ。16 [西]侍従アリ。17 [西]ナシ。18 [国]大臣に。19 [西]左。20 [国]中アリ。21 [国]ひ。22 一字[イ]ニヨリテ補フ。23 [国]る。24 [西]は、[西]く。25 [西]御、六26 イ…ら、[国]白、[西]今日。27 [国]させアリ。28 一字[イ]ニヨリテ補フ。29 [イ]部ら、皇仕。30 [西]左。31 [西]内裏。32 [西]次将アリ。33 [西]左。34 [イ]にアリ。35 分。

ち1勝ちては舞ひ遊ぶ。御馬ども池に牽き立てゝ冷し、秣飼などするに、2左大将の主、手番の給はんとて、馬場に著い給へりけるを、この殿に4 5右近の馬寮参りぬと聞召して「3興ある事かな」とて、馬場より、亮達よりはじめて6物7節まで、8左の馬寮牽て、亮達より9もはじめて、馬に乗りて、大将の10御前11御車の前に、駒方舞はせつゝ、遊びて物し給ふを、大将の大殿聞召し12「雅楽寮の樂の近く聞ゆるかな。轆轤が笙にこそあなれ。然や13うの14ものうはらくの引き連れて来る15せちならむかし。見よや」と宣ふ。16牛か17く〔○飼〕の預「大将18殿、大殿の19左近の馬寮引き連れておはしますなりけり」と申す。大殿「切に興ある事かな」とて、御佩刀の緒したゝかに結び垂れ、御衣の裾走り引きて、さ20そ〔○笙〕の御ふ21み〔○笛〕取りて、22右近の23右の馬寮牽きて、限なく遊びて出で給ふ。右24近左の馬寮見付けて崩れ下りぬ。遊びて、左右見25入りて、賑くよき26大内に、若く盛りなる大将達、左右の近衛府馬寮を牽きて遊びて、27幾28人入り給ふ。夕影切なる事限りなし。東の御階より左の寮、西の階より右の寮、等しく見合せて昇り給ひて、右南向に著き給ひぬ。御前ごとに御机参りぬ。29土器始まり御箸下りぬ。

かゝる事内裏に聞し召して「俄にいかにすらん」などて、右近の藏人をして、后の宮に「30右大将の、俄な

校異 1舞得り。2[国]右。3[国]宣。4[亻]はアリ。5[因]左。6[国]武士ら。7[亻]のアリ。8[因]右。9[亻]り。10[国]主、[因]主の。11[亻]ナシ。12[因]てアリ。13[国]右。14[国]こくはくの者ども、[因]つかさの幾多の者ども。15二字[国]ナシ。16[亻]腰。17[国]ひ。18[国]の。19[因]右。20[亻]う。21[亻]え。22三字[因]ナシ。23[因]左。24[因]を。25[国]合せ。26[国]御殿、[因]大路。27[国]おとゞ、[因]大殿。28[亻]へ。29[因]御アリ。30[国]左。

る1宮得たなるを、訪ひになむ遣はす。設の物さぶらはゞ、少し賜はりて物せん」と聞え給2ひつれば、な3(が)〔◯異〕持の御唐櫃一具に女の装4もと具、白張袴添へて、大袿十具入れて、「かく宜くもあらぬなん侍りたりける」とて奉5れ給へり。帝内蔵寮の絹三百匹御6唐櫃に入れさせ、銭の御衣箱7十に入れ、蔵人所の御菓物櫃十8二積み9うく、大将に10奉り給はんとするに、殿上蔵人一人もなし。「たゞ今までありつる11男ども、彼處へ去にけるかな。尭に12高き人にてある」13など宣ひて、蔵人の兵衛の佐行正を召して、大将14殿に斯く言ひ遣はす。「俄なる15く16客17え物せられたなるを、饗の事などを如何にとなむ。引出物なども乏しくば、内侍料などをも、多く物せらるらんを、御心に任せて物せられよ。」とて、土器に斯く書き付け給ふ、

所せき身は餘所なれど遊ぶなる18く宿に心を19忘れもやるかな

とて遣はすに、左20大臣平中納言夜に入るまで21侍ひ給ふを、「大将の朝臣訪はるべきものなり」と仰せらる。講師に講誦して罷出給ふ22を、御使の蔵人率れ給ふ物を持て連ねて大将殿に参る。大殿御土器23見給ひて驚き畏まり給ふ。とうじ〔◯藤使カ、藤氏カ〕の蔵人を階に据ゑて、下りて舞踏して、大袿かづけ給ひて、畏まり申し給ふ。

雲井より降る白玉を袖に入れて見る人さへぞ心ゆきぬる

〔校異〕1〔延〕蔵人、〔異〕蔵人。2イへ。3一字〔イ〕ニヨリテ補フ。4〔異〕白具。5異り。6〔イ〕唐櫃、〔イ〕唐櫃に。7〔国〕櫃アリ。8〔イ〕に。9イて。10〔異〕賜は。11〔異〕男。12〔異〕名アリ。13〔イ〕と。14〔異〕ナシ。15〔異〕る。16〔異〕客人。17〔異〕ナシ。18イる。19〔異〕忘、〔異〕扱。20〔異〕のアリ。21〔異〕内裏にアリ。22〔異〕ナシ。23イをアリ。

など奏せさせ給ふ。藏人參りて、左の大臣平中納言連ねて入り給ふを得知り給はず。御前の御1さい〔〇松〕明燈したる兵衞の尉ども俄に入るに驚き見給ふ。右の大臣式部卿の皇子と連れ下り給ふ。左の大臣「更に何か」とて、上りて著き給ひぬ。大殿「いとも畏く、夜2く深くなりぬるに、3もた〔〇渡〕りおはしましたるをなむ」左の大臣「今朝內裏に4も參りて、今まで侍ひつるを、ある人の『かく5兵衞の馬寮67諸門8、と〔〇集〕はれたり』と奏しつれば、上驚かせ給ひて、藏人奉9り給ふ10べきに、垣下に參れと仰せられつれば」など宣ふ。主の大殿悅び畏まり給ふ。かくて、左右の馬寮御馬左右大將黨にておはします。上達部御子達方分きて比べ給ふ。左の乘尻は右近の尉より始めて11物の節まで逸物を選び、右の乘尻は左近の12空まで選び、西東13あしらうて、馬寮著き並み14たり。御15さい〔〇松〕明燈したること、廊より南に、御前に向きて、馬出より馬留まで隙なく、褐の衣著たる16男ども燈したり。皆これは兵部17の18ほ19のこ〔〇男〕どもなり。廊より北の御前に當りては、兵衞の尉より始めて宮の帶刀まで、丈整ひたるを選びて、上より下まで燈したり。皆乘り連ねて20內より上る。札結ひて、皆引き立てゝ、左右亂聲して、勝負に樂の舞す。兵部丞飾り馬に乘りて、埒に向きて、馬の毛申し給へり。21こはて〔〇二までカ〕はなかつきて右勝つ。亂聲して

校異 1〔イ〕た。2〔イ〕ナシ、国の、因も。3イわ。4因ナシ。5因近。6因のアリ。7国諸卿。8イつ、異い。9〔イ〕れ。10〔イ〕次。11国武士ら。12〔イ〕尉、〔イ〕將監。13〔イ〕爭ひ、国爭ふ。14〔イ〕居アリ。15〔イ〕た。16因男。17因卿アリ。18異お。19因と。20因埒。21国二の果、因二番。

1さひ〔○舞〕す。三つに出づる御馬左勝つ。四つに右勝つ。五つ左勝つ。六右勝つ。七つ左勝つ。八右勝つ。九2〔左〕勝つ。勝3さけ〔○負〕して數4さし、終のこと5（わ）り〔○決定〕に、左にはま6へりこと人（○判官）近正、右には同じき7さつ〔○松〕方、8 9たる10御馬どもに、只今の上手乘りて出でき、競ひ始めて大願を立て給ふ。御前11にては等しく見えしを、右の舞12打ち籠められて、左負け給ひぬ。

かくて、土器度々になりぬ。御遊び盛りなり。内に君達、母屋の御簾にかへ代掛け、御簾の内に四尺の御屏風ども立てわたしたる内に、ある限り立て並めて見給ふ。左の大臣、「こゝには、13いゝ思し誇つまじき人々物し給ふらんかし。かゝる序に、土器なども賜へや」などて、「實忠も殿に侍ふなるを、などか罷出來ぬ」主の大殿、「勞はる所物し給ふとなむ承はる」左の大臣、「怪し14く然もあらざ15 16るしもの〔○者、物〕の病だ17かしくなりにたるかな。年頃18兄君に聞えんと思ふ事、今宵序のついでに聞えん。19下臈な20る實21忠をだに侍はせ給ふめるを、などか22（さ）ね〔○實〕23類をしも召し入れぬ。數多侍る中に、らうたしと思ふ者なり。侍從の朝臣に思し准へて、彼をも顧み給へ」と聞え給ふ。主の大殿打笑ひて、「仲純に准へ聞えむには、眞の事も思24ひ給へ知るまでこそあ25なれ。まめやかに然思ひ給ふる事ぞや。かの26者見給ふべき人ぞ

【校異】1 [イ]ま。2 一字[イ]ニヨリテ補フ。3 イま。4 [国]な。5 一字[国]ニヨリテ補フ。6 [イ]つ。7 [イ]ま。8 二字[イ]ナシ。9 一字[国]さ。10 [国]興物（いさめつき）のアリ。11 イまで。12 [国]にアリ。13 [イ]え。14 [国]ナシ。15 [国]めりアリ。16 イり。17 [イ]た。18 [国]音が。19 舞に。20 [国]れど。21 [国]遊。22 一字[国]ニヨリテ補フ。23 [国]思。24 [国]う。25 [イ]ナシ。26 [国]人の。

侍らぬ。さ1つ2れ、如何すべき。五3月雨にもなり4にけるを」5右の大臣土器取り給ひて「いでや、さうけた6まは〔○承〕りて7久しくなりぬ」とて、

時鳥鳴く音久しくなりぬるをさみだれながら幾夜ふればぞ

主の大臣、

卯の花横に宿ればぞなほさみだれも常夏なるべき

「思ひ寄へつ8るこそや」などて、夜一夜遊び明して、上達部御子達には女の装一具、馬の頭左右9中将まで、それより下には白張袴、随身に添へて賜10わたりぬ。し11り上〔○下〕部の12人もし馬寮の男ども13物の節14しに賜15御衣しなど16す。遊び17はして早朝帰り給ふ。かゝる程に、春宮よりかく聞え給へり、

「例にも人の引くべき18時鳥この五月雨を今やあへ〔○取へカ、背えカ〕なん

妬くも厭はされずや。なほ早くをこ」と聞え給へり。あて宮、

19うきらん20とこそ苦しき菖21にこそ世の例にも22あると言ふなれ

兵部卿の親王、

御所にのみ思ひけるかた夏因の長き歎は身23こそありけれ

【校異】1 図は。2 国今。3 国月。4 異ナシ。5 国左。6 異にいこ。7 イもアリ。8 図つ。9 国めアリ。10 二字図は。11 国も。12 図火焼。13 国賜ふ。14 異ら、図ナシ。15 図ナシ。16 国賜ふ。17 図か。18 国菖蒲草。19 イ言は、図思ま。20 イこと。21 国身。22 国な。23 イにアリ。

1 左大將殿より、

　侘び果てゝ何の心もなけれどもなほ夏の夜の長くもあるかな

中納言殿より、

　侘びぬれば五月2に惜しき棲てふ花の名をだに聞くと思へば

源宰相、

　「沈みぬる身にこそありけれ淚川浮きても物を思ひけるかな

身の徒になる3とも4思ひ給へず、心ざしの空しうなりぬる5をこそいみじけれ。」など聞え給へり。哀れ

と見給へど御返6しなし。三の親王、

　君がため輕き心もなきものを淚に浮かぶ頃にもあるかな

紀伊國より、

　何處ともまだ白雲の侘びしきは云ひやる空のなきにぞありける

藤侍從、五月の晦の日、朽ちたる橘の實にかく書きつけて、

　「橘のま7ほし五月に朽ちぬれば我も夏越を如何とぞ思ふ

五月雨の過ぐるも恐ろしくなん。」侍從の君、

[illegible] 1 [イ]右。2 異ぞ。3 [イ]こアリ。4 [國]思う。5 [イ]ナシ。6 [イ]ナシ。7 [國]ち。

涼しやかて入りぬる夏蟲や携へぬ思ひぞ侘びしかりける

少將、

ながめつゝつ1ねに2曇らじ標3は常に空なる身とやなりなむ

良佐、

山も野も茂くなれども我が宿4にまだ言の葉の見えずもあるかな

かゝる程に六月の頃ほひにもなりぬ。大5將は池廣く深く、色々の植木岸に6て生ひた7り。水の上に放さし入などしたる中島に、片端に水にのぞき、片端は島にかけて、嚴しき釣殿造られて、をかしき舟ども下し、浮橋渡し、暑き日盛には人々涼みなどし給ふ、8「十二日り晦の日にて參り給はぬを、釣殿にて今日遊ませ奉らん。興あらん果物など賜へ10よ」など11きこえし置き給ひて、釣殿に出で給ひぬ。君達さながら侍ひ給ふに、大殿御屏風にかく書き付けて、武部卿の宮の御方に奉れ給ふ。

枝茂み露だに洩12えぬ木闇に人松風のはやく吹くかな

とて、侍從の君して奉れ給ふ。皇子13(見)給ひて、かく書き付けて右の14大殿に奉れ給ふ、

「木闇に寒く吹くらん風よりも内なる枝の15蔭ぞ涼しき

【校異】1 国ね。2 国行ちにし。3 国の。4 国の。5 国嶋。6 国ナシ。7 国考具る。8 国にアリ。9 国はアリ。10 国ナシ。11 国聞え。12 イら。13 一字国ニヨリテ補フ。14 国大臣。15 国風。

釣殿よ1く斯くなむ。」とて2（たて）まつ（〇奉）れ給へり。右の大臣見給ひて、中3（務）の宮に奉れ給ふ。

風4にさる枝にぞ誰も涼みぬるもとの蔭をも賴むものから

皇子(みこ)見給5ふて、かく書き付け6、民部卿殿に奉れ給ふ、

木隱7は蔭に8さどゐる9檞(み)松10の根より生ひたる末にあらずや

民部卿殿、

大方の蔭とは見つゝこち風の吹く木隱と知らずぞありける

左衞門督殿、

我が賴む千歲の蔭は漏11えずして松風のみぞ涼しか12らなむ

藤宰相殿、

まどゐする千歲の蔭の嬉しきは漏るとも無げの松の13蔭かは

中將、

人ごとに千歲の蔭を添ふる松幾代(いくよ)限れる齡(よはひ)なるらん

なとて奉れ給ひて、七(なゝ)所ながら釣殿に參うで給ひぬ。「女君達も出で立ち給へ」と聞え給へば、御車どもし

【校異】1イり。2二字【イ】ニヨリテ補フ。3一字【国】ニヨリテ補フ。4【国】わた。5【イ】ナシ、【内】ひ。6【内】てアリ。7【内】て。8【イ】ま。9【国】桃、【内】もえ。10【内】は。11【イ】ら。12【異】るら。13【内】風。

て、舟1組みて2並べて渡り給ひぬ。うなゐし3も〔〇下〕仕らはさし4つゝ浮橋より渡る。舳艫に御座設け御几帳立てわたして、君達おはし5て、ま6す〔〇先づか7(す)〕のこ〔〇簀子〕に上達部皇子達おはします8して、女君達御琴ども搔き合せ、男君達笛ども吹き9〳〵合せ、琵琶御琴書打たせ、10かの聲に合せて遊ばし、御前の池に網下し鵜11下して12ゝ、侍所13蹴らせ、よき鯉大きなる大14鯛取り出でさせ、峨しき山桃桃など中島より取り出でゝ、をかしき15破籠ども水に浮び立てなどして、涼み遊び給ひて、主の大將、今日16は此所にこの將監ども一人なき、さ17うらくしや。仲頼は藤侍從呼びに遣れかし。深き契ある人は、山ふる折を過さぬ18をこそよき」など宣へば、驚きて喚び遣したれば、三所ながら遊び19人と出で來て、舟に乘りて、釣殿へ參うづ。主の大將白き綾の御衣脫ぎて、侍從に賜ふとて、

深き池の底に生ひつ20ゝ菱摘むと今日來る人の衣にぞする

侍從、

底深く生ひける物を怪しくも上なる水の綾と見るかな

などて、同じやうなる御衣脫ぎて賜ふ。君達の御前なれば、人々心遣ひして物の音など搔き鳴らしつゝ、明

校異 1国組みて、国並べ。2国舁ゑ。3イも。4イ置き、国葺き。5イナシ。6国づ。7一字イニヨリテ補フ。8イす。9イナシ。10イ日、国古歌、国栞。11イをアリ。12イナシ。13国などアリ。14イ鯛。15イ胡桃〔〇くるみ〕、国胡桃。16イナシ。17国うら〳〵。18イナシ。19国つゝ。20国る。

くる際に、時鳥のほのかに鳴く、1兵衛佐聞きて、筝の琴に斯く、掻き鳴らす、

我のみと思ひし声を時鳥の鳴り侘びて音をも鳴くかな

と有るか無きかに2鳴らす。あて宮筝の御琴に、

時鳥の常に鳴べる心には音をだに高く鳴かずもあらなん

など言ふ際に、内裏より「兵衛佐兵衛督の君へ。宣旨なり」と云ふ。仲忠「あな3はりなや。斯しるこそあれ。わりなき日かな」と言ひて、「只今参りてなん」とて、参り給ひぬ。

かくて、4主の大臣殿の君に聞え給ふ「まるぐら〔〇須臾〕すべき5が近6らなりぬるを、水深く涼しからん所求めらん7に」国の君「京河には見えずなむ侍る。8宗大将殿の住み給ふ陸のわたりなむ涼らかなる心ばへりし出だされて前日侍る」「然あらんかし。かの殿の心10とて、めで造らせ給ふと聞く所なり。宗宣の男どもにつけられたる11もだに、殿の例として、心異に12かとし出でらるゝを、かの殿13は心14に劣らせ給ふあれば、見所あらん。人のし出だす事は心に従ふものなり。賢き人の酒にも優れ、公のう15へは〔〇難〕物に16判ひ給へる殿にこそあれ。16人の17しき〔〇式カ、審儀カ〕に驚きて見給へしに、皇子達、上達部

〔頭注〕1 団をアリ。2 団掻きアリ。3 団わ。4 団か。5 団所。6 団ら。7 団よ。8 団右。9 国考異ナシ。10 イためて、団とめて。11 イこと、団考異を。12 イこと、国二字ナシ、団皆ら。13 国考異の。14 国考異に、国と。15 イつ。16 国上。17 国考異階級。

在る限り參り侍ふた1るに、2左大將侍從一3へ奉りて下り給4へしこそ有り難く見えしか。そが中にも、侍從を5目給6ひしこそ、常は賤はしき女7の子のよき8 9惜しかりしかな」と宣ふ。かくて、君達方々に歸り給ふ。大宮內裏に10參り給ひて、「などか涼みに11い出で給はざりつる。釣殿御覽せさせ12 13としつるを。闇の夜の錦とか云ふやう14もなむ」宮15「人々涼み給16つれば此處17までなむ」とて、

　　枝ごとに分かずや風の吹きつらん離れる根さへ涼しかりつる

大殿、

　　奥山に松の古根を殘しては岸に靡くぞかひなかりつる

などて「か18つら〔○神樂〕十七日になむすべき。その設せさせ給へ」宮「面白からん所こそよからめ」大殿「19左大將の主の仲忠が母掃ゑ給20ひたる所21の、仲忠が心に入れて造らせた22く所、思23おしやれ、またはありなんや24は」25など宣ふ。

かくて御神樂に出で立ち給ふ。大宮女御の君あなたの北の方より始め奉りて、世の人は青朽葉、それよりこなたは二藍御小26そちぎ〔○袿〕ども、御供の人は大人童27赤色に二藍襲、28みか29このこ〔○御巫子〕青色に

校異 1 [イ]か。 2 [イ]右。 3 イつに。 4 [イ]ひ。 5 [国]得。 6 イへ。 7 [国]ナシ。 8 [国]考異をアリ。 9 [国]欲。 10 [国]入。 11 [国]は、[イ]も。 12 [国]んアリ。 13 [イ]て。 14 [イ]に。 15 [国]のアリ。〔○宮の人々「」〕 16 [イ]へ。 17 [国]に。 18 イぐ。 19 [イ]右。 20 [国]う。 21 [国]は、[イ]ナシ。 22 イる。 23 イほ。 24 [イ]ナシ。 25 [イ]と。 26 [イ]う。 27 [国]若言。 28 [イ]御。 29 [国]う。

二匹、下仕相良色1と著たり。御車二十ばかり、四位五位数知らずして、桂川に出で給ふ。陣左右に添して、一の車より2前のみ下して3さ〔○禁じ〕ひ入る。御車4に敷きて供し入る。御桟敷に下り給ひて陣の禄仕うまつりぬ。御前の召人さら5へか6はら〔○仮名衆カ、神楽カ〕つか7まつる8べき右近の将曹方、ふ9み〔○節〕仕うまつる10 11右近の尉近正、維貫仕うまつる12べき右兵衛の13尉時蔭、大膳亮仕うまつるべき殿上人の只今の上手ども、皆召しつけつ。上達部皇子達帰るまじきは出で給ふ。殿上人残14りなし。おほ15うま16ゝ〔○御前〕より給め召人17ゝくまで18も参り、国土新給まり御者下りぬる程に、19左大将の主河の瀬方よりをかしき20小舟興ある様に調じて21造り、を22かしき23物を興ある24うへいして25土器取りて、侍従26高麗の楽せさせて興り給ふ。27右大弁28大輔限りなく喜び給ひて、川面に29右の30使の31遊女と殿上人君達二一人出て遊びて待ち給ふとて、大君32まさばと云ふ藤衣に、かう歌ひ給ふ、

庭深き淵をわたるは水馴棹長き心も人やつくらん

34左大将の主、伊勢のふかみ〔○海〕のこ35い〔○磯〕辺に、

【校異】1図ナシ。2図前駆子、図寄物見。3一字異ま、三字図寄。4図ども。5図一字い。6図く。7図うアリ。8図寄異つきに。9図え。10図べきアリ、図寄異本にアリ。11図左。12図寄異本に。13図寄。14図ろ。15図ん。16図へ、図ら。17イら。18図物。19図右。20異ナシ。21図迫。22図か。23図も、図物。24図出、図寄異本出に、図寄、図寄異本出だ。25図にうけ〔○故下カ〕。26図にアリ。27イ左。28図のアリ。29図左。30図将。31図遊人。32図など率て、図率て。33イ楽アリ。34図右。35図う。36図わ。

人はいさ我がさす棹の及ばねば深き心をひと1かとぞ思ふ

とて渡りて、左右遊びて著き遊み給ひぬ。又兵部卿の皇子も御車蔵しに同じき河原に出で給へるを、喜びて御2〔む〕かへ〔〇給〕して、同じ御前に著き3〔た〕ま〔〇給〕ひぬ。かゝる程に春宮より藏人を御使にて、かく聞え給へり、

うちはへて我に縁なき君なれば今日の禊もかひなかるらん

あて宮、

「逢ふ事の夏越の祓しつるかな大路なら4ぬ人を見じとて

今日の禊は神も耳5聞6き7なん。」と聞えて、御使に女のよそひ8しとゝ賜ふ。かくて、夕暮に侍従両簾上げて、縦9遊の御几帳ども立てわたして、御10さへの前に、ただ11かゝかなる石角ある岩など拾ひ立てたる中より、川の湧きたる瀬12落ちたるなど見給ふとて、孫王中納言典侍13うらの君など、よき童など、岩の上ごとに出だし据ゑ、御琴搔き鳴らし、人々に歌詠ませなどして出で居給14ひつるを、巽方の御前川出たう興ありと思す。藤侍従御前のわたりに立ち寄り15て、孫王の君に物云ひなどするに、湧き出で16ゝたる水を見て、

〔校異〕1〔イ〕り。2一字〔イ〕ニヨリテ補フ。3一字〔国〕ニヨリテ補フ。4〔国〕む。5〔イ〕疾く。6〔イ〕ナシ。7〔国〕聞ひアリ。8〔類〕一具、〔国〕一具。9〔国〕紐。10〔国〕前、〔類〕様敷。11二字〔イ〕ら。12〔イ〕のアリ。13〔イ〕僧、〔国〕師。14〔イ〕へ。15〔国〕ナシ。16〔イ〕ナシ。

「河邊なる石の思ひの消えねばや岩の中より水の湧くらむ

瓦もと言ふとて1も」、孫王の君の答へ、

底を掬み石間を分けて行く水2は湧くと見れどもぬるまざりけり

など云ふ程に、同じ年頃兵部の君の許にある文を君達見給ひて、打笑ひつゝ物も宣はねを聞きて、又かく聞えたり、

我が文は八百萬代の神ごとによむとも實は盡きずやあるらん

4など聞えたれど物も宣はず。夜に入りぬ5。御神樂始まりて夜一夜遊ぶ。御神樂果てゝ、6才の7男8など9取る10に、兵部卿の皇子、11才は12つる13」など宣ひて、御前なる君の上に居給ひて、大宮に聞え給ふついでに、「月頃聞えさせまほしき事のあるを、序なくてのみなむ。今宵は御だに物聞え入れ給はなむ。年頃御伴らひに御ゆるしあるを、羨ましくなん人よりも14思し捨てたる。さは有るまじ15つき人そとやは聞え知らせ給はむ」大宮打笑ひて「ついでや、かやうの折には御16外にのみぞ思はゆるや。頻にしき事17かな18と宣はすは(□)すら、19さも宣はずば、20さも宣ひ知らせてまし」皇子「あるが中に思はし捨てたれば、何ら

〔校異〕1 [illegible]ナシ。2 [illegible]。3 [illegible]とアリ。4 [illegible]と。5 [illegible]てアリ。6 イ才。7 [illegible]。8 [illegible]アリ。9 [illegible]。10 [illegible]なこ。11 イ才。12 イて。13 [illegible]やアリ。14 [illegible]思はる。15 一字[illegible]ニヨリテ補フ。16 [illegible]もアリ。17 三字[illegible]など。18 五字[illegible]恋く宣ひ聞えさせば、[illegible]宣ひ聞え給ひなば。19 六字[illegible]ナシ、[illegible]物思はせ給はせずなん。[illegible]さ物思はせ給はむやは。20 [illegible]恋く。

れの度か嫁く思ほえぬ時なけれど、此の度こそ身は徒になるとも思ひ忍ぶまじけれ」大宮「まめやかには、見給へつべき人あらばと思ふを、さりぬべきが無ければなん。今暫しありてぼさ聞ゆる折もありなん」皇子「命あらずば、さてや止みなむ」とて立ち給ひぬ。暁に上達部皇子達には女の装、召びと1ろには白張袴、右大将主によき馬鷹など奉り給ふ。2かくて皆歸り給ひぬ。

〔歌詞〕3はろは4らはらみか5この子〔○御巫子〕6 7いも山と8さ〔○舞〕ひ9て10はる。さ11う〔○才〕の12男ど13か14人長〔○訓にひとをさ〕をさ〔○舞カ〕ひたり。15右に立て16り採物ども奉る。浮女ども澤山なり。

かくて、殿に歸り給ひて、東宮より常夏の花を折りてかく聞え給へり、

「獨りのみ我が臥す宿の常夏は常にをり憂きものにぞありける

今は住みにくゝさへなん。」とあて宮、

白露の置き變るなる常夏を何れの折に獨り見17るらん

例の宰相久18（しく）照りたる日盛に、

大空も我がごと物や思ふらん草木焦れて19暮れる夏の日

〔校異〕1イら。2以下歌詞ノ終マデ六十一字イナシ。3イ此所。4国御神樂。5イど、国う。6国どもアリ。7国ども連れて、国老與いもやま。8国ま。9国ナシ。10国入。11国え。12国男。13国も。14国御神樂仕うまつれり。15国御垣。16国る。17異ゆ。18二字イニヨリテ補フ。19イ照。

あて宮、

　時の間に入らぬ宿なく照る日には君さへなどか劣らざるらん

兵部卿の宮より、夕立のいたうする折に、

　年経れどいとゞ情なくなる神の響にさへや驚かぬ君

あて宮、

　聞けどもつれなき人は雷かで雨雲のみも聴くべきかな

1左2の大将殿より、海にのぞきたる磯立てる洲浜に、かく書き3付く、

　4綿津海の底に見るめの生ふればぞ我さへ潜む深き心を

あて宮、馳走したる洲浜にかく5れて、

　沖する潮は何ぞも海といへ6どいかなる底に生ふる見るめぞ

平中納言殿より、

　見る人は牡鹿の角にあらねども驚む種のなきぞ侘びしき

あて宮、

　思ふらん事は知られで夏の野に角落ちかはる鹿とこそ聞け

[illegible] 1因右。2因のナシ。3因てアリ。4因わだつみ。5因書き付く、異書き、因書きて。6因ば。

藤侍從、祓しに難波の浦まで下りて、それより、

　戀ひつゝ1摘み2へ來しかど住吉の生ひずもあるか戀忘れ草

あて宮、

　あだ人の心をかくる岸なれや人忘れ草摘み3へ行くらん

三の皇子、

　鳴く蟬も燃ゆる螢も身にしあれば夜晝物ぞ悲しかりける

紀伊國より、

　常よりも夏越の月の侘びしきは忌むてふ事の無きにぞありける

と聞え給へるを君達見給ふを侍從の君取りて見て、端にかく書き付けてあて4の宮に奉り給ふ、

　人はいさ夏越の月ぞ賴まれし瀬々の禊に忘5るるやとて

奉り給へど、6誰々も聞え給はず。少將六月晦に、

　衣手7も乾さで過ぎぬる夏の日を惜しむにさへも濡れまさるかな

兵衞良佐七月一日、

　繁かりし8とくゝにある言の葉の秋たつ今日の色は如何にぞ

校異 1 イ海。2 イに。3 イに。4 イナシ。5 イら。6 イ誰にも〳〵、イ誰も〳〵。7 イを、イに。8 イ事だ、因時だ。

致1か〔〇仕〕の大臣の御許より宮内の君の許に、「日頃え申し給へでなん。其方にも參うで2（3來まはしけれど、政所の人目騒がしきによりて）なん。人知れず諫らひ申すべき事なんある4。あからさまに渡り給へ。車奉る。」と言へり。宮内5擦り出たり。大臣並ひて「いかに、殿は何とかせしめ給ふ」宮内「只今は異なる事も侍らず。一日なん御教、やがて夏の御神楽せさせ給ふめりし」大臣「何處にてかせられし。公卿達は誰々か物せられし」宮内「西洞院6左大將殿にてなむ。人は、殿におはします限り7までは、兵部卿の宮8左大將の大納言菜用、殿上人は例のごとなん」大臣「大いなる御遊びにこそはありけれ。え知らましかば、いさゝかすかり9ら〔〇西宮か、藤司か〕參へて參うで10來ましものを。すべて殿は、かゝる好き者ども語らひ集へ給ひて、物習し給ふこそ嫌な物の11とうら12む。語はり給ふ司は、盛人のみ集ひて人の衣を剝ぎ取り13有手擦し給ふ14ん御府司。取り給ふ御手に好き者。或は攫れ14或は宿府隊けて15頼ふ大臣公卿と、これは宮仕人好き者とも。いさゝかに16御戻らふ心もなし。たゞ物の音を上手に彈き、和歌もいさゝかに人の跡に真らじ。17ら人〔し欤〕名聞き和歌讀み、他18ら〔〇所〕川よき史をば、雲の上地の下を求めても饗應し、19笑ふ人をば20身にも四入れず、人の加論持ち前21はと、参じてた22ゝは23く〔〇着へ〕渡らひ事すれば、口を。

〔校〕1〔校〕し。2井ニイニヨリテ補フ。3因來異行然。4異にアリ。5〔校〕推出た、因參りてけ、〔校〕參でた。6〔校〕有。7〔校〕さて。8〔校〕有。9〔校〕う。10異來。11〔校〕も。12〔校〕め。13〔校〕む。14因者アリ。15異さしろ、〔校〕考異輩。16異師へ。17因か。18〔校〕そ、〔校〕う。19〔校〕頓。20〔校〕耳。21〔校〕むし。22イく。23イへ。

開きて居る人をば、婿に1取り給ふべきものか。娘に夫婿はする心は、寡なる人の貧しく便りなくて、親の煩とあるによりするにはあらずや。殿のせ2しめ給ふごとくにては、婿取の本意なし」宮内打笑ひて、「見る日やさあらん。御方々は豐かに勢ひて、七3の宵を遣4くむ方なく5こそおはします6めれ」大臣「物は櫃に積み滿て7動かさであることそ賴もしけれ。若しは望ある者の、勢德を8蒙らんとて、非物費はし奉9る恩にこそあらめ。すなはち家人隨身わ10うは〔〇童〕11見失ひつらんものを。なほ今だにかゝる果敢な12業し給はで、確13かなる事し給14へなん。只今15世に人の婿は、滋野の宰相こそあらめ。御年や少し老い給16つらん。さりとも、七十には未だや餘り給はざらん。よき人なり。御心全く確かに、物盡くさず、貯へ17心よく18知りて、ことゝもなき人なり。さてはこゝらにこそ其の九の君は19（20得）め。あたらよく聞え給ふ君に、例の業し給ふらん21に、なほ北の方主の君に聞え給へ。若き時に、た22ゝは〔〇貯〕へ渡らひ心ある人に付きて、家刀自23へき24、家の內に無き物なく25〳〵てある人なむ行く先賴もしき。末の世襲へ26ては、27家貧しき人の28聞くぞかし。心浮きたるにつき29ては宮仕などする人は、世處も知らで、親の後の世後めたく、末の30惡きものなり。かの君はなほ此處におはせさせ給へ。殿の御疲入れず、子の代孫の代後安くておは

校異 1異はアリ。2因させ。3因つアリ。4異ら。5二字因ナシ。6因若異らめ。7イてアリ。8イ蒙、因蒙。9囨らせん。10イら。11囨者。12国きアリ。13異やか、イやに。14因は。15因よき。16囨へ。17国渡らひアリ。18因し。19一字囨ニヨリテ補フ。20囨見。21因よ。22イく。23イづ。24因てアリ。25囨ナシ、因し。26イず侍る。27イ讓るアリ。28国多き。29イさアリ。30囨世アリ。

しまさせんとなん1聞ゆると聞え給へ」「一前2にも斯くなむ聞え給へど、3宮に只今殿に北の方もおはしまさず、「一所など聞えさせしかば、げに似つかはしき事にはあ4んなれど、只今さあるべき5かなこと〔〇二字などか〕、あて宮は只今春宮に切に聞え給ふを、如何はせましとなむ思ほし煩ふとぞ宣はせし」大臣爪弾をして、「一筋なき君にもいます6がるかな。その7御の君に如何にいますなる君て。只今は此の8左大将の主の子9よ、仲忠とか云ふ好き者を心に入れて、夜昼10遊び戯れて好き者います11かめる宮に、参り給ひては、何事12し給はんと、親の御前に構はれて、猶らを好み容貌を化粧ひて、遊び業打ちして、行末果敢なくてあるばかりぞかし。あな心憂しや。この13方の君も斯くは聞え給はざりき。多くは此の侍従のし14なしつるをや。未だ知らぬ果敢な者にこそあれ。髪15取をし従者を使ふ事のみいみじう、容貌身の才の勝れたるぞ用なきや。内には宿直しとて、その容16皃をやは有には積まんとすや。17そあちには18備まし給ふとも御佗なり。天下に國王侍の君に乗り給ふとも、かの君19かはせば、此處にもおはしましなむを、なほよろしきに20を聞え給へ」とて、しこぶちに古めきたる硯二つに、東絹一箱、近江綾一箱入れて、肌21衣蓮すま22ちらゑに、かく書きて添へ給ふ。「人知れぬ宮仕に年経ぬれ23ど、御方の呼ばひを見給はざ24らぬをなん思ひ給へ、歎く。自

〔校異〕1異とアリ。2国ナシ。3国げ。4イらアリ。5国かな、国なたれ、国もなし。6国るな、国考異な。7国珍。8国有。9国に。10異遊び召すべき、国遊び召し揃えて。11国め、国考異な。12国かアリ。13国坊。14国か。15国る。16国同。17国御心をしも。18異をや。19イお。20国ナシ。21イ亮く、国考異異く。22イちうゑ、国中紙、国考異紙。23国ば。24国ナシ。

ら此の侍ひ給ふ聞え給ひてむ。此處には後めたき人もは1つ〔○侍〕らず。たゞ高き山とのみ頼み聞えてなん。必ず御頼み蒙らん。さて、これはいと無禮げな2けれど、御方の下仕3つにも賜はせよとてなん」宮内に錢取らせてか4く〔○歸〕し給ふ。

かくて又御の主、殿守の御を家に迎へて、「かの若君の御迎す5つき日、二十日餘り一日の日となん定めたる。かの御6色はいづれぞ」「7み委しくは知り給はず。8何時の日にかおはしますらん。さても、ふと御迎はし給はで、先づよく聞えおも9ひ〔○趣〕けてこそ定めさせ給はめ」10うち〔○聞〕「何かは、賤ある身ならばこそ。せうも11ら〔○非物カ〕せむとて侍る。寡にもは12つ〔○侍〕る。司冠はた持てり。何事をかは女人の嫌13(は)しむ14つきにあらしめずや」殿守、「げにさなむ物し給ふ。何かは許し聞え給はざらん。そが中にも、殿守15見侍れば、御願も必ず叶へ奉り侍らん16と、さはありとも、又々御消息聞え給へ」と言ふ。師の主、藏人木工の亮に云ふ17を、「18こまう達の後見せしめむ女人、珍らしめ19いべからむ歌一つ作らしめむ」と言ふ。藏人の主打笑ひて、「自らの爲めに、多くし侍れども、こと人なむ賞で侍ら20(ず)」「さらば誰か女人らは賞でさしむる」「少將主帶刀などなん人の驚くばかりは仕まつる」主、「その帶刀が和歌に賞でざりきや。少將に言はむ」とて、少將に宣ふ。「いと易き事なり」とて、詠みて奉り給ふ。よき色紙に書き給ふ。「日頃21の

校異 1イべ。2因ナシ。3イへ。4イへ。5イべ。6イ家、イ急。7イえ。8イ何れ。9イむ。10イそ。11イち。12イべ。13一字イニヨリテ補フ。14イべ。15イら。16イナシ。17因やう、因寸具げに。18イ高麗人歟、因鎭人達。19イつ、因言ふ。20一字因ニヨリテ補フ。21因仲媒(なかだち)。

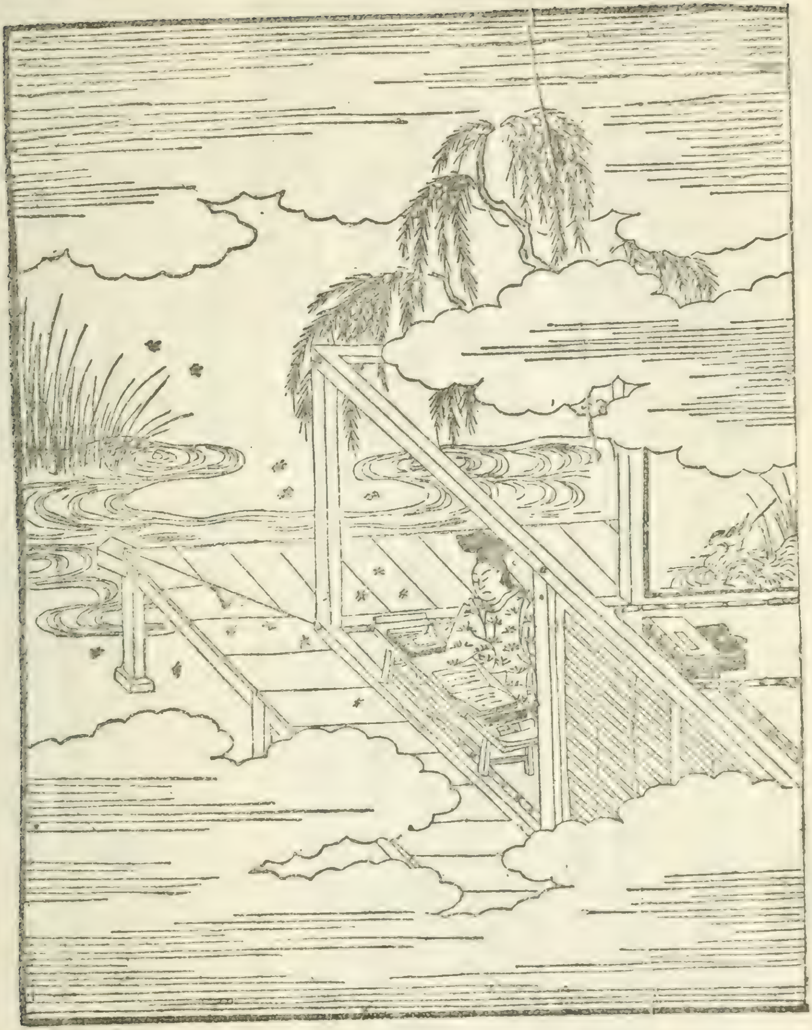
容貌になむ1怠らず聞えしむるを、此の頃は御2さい〔〇御前カ〕賜3へるべき汚き所は、掻き拂ひ4垣間は
すとてなむ御消息聞えしめざりつる。早や渡5 6ま7すべき心遣ひせしめ給へ8ば、何時しか眼のあたりに
て見なる9身許も申し賜はらんとなむ嘆き申す。さて、かゝる事は若々しければ、若き男どもの賤はしむる
を、10こと〔〇昔カ、殊カ〕に聞くに。」とて、

君穂ふとみなかみ白くなる齢は老の涙の積るなる11べし

御被綿に取らせて歸しつ。

かくて、勧學院の西のさ12らし〔〇曹司〕に、身の才もとよりある中に、身を捨てゝ學問をしつゝ推量なく遍
りて、院の内に無禮なくせ13ら14か15らさ16らしき〔〇藏人〕くりね女云ふ事も聞かず、17かはやいて〔〇罷出で
カ〕、18されくく座に着けば、院の内笑ひ騒ぎて、19日に一度短冊を出だして、一筒の飯を20食ふ。院司かい
とり〔〇挑取カ〕、三藏奘が21は22て〔〇糧〕、23への搗り交」24〔と 笑はれ、博士達にいさゝか數まへ25つられず、
父母26すち親族一度に亡びて、はか27りなく28便り29な30き學生頭多31〔に序を越えらるれども〕、藏人32〔對〕

【校異】1[イ]カ。2[イ]前。3[丙]は。4[丙]掻き拭。5[国]りアリ。6[イ]ナシ。7[イ]しアリ。8[丙]ナシ。9[イ]御物。10
[イ]こと。11[イ]ら。12[イ]う。13イう。14[図]るゝアリ。15イう。16イう。17以下八字[図]ナシ。18[国]稿。19[図]早
や出で来れくく」と云ふアリ。20[図]貫。21[国]か。22[イ]へアリ。23[国]一、[図]一つ。24一字[イ]ニヨリテ補
フ。25[イ]へ。26イうから親、[国]從者。27[イ]ナシ。28[図]考異こども。29[国]なしこともアリ。30[図]考異し。
31十字[国]ニヨリテ補フ。32一字[国]ニヨリテ補フ。



策なす1(べき便りなくかくて)2ゑふき、年3三十五、容貌見もなく、才かしこく4心賢き学生なり。かゝらんにも思ふ心ありける、いかでと思ふに、或る楽、藤英7くわ甚なくせ8さ(通)るを見て、「異もなき男なりや。左の大将殿も、かばかりの者はえ取り給はじかし。容貌・才は有り難しや」など、これかれ打笑ふを、藤英、己の涙を流して、恥かしく悲しと思ひて、夏は螢を9涼しき10袋に多く入れて、書の上に置きて読ます。まいて11日など白くなれば、窓に向ひて、光の見ゆる限り読み、冬は雪を丸がして、其が光にあてゝ、眼の皮むきて学問をし、「こ12くばく学13は九経ふ14帥、学問の力に返報して給へ」と心の中に祈り申しつゝ、身の沈む事を嘆きつゝあるに、院より出でたる人の15丹波守になれるが、出で立たむとて)、藤英監訪ふるひの慶する日16さうしと憧色を使にて「今日院に帰れ。17たうをきに18さかり者きたる日なり」と言はす。藤英、「甚だ畏く畏し。召し数19さふること、入學して今年廿餘年、未だそのねんに興らず。たまくまかり帰きし昔、身の恥厚ふ20(り)しによりてなり」と言はす。さう21とうし22く夏の衣の破れたる朽葉色の下襲の23裏したるを取りに遣りて、かく言ひ遣る、

【校異】1九字国ニヨリテ補ス。2国あり絶る、国離にき。3国二。4三字国ナシ。5イかゝる心。6国てアリ。7国かく、国書は。8国ま。9国生絹の、国生絹帷。10国考異刪。11国火もなし、国く、国人なし、白く。12国ゝ。13国か。14国宿、国帥、国考異塁の。15十五字国ニヨリテ補フ。16国さうとうしき、国考異憧色、(同)さうしにきうしき。17同責、イたうとを。18一字異本、国考異三字ナシ。19国まて。20一字イニヨリテ補フ。21国天眼しアリ。22国ナシ、国考異ゝ。23国譲う、国考異椅子、(同)こら、(同)こえ。

夏衣我が脱ぎ著する今日より1は見るなる恥も薄くなりな2ば

藤英紅の涙を流して、

恥をのみ八重著る衣に脱ぎ代へて薄き衣に涼みぬるかな

とて歸す。さうとうし3ゝ4た5ひは一つが盛物、藤英が曹司に遣る。皆これに文ども作れり。

[通釋] こゝは勸學院の西、6（7藤英が）曹司。藤英文つく8る〔○机〕に向ひて、書ども廻りに山のごとく10は〔○積〕みて、韓袋に入れて書の上に置きて、太き布の帷子一つを著て居たり。く11らやめ〔○厨女〕12黒き13にはい14（ひ）け〔○飯笥〕に入れて、黄葉の汁して15め〔○持〕て來たり16たれ。東17曹司、18侍從の19うへ〔○學〕衆ども20へ〔著〕き並みて、酒肴飯院21 22雜色集ひてのゝし23る。政所の24別當ども著き並みたり。米數25（知）らず積み置きたり。大炊殿、男御賄す、26あさめ〔○專女〕厨女あり。「藤英が膳部に27はのみ28たき29ら」と言ひて奪ひ歸30り。これ31 32生に著きたる進士秀才、この33かへ合せて八十人ばかり、饗膳に向ひて物食ふ。34丹後守饗したり。紙ども35も貼る。厨女し貼り〔○讀りカ〕かけて打つ。

[校異] 1[イ]も。2[国]を。3[国]ナシ、[図]き、[図]考異と。4[図]考異こ。5[イ]へ。6三字[イ]ニヨリテ補フ。7以下五字イナシ。8[国]ゑ。9[イ]ナシ。10[イ]積。11イり。12[イ]白。13[イ]に、[図]微。14一字[イ]ニヨリテ補フ。15イ持。16イこれ、[国]此所は、[図]これは。17[図]のアリ。18[図]大學。19イがく。20イつ。21イ司アリ。22[図]さうとうしき。23[図]考異り。24[図]別。25一字イニヨリテ補フ。26[図]を。27[図]考異ナシ。28[図]考異に。29[国]う。30[図]る。31[国]はアリ。32イ座。33[国]人。34[イ]丹後。35イ聖。

かゝる程に、七月七日に、大將殿に數日1留めて、西の大殿より、青色に蘇枋襲、檜の2ゝりへの3袖、4
三重襲の袴、一重襲の衣、汗衫の袴5る童、髪丈6等しき7い人8の、中の大殿より赤色に二重襲の袙
袴、同じき9八人、北の大殿より、薄物に綾を重ねたる女郎花色の汗衫袴、同じやうにて10八人、方々よ
り歩み出でゝ、御前の前栽11まで12へ〔○枝カ〕の下に、反橋を渡しつゝ、〔色〕々の絲どもを一つゞゝ織物に作る。
つぎて簀子に蒔繪の筋つ13まで〔○何カ、囲子カ〕七つ立てゝ、此に御簾掛け並べすてゝ、よき作り作して、
色々の御衣ども色を盡くし、簾き14などき、大15衣架を並べ、御調度色を盡くし、16など作り、御書ども長
み調へ、數を盡くして、方々17盡されたり。風に從ひて物の香ども吹き加へぬ鳥15々なし。19御伴例のこと、
預りごとに折敷、參り物20は同じ數に參21り、預り22どもに女の裝23ことゞ〔○一具〕、本家の24御方より召
し並べて賜ふ。25涙落ちて舞踏したり。
かゝ26ゝる大殿源氏におはしませども、外戚腹臣におはしまさず、聞け申しけるによりて、大殿勸學院の27別當し
給ふ。公の試策おこなひ給ふとて、博士文人八十餘人、28〔仁壽殿〕に參るべきを、公29の仰に止30まりぬ。さうぐ〳〵
しき驗かな。何よりも興あるべき試策なるべきを、たゞに過ぐさじ。31べき、32ど〔○別當カ、唯カ〕既に此由33ら

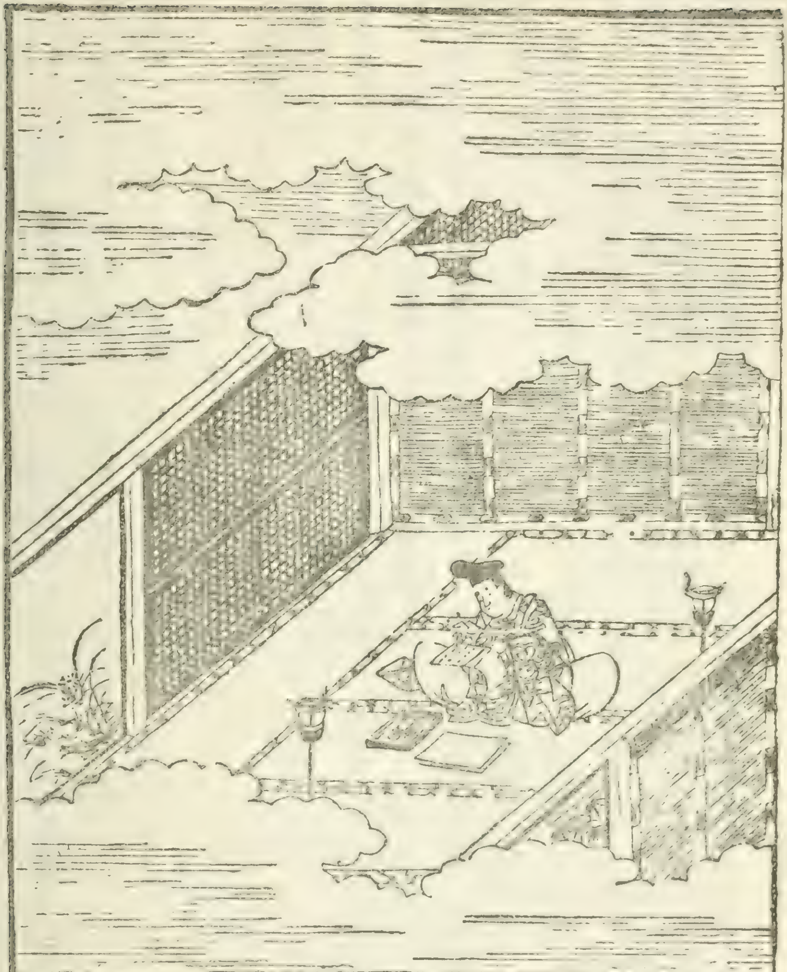
〔校〕1 関つと。2 一字ナし、〔イ〕の。三字〔異〕上、〔異〕給。3 さ考異所。4 下、考異〔色〕に花薄襲、〔異〕考異みへ、えかさね。5 イたアリ。6 〔異〕にアリ。7 イ八。8 〔イ〕ナシ。9 イ八。10 イ八。11 〔イ〕のアリ。12 イつ。13 〔異〕き、書し。14 〔イ〕など、〔異〕〔異〕。15 〔異〕眠。16 〔異〕品を。17 〔イ〕さうさ、〔異〕に降ら。18 〔異〕ナシ、〔異〕考異は。19 本〔同〕。20 〔イ〕ナシ。21 〔異〕る。22 〔イ〕こアリ。23 一字イひ、三字異一具、〔異〕一具。24 〔イ〕ナシ。25 〔イ〕並み立。26 〔異〕くて。27 〔異〕別。28 〔異〕仁壽。29 〔異〕事。30 〔異〕ま。31 〔異〕ナシ。32 イう。33 〔イ〕ナシ、〔異〕を。

申させて、大學より三條の院近し。か1らち〔○小路カ、徒カ〕より歩まん」とて2列引きて立てる3所、4かし
〔○西〕5曹6〔司〕の藤英、常はのゝしりて出で立つを見れど思も懸けぬを、今日はえ留まるまじく思ほゆ。7
こめの衣の8わゝけ9、下襲の10いんひ〔○半臂〕もな11き、太帷子の12上13の14 15著て、上の袴下の袴わたし。
冠の破れひしげて巾子の限りあ16か、17尻切の尻の破れたる18穿きて、19毛もなく背み瘦せて、ゆる〔○韌〕
ぎ20出で來て、「季英、今日の御歩の21おち〔○中カ〕に入らん」とて交りた22く。博士友達より末まで、わ23〔ら〕
〔○笑〕ふ事限なし。24うものす25にあらくて「けさうさ26かのべた27ら〔○別當〕殿の殿上の御殿に劣らず28
退く。か29ら〔○才カ、功カ〕ある限り集ひたちて、例の人をだに許し給はぬ世の中にゝいはんや學生の30各こ
31うのみさう32〔○御族カ、御装束カ〕にて參り給はゞ、氏の院の永き名になりなん。速かに罷り留り給へ。い
と不便なり。院をも33追ひ捨てむ」など言ひて、取り寄りて打ち引かぬばかり、引きし34う〔○退〕け、押し
35倒しなどすれど、留まるべくもあらず。騒ぎ滿ちて歩み36なん37とす。さうと38うし39ゝ參りて、「などか
御歩のまだしかりける。40たゞ通り參り41つるを待たれつるか」衆の答「さもあり。又この藤英出で立ち給

校異 1〔イ〕う、〔図〕ナシ。2異例。3〔国〕に。4〔イ〕に。5〔国〕のアリ。6一字〔国〕ニヨリテ補フ。7異前、〔国〕上。8〔イ〕
丈。9〔国〕たるにアリ。10〔イ〕は。11〔国〕く。12〔国〕下。13〔イ〕に。14〔国〕衣アリ。15異衣。16〔イ〕るゝ。17〔図〕尻。18
〔国〕をアリ。19〔図〕色。20異參。21〔図〕を。22〔イ〕る、〔国〕り。23一字〔イ〕ニヨリテ補フ。24以下十三字〔図〕ナ
シ。25一字〔イ〕そ。26〔国〕る。27〔イ〕う。28〔図〕術德。29〔イ〕う、〔図〕ど。30一字〔イ〕名、〔図〕丹。31〔イ〕そ、〔国〕ふ、〔図〕上下二
字ナシ。32〔図〕そくアリ。33〔イ〕る〔イ〕言。34〔イ〕ぞ。35〔国〕倒。36〔イ〕止みアリ。37〔イ〕す。38〔イ〕ナシ。39〔イ〕ら、〔図〕
き。40〔図〕忠遠が。41〔図〕來。

ふに立ち亂れて、試策の1こそ2め3らにの罪く到4らで歩みぬるは」さうとうし5、なども6ゝ藤英の[illegible]
に參り給ふらんか7うに歩み止まむ。藤英は氏の院の學生にはあらずや。えさう〔○衣裳カ〕8古こ9なるこ
とは、いはゆる文學の10生なり。冠[illegible]はり、[illegible]の衣破れ崩れ、11[illegible]れて、[illegible]したる人の、身の才あ
るをなん學生と云ふ。これ然こそ出て立ちもすれ、12なや〔○親〕ある人の、身の才もなくて、豪家を頼み時。
を盡くして、下に括をしつゝ華やぐ人は學生にはあらず。さても、何13その14ふや〔○功者カ、冠者カ〕15は
らは「□[illegible]の物16[illegible]ひはするを、早や出で立ち給はん」などて、「藤英立ち給へ。これなん頭の大學の17生」と
て、大殿「[illegible]より18くらある試策なるを、え見過すまじく思ほえつるを、いと頭なる歩なり」と宣ひて、中
19島の釣殿に[illegible]ども[illegible]りて[illegible]へ、上達部皇子達宰府院司まで著き並み、博士20文人列引きて著き並みぬ。[illegible]
さ21らとう22に、當時客の所より、御前ごとに机參り、土器始まり[illegible]下り23て、主の大殿題24渡し給ふ。探
韻25賜ひて26は[illegible]の文作る。上達部皇子達宮家の子作り給へり。作り果てゝ、御前に出でゝ文奉る。式部丞
か27らじ〔○[illegible]カ〕[illegible]カ、28らて讀みあぐ、もろす29く、夜に入りて、と30ころ〔○[illegible]〕聞ごとに[illegible]け、
學生31間なく立て、豊明し[illegible]して、藤英は文人32もかくたより文奉るにも、御前にて作り出だしたる文は、

[校異] 1 [illegible]み。2 [illegible]み。3 [illegible]。4 [illegible]して。5 イしアリ、[illegible]らアリ、[illegible]きアリ。6 [illegible]か、[illegible]り。7 [illegible]
ら。8 [illegible]古く。9 [illegible]。10 [illegible]。11 [illegible]下上。12 イお。13 [illegible]すな。14 [illegible]からし。15 [illegible]。16 [illegible]。17 [illegible]
所。18 イ[illegible]。19 [illegible]ナシ。20 [illegible]文。21 [illegible]り。22 [illegible]しき、[illegible]しきに。23 [illegible]ナシ。24 イ出たつ[illegible]ほり、
[illegible]。26 イ入。27 [illegible]。28 [illegible]ナシ。[illegible]し。29 [illegible]し、[illegible]。30 [illegible]う。31 [illegible]。32 [illegible]どアリ。



上達部見給はんに、1名高くなりぬべければ、講師取り隠して讀まずなりぬ。上達部皇子達在る者とも知り給はず。主の大殿より始め奉りて、琴遊ばす限りその師に調べて、今日の文2の興ある3手を4あらせて遊ばすに、夜も更け行くに、琴の音人の際遙かに高5く、藤英己れが作れる文を、聲の限り振り立てゝ誦する聲、高麗笛を振り立つるに劣らず。主の大殿聞し召して、「今日の文に聞えざりつる句を、一人誦6もる人あなり。誰ぞ」と宣ふ。博士文7に聞え知らはす。「こゝ8ちに興ある9ことを面白き聲に、多くの人10誦11くる聲に劣らず、いみじき者かな」とて、聲を靜めて、御口づか12ら問はせ給ふ。一學生13みの末に、異句を誦14かそ15いへなり、何16よろといふ學生ぞ」17ら高く宣ふ。藤英驚き申す、「勸學院西18曹司の學生、藤原季英」と申す。「興ある學生、19誰方此方に參ら20せ21よ」と宣ふ。許多の中を分けて、晝よりも明く照り滿ちたる火影に見えたる姿、限りなくめづら22かし。え念ぜず一度にさと笑ふ聲のす。荒くけうさう〔○警策カ〕して鳴靜まりぬ。主の大殿藤英に問はせ給ふ、「誰23ろ後として、誰が24師家に侍る學生ぞ」と問はせ給ふ。季英、「けたう〔○遣唐カ〕の大辨な25んかげ〔○成蔭〕の大臣の一男として、料賜はれる26にや道に侍り。な27んかげ〔○成蔭〕の左大辨參議に侍りし程28に、兵の爲めに命終り、兄弟29遂く殘る者なく滅び果てゝ、

【校異】1異なだらか。2因ナシ。3因句。4因合、因示異撰ら。5因し。6因す。7因入ら。8因ら。9因句。
10因のアリ。11因す。12因ら。13イら。14因す。15一字イは、四字因人。16一字因ま、二字因者。17因と、イこ。18因のアリ。19因かな。20因來。21因ナシ、因來。22因ナシ。23因か。24イしけき、因申す。
25因り。26因文藏。27因り。28因ナシ。29因多。

季英一人なん彼が後とて侍る。三月のあ1い2れし3ゑひ4はする蕩一生一人なし。七歳にて入學して今年は5卅6一7年、それより幾眼の拔8れ、臟の蠹きんを期に定めて、大學の窓に光賜らかなる朝は、眼もかはさず見守る。光を閉ぢつる夕は草薹の螢を集め、冬は雪を集へて、部屋に集へたる事年頃なりぬ。然れど、當時の博士あはれ9淺く、貪欲深くして、料賜は10りて今年廿餘年になりぬるに、一つのしき〔○仕儀カ、式カ〕宛てず。兵を業として、惡を旨として、11熊鷹狩漁に進める者の、昨日今日入學して、男12し赤しの智なきが足13う14奉るを、序を越して、季英多くの序を過しつ」許多の博士の前にて紅の涙を流して申す。聞し召す人涙を流し給はぬ15なし。主の大殿、「この學生がかく申すは如何なる事ぞ」と問はせ給へば、博士ども聞ゆ、「季英眞に智侍る者16や。されど17しりが魂定まらずして、公に仕うまつるべくもあらず。これ罷り出でたらば、公私妨と18あるべきによりて、19しせず侍る20や」と申す。季英爪を彈き天を仰ぎて侍ふ。大將の大殿、「さ21果つるものか」と普く問はせ給ふ。心を合せて靜むる中に、さ22らと23ら24進士「25只今氏の院に、魂定まり身の才優れたる者これのみなん侍る。人の爲めに犯、過一26三生なし。身の便りなきを愆りとして、27か28ら只院内情なくして、私豐かに智なき學生どもには豐かに賜へ、れ

校異 1 国は。2 図考異や。3 イえい。4 イわ、図考異ナシ。5 イ廿。6 国五、図考異八。7 図考異歳。8 イけ。9 図みアリ。10 国らで。11 図博打。12 異く。13 図を。14 図奉。15 図考異はアリ。16 イなり。17 イ其、図彼。18 イな。19 イえ。20 イなり。21 イ侍。22 イう。23 イう。21 図しき。25 図怠遂。26 イ期一。27 三字図學生。28 一字イう。

ども、季英が便りを失ひ1學問に疲るゝをば、一度のしき〔○仕儀カ、式カ〕行ふ是れ2て疲れ3臥す4る事なし、跡を絶ちて籠り侍る學生なり」と申す。大殿、「大學勧學院と云ふものは、大臣公卿より始め奉りて、封を分けさ5ら〔○非〕を入れ、た6らはり〔○賜ばり〕7を置きたる所は、大學のみちにかくそく8らと云ふ事あらん。か9らけ〔○豪家〕としてある10正嗣だに殊にせぬ事なり。皇子達の御賜ばり數數多あり。自らも一11わう賜はる。かゝれども、家に12く13ら〔○功〕あ14ら者に賜ひて、あ15さ〔○餘〕るをこそ料物16たまふるには賜17べ。季英が申すごとくには公に仕うまつ18りぬべき者にこそあなれ。堪へたる事なき人だに、身の洗ひをば變とする19事を20ことはかりな21り22。貧しきを窓にせば正嗣こそは交らはざらましか。魂におきては、身の23愛ある時24公に證をなし、上き人も歸まらず、事25(か)な〔○叶〕ふ時には武藝の者も治りぬるものなり」など宣ふ。博士達退まりて侍ふ。大殿、作26りける文を一人に誦せさせて、御寿27に合せて28さす29ことくなく面白し。大殿季英に博士給賜ふ。

　色かへぬ松をばおきて誰が枝30に秋の山にも移してしかな

季英賜はるとて、

〔校異〕1國てアリ。2國に。3國考異浸。4國ナシ。5イう。6イう。7國ナシ。8國考異う。9イう。10異二さま。11國考異に。12二字國考異勞。13一字國う。14國る。15國ま。16異賜は。17國ふ。18異る。19二字異ナシ。20國言卿。21國れや。22異やアリ。23寄進。24寄はアリ。25一字國ニヨリテ補フ。26國れアリ。27異ナシ。28國進。29イ事、寄他事。30國を。

荒金の土の上より藤葛道1ひて2ふ今日ぞ嬉しかりける

と聞ゆ。大殿藤英が姿を思ほす程に、民部丞藤原の元則鮮かに麗はしき3とそひ〔〇装〕し、優れたる帶さして出で來たるを御覽じて宣ふ。「此の學生4心みさうな5る。元則暫し布衣になりて、その裝束此の學生に取らせよ」元則畏まりて、藤英を呼び6かくして、鬢搔き7ひうり裝束せさせつゝ言ふ、「主は8うんこたえ〔〇言語絶え〕給ふなめり。元則9ども道の事のいみじう愛しき事は知り給へたり。細かなること〔〇故事カ〕かうたいも侍らず。主も將さもし給は10(ざ)なり。一11向にあひ仕うまつらん。元則ら12も13源に14越し給へ」など言ひてつくろひ立てたり。裝束容貌美ひつる15すらはうにこよなく勝りたり。作り16果たせる文詩多の中に勝れたり。樂の中に只今一なり。かくて、垣下の所の物の音出だして遊び明して、曉方に皆、博士四位には女の裝、五位には白張一襲づゝ給の袴一襲づゝ給ふ。藤英も賜はれり。藤英賢き心に思ひ狂ひて出で立ち17しを、かひなくて殿を罷18へ〔〇出〕る19ともの劍に當る20事21思ほゆ。然ありとて爲べき事も思ほえねば、中の大殿の東面なる竹の葉にかく書き付く、

彥星のあひ見てかへる曉も思ふ心のゆかずもあるかな

校異 1因ふ。2イし。3団よ。4団心美、団ふみゝ、国一身の、因び。5国り。6団返。7団髭剃り、国装ひ、因つくろひ。8一字団ご、五字異え答へ、因考異よく堪へ。9団ら。10一字団ニヨリテ補フ。11異から。12因が。13因許、因考異御許。14因考異具。15異すうわう、因學生ら。16団出だ。17団にアリ。18団づ。19団事物、因事の。20団ごと。21因考異覺。

と書きて細川。陸1の内さこらし〔○曹司〕に3ぞ思ふ事限りなし。4春宮より、

「情もなき人を日つ間に七夕の逢ふ夜も數多過ぎにけるかな

帶に4奥せ給ふかな。なほかうのみあめる。其高にや參り來べき。」など宣へり。あて宮、

「七夕の逢ひ見ぬ秋を待つものを逢ふ夜をのみも數多聞くかな

ゆゝしき物5名をめみもとなん。まことや藺の板戸は明5たぞめみなん。」と聞え給ふ。

宰相、中の大殿の簀子にて大殿君達御6琴遊ばしなどする夕暮に、御簾のもとにて兵衛の君に、「などか一夜は下り給はざりにし。今は君さへ情なくなりまさり給ふこそ侘びしけれ」兵衛、「數ならぬものは然て見ゆるや。一夜は御前に侍ひしかばなん」など言ふ程に、蜩たちかへり鳴く。宰相の君、

夕されば宛轉する身の侘びしきに鳴く蜩の聲やなにな7り

と宣へど聞き入れ給はず。兵部卿宮より、

「露と露に夜の下葉は色づけど衣擣つべき人めなきかな

如何せん。かくてのみ8はえあるまじきを、情なき御氣色に見給ふるこそいと侘びしけれ」と聞え給へり。

御返なし。9左大將、

〔校異〕1以下七字異本に難出てかなほ。2一字国う、图え。3一字图こ。4图かくてアリ。5图さ。6異本。
7国る。8图ナシ。9图右。

「幾度か夜に返すらん唐衣返す〴〵も恨みらるゝはかつは1怪しゝ」など聞え給へど御返なし。平中納言殿より、

「浦風は荒るゝ海にも吹くものをなど暴風2かも早き川瀬3ぞ有り難き御心となむ。」聞え給へり。三の皇子、

覺束なまだふみ4見5せぬもののゆゑに君はあたごと思はゆるかな

と聞え給へり。

月の面白き夜、今宮あて宮簾のもとに出給ひて、琵琶箏の琴面白き手を遊ばし、月見給ひなどするを、仲忠の侍従隱れ立ちて聞くに、しら6は〔〇調〕より始め違ふ所なく我が7彈く手と等し8くを聞くに靜心なし。身は徒になるとも、取りや隱してましなど思ふにも、母北の方の御事を思ふに、なほいとほしく9覺ゆ10。思ひ煩ひて、隱れたる簀子11と立ち入りて、孫王の君に、「などか一日の御返りは宜はずなりにし」答「侍従の君と御琴遊ばす折なりしかばなん」侍従「12かさまか13らにやありけむ、あはれ手つき14思ひ遣られても遊ばすなるかな。箏の御琴は然なり。琵琶は誰が遊ばすぞ」答「15一の宮にやおは16しますらん」侍従、「今だにかゝる御琴17も、いかにあらんとす18らん。いでや、かく物の覺ゆればや人の過失をもすらん。限り

【校異】1〔イ〕あやなく。2〔イ〕こ、イし。3〔イ〕に。4イも。5〔イ〕見。6〔イ〕べ。7〔因〕考異ナシ。8〔イ〕き。9〔因〕思は。10〔イ〕るアリ。11イに。12〔因〕承はり。13異し。14〔イ〕やアリ。15〔因〕今。16異二字ナシ。17〔因〕どアリ。18異すむ。

なく思ひ忍べど、え堪ふまじくもあるかな」一答、「よくもあらぬ者こそ然る心もあれ。1かたても宣ふかな」一侍従「幾そ度か思ひ返しつれ。されどさてのみ3はえこそあるまじけれ。如何せむ」孫王の君、物な宣ひそ」とて立ち4入れ5ば「6聞給へ、さ聞ゆとも世に悪しき業せしや」などて、引き留めて、「まめやかには、いかで然るなから物一こと7そ(○言)聞えさせてしがな。さはあ8りぬべしや」「いで、あなむくつけ。時々宣ふ返り事も、いと聞え難うし給ふを、と9かくしてこそあれ。10思はしだにか11くるこそいと12目覚ましけれ」「怪しや。内裏にては、13仁壽殿などにても時々召して物宣ひなどはせずや14。など人はえ宣ひ觸れぬ15こそあめれ」答「これも人してこそは聞え給はめ。此處にも己15しは聞えずやは」など言ふ。侍従17龍18膽の花押し19たて(○折)りて、白き紙の花に、昇の先してかく書き付けて奉る、

「頻々20世に21嘆き22て23渡る侍士は龍膽らのくれかなか(○流、泣か)れ來ぬらん

かく思う給24ひては久しくなりぬるを、いかで今宵だに一言だに聞えさせてしがな。答こそ宣はざらめ、聞し召すばかりには何の罪もあらじ」とてなん奉る。宮見給ひて、「何處にあるぞ」と宣ふ。孫王の君、一夏の實子に」「25然ば果留きつるは聞きつらんな。あな恥かしや。昔上手ぞや。我は聞26かじ」とて入り給ひぬ。侍従聞きて、「あたら心幾の事や。なほ昔が27君篇、今宵な23らずとも譲り給へ。人よりも親に仕うまつらんと

【校異】1イう。2罪し。3イぞ。4国てアリ。5イナシ。6田見、亜寺異待ち。7イと。8イる。9異りへ。10イ給。11イ人。12国逍。13国仁壽。14イはアリ。15イにアリ。16イら、異れ。17イ龍。18異膽。19イを。20イ頻。21イ流れ。22国考異に。23国下。24国へ。25異誤語。26国え。17イ待、国ナシ。28異なす。

思ふ心深きを、かゝる思ひつきにしより、片時1に〔〇世〕に經2つく3は思はえねば、今更に不孝の人になりぬべきがいみじければ、いさゝか思ひ靜まるやとてなん」と泣く〳〵夜一夜物語りし明して、早朝黒方4に銀の鯉5銜はせて、その鯉にかく書き付けて奉れたり。

夜もすがら我6浮かみつる涙川盡きせ7ずこひのあるぞ侘びしき

とて奉れたり。あて宮物も宣はず。孫王の君、「この度はなほ宣はせよ。殊に物も宣はせず靜かなる人の、心魂もなく泣き惑ひ給へば、いとほしくなん」と聞ゆれば、「8にくき事出で來ば、君の御難になさむ」とて、銀の9川に沈のま10ろ〔〇松〕11としてぢん〔〇沈カ、鎭カ〕の男に持たせ12、書き付けて遣はす、

川の瀬に浮かべるをの13ゝ〔〇男〕14かゝる火の影を15や己がこひと見つらん

など宣ふ。近き程16にだにかく思ほし17焦らるめれば、まして紀伊國の源氏限りなく18思ひ歎くまゝに、容貌淸らに心ある童人の子どもに裝束を淸らにせさせて、時々に珍らしき花紅葉面白き枝に、書きて、日に從ひて奉らる19に、かくなん、

「數知らぬ身より餘れる思ひには名草の濱のかひもなきか20な

とのみなん。いでや、塵もこそ積る所あなれ。留まる影も覺えぬこそ裝束なけれ」など聞えたり。大殿見給

校異　1イ世。2[イ]べ。3[イ]も。4[国]を。5[国]にアリ。6[国]がアリ。7[イ]ぬ。8イ聞きアリ。9[イ]貝。10[国]つ。11[国]燈。12[イ]て、かくアリ。13[国]こ。14イ靜。15[イ]親子の貝。16[イ]ナシ。17異本ヘ。18[イ]二字ナシ。19過るに、[国]考異るゝ。20[国]考異も。

ひて「1大す〔〇上手〕の所に打ち出でたるに御痛からぬ文かな」など宣へど、御返りなし。中の大殿に渡し給ひて、男女方わきて石弾き2も給ふ。侍従御前なる硯に手まさぐりして、

　逢ふ間なく歎く心も夢にだに3逢ふやと思へばまどろまれけり

と書くまゝに消えぬ。あて宮見ぬやうにて物も宣はず。源宰相伏し沈みて、4死ぬ〳〵と天の下に惜しまれつゝ罷り臥して、思ひ歎きてかく聞えたり。「數ならぬ身を思ひ給5へ知らぬやうなるが拙きに、聞えさせじ6と返す〳〵思ひ給へれど、後になりぬ7るばかりも約束なくて止みぬるがいみじければ、いでや、

　涙だに川となる身8に手を觸てかく水茎ぞ何地行くらん

只今も死ぬる身なれど、若しやと聞え合せてなむ今の程延らひ侍る。吾が君〳〵助け給へ。」と聞え給へり。あて宮「かくも言はぬものを、いとほしくも言ひたるかな」とは宣へども物も宣はず。9本の君、「なほ此の度ばかりは宣はせよ。10ひみじくなりにたりとていとほしがり給ふを、人を助くると思せかし」あて宮「我に負す11にこそ怪しけれ。さてもかゝる人にはまたなん言はぬ12てらき。など13も人に情なく14なをしに。さうなても見えぬるぞ15」など宣へ16ば、「さ17か聞えつべき人にこそは時々物すれ」18などて物19宣は

【頭】1頭上。2図し。3イ逢。4図しぬ。5図へ。6図と。7図ナシ。8図め。9図兵衛。10イい。11図ナシ。12図てよ。13図しアリ。14図聞えず、国なぜぞ、図思しなりしぞ。15図よきアリ。16異ど。17イば。18図と。19図もアリ。

ず。兵衛1良佐思ひ惑ひて2たゞかくたん、

數ならぬ身を初秋の侘びしきは時雨も色に出でぬなりけり

など聞えたり。3

文化十二年亥三月十七日以本居氏藏書校合畢　橡樟園

〔校異〕1〔異〕のアリ。2〔又〕二字ナシ。3〔異〕御返なしアリ。

かくて八月中の十日のほどに、1帝花の宴し給ふ。上達部親王達、残りなく参り給ひて、御遊びし給ふ。帝「年の内3 4草木の盛り、秋のほどるにいつ6か」と問はせ給ふ。蔵人少将仲頼奏す「野の盛りは八月中の十日、山の盛りは九月上の十日の程になん」。「野山の中には何れか面白き」仲頼奏す、「近きほど7には嵯峨8、春日野、山は9「小倉山、嵐山なん侍る。草木などは、心生ひに10思ひたるはつたなきものなり。人近にて、朝夕な11くつくろひたそなん妻有難侍る。花紅葉などはしか侍らぬ物なり」と奏す。「今年は怪しく木の葉の色濃く、花の香をかしかるべき年になんある。興あるをかしからん野邊に、小鷹入れて見ばや」と宣はす。仲頼「しか侍る年になん。木の葉12またきに色づきて、同じ露時雨もげに心ばへ異な13る。司の大将、鷹引き連れて大原野に罷りて侍りしに、その野いといみじきほどになりにて侍り14き」上「いとをかしき事かな。いかめしき逍遥などする、故あるわざなりかし。さて何事かありし」仲頼「異なる事侍らざりき。数多が中に、ことらなき小鷹一つなん侍りし」上「かの鷹を試みばや。入り所のをかしからん、思ひ出でよや」「仲頼が見給ふ15かは、さきに奏し侍りし鷹仲間16なん侍る。十六の大国にも、さばかりの所

〔校異〕1宴ノアリ。2問ふ。3〔イ〕のアリ。4〔イ〕木立。5〔因〕は。6〔イ〕は、〔国〕かは。7〔国〕野。8〔イ〕野アリ。9〔西〕宇〔イ〕ニヨリテ補フ。10〔イ〕生。11〔イ〕で。12〔頁〕あアリ。13〔イ〕る。14〔宝〕。15〔イ〕る。16〔宝〕にアリ。

やは侍らん」上、「1にや、さる事ぞや。いとゆかしけれ。2ある3かじ(〇褻)いかでかは、げにいとさては物せん。いと所狭きうちに、例なき事にもこそ」と宣4ひすれば右の大臣、「などか5におはしまさざらん。唐の國の帝は、逍遥し給ふとては、十6日廿日こそは7(歩かせ給へる。まして)四五日の程は、いとよくおはしましなん」と奏し給へば、御氣色よくて、「さらば」など宣はす。これかれ、「この頃こそ草木の盛りに侍れ。衰へざらむ前に御覧ぜさせばや」と聞ゆれば、「よろしく定めて物せんかし」とて、才ある人、在る限り8選び給9ふ。九日の宴は彼處にて聞し召さむとて、文章生など侍はせ給ふ。季英賢き者と聞し召して、侍ふべき由仰せ給ふ。大將殿裝束馬鞍より始めて出だし立て給ふ。かくて10嵯峨の院11皇子達殿上人も才あり容貌あるは皆出で立12つ。紀伊國の源氏かゝる事を聞きて、御設し給ふ事いといみじ。

九月一日に出でおはします。道の程の事ども言ひ盡くすべくもあらず。紀伊國に入り立ち給ふ界より始めて、道の程の事13く、種松金銀14な(〇瑠)璃して造れ15るなり。吹上の宮に著き給へれば西の陣を開きて入らせ給ふ。16 17日18申の時ばかりにおはしまし19て、目出度く響きしつらへる所にみ20る(〇皆)著き竝み給ひぬ。いとになき所なりけり。いかでかくて住むらんと御覧ず。威儀の御膳は更にも言はず、上達部皇子達、

校異 1**イ**そ、[図]そよ。2以下十六字[国]誰彼もしか([図]さ)奏せしかど、いかでかは彼處までは。3[イ]ナシ。4**イ**は。5[イ]は、**イ**そは。6[イ]ナシ。7以下九字[図]ニヨリテ補フ。8**イ**容貌アリ、[イ]かたちなどアリ、[図]かたちをアリ。8[イ]ひて、[図]へり。10[国]三字ナシ。11**イ**のアリ。12[イ]ち。13[イ]は、[国]まで、[図]ども。14[イ]る。15[図]二字ナシ。16[図]五アリ。17[イ]ナシ。18**イ**のアリ。19[国]ぬ。20**イ**な。

池奈際の御前にして前山の物1盡くして参り、六位の御府詰大夫品々にいかめしく2て装したり。上より給ふ
まりて御階下り御土器参る。源氏上許されて、御前に召して御覽4ず。そこばく選ばれたる人々に劣らず
御覧ぜらる。御遊始まりて、上は5箏の御琴、なら6り〇仰に和琴、仲頼卿の琴、源氏に琴の御琴賜ひて遊
ばす。慎む事なくおぼめく事なし。「いかでかくはし習ひけん」と仰せ給ひて、又6箏の御琴たまひて弾か
せ給7は、何れもいと8く日出度し。9こ10くばくの上手どもに勝れり。御琴を取りて侍ふを御覧じて、

昨日まで二葉の松と聞えしを雲さすまでもなりにけるかな

式部卿の皇子、

11枝を重み露も及ばぬ庭の松に我の齢ぞ遂しかりける

兵部卿12皇子、

昨日今日岸より生ふる松なれどすぐれてさせる枝にもあるかな

かくて九日こ13しにて開宴す。御前を始き揃れる事限りなし。匣の懸木には黒檀、横木には沈、錦縞には紅
の組して結びて、黄金の花数きて、黄方を土にしたり。白銀して箸を飾14れり、移ろへる花など15のへした
るなか16さ、紺17青緑18青19玉を花の露に置かせたり。その日の乳餅は散そうせさせて、源氏参らせ給ふ。

校異 1盡ヲアリ。2装无異ナシ。3御め。4御せらる。5イか。6匡箏。7国へば、国ふ。8国ナシ。9国そ。10イこ。11イ枝。12国りアリ。13国こ。14国ナシ。15国調へたるなか、国り伏したるなか、国考證の上下中。(国)の上下など。16国に。17国青。18国青。19国のアリ。

この源氏の名はす1くし（〇涼）となんありける。菊に付けたりける歌、

　朝露に曉りの菊を折りて見る御前よりこそ2御代もまさらめ

み3こと（〇帝）御覽じて、いと切なりと思したり。

　餘所ながら4になすものは菊園の露の光を見る5が嬉し6さ

式部卿の皇子、

　秋來れば園の菊にも置くものを我が身の露ぞ7何處8きけん

中務の皇子、

　菊園に幾らの臨幸9られば露の底10かり千代を延ぶらん

兵部卿の皇子、

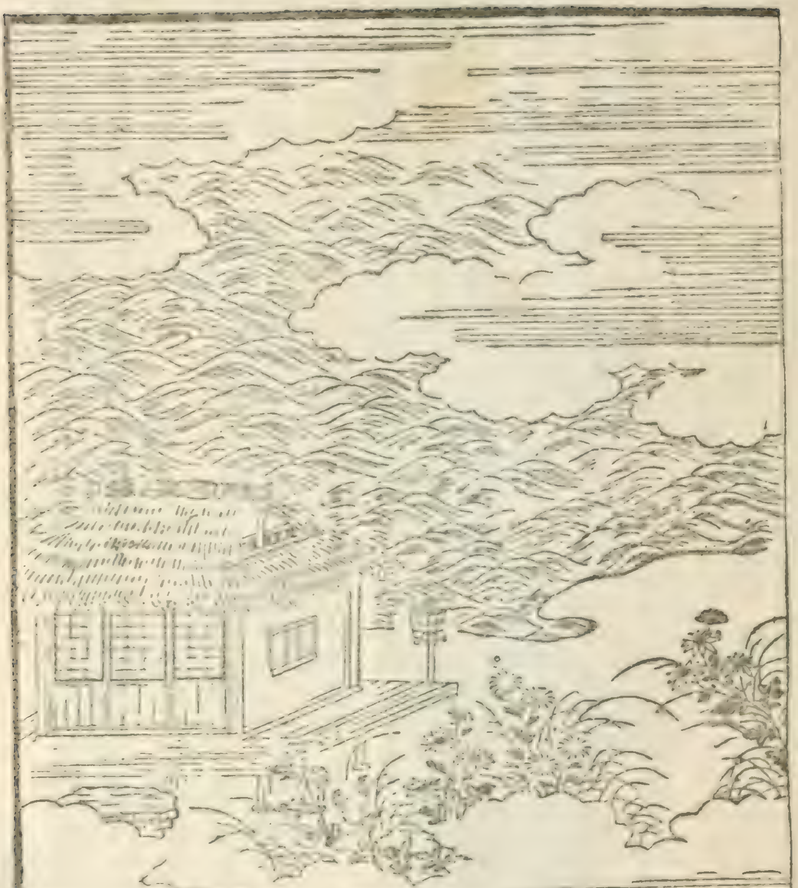
　白菊の同じ園なる枝なれば分かれず匂ふ花にもあるかな

左大將、

　白菊の千歳をこめて待つ間に積れる露を玉と見るかな

かくて帝出でおはしまして、上達部皇子達11若き竝み給へり。御前には錦の幄打ちて、陣の座に文人學生

校異 1 因す。2 因若異等に。3 すか。4 因開は。5 因考異ぞ。6 因考異き。7 因など。8 因考異くら。9 因れら、因れゝ。10 因よ。11 因考アリ。



など著き並みぬ。暫しあれば、宣旨下りて、殿上人仲頼行正す1くし〔○凉〕な2り〔○仲〕忠四人召されて、横座に着きぬ。かゝる程に、御前に沈の御厨子九具3に、瑠璃一に同じ瑠璃挽の御器4一尺五寸のゝ一尺五寸、装5へは十六の生物干物より始めて、貝甲を盡くして、6さかた〔○御菓〕物數を調へ飾り盛りたり。7さ物の頭九具、8黄金の御器9よき〔　〕四器カ、宜きカ〕飲食物同じ數なり。皇子達上達部に紫檀の御面、同じ瑠璃挽の御器、程々に從ひ10て11となへて參る。殿上人より始めて、所々の上下の人々に、おの／＼馬添ゐか12はおさへをかへまで賜ひ、同じく13出し給ふ物14も、いかめしく麗しく盛りて、15補調へて陶き講ちたり。かくて御土器始まる。文人に題出だされたり。賜はりて、文作り果てゝ御前に奉る。文章博士講師讀み申す。諸聲に誦せさせ給ふなかに、季英が聲を聞し召して、帝驚き賞させ給ひて、立返り誦でさせ給ふ。うち次ぎて四人の殿上人の文講ず。帝驚き賞させ給ふ。「度々唐土に渡16れる累代の博士の文に劣らず、この男どもの作り勝れるかな。17 18遊さむとて學問せさせたる道の人にもあらず。年若くして遊びに進める者どもなり。行正幼くて唐土に渡れ19るといへども、まだ年若くて歸り參うで來たり。仲忠俊蔭が後といへども、俊蔭亡れて20三十21年、仲忠世間に智ありといへども、彼22る時にあはず。琴におきては女に傳

校異 1〔イ〕ナ。2〔イ〕か。3〔イ〕ナシ。4〔国〕十五、黄金の御器十五づゝ。5〔灰〕ひ。6〔イ〕御く。7〔イ〕御。8〔国〕无アリ。9〔国〕二字ナシ。10〔イ〕ナシ。11〔イ〕供、〔灰〕謝。12〔イ〕ひ〔〔イ〕居飼〕、〔灰〕考異い。13〔イ〕渡、イ下。14〔イ〕ヲアリ。15〔イ〕供御、〔国〕組み。16〔イ〕ナシ。17〔国〕雜きアリ。18〔イ〕題出ださん、〔西〕對策。19〔イ〕り。20〔国〕二。21〔国〕餘アリ。22イか。

よ、な仰せ候ひそ、それたに仕りし、かの道々やに侍ひ女子に参らせけん。すべて何事何物はいと惜しう無
化の者どもなめり」と宣はする程に、その1者2達、源氏の君、帝の御前に白銀の透箱同じ様に揃へて(へ)並べて、かの九つ3包み4なみ、綾錦より始めて、有難き薬、世に出で来難き香、帝いまだ御覧ぜぬ物ども、白銀黄金にて、細かに仕入れて参らす。上達部皇子達まで連ねて持5て参りて立ち並べり。左右の大臣皇子6より始めて、白絹畳み綿百屯、殿上人諸大夫どもより始めて、多くの百官、しな〴〵にいかめしき事どもなり。上下の御供7人8にただ程につけて賜はす。かくて夜に入りぬ。御前に黄金9燈籠燈台、沈の御帳明前毎に燈したり。西東の廊十一間を10鱗の如く打ちたり。沈の舞台の縁して結びわたし、万の楽器ども金銀瑠璃を磨き調へて、笙四十人琴四十人、弾き物舞人数を尽くして参る。穴ある物を珍ら11 12かなる声せし御時なり。その道の上手数を尽くしたり。選びすぐりたる上手を調へたり。乱声鼓物の音一度に打ち吹き弾き合せたり。騒しく13日出たし。明くるまで遊ぶ。

その夜、物の音静まりたる明け方に、14行ひ人の声15遥かに聞ゆ。帝聞し召して、「怪しく貴とく誦経するものこそあれ。尋ねて召せ」と宣ふ。16蔵人殿上人馬に乗りて、ほのかに聞ゆる方をさして行くに、神の宮に到りぬ。そこにかの行ひ人17には誦経してあ18り。これは忠こそなりけり。あて宮の御上をこそはるかに思ふま

校異 1図日の。2図のアリ。3図のアリ。4図中に。5異ち。6イ達アリ。7図のアリ。8イにさへ、図々まで。9図のアリ。10異覚。11図考異しアリ。12図考異しう。13図いかめしうアリ。14図遥かにアリ。15図三字ナシ。16図蔵人。17廿四字図ニヨリテ補フ。18図考異なアリ。

じき心つきて、「その邊をだに今一度見せ給へ」と、六十餘國を行ひ歩きけるを、召すに參らぬを强ひて率て參りて、「侍ふ」と奏す。帝御階のもとに召して御覽ずるに、木の皮苔の衣を著て、云ふばかりなきものから、たゞの人に見えず。帝なほこれはあるやうある者なりと思召して、「何事により何れの山に勤め行ふ人ぞ」と愛しく問はせ給ふ。忠こそ、かくなりにたれば見知る人もなけれど、思召しもこそ出づれと恐しくいみじく思1ふ。帝、仲賴行2さま(○正)に琴を3その人に4調べさせ給ひて、行ひ人に孔雀經理趣經讀ませ給ひて、合せて聞し召すに、哀れに悲しく涙落さぬ人なし。帝この行ひ人をほのぐ〱御覽ぜしやうに思さる。5大將な6り(○仲)忠などは春日にて見給ひしかば、それと思へど、恥ぢ畏まりしを思して、唯今もいみじう思7ひつるを見れば、知らぬやうにて侍ひ給ふ。帝昔より御覽じたる人を思し出づるに、忠こそを思し出でゝ、それなりけりと思し定めて、左大將に宣はす、「この人見しやうなれば、哀れなるを一人なん思ひ出でたる。昔契られたる中なれば、見知られたらんとなん思ふ」大將悲しと8思して、え奏し給はず。帝右の大臣して、「昔の御時に、上に侍ひしと見るはあらずや」と問はせ給ふ。忠9氣色御覽ぜられぬと思ふに、涙雨の脚の如く零る。帝より始め奉り10ゝて、誰も惜しまずなん。大將、「この法師見給へつけし初より、奏せんと思11ひ給12(へし)かど、世に侍13るけると聞し召されじと、限りなく恥ぢ畏まり侍りしかば、今に奏せず侍りつ

校異　1[國]考異へり。2[國]まさ。3[イ]四字ナシ。4[國]帝か。5[國]左アリ。6[イ]か。7[國]へ。8[異]覺え。9[イ]にそアリ。10[イ]ナシ。11[國]う。12二字イニヨリテ補フ。13イり、[イ]ナシ。

る」帝限りなく哀れと思召して、御階に召し寄せて、「年頃今に至るまで、隠れにしを思はぬ時なし。怪しく果敢なくて失せにしは如何なる事に1てぞ」など問はせ給ふ。山伏紅の涙を流して奏す。「山に籠り籠りしは、父、剣をもちて殺害すとも、汝が罪をば咎めじとまで申し侍りしを、かの朝臣弥はる所ありて参らず侍りし間、許されぬいと2(ま)〔〇暇〕を奏し3く、罷り出でゝ侍りしに、にはかに許さぬ気色見え4侍りしかば、親を害する罪より勝る罪や侍らんと、魂静まらずして、遥かに籠り籠りて、山林を棲庵とし、猿猴を友とし、木の實松の葉を供養とし5のみ木の皮苔を衣として、年頃になり侍りぬ」と奏す。帝限りなく悲しと思して、「籠りぬる事靜くにかひなし。今よりだに近く侍ひて、御前も仕6うまつれ」と仰せらる。「かくて世にありけるものを、7籠め8出でずもありけるかな9、

谷深く下り居る雲の立ち出で10つなど山の端を求めざるらん」

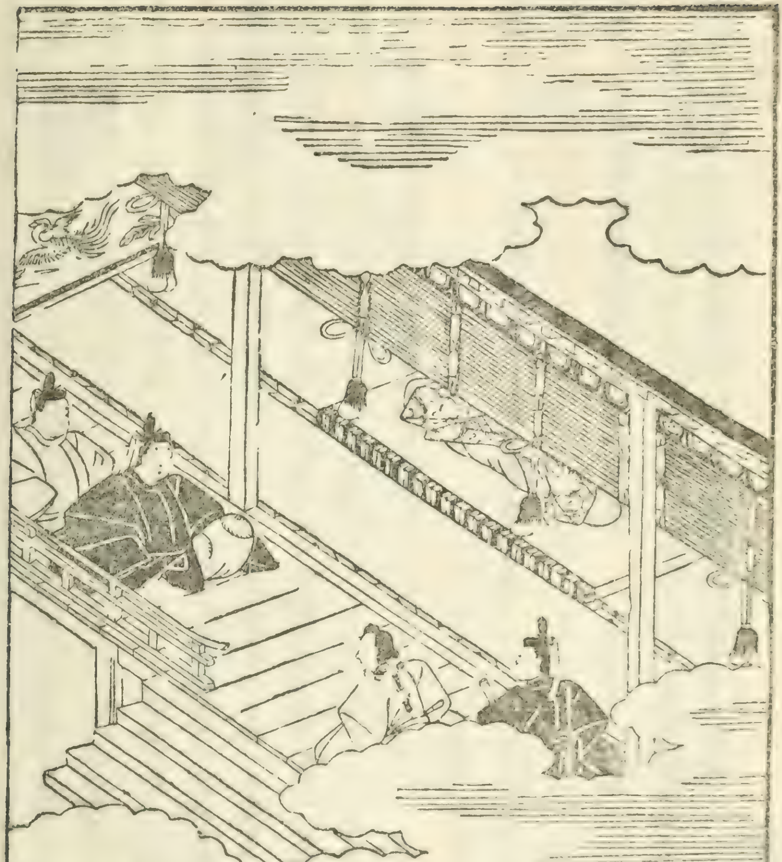
山伏、

空になるを見つゝ入りにし山邊には雲の下り居る谷もなかりき

式部卿の皇子、

空に浮つ雲のかゝりし秋霧を山の底より出でんとや見し

図図1図かく。2一字図ニヨリテ補フ。3図て鮮、図て。4図てアリ。5図二字ナシ、図木の葉。6図ナシ。7鬱求、イ見求、図え求。8図考異二字ナシ。9図と院の帝アリ。10図す。



中務の皇子、
　空よりも尋ねて雲のかゝるてふ1暗部の山を頼むなりけり
右大臣、
　入る人を星楽になす山よりや2暗部てふ名を人の知るらん
左大将、
　風吹けば空に遊びし白雲をさたゞに下り居んとやは思ひし

夜明けぬ。かくておはしますに、万の事を尽くし給ふ。かくて帰りおはしますに、源氏率て上らせ給ふ。種松、上達部親王達に、御衣、被馬4御引出物など、様々奉る。饗したる様言はん方なし。かくて帰らせ給ふ道すがら6も興を尽くして御遊び7あり8。

9かくて10帝紀伊国より帰らせ給ひて、内裏の帝春宮に紅葉の賀開し召すべき御消息聞え給ふ。右大将三條の北の方に聞え給ふ、「紀伊国の源氏御供に率て上り給へりしに、春宮のおは11えゆき（○行幸）、院の帝もおはしまして御遊びあるべかなるに、侍従も奉仕うまつるべきに、同じくば人に勝らんとこそよからめ。かの宿しと宣ひし事は出だされ13にや、北の方一昔の人の世の中に出だし給はずなりにし物を、己が世にしも取

[illegible] 1国暗部。2国暗部。3異谷。4国御馬、異御衣。5国り。6国設け。7国どもアリ。8異けりアリ。
9イ此間文段。10国院のアリ。11イみ。12国ンアリ。13国考異なん。

り出でむなん苦しき」「世に1つり難き物の音、一度この侍従の仕うまつりたらむに、来し方行く先あるまじき事をせさせむ」とて、2乞ひ出給ひて、行幸の供に仕うまつり給ふ。

院の帝もおはしましぬ。世の中の物の上手ども皆参り集りて、文人も選ばれたる限り参る。3帝御物語のついでに、「怪しく此の世に珍らしき所ありと、これかれ申ししかば、見給へむとて物せし4を、このすゞくし〔〇涼〕が侍る所になむ侍りける。げに見給へしに世に似ずなむ侍りける。さる所にさてのみ侍るまじく見えしかば、率て参うで来しを、殿上など許させ給6ふに、7訪はせ給へかし」帝、「承はる者なり」とて、宣旨下りて召上げられぬ。かくて事始まりて、文人ども題賜はりて、上達部殿上人文人ども文台に文8立つる。季英試みの題賜はりて、一人船に乗せられて出でたり。すなはち面白き文作れり。進士9なされて方略の宣旨下りぬ。かく10御遊び始まりて、上達部惜しむ手なく仕うまつる。院の帝聞えさせ給ふ、「11上達部惜しむ手なく仕うまつる、涼仲忠徒に侍ふまじき者なり」と宣はせて、「琴仕うまつらすべし」と聞え給ふ。帝「仰せ給はむかし。12別いてもな13り〔〇仲〕忠琴賜ひて14かひなき15となん数多度侍り」とて、仲忠を召して、「こゝにかうなどにも仕うまつらず、仲頼行正16ら手惜しまぬ夜なるを、仲忠しも徒に侍ふまじき者なりと院なん仰せらるゝ。これに手一つ仕うまつれ」と仰せられて、17(ほそ)を風を五箇に調べて仲忠に賜ふ。花

校異1イ有。2異出で。3国院のアリ。4国に。5国ず。6イひて。7異侍。8イ奉。9国にアリ。10国てアリ。11イかうしく。12異考異ま。13国か。14国もアリ。15イこアリ。16国さて。17二字国ニヨリテ補フ。

箏1を同じ聲に調べて源氏の侍從に賜ふ。畏まりて奏す、「異男ども2は今日の爲めに侍ふに侍るを、仲忠はたま／＼仕うまつ3りては、前々に仕うまつり盡くして、今日4さだめには侍はずなむあり5ける」と奏す。帝「選したる手なくば、前々仕うまつりし手を仕うまつれ。身の才は人聞く所にて上手と定めらるゝなむよき。今宵仕うまつらざらんは何かせん。早う仕うまつれ」と宣はす。なほ仕うまつらず。帝「仲忠が爲め6は天子の位かひなしや。7蓬萊の8不老不死の藥の使としてだに9こそは、宣旨免れ難さによりて渡れり。璽も角もあれ仕うまつれ」と仰せらる。仲忠畏まりて、仰せを承りて、す10くし〔○涼〕と諍11あひて、なほ屏立てゞ、帝「如何にせむ、涼、12靡」と仰せらる。す13くし〔○涼〕苦しと思ひ14ては、前の15かそうの16一の17琴をほのかに掻き鳴らす。仲忠平らして同じ18琴を俱に掻き合せて、五箇の手19仕20まつりぬ。夜深くなりもて行くまゝに、琴の響高く出づ。人々昧に心止まりて、五箇の手どもを仕うまつり盡くす。帝より初め奉りて、そこらの人泣落し給ふ。帝興土器賜ふ。

　秋を經て今宵の琴は松が枝に負通る聲も調べてぞ鳴く

仲忠、

　秋深み山邊にか21ゝる松風をめづらしげなく誰や聞くらん

【校異】1 圖琴アリ。2 イナシ。3 イりし手、圖る手。4 異の音。5 イつ。6 圖にアリ。7 圖考異常世。8 圖闕の。9 圖三字ナシ。10 圖す。11 圖ろ。12 圖過し。13 圖ず。14 圖つゝ。15 圖調べにて。16 圖五箇のアリ。17 イ琴、18 圖琴の中、イ琴、異手。19 圖をアリ。20 圖うアリ。21 イるゝ。

院の帝、

永き夜の更くるも嬉し朝露を落す小松の蔭に涼めば

す1くし〔○涼〕賜はりて、

風をいたみ露だに置かぬ小松には宮人涼む蔭やなからん

2この3皇子取り給ひて、琵琶仕うまつる仲頼に賜ふ。

蔭ごとに人のみ涼む松よりは風も常磐に吹き渡らたん

仲頼賜はりて、

松4近み吹き來る風も荒れまさる秋の蔭には誰か涼まむ

三の皇子取り給ひて、箏の琴仕うまつる行正に賜ふ。

木枯の風も吹きつと松蟲や茂き木蔭と人に見ゆらん

行正賜はりて、

年經れど5おちも變らぬ松よりはいかで吹くらん木枯の風

四の皇子、和琴仕うまつる仲純に賜ふ。

おしなべて松風にしも知られねど我が身涼しき蔭にもあるかな

校異 1 [イ]ず。2 [イ]二。3 [国]琴。4 [イ]深。5 [改]色。

仲純賜はりて、

隠れ沼の草葉もさやぐ風をさへ松の響にいかゞ響へん

とて賜はりぬ。連ねて下りて舞踏す。かゝる程に、す1くし〔〇涼〕仲忠2御琴の音等し。右大将の主持たせ給3ひつるなむ風を、帝に、「これなむ仲忠が見給へぬ琴に侍るなり。仕うまつらせん」と奏し給ふ。賜はりて何心なく掻き鳴らすに、天地揺りて響く。帝より初め奉り4、大に驚き給ふ。仲忠、今は限り、此の琴ま5(さ)に仕うまつり静まりなんや。嫉く口惜しきに、同じくば天地踊くばかり仕うまつらんと思ひぬ。す6くし〔〇涼〕彌行が琴なむ風に劣ら7んぬあり、8此の9す10たの琴を院の帝に参ら11す。12同じ声に調べて賜ふ。仲忠かの七人の13てふ山の師の14く、す15こし〔〇涼〕は彌行が16琴を少し站う仕うまつるに、雲の上より17ひらき地の下よりどよみ、風雲動きて月星騒ぐ。18へうくのやうなる氷降り、雷鳴りひらめく。雪衾のごと19たりて降るすなはち消えぬ。仲忠七人の人20調べたる大曲残さず弾く。す21くし〔〇涼〕彌行が大曲の音の出づる限り仕うまつる。22仙人下りて舞ふ。仲忠琴に合せて弾く。

朝ぼらけほのかに見れば飽かぬかなな23る〔〇中〕なる少女響し留めなん

返りて今一返舞ひて上りぬ。帝24御覧ずるに、量なくすべき方思されず。すなはち仲忠に正四位の位賜ひて

校異 1国す。2国の。3イへ。4国てアリ。5一字イニヨリテ補フ。6国ず。7イナシ。8国涼アリ。9三字国ナシ。10一字イき。11国せしを。12イ帝アリ。13国人の傳へし。14国手。15イず。16国手。17イ響。18イ還。19国襲。20イのアリ。21国ず。22国天。23国か。24国考異はアリ。

1右近中將になされぬ。す2くし〔○涼〕に同じ位同じ中將になされぬ。す3くし〔○涼〕源氏なり、琴仕うまつらずとも此の官位賜はるべし。その代りに、祖父種松に4五つの位賜はりて、紀伊守になされぬ。帝左大將に宣はす、「今宵す5くし〔○涼〕仲忠に賜ふべき物國の中に6覺えぬを、朝臣のみなん賜ふべき」と仰せらる。大將、「あなかしこ。公にだに侍はざらんものを、正賴はいかでか賜ふべからん」帝御7時よく打ち笑はせ給ひて、「8（そこには女子數多持給へる、殊に有り難く物せらるゝ9、ろ10（く）〔○藤〕11は、す12くし〔○涼〕仲忠に賜はんなん優す物なかるべき」大將、「賜ひ侍りなむ13と、14はいてもす15くし〔○涼〕仲忠が今宵の祿に16あるべき女子や17難う有り難く侍らむ」上、「いはゆるあてこそ、そ18れこそはよき今宵の祿なれ。す19くし〔○涼〕にはあてこそ、仲忠には、そこに一の內親王物せらる20（21ら）ん、それを賜ふ」と仰せらる。す22くし〔○涼〕仲忠削れ23女もこ實踊す。又す24くし〔○涼〕仲忠位記御前にて賜ふ。帝仲忠が位記の上に書かせ給ふ、

　松風25し26濡き來き乾さば紫の深き色をばまたも染めてん

仲忠、

【校異】1國右。2㊀ず。3㊀ず。4㊂五位。5㊀す。6㊀はアリ。7㊂氣色。8十四字㊂ニヨリテ補フ、イ此間文脫。9㊂を、今宵のアリ。10一字㊀ニヨリテ補フ。11㊂に。12㊂す。13㊀云ひ、㊂に、㊂考異ナシ。14二字㊂補い、㊂考異言ひ。（㊂）まい。15㊀す。16㊀富。17㊂二字ナシ。18㊀て。19㊀ず。20一字イニヨリテ補フ。21二字㊂るを。22㊀ず。23㊀下り頭、㊂下り。24㊀す。25異も、㊂の。26イ朝く、㊂挾く。

紫に染むる衣の色深み乾すべき風のぬるきをぞ思ふ

す1くし〔○凉〕2の3位記に院の帝書かせ給ふ、

秋深4み野邊の草葉は5生ひぬれ6ど若紫を今は頼まん

す7くし〔○凉〕、

盛りだに花の8朽葉の露をこそ今日紫の色は染めけれ

種松が位記に左大臣、

立田姫紅葉の笠を縫ふ事は一木ある松を露にあへとぞ

種松、

佐保山の緑の9峰に隱れたる松の蔭にも10今は入りぬる

など聞えて、す11くし〔○凉〕仲忠下りて舞踏す。種松すなはち上許さる。宣旨下りて參う上りぬ。院の帝御き悴しがらせ給ふ。「仲忠の朝臣が琴は俊蔭の朝臣が手に勝る事限りなし。す12くし〔○凉〕變化の者なり。五箇の調は俊蔭彌行と等しかりし度の彌行が手なり。彌行隱れて三十餘年、その筋絶えて繼ぐ人なし。す13くし〔○凉〕二十餘14、琴の曲15の16彌行17等し。如何なる事ぞ」と問はせ給ふ。中將す18くし〔○凉〕奏す、

校異 1 図ず。2 因考異が。3 イ文闕。4 図き。5 国老い。6 国ば。7 図ず。8 国草。9 図裏。10 イ六字闕。11 図ず。12 図ず。13 図ず。14 国のアリ。15 国ナシ。16 因手アリ。17 イにアリ。18 図ず。

「斗行蹤り竄れて今年六年になんなりぬる。仕うまつれ1ば公に数まへられず。2さしの宮仕かひなし。
菩提の猶を致さんとて、深き山に入りて勤め侍りけるを、す3くし〔○涼〕五歳にて熊野に詣うで逢ひて、山
伏の申し侍りし、世に琴仕うまつる名を施してき。此の手留まらざらん悲し4きにより5なむ今6しで宿縁
に導らひつる。7さんお此の手を傳へ施す物ならば、此の世に亡からん世なりとも訪ひ守らん。速かに今は
勇める験に身を8施し深き9谷10し屍を曝してんと申して、もとの山に罷り籠りにし。しかある遺言を、
11こんほど12〔こ〔○過〕さず侍る事」と奏す。院の帝驚き哀れがらせ給ふ。かくて先づ内裏の帝聞りおはし
ます。

評釈 此所は神泉。上達部皇子達皆さ琴み給へり。探韻賜はる。藤英舟に乗りて放13たれたり。仲忠琴
賜はりて弾く。詩作れり。天人下り14君賜ふ。

15かくて源氏三條16 17に18小家造りて、磨き調へて滿らなり。たか19と〔○財寶〕を府へ収めて、萬の調度を
金銀瑠璃に磨き立てたる所に、容る女君引き奉て上りたり。褐松朱の衣に白き20労持ちて、妻君排む。妻さ
21え〔○君〕「覺えぬ喜びかな」と言ひて、

置く露も時雨もまだ21ぐと見しものを變れる色を見るが怪しさ

校異 1因る。2イ才。3団ず。4因さ。5因てアリ。6イま。7因考異公達で 8異布。9イ山アリ。10イ
に。11二字団得。12一字イニヨリテ補フ。13団ナシ。14イて舞。15イ此間文闕で 16底の 東 アリ、イ文
闕。17イナシ。18団ナシ。19イら。20因劣。21団べ。22底よ。

種松、

　実に及ぶ松の末だにあるときけば離れる根こそ色變りけれ

紀伊守國へ下りて、面白く興ある所に樂しび遊ぶ。中將は、世間の人聟に取らんと爭ひ聞ゆれど、聞き入れず、宮仕心に入れて、交らひ人に許さる。時めくこと頭中將と等し。

かの行ひ人を院の帝限りなく勞はらせ給ひて、院の内に檀1（2 3所4を賜ひなどして侍はせ給ふ。5とき師につきて畏く受けられ、智いと深く6驗あり7、院8奏9せさせ給ひて、眞言院の阿闍梨になされぬ。弟子10の同行など多く、身の勢ひ時11なる12事昔に13劣らず。召ありて14嵯峨の15院に參る。16車清らに裝束きて、人17いと多くて參る。18 19院の御門のほとりに20、21 22頭は雪を戴き23、顏は墨よりも黒く、足手は針よりも細くて、調の布のわ24らけたる、鶴脛に25て、阿闍梨の罷出る26に手を捧げて、「今日の助け、」と後に立ちて還ひ行く。阿闍梨哀れがり物など27食はせて、「昔28いかでありし人の29家よりかくはなりし

校異　1以下三百三十餘字[国]ニヨリテ補フ。2下二字国にはかくありけ。3一字因所。4一字因ナシ。5イよきカ、国昔。6因驗。7国しかばアリ。8国の帝アリ。9国ナシ。10異ナシ。11国めく。12国と。13国おく。14国内裏。15国帝。16十六字国ナシ。17二字因考異ナシ。18国内裏の帝の御祈りの事承りて罷出つるアリ、因御祈りの事承りて罷出るアリ。19二字国ナシ。20国てアリ。21国因老い屈りたる嫗の乞食、市女（二字因ナシ）笠のいたく損ばれしを戴き（因持ち）てアリ。22六字国ナシ。23異てアリ。24国ゝ。25国着アリ。26国を見て。27国取ら。28因はアリ。29国何時。

ぞ」と1聞へば、「2限りなき財宝の王にて、世3中の一の人の妻にて4なん侍りし。その人5、6母なき7男子の、年頃心得れたるを持ちて、限りなく愛しくし給8ふ、9君も10二つなく顧み給ふ11人を、亡ばさむと思ふ心深くて、親の家の宝12を取り隠して、13彼が盗みたると14言15ひ、親の為め16に咎あるべき事を17、18この人に19負せ20つゝ、遂になん21）失ひてし報にや侍らん、22（身を変へても、かゝる様にはかけてもなり侍らじと思う給へし多くの財宝ども23も皆失せて、）生きながらかゝる身をなむ受けて侍る」と云ふ。聞24き〔○聞〕奥皆の一條の方に聞きなし25つ、時の更るまで思ひ入りて思ふ程に、大臣の大26と願を立てゝ求め給ふ帝も、我にこそ27は負せけれ、また大臣の御気色も、さば大きなる禍を聞かせ奉れるにこそありけれ、年頃の煩ひ嘆きわたりつる事を、佛世におはしましければ開き明めつる事と思ひて、久しくありて言ふ、「さ28程に、如何にしてか、さる罪なき人の為めに29、悟しき心を遣ひ給30ひ31、しかありける報にかゝる身となりぬ。来ん世には地獄の底に沈みて、浮む瀬あらじ」と云ふに、乞食涙を流して云ふ32ほど、「この事

〔注〕1国言へ。2国乞食はアリ。3国ナシ。4また後に思ふ事なくアリ。5国の子にアリ。6国嗣ニ 7国男子。8国ひ。9国二字ナシ。10国に。11国関がありしを、後〔国已〕には国に〔国てアリ〕侍りしけにや〔十一字異本ナシ〕、心に迷ふ事の侍りしかば、いかで此のアリ。12国の帝アリ。13国それ。14国人にネアリ。15国はせ。16(イ)にカ、国に。17国作り出でゝアリ。18国そ。19国言ひアリ。20国て。21国その人アリ。22三十八字国ニヨリテ補フ。23国ナシ。24(イ)ざ。25国給へば、異本異給ひつ。26(イ)ナシ。27異ナシ。28異や。29イはアリ。30イふ。31国しアリ。32国やう。

を悔い思ふも、火焔に燃ゆるが如し。されどもし1てし事2をなれば、返すべき方なし。思ひ出づるなんあ3らしく悲しく侍る」と云ふ。阿闍梨「今幾許もあらじと見給へば、世に経給はん限り4は労り5奉らむ。後の屍をも収め、地獄の苦6びをも救ひ申さん」と宣ひて、小さき7小屋造り8て籠め据ゑて、物食はせ衣着せなどして養ふ。

かゝる程に、9大将殿の宮あこ君物怪つきていたく患らふ。兎角すれども怠らず。この阿闍梨に告げ奉れば、畏く10て労り止めつ。阿闍梨宮あこ君に心美しく語らひ11て宣ふ。殿の事など問ひ聞きて、「この春春日におはしまし12て御方に聊かなる事聞えん、奉り給へよ」とて、かく書きて奉る、

「閉ぢ籠13めり巌の中に入りしかど君が匂は空に見えにき

かくてしも思ひ離れぬものになん」とて、「これ奉り給ひて、御返必ず賜はり14に賜へ」と言ふ。宮あこ君「更にかゝる事見給へぬ人なり。如何あらん」阿闍梨「などかく、労り止め奉る志をも思15ひて、相思せとこそ思へ」あこ君難き事と思へど参りぬ。あて宮に奉り給へば、「あなむくつけ。何でふさる物を16か持ておはする」とて、引き17破りて捨て給18へ。

かくて、九月晦に東宮よりあて宮にかく聞え給ふ、

校異 1 [国]果アリ。2 イナシ。3 [行]たアリ、イかアリ。4 [因]ナシ。5 [異]奉。6 [因]み。7 [国]家。8 [国]留。9 [因]左アリ。10 イしアリ。11 [因]ナシ。12 [行]し。13 [行]も。14 イて。15 [因]はで。16 [行]ば。17 [因]破。18 [行]ひつ。

秋待に情なき人をまつ蟲の常盤の蔭になりぬべきかな

あて宮、

色變へぬ秋よりほかに聞えぬは頼まれぬかな松蟲の音も

源宰相鈴蟲を奉りて、

鈴蟲の思ふことなるものならば秋の夜すがら振り立てゝ鳴1く。

兵部卿の宮菊の盛りに、

頼もしく思ほゆるかな云ふ事をきくてふ花の匂ふ長月

右大將殿、晦(つごもり)の日、

長月は忌むにつけても慰めつ秋果つるにぞ悲しかりける

平中納言十月朔(ついたち)の日、

薄かりし夏の衣や濡れしとて代へつる袖2。に變らざりけ3る。

三の皇子、御前の紅葉の色濃きに付けて、

色深く染むるまに／＼神無月袖や紅葉の錦なるらん

中將仲忠宇治の網代(あじろ)より、

校異 1国け。2国も。3困り。

流れ來る日を數ふれば網代木に1取るさへ數も知られざりけり

初雪の降る日涼の中將、

雲井より袂に降れる初雪の打解け行かむ待つが久し2き

大殿見給ひて「九月に仰せられしを思ひたるなめりかし。警策なる人にあれば、かしこをば人にこそ稍み聞えたれ」など3め給〔〇宣〕ふ。侍從の君時雨いたく降る日、

神無月雲隱れつゝ時雨れば先づ我が身のみ思ほゆるかな

源少將祭に使に立つとて、

袖漬ぢて久しくなれば多中にふり4果てゝぞ行く訪ふか逢ふやと

兵衞の佐物に詣るとて物語などす。歸る曉に御前の池より水鳥の立つを見て、

我獨り歸れる池に鴛鴦の5（汝も情なく）鳴きて立つかな

藤英六十餘日6はうちに對7策せんと夜雪を夜の光りにて勤めつれ8ど、今は9御故10院花の如し、食物は山11の如12し、油は海の如湛へ13て14 15などすかにも、なほ此の事を歎く。雪16降る日、

校異 1 國寄。2 イさ。3 イの。4 イ出で。5 五字國ニヨリテ補フ。6 國が。7 國策。8 イば。9 二字イさと、七字國此の大將殿の御驕りみに。10 イ院ノ下文闕。11 異々アリ。12 國く。13 國ナシ。14 イ此間文闕。15 國などして在り經る、國在り經る。16 イのアリ。

心1だに明くなり2にし雪降れ3ど總には惑ふものにぞありける

文化十二年三月十五日以本居氏本校合畢[illegible]京園

【校異】1[illegible]こそ。2[illegible]しか。3[illegible]ば。

吹上　下

菊の宴

〔○此ノ卷ノ前半ハ、嵯峨院ノ卷ノ後半ト文章酷似ス。同一文章ヨリ混亂セルモノト思シケレバ、彼此參照校合スベシ。但シ、此ノ部分ハ、嵯峨院ノ卷ニアルヨリハ、此ノ卷ニアリテ、吹上ノ下ノ卷ヲ受クルモノトスル方、フサハシキ點多シ〕

かくて霜月の晦日頃、殘れる菊の宴聞し召しける1に、皇子達上達部參り給ふ。博士文人等召して文作らせ御遊びなどし給ふ。大將の大殿のみ參り給はず。かくて夜深くなりて、春宮御遊びなどし給ふついでに、「此處に物せらるゝな2ろ3に、こともなき女4誰5多く物せらるらむ。賭物にして、女比べなどせられよや」左の大臣、「此の中には聞えずなむ。平中納言ばかりや。それも少さく6なむ聞えねど」源中納言奏し給ふ、「7右大將の朝臣に8一人をてしりう9〳〵かう上10うなと、母こはきかたきなむ、怪しき女のそのにこそあれ、11天の下の人集へられ果てぬと見給ふれど、なほ又多く侍なり」左の大臣「あの12へに、一人二人は侍らむ」平中納言、「さのみはあらじ。又も聞ゆるやうあり」兵部卿13皇子、「聴なの物言ひや」とて、春宮源宰相を見やり給へば、苦しと思ひて物も宣はず。春宮、「かの集へらるなる中に、など入らざらむ」左の大臣、

【校異】1国ナシ。2団か。3異ぞ。4団達。5国かアリ。6団てアリ。7国左。8以下三十五字国ナシ。9一字団く。10一字団こ、異ら。11以下三十四字国ナシ。12団れ。13国のアリ。

「仰せ言1とて承り侍りなむを、畏まりてこそ候ひ給ふらめ」春宮、「事のついであらば2と思へど、すゞろに覺えつゝ、3又かの大將に4も物せず。かの人にはた時々消息など物すれど、をさ〳〵5わらへ（〇答）も物せ6られずや」など宣ふ程に、7こふ大將の大殿8など物し給へり。9宮「10くらふ（〇今日）こそ怪しく時過ぎたる菊をもえ見ず、つ11ましう12思ほえつれば、此彼召して見せなどしつるに、見え給はずありつれ13ど、さう〴〵しかりつるに」など宣ふ。大將の君、「甚だ畏14かし。例も思ひ侍る脚病の15發とう（〇動カ、病ノ誤カ）し侍りて、久しう内裏にも參らず侍りつるを、唯今16ある人の告げ申しつれば17なむ、驚きながら侍ひ侍りつる」とて、御物語りし給ふついでに、宮「年頃聞えむと思ふ事のあるを、しめやかなる折なければ、え聞えぬかな」大將「今日よりしめやかなる折侍18りしを、いかで承りてしがな」宮「さすがに聞えにくしや」などて、「なほ上野の皇子などに思ひ落し給へるをなむ妬く思ほゆる、さやうなる謀計をやせましなど思へど、そがやうにもやせらるゝとてなむ」大將「あなかしこ。しかある仰せ言なきうちに、もしか侍ふべきも侍らず。口惜しう拙きのみ侍れど、さ言ひて侍らむやはとてなむ、これかれに分り侍ること侍19しに、かの皇子20だに見21給ふべきが侍らざりしかばなむ辛22く求めて物せし」春宮悲しと見やり給へり。「さても殘りあるやうに聞ゆ。それをさへ忘れ給ふな」大將の大殿、「拙き23が中にも撰府なるが侍るを、この神泉の行

校異 1イ候はゞ。2国やアリ。3国まだ。4国は。5イい。6国二字ナシ。7イかふ、異左、国二字ナシ。8国春宮に參り。9国春アリ。10イけ。11国つアリ。12国覺。13イば。14イナシ。15国發り困じ。16国二字ナシ。17国二字ナシ。18イらじ。19イりアリ。20イ達、異達に、国にだに。21国えアリ。22国うじて。23国ナシ。

等に??ひ?、同じ中納言(仲忠)心止めて仕うまつりしに、仲忠の朝臣に一の内侍のかみ、涼の朝臣に正頼が九にあたる女御ふべきよし、宣旨降りにし事なむ侍る」と申し給ふ。春宮「それは今の帝にこそあなれ。ここには、そこにこそ唯今御ゆれ、かしこに2聞え3て久しき心地なむする」大将「宣旨を背かむものに侍ればなむ、延ひ給へ伺ひ侍る」4「何かそは。罪あらば共に5さすばかりにこそ6はあなれ。な思し煩らひそ」大将「さ7とは何ごとに従はむ」など奏し給ふを、若子の人、8気も(○許カ)心9も許10さで11おはなかに、涼宰相、青くなり赤くなり、頭るなき気色にて侍ふを、12春大夫13見やり給ひて、いと14悪しと見やり給へり。

〔補註〕15春宮16にはします。御前に、上達部皇子達、兵部卿17皇子左大臣右大将中納言二所宰相、大床子立てて、涼仲忠仲頼行正大将殿18公達19を始め20にて、四位五位宣旨進士唯今の秀才文章なと召の召したるに引出物賜へ出る、22殿上人24に博士一部にて25もし給へ27る。作りて文奉る。今所進じす。文台立てたり。今博士たる上達皇子達博士達23まで、白き衣は29るまへ(○給)かづく。30人も尖眼にて。

〔校異〕1二字朝二ヨリテ補フ。2国はアリ。3異し。4国春宮アリ。5国遊アリ。6国ナシ。7イら。8異さき。9異イ×。10国け。11国おはす、異多き、国思はす。13国左の。13国六字ナシ。14国は。15国此所はアリ。16異お。17国の行。1?国の御耶。19国ナシ。20国ナシ。21国ナシ。22国り。23国此所はアリ。24イ多。25イは。26異物し給、国文字脱。27国り。28イ失せ。29国か。30国其アリ。

かくて大将の大臣1せ給ひて、宮に聞え給ふ。「春宮よりあてこそに今も宣ふ事やある」宮、「2さあめり」
「その事を3ぞ宣4ひつるや。昔しはとかく聞えつれど、いと切に宣ひつれば、え否び侍らざりつるを、兵部卿の5皇子、平中納言いと物しと思ひた6るつる中に、源宰相の、あるゝ7中に思ひ入りて居給ひたりつる。左の大臣これかれ8に見合せてぞ涙ぐみて物し給へる、いとほしかりつれ」宮もいとほしと思ほし居たり10つ。「怪し11き此の子によりてこそ、興ある折もいとほしき折も多かれ。12宮などかは人々数多ある折しもさは宣13はむ」大殿「なほ人々かく物すと聞し召してなりけ14そと思し召15 16いて宣はする17にこそはあめれ」18大宮「源宰相さ云ふばかりの人にはあらぬ19気色20を見ゆるぞ悪きかし」大殿「21異く思ひ沈むなれど、それしもぞ善きかし。22その23兄(○男)は、さこそはあれば、かくても候24ひけれど、昔御事を思ひ初め25さだし程は、何26心地かせし。かの主い27しそ28こ(○有職)なれど、この道になればかくこそはあれ。その道人目つゝまるゝものかは。これを思へばこそ、この29如くもを宣ふ人々には、え惜しみ申したれ」など宣ふ程に、女御の君30罷出給はむと聞え給31ひつれば、御迎への車廿ばかり、四位五位六位数多く兄弟の君

校異 1イ出。2国聞ゆ。3異こそ。4イへ。5国宮。6イ有り。7国がアリ。8国ナシ。9以下五字国し居給ひつゝ、国い給ひつゝ。10一字異ナシ。11河ナシ。12正作アリ。13国ひ出だし給ひつら、異ひ出だしつら。14国れ。15国しアリ。16国出でゝ。17国ナシ。18国ナシ。19国そアリ。20国ナシ。21イいとゞアリ、異いともアリ、河いとアリ。22異せ。23イこ無、国こ。24国ふべ。25異給ひ、国参らせ。26国のアリ。27国う。28国く。29国言葉。30イ参うで。31河へ。

遂さながら参り給へり。1御輦の宣旨遅く下りて、夜更けて罷出給へり。2大宮登る早朝、中の大殿に渡り3、君達4御装引き掛けつゝおはします。宮、兵衛の君して西の大殿に、「そなたにや参り候ふべき、こなたにや侍る5」と聞え給へ6り。女御「そなたに唯今参りて」とて渡り給へり。宮「そこに参りでむとこそしつれ、などて久しうな7る〔○長〕居やしつる度に8こそあれ。そが覚束なきになん」「この度も暇はせざりつれど、怪しく悩ましくのみ侍れば、事托て罷出つるぞや」「などかさは仰せらるゝ。もし例の事9る」「いさや、10こが見苦しき事」宮「11なこは。さう／＼しかりつるに、何時12よりぞは」女御の君「いさや、七夕の心地せし頃よりなむ」宮打笑ひ給ひて「紅葉の橋はいかにぞ」とて、物語りし給13へりついでに「あて宮は、などてか、かくてのみとぞ思ふ14や。いかゞすべき、宮へかし」女御の君「中将こそさやうの事はすれ。計り聞えむかし。大殿はいかゞ聞え給ふらむ」宮「そもまだ思15る定められざめり。春宮なむ御気色ありて宣16ふはす17なる。18内裏にも仰せらるゝ事ありけりとなむ」女御の君「東宮よりはなは聞え給ふや」「さかし。されど、やむごとなき人多く候ひ給ふとて、此の人19たそのはかなくて交らひ給はむ、かたはに20はこそあ〔○な〕れ」女御の21聞え「人は多かれど、その儘にしもなき22ものを。内裏にも23二

校異 1国ナシ。2国ナシ。3イ給ひアリ。4国皆アリ。5国べきアリ。6イば、国れば。7イ嫁。8国しそ。9イか。10国そ。11イなど、国何か。12イばかりアリ、異はりアリ。13国へる、イふ。14国を。15国ひ。16イナシ。17イ二字ナシ。18異此方、国内々。19イ遠、国考異二字ナシ。20イナシ。21イ君。22イ二字ナシ。23国四の。

宮1右大將ばかりこそ、さてはなど聞えめ。左大殿はおはせかし。同じ君達と聞ゆれど、あらまほしく目出たくおはします宮たち2れ3。此の君達の4侍ひ給はむ5ところそは似つかはしからめ。6顯注し給はむ7には便なうこそあらめ、内裏には只二人あるやうにてあらせむ。參らせ奉れ8ば、さやうの事9し給ふまじき10人なればなむ、かしこには、え物せ11ねなど聞えさせ給へど、先立ちて候12よそにこそあらめ、宮には13君達などもまだ14參り給はねば頼もしかし」宮「後めたくぞ侍るや、御方をこそはあえ物に」女御の君「あなゆゝし」など15て、16一日調物奉りし、御家言はし、方々野君達、大殿も皆おはしまして遊びありて、方々より17興ある物ども18くへら(○酒)らに奏して參り給ふ。かくて19皆夜更けて20御方々に歸り給ひぬ。

[國譲]21中の大殿22。23大宮24女宮の御衣御贈りし給へり。あて宮皇子達五所御方々おはします。皆物參れ25り。男君達七所ばかり26と給ひて皆參る。宮達多かり。右大將殿より御菓物醬など27を奉り給へり。

かくて28霜月の29か30つら(○葛餝)し給ふべき31事、伊勢の君に聞え給ふ。二條府の源中將物し給ふこと32を

【校】1國右。2國奏良さアリ。3本宮眞ヒアリ。4國侍ふ。5國ナシ。6國御アリ。7國ナシ。8國付ひなアリ。9國もアリ。10國有。11國ぬ。12國鼻にいこそ、國ふこそは、國よりはこそ。13國御子達。14國おはし、國參る。15國聞ひ給ふアリ。16國日アリ。17イり。18イけう、國物。19國ナシ。20國宮アリ。21國此所ニアリ。22國にてアリ。23國ナシ。24國御息所。25異る。26國時。27國ナシ。28國三字ナシ。29國御アリ。30異く。31異ナシ。32國ナシ。

する、この1事ひ〔○度〕の神樂少しよろしうせばや。召人など撰びて、その行事2いうとめて物せられよに
3伊勢の君「例の者どもは參りたむ。こい4そしにの雅樂頭などらは、内裏の召にも必す5なむ侍る」「6なほめ7つ〔○廻〕らし8又して、與に9ゝ10ら〔○草〕假名書11れ付けて遣はさば掟12いじ」13伊勢の君「遊の者どもはえ止みた14(ま)〔○給〕はざらむ。末に和歌を詠まむやは」など宣ふ。

かくてその夜になりぬ。15大殿「さればこそ、さはあらじと思16るつ17るゝ」とて、蝦打ちて、催馬樂笛吹き歌ひ著き並みぬ。

〔書詞〕これ侍ふ唯今の18つち〔○遊〕物ど19りなり。上達部皇子達、殿の内より、世にある限り集ひ給へり。客人にて、兵部卿20皇子す21くし〔○凉〕の中將なむ物し給ふ。22樂人より歸り給ふ。

御巫子ドりて23舞ひらり、24山人25返す物の音出だし神歌仕26まつる。

や27なしで〔○八平盤〕を手に取り持ちて山深く我が折り28持29て來る30〔榊葉の枝

山深く我が折りて來る〕榊葉は神の御前に枯れせざらなむ

榊葉の香をかうばしみ求め來れば八十氏人31ぞ圓居しにける

〔校異〕1イた。2イイつと、イは心留、国心留。3国辨。4国族の外に、イそし等の。5国否み。6国大殿。7イぐ。8不文。9四字国そうゑ。10一字イう。11イき。12イは、イひ。13国辨。14一字異ニヨリテ補フ。15異男。16国ひ。17イかし。18イい。19異も。20因のアリ。21イず。22イ神樂、イ樂師。23因舞ひ入る、イ參り。24因召。25因等。26イうアリ。27因ひら。28因ナシ。29異ちアリ。30以下十四字因ニヨリテ補フ。31イは。

優婆塞が行ふ山の椎が本あな1うばゝしと2し〔〇欠〕にしあらねば

などて遊び3する程に、兵部卿の親子、中將君して、大宮の御許に御消息聞ゆれば、中の大殿に對面し給へり。4兵部卿の親子「夏頃河原にて遊しう聞え承りしを、今宵5を同じ神の御遊ならでは聞はせ給6ひてこそは」などて「院には參り給ふらむや。宮7の上の8みおはしますと承りて參らばやとぜしを、怪しき人に見給へ慕ひてなむ」親子「9つる參り10て侍りき。異なる御事もおはしまさざりき。さて御上どもをなむ宜はせし。誰々に對面するの事の聞き、11變えた世も行く先短き心地するを、覺束な12からぬ程にてあらむと思ほすを、え參らぬ事。13内裏にこそ御樂も難からめ、さらぬ人々さへ覺束なきを」「若君達などもいかで見14奉らむ、また怪しからぬ者どもの今出で來たるを御覽ぜさせむと思15ひ給ふれど、見苦しき樣なれば16なり」17と聞え給ふ。兵部卿の親子「いでや今は聞えさ18せて趣な19けれど、いみじく20戀なき事は、先づ聞えさせむとこそ思21ひ給22ふれ。月頃思23ひ給ふ24人の、つひにはかなくなりぬる事。25先づ〳〵數ならぬ者に思されざらましかば、かくもあらざらまし。同じ御仲らひにも、讀み聞えさせしかば、かやうの折にも人よりはとなん思う給へし」宮「など留めぐひなく思さるべき。さ思ひ給へたる事あるか、又えさ

〔校異〕1 イそ。2 〔イ〕ニ。3 〔国〕つ。4 〔国〕宮。5 〔イ〕ナシ、〔国〕そ、〔国〕も。6 〔国〕はで。7 〔イ〕ナシ。8 〔イ〕傍ニアリ。9 〔イ〕一日、〔国〕一日も。10 〔国〕ナシ。11 〔イ〕〔国〕。12 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。13 〔イ〕がた。14 〔国〕えアリ。15 〔国〕う。16 〔イ〕二字ナシ。17 〔国〕などと。18 〔国〕すとも。19 〔国〕ボ。20 〔国〕忍びがた。21 〔国〕う。22 〔国〕へ。23 〔国〕ぢう。24 〔国〕事。25 〔国〕丸、〔国〕三字ナシ。26 異かく嘆、〔イ〕かく嘆。

もあらざりけれ1ば、一所をなむ聞えさする。よ2くもあらぬ3中にも、いかでと思4ひ給ふれ5ど、え見給ふまじくのみあれば、少しよろしきや出で來るとてなむ」6宮「7つか8宮にて承りしかば、片時世に經べき心地せねば、徒らにならぬ程に、かくなむとだに聞えさせむとてなむ、心ざしを停めて聞え初めたる身のみこそ。いと9辛く悲しく10は覺え給11ふ」など泣く〳〵聞え給ふ。12大宮とかく聞えこしらへて入り給ひぬ。

かくて13さうはちの物の調14べばかり物の音ども、同じ聲に調へて遊びす。歌15の仕うまつりなどする程に、頭中將實忠、中將など、「離頭た16ら。物添る人を片偏り離れ、17その業を持てる」と云ふ。式部卿の皇子「頭18の中將の朝臣何の才か侍る」「打ち仕うまつる才なむ」「いで仕うまつれ」「打ちよげの君達や」右近將監のあるを抑し19留して入りぬ。「頭中將の朝臣何の才か侍る」「和歌の才なん侍る」え20らじ〔○まし〕の大徳「難波津にこそあ21なれ」「多布りの22こそや」とて、かづき渡して奥へ入りぬ。「23輔親の朝臣何の才か侍る」「24わたひじりの才なむ侍る。あな風早やの夜や」「25仲賴の朝臣何の才か侍る」「木伽の才なむ侍る、26人にあらずのみや」「27仲忠の朝臣何の才か侍る」「山伏の才なむある、あなまつ草の音」「行正の朝臣何

校異 1国皇子。2国し。3国事こそ。4国う。5国宮。6国皇子。7イ一日。8国春宮。9異ほしく、国三字ナシ。10国ナシ。11イへ。12国ナシ。13イ催馬樂、異さうはつ、国才ども。14国三字ナシ。15イナシ。16イし。17異物。18イナシ。19異倒。20イる。21イる。22異三准、イ頭、国頭に、異頭ぞ。23国仲純。24イ綿むしり、異渡し守。25国輔純。26国垣下。27国仲賴。

の才か侍る」「筆結の才なむ侍る、渡り1難き物は冬2毛なりや」など云ひたてたる3に、源中将4垣下の
所より入りいまするを、5右の大臣「かの君は何の才かおはするや」「陰陽師人の才なむ侍る」兵部卿6親王
「こてふ(○胡蝶カ、蝴上カ)吹く笛にあな入り給ひたる笛や」とて、つい立ち給へり。かくて上達部親王達は、
供人まで物かづき7当座まで酔ひ臥しにけりぬ。かくて皆退出ぬ。藤8中将、9侍従の君10は御方に「仲忠退出11
つべき方なし」とて「いま12なに13三14宮に15侍ましく強ひられ奉りて、物も覚えず酔ひにけり。此のつ
いでに聞えむ事は夢もあらでなむ、鞍も許しとか云ふ」16とて、物語りのついでに「一日弥行にて悲しき心地
17らせしかな。やがて御所にて死ぬとお18(ほ)(○覚)えし。いかで今日まで侍るならむ」19侍従「怪しの20
つらく21むしや」22中将「されど思しぬる23牛の心地24ぞするや」「主は25うと(○異)病になり給ひ26ひつる。
人はあらずや。27何をか思す」28中将「主の夢もと云ふ。源中将の君こそ賢ましけれ」29侍従30の一角折れ
たる牛の31聞なりや」32中将打笑ひて「むく33り犬のあい34な頼み35みのやうに36て、守おも37はせなう38御
覧せそ」39「かの人は唯今の世40の一にて、内裏にも此所にも、桜井より降りたる41よりも殊に思ひ聞え給

[校異] 1 [旧]にアリ。2 異ナシ。3 [国]代アリ。4 [国]垣。5 [国]二字ナシ。6 [国]のアリ。7 異武士、[古]初の師。8 [国]侍従。9 [国]侍のアリ。10 [旧]め無、[国]の。11 異ぬ。12 [旧]心。13 [旧]上。14 [旧]のアリ。15 イ目覚。16 [旧]云侍め給ひそ、仲忠。17 [旧]ナシ。18 一字[旧]ニヨリテ補フ。19 [旧]源アリ。20 [旧]明。21 [旧]言。22 [旧]侍従。23 [旧]内。24 異ナシ。25 [旧]こと。26 異、。17 [旧]侍従アリ。28 [旧]侍従。29 [旧]源アリ。30 [旧]ナシ。31 [旧]下。32 [旧]侍従。33 [旧]ナシ。34 [旧]ナシ。35 異ナシ。36 イいで。37 イ二行。38 イなアリ。39 [旧]源侍従ナリ。40 [国]ナシ。41 [旧]殿人。

ふ人を、さるついでにしか仰せられぬ。かゝる身をも1ろく、なぞ此のはかな言は」2中将「異けれど、心魂を盡くして聞え初めたるを、此所には身を變へてもいかで3とはえ思4ひ給へよらぬは、いと畏き5うや」6侍従「藥の杵はいかにぞ」7中將「寶のな8の9もえ食はぬ心地ぞするや10と」など云ひて、

かくて、大將殿11大宮、年頃12母13后の14御六十の15賀仕16まつ17る給はむ、御18は[○國]19御屏風より始めて、麗しき御調度どもを、綾錦にしかへして、大殿に聞え給ふ、「19はせ[○伊勢]の君、その上、20こに對面したり21にしに、宮の上のま22つ[○參]らぬ事を23ゆぶかしげに宣ひけるを、いかで思ふ事して參りにしかな」大殿「いと易き事にこそあれ。來年こそは足り給ふ年におはしま24すらめ。25子26日27かつら28參り給へかし。早やあるべからむ事をせさせ給へ」宮「皆したるを、29かづけ物なむまだしき30こそ、八木は31つうてく事をなむ、32黄金の藥師佛五尺にて、33 34陀羅尼經など35きゝにせらる36なり。37こ宮は法38服をなむ39し給ふ40なる」「41それは今年となむ聞く。身には湖としみの事42を事もなども御覽せさせよ。たゞ

校異 1 イちて。2 [国]侍從。3 [国]かはアリ。4 [国]う。5 [イ]ナシ、イ異ぞ。6 [国]源アリ。7 [国]侍從。8 [イ]る。9 [イ]イ桃。10 イナシ。11 [国]の。12 [国]御アリ。13 [国]后。14 [国]宮の。15 [国]御アリ。16 [イ]らアリ。17 イり。18 [イ]イづ。19 イい。20 [イ]二字ナシ。21 [イ]ナシ。22 [イ]い。23 [イ]聞。24 [国]せば。25 [国]御アリ。26 [国]のアリ。27 異がてら、イ神樂。28 [国]もアリ。29 イ且つ此。30 [イ]と。31 [イ]くうてく、イつう一らく、[宮]朝服の。32 [国]大臣はアリ。33 [国]七柱アリ。34 イ七所に。35 [イ]急に、[国]二字ナシ。36 [国]二字ナシ。37 [イ]二、[宮]二の、[国]ナシ。38 異服。39 [国]急ぎせさせ。40 [国]二字ナシ。41 以下三十八字[国]ナシ。42 三字[イ]ナシ。

ならむやは「1 2大宮は聴けし、女3は物4音掻き鳴らして聞し召させ給5へかし。殿には御子達の御子ども、左大将兵衛督中将などの御子ども出だきるなりや」「6 7宮あこ8宮あこなどをば、御の9人にはあらで、仲頼行正等して、10いかで習はせ11となむ思ふ」12大殿「中将13殿上などは、後めたうはあらじ。14また女15達も恥かしげにはよもあらじ。か16ら〔○唐カ〕嫌17おやこ〔○みや此カ、親子カ〕の人々習はさざらむ、まだせぬ18となめれば、さはありとも宮19ふなむかし」と20て、召しに遣はして、人もなき御簾の内に召し入れて「年頃大事と思ふ事を、主達の同じ心21し給はぬに、22思ひとする23となむあるを、さ言ひて24あらむやは、今日25始めんとてなむ消息物しつる」少将仲頼、「甚だ畏し。何事にか侍らむ。26殿の御大事27より思ほし参る28事の侍るになむ承り驚きぬる」大殿「29ふし事を山と30積み体としても、唯今此の事しつべし、たゞこれになむ」とて「まめやか31に、此所に物し給ふなむ、院の后の宮、来年御年足り給ふ年な32かを、え承り過ごすまじうなむ。33いつあこ宮あこ34くに舞仕うまつらせむと思35ひ給36ふるを、人の

校異 1〔国〕かくてアリ。2〔国〕男子、〔国〕男子、〔国〕大殿、男子。3〔国〕子アリ。4〔国〕のアリ。5〔国〕はんとて。6以下「一内ノ例〔国〕ハ次ノ「恥かしげには云々」ト「舞をば此の人々云々」ノ間ニ置ク。7異ナシ。8〔国〕いつ。9〔国〕師。10〔国〕此の手ども。11〔国〕五字ナシ。12〔国〕左大将。13〔国〕などの御子達。14〔国〕二字ナシ。15〔国〕子アリ。16〔イ〕イし、〔国〕移異れ。17〔国〕ねば。18〔国〕事。19〔国〕ひ。20〔国〕思ほしアリ。21〔国〕にアリ。22〔国〕忍びて物。23〔国〕事。24〔国〕もアリ。25〔国〕は聞え。26〔国〕二字ナシ。27〔国〕の事を宣ひ聞ゆべく、〔国〕を宣ひ聞ゆべく。28〔国〕べきと宣へ。29異文言、〔国〕伏柴。30〔イ〕見、異八見、〔国〕も見。31異なる。32イる。33〔国〕家。34イい。35〔国〕う。36〔国〕へ。

1ふかせ2う手に傳へじとなん思ふ、御弟子にて生し立てられよ3と仰せよ4なむ」少將久しく思5ゐ6み
そ7ひて、「更に仕うまつらぬ事なり。自ら御覽ずらむ、8自然天上の調などにてこそは、人仕うまつらね
などなく仕うまつりそめりしか。その折なども、仕うまつらずなりにし事なり9る」行正も同じ10事申す。大將
「御琴さへか11ら物せらるる12めればこそかの少將の宣ふ事も覺ゆれ。宮あこをば少將濟藤、兵衞13佐14ばか
り仕ける歌人に習はし、男どもに種々15に物の音どもなどに合はせて出だし立て16ふ17すは、生々世々の18た
まいめ仇とたらひとす。「宮にし物ふべくば遠印の契りをなさむ」など言ひかけて入り給ひぬ。少將思ふ、此
の事をすといふ19はゝ聞し召しけむ、かゝる事すと人にも聞かれ20などせ21ずば、いかに思22さむと思ひ煩ひ
て、たほ大殿の思さむ事苦しう思23ざるれば、少將24くか(一)具(二)花殿の君達25(十)26所を、五所づゝこそと
りに取りて、少將は27あたこしと云ふ所の邊に、鳥も通はぬ山の中に籠り、其花は水の尾と云ふ所28よりの奧
に籠りやうなる所に、人にも知らせで籠りて習はす29に、30子供の餓り師じうはと思ひ31習はす。孫子達朝
野朝臣は只今のにて舞の師匠習はす。32大將殿35式部36を37宮の御38方39太郎君太平樂、40仲忠君41(な

[校異] 1 [活]古る。2 [活]る。3 [国]これを聞えんとて。4 [イ]とアリ。5 [イ]ひ。6 無め、[活]ひ。7 [国]み。8 [活]天上は
9 [国]なり。10 [国]同。11 イら。12 [国]ゑるアリ。13 [イ]のアリ。14 [国]は宮あこ陸王の事なく。15 [国]の。16 [国]ナン。
17 [国]れアリ。18 イたい(一)たか(二)、[国]心結。19 [イ]かで。20 [国]じ。21 [国]しかど。22 [国]し知りにけり。23 [国]思ひ。24
[国]らず。25 一字空ニヨリテ補フ。26 [イ]と、[国]ナシ。27 [イ]あたこし、イあたらし、[国]あたこし、しへ[国]
ニテあたこ領、[国]樂所。28 [国]の。29 [国]ナシ。30 [国]手ども。31 [国]てアリ。32 イ殿。33 [国]申してうす。34 [国]か
くし、35 三字ナシ。35 [国]式。36 [国]御。37 [国]殿。38 [イ]子。39 [国]のアリ。40 [イ]次郎。41 以下十六字[国]ニヨリテ補フ。

と舞ひ給ふ。

[評詞]此所は民部卿1殿の御方)。舞の師二人樂人十人ばかり、殿上人など多かり。物食ひ酒飲み舞の師立ちて舞ふ。君達習ひ給2へり。中務の宮の御子太郎君萬歳五常樂3よひ4(給ふ。舞)の師樂5聲が多かり。左大辨殿の御方6太郎君7す8くし(〇涼)の君おはせず。舞の垣下多かり。兵衞の督の殿の御方太郎君ずらう(〇受領カ)、中將殿の太郎9の君鳥の舞10と思ひ。

かゝる程に霜月11の晦日ばかりになりぬ。新嘗會の頃春宮よりかく宣へり。

禰ぎ言を神も驚く12よろ(〇頃)しもや君が心は靜けかるらむ

あて宮、

ちはやぶる神の前にはあだ人も思はぬ事を祈るものかは

降る雪を見て聞え給へり、

「數ならぬ身は水の上の雪なれや涙の13上に降れどかひなき

御覽じ14こそ落15(さ)ざ16らめ。」と聞え給へり。あて宮、

「水の上に雪は山とも積りなむ浮きてのみ經る人のかひな17さ

[校異]1 国の宮。2 国ふ。3 イ舞。4 三字国ニヨリテ補フ。5 国の垣下。6 国のアリ。7 以下廿八字国ナシ。8 [不]イず。9 国ナシ。10 国習ひ給ふ。11 国三字ナシ。12 [不]こ。13 国憂き。14 国二字ナシ。15 一字[不]ニヨリテ補フ。16 [不]ろ。17 [不]き。

あた見苦しや。」と聞え給1へり。右大将2宮に五節出だし給ひて、内裏3より参りの夜、

「百敷にさぶらふ少女の袖の色も君し染めれば4何とかぞ見る

かひなきものになむ。」と聞え給へり。あて宮、

「一人(ひとり)6も染むべき物か紫の雲より降れる少女なりとも

思し7（顧）くえ8もそなめげ9（な）れ。」など宣ふ。兵部卿10皇子小宮に言ひ給ひて、内裏より、

「色深く摺れる衣を着る時は見ぬ人さへぞ思ほゆるかな

何れの折にか11は我聞えむ、あないみじや。」12となど聞え給へり。あて宮、

「あだ人の多くに摘みつゝ摺れる色に何にあやなく思ひ出づらむ

なれな13らではえ宣はじかし。」など聞え給ふ。頭中将仲忠、臨時の祭の使に出で立つとて、

「夕暮の闇まるゝかな逢ふ事を賀茂の社も許さざらめや

神の御14をくゝも見給ふに、今15まり（本ノママ）来む。」と聞え給へり。あて宮「日暮ましや」など宣ひて、

「榊葉の色変るまで逢ふ事は16もゝの社も17（18許し給はじ）

19神も同じ心にや。」と宣ふ。20みの皇子21、

〔校異〕1国ふ。2国のアリ。3国二字ナシ。4国如何に。5異こそ。6イと。7一字国ニヨリテ補フ。8国もこ、国こ。9一字国ニヨリテ補フ。10国のアリ。11異イ忘れ、国は忘れし。12国ナシ。13国くて。14国御、イをけ。15国参。16国賀茂。17五字国ニヨリテ補フ。18高えこそ許さじ。19国二字ナシ。20国三。21国よりアリ。

獨り寢る年は經れども多山にまだ1人肌の見えずもあるかな

2す3ぐし(〇涼)の中將4露の置ける早朝、

「云ふ事に答へぬやなど冬の夜は言の葉にさへ霜や置くらむ

とさへなむ覺ゆる。」と聞え給へ5り。御返りなし。侍從の君、極月の朔日に、梅の6開け果てぬる7折りて、

「年の内に8したひに解くる花見れば思はゆるかな我が戀ふる人

9先づこそ思はゆ10るれ。」などて見せ奉り給へど、見ぬやうにて物も宣はず。藏人の源少將晦日の夜、11院の12後内裏より罷出て、かく聞えたり。

13(數)かりける年さへ今日に閉ぢむればいつを思ひの果と云ふべき

御返りなし。年返りて、朔日の日良佐、

立返14り年とともにや辛かりし君が心も越えたりと見ん

15藤英は宣旨賜はりて、六十16が試賜はり17て、年の内に18 19奉20擢りて、内舍(〇五位)に當りたれば、大將殿の御勞にて、七日の日内舍(〇五位)賜はり、十一日に大内記になされ、春宮の學士になされなどし

図賜1国一枝。2国と聞え給へど御返しなしアリ。3イず。4国霜。5国ど。6イ花アリ。7図をアリ。8国下紐。9国待つ事ぞ。10図ナシ。11イ經、国御讀經。12図經のアリ。13以下卅三字国ニヨリテ補フ。14国る。15国御返りなし、かくてアリ。16図賀の、国の。17国ナシ。18以下四字国ナシ。19一字異違ひ。20一字図返。

て、時めく事二1心なし。内宴に召されて、青色の衣に朱2衣換ふとて思ふ、

衣手の色は二3かひ變れども心に染める事は變らず

など思へど4も、かくなむとも聞えず。忠こその阿5〈6闍〉梨、宮あこ君を呼び取りて、かく聞え奉る。

「親の蔭より出づる花擧も世に憂き物と思ひ7わるかな

かくは思ほえぬものにこそあ8なれ。」と聞えたれ9ば、恐ろしとのみ思す。

かくて后の宮10は正月廿七日に出で來る11乙子に召なむ仕12まつり給ひける。設けられたる物、御厨子六具、沈14麝香白檀蘇枋15。16こう〔〇〕香か の17つかひてこと、おほい綾羅18多く、雨麝香19組の具より初めて、御衣20は女御達御裝束冬春秋、夜の御衣21・御衾、御は22らのおりたてち23へ白銀掛きて、ちことの形備して、中の物色に從が24へて、有り難く清らに25てな26すら〔 〕並べて調へたり。御27〔 〕調度28の調度、白銀29手付30つ御盥、沈を瓶に作りたる匜、白銀の匜、沈の脇息、白銀の透箱、唐綾の御屏風、御几帳の帷31夏冬有り難し。御几帳32帷子、33多34かへはしき御褥御座35等云ふばかりなし。御盤六具、金

〔頭注〕1〔イ〕つ。2〔イ〕のアリ。3〔国〕居。4〔国〕七字ナシ。5一字〔イ〕ニヨリテ補フ。6〔イ〕ま。7〔イ〕け。8〔国〕む。9〔国〕ど。10〔国〕の御アリ。11〔国〕乗、〔国〕乙子。12〔国〕になく。13〔国〕うアリ。14〔国〕紫檀。15〔国〕なりアリ。16〔国〕か。17〔国〕所備たど。18〔国〕などす。19〔国〕の組アリ。20〔イ〕二字ナシ、〔国〕六具。21〔イ〕屏。22〔イ〕し。23〔イ〕く。24〔国〕ひ。25〔国〕ナシ。26〔イ〕ナシ。27〔国〕手水。28〔イ〕三字ナシ。29〔イ〕の杯。30〔イ〕ナシ、イの、〔国〕一つ。31〔国〕なり。32〔国〕のアリ。33〔国〕宜ナリ。34〔国〕春秋。35〔イ〕ナシ、〔国〕など。

の御器に黄金のけうてり〔○脇息カ〕、これらより初めてせぬ事なし。かくて廿六日参り給ふ。車廿、榻七十1二、銀つ2ふり〔○造〕3の横4やう〔○様〕毛十、檳榔車二、下仕への車二つ。御前大の下の人数知らず、四位五位百人、六位数知らず。御装、5大宮女6一宮今宮までは朱色に織物7の襲の袿、唐の御衣綾の裳、8若宮は十9一、同じ朱色の織物い10へ〔○五〕重襲、上の御衣白き綾の表の袴。御供の人、青丹に柳襲の11ひら〔○唐〕衣前12蒲桃の裳上下分ず著た13ろ。童同じごと、14下15ろかへ〔○仕〕本給の三重襲着たり。

〔○以上嵯峨院ノ巻ノ後半ノ文章ト酷似セリ、彼此参照スベシ。但シ、嵯峨院ノ巻ノ後半ノ文章ヲ此所ニ置キテ、以下ノ文章ヲ直チニ継ギ合セテ読ムヲ可トス〕

かくて16入り給ひて、宮17におほし18宮19聞え給ふ、「怪しくその事となきものから、騒がしくのみ侍るを、見給へむづかりて、久しくえ参らざりつる事。先つ頃も御薬の事おはしますと承りて、驚きながら参り来しを、この内裏に候ふがほと20おとこそ侍りしを見給へ慌てゝなむ」后の宮「此所には、事にもあらざりけり。例の熱などなむ有りけり。などか物し給ひけむ」など宣ふ。かくて21上の御座所設ひ、御調度どもあるべきやうにまかなはれたる、玉光り輝く。御屏風の歌、

正月　子の日したる所に、22岩に松生ひた23る24てうに鶴遊べり。　25右大将

校異　1 [不]黄。2 イく。3 [不]ナシ。4 [国]ら。5 [国]ナシ。6 [国]何。7 [不]ナシ。8 [国]あて。9 [国]五。10 イつ。11 [不]か。12 イ紙。13 [不]り。14 [因]供。15 イつ。16 イ参。17 [国]后の。18 [不]ナシ。19 [国]にアリ。20 [国]〳〵しく。21 [因]彼。22 [不]二字ナシ。23 [不]り。24 [国]上、[因]考異ほとり。25 [国]考異左。

岩の上に田鶴(たづ)の下(おと)せる松の種は1生ひにけらしな今日に逢ふとて　民部卿

二月　人の家に花園有り。2

植ゑ3なむる人ぞ知るべき花の色は幾夜〔○代〕見るにか匂ひ飽くとは　源中将

三月　詣(ま)したる所に松原あり。

御禊(みそぎ)する春の山邊に4立てる松君の世々をば5誰に寄すらん　頭中将仲忠

四月　神祭る所に山人歸れり。

神祭る榊木折りつゝ東山に往き返りぬる數も知られず　中将輔純

五月　人の家に、橘に時鳥6居り。

我が宿の花橘の時鳥千代經る里7に思ふべきかな　少将仲頼

六月　人の家に池あり、蓮(はちす)生ひたり。

池水8も餘る淺き蓮葉(はちすば)に長閑(のどか)に物9み思ほゆるかな

七月　七夕(たなばた)祭りたる所に。

彦星の逢ふに織女逢ひぬれば今朝來る11鳥のふ12え〔○交〕になるらむ　10（少将行正）

〔校異〕1国若異老い。2イ今かへ木すアリ、異今植木すアリ。3国初(そ)。4国並み立てる松、イ生ひ立てる松。5国君。6国在り。7国と。8国の。9国の、国ぞ。10四字異ニヨリテ補フ。11国雁。12国み。

八月　十五夜したる所あり、雁1と云へり。　侍従仲純

秋ごとに今宵の月を惜しむとて初雁の音を聞きならしつる

九月　紅葉見る人の山邊にあり、田刈り積めり。　中將實頼

織り敷ける秋の錦に圓居して刈り積む稲を餘所に2こそ見れ

十月　網代ある河3原に船ども漕ぎ浮けた4る。　左大辨

漕ぎ連ね氷魚5はらふとて網代には多くの冬を見なれぬるかな

十一月　6に雪降れる7、人詣れたり。　兵衛8督の君

降りにける齢もいさや白雪の頭に積る時にこそ知れ

十二月　佛名したる所。　9中將仲忠

懸けて祈る佛の數し多10かれば年に光や千代もさすらん

など詠みて、少將仲頼書けり。辰の刻ばかり11事始ま12りて13(幄)打ち舞た14は(〇萃)15ゆるき(〇装ふ)。16笙鼓17ひさきつ。樂所舞人も參る。舞の君達、青色に蘇枋襲、綠の表の袴、樂所の君達闕腋柳襲など著つつ參る。かくて暫しあれば、御18桶19火參る。沈の火桶白銀の缶、沈を火箸にして、黒方を鶴の形に20て、

頭注　1 [イ]飛べ。2 [イ]見るかな。3 [イ]ナシ。4 [因]り。5 [イ]運ぶ。6 [イ]ナシ。7 イにアリ。8 [因]のアリ。9 [国]左衛門の督の君。10 [因]け。11 [イ]にアリ。12 [国]れり。13 一字[国]ニヨリテ補フ。14 [国]い。15 [国]よそふ。16 [国]笛アリ。17 イ彈き、[因]彈。18 [イ]火アリ。19 [イ]ナシ、[因]考異四つ。20 [イ]しアリ。

白銀の箸などして、帝后の御前に參る。御衾1まゐる。暫しあれば、左大將折敷2六十、同じ3貫文の4盥
具、萬の物數を盡くして參る。上達部殿上人取り次ぎて參る。女御の君のまかなひ民部卿、御前に沈の折敷
同じ5事して、打敷參る物同じ6事。左衞門の督7殿より、大宮より始め奉りて「親君達の御前、藤坊の8
(折敷)廿づゝ、あなたの御前の君達御方々よりも、大宮の宣旨お許人内侍命婦童人の前に、衝重して賜ふ。
それよりもりまで9 10はて、上達部親王達の御前、遊び人舞人の前まで參り11いてぬ。又白銀貫の若菜の
籠同じ數ども、色々の作り枝どもに、萬の寶物ども清らにし入れて、持て連ねて參り給ふ。御補頭内侍の督
の殿、松の下に廻り据ゑて、12

おのれだに齢久しき壽田鶴の子の日の松の蔭に譲る

13 われ一人鶴と松とを見るよりもひと14り〳〵は君にとぞ思ふ

など宣ふ折に、春宮、年の始にまだ參り給はぬを、同じうはとて、今日參り給へり。15帝聞きて對16面し給
へり。かくて宴始まりて、君達舞仕うまつりなどす。大將殿の宮あこ落蹲舞ひ給ふ。上達部かしづきて出だ
し給ふ。17さいに立ち給ふに、帝18より初め奉りて、數多の人驚く。「只今の舞19うそ20は21 22えの盛りに

【校異】1イ參、異始き。2異九。3イきアリ。4異雜足。5イごと。6異ごと。7イのアリ。8二字異ニヨリ
テ補フ。9イ補出。10異へる。11イ果。12イ御本ノママアリ。13異得本アリ。14異つ。15異院のアリ。16
異面。17イ寄暮。18イを。19イこ。20イナシ。21下六字異ナシ。22一字イオ、異世。

て、様々の1仰え2〔盛り〕にて人の容貌さへ勝れてあれ。そが中にも3ひら〔〇選〕ひ調へて、この世に見えぬ業をせむとせし吹上神泉の行幸なむどにも見えざりし舞の手かな4〈〈」と騒ぎ満ち、上達部皇子達音はせる少将5かなと涙落さぬなし。6次ぎて7家あこ君8陵王舞ひ給ふ。たゞ生ける陵9わに舞ひ給ふ。驚き怪しがり給ひて、帝舞ひ果つるすなはち二所ながら召しあげて、土器取らせてかう宣ふ。

過ぎにける齢ぞのぼ10り雲近く遊び始むる田鶴の雛

宮あこ君、

君にとて世々をば思ひ白雲に連ねて遊ぶ田鶴の雛鳥

とて土器取り給ふ。11后12君女一宮より初め奉り13、大将殿の君達に御琴弾かせ奉り給ふ。14さきの宮「あてこそはなど見え給はぬぞ」とて、あらはなる方に御几帳差し出でさせ「なほ此所に。あらはにもあらず」とて、姉君達かしづきて、参らせ奉らせ給15ひて、后の宮「道理こそはありけれ、ち16く〔〇乳カ〕な17くの口開けさせなどしけるは。いであなれや」とて、18空飛ぶもの多く琴二19〔つ〕調べて、「此の上には多くもあらず」とて奉り給ふ。あて宮「更に」など聞え給ふ。上「さ言ふばかりには聞えずや。なほ少しや」と聞え

校異 1〔イ〕イ才。2〔イ〕のアリ。3〔因〕え。4〔イ〕など。5〔国〕など。6〔異〕續き。7〔イ〕は。8〔因〕陵。9〔イ〕王。10〔イ〕る。11〔因〕后。12〔イ〕宮、〔異〕の宮。13〔国〕てアリ。14〔国〕后。15〔因〕ふ。16〔イ〕ち。17 イど。18〔因〕装束かれたる箏の、〔国〕箏の。19 一字〔国〕ニヨリテ補フ。

給へ1ばなむ2ひらき高く両3(し)ろ〔○白〕く仕うまつり給ひける。「只今誰ぞや、かばかりの4(琴)思はえぬ」など聞きて、帝春宮聞し召す。頭中将「誰ならむ、我が手に覚えたるかな、あらじと思ふものを」など、ある限りの人驚く事限りなし。春宮「仲忠の朝臣聞くに驚かしからぬ手かな」と宣ふ。5右大将の大殿涙を落して聞き給ふに、皆人あて宮なるべしと思ひぬ。后の宮「いと有り難し。只今6は7みなめりかし」とて、

宮よりも今日の子の日の嬉しさはなく8松の深山にぞありける

あて宮、

9の匿れて星の影10への末11かれは今日もひかれぬものにぞありける

など聞え給ふ。后宮、白銀の柳の籠六、黄金の籠、12ゆはに〔○宮〕どもの13たにく箱の有り難き物ども入れて、箱の中に有る難き物ども14へ...帝春宮に...の御前に奉り給ふ。かくて春宮后15宮に参り給ひて、16后の宮御当などと聞え給17うて「かく18時も知らぬ住居せし程に、年月過ぎけるも知られざりつる程に、今日此の君の20知らせ給ふに、残り少なくなりにける行く先も哀れに思はゆるを、かく喜りおは

〔校異〕1国マ無れアリ。2有哥、〔〕哥。3一字イニヨリテ補フ。4一字国ニヨリテ補フ。5国左。6国の。7国宮、〔〕御手。8国松の尾を、〔〕宮四つの緒た。9国末。10国ふそ。11イの。12国つ。13イ中に、国の中に、国兼巣などに。14イ時、国へら、国所、国考異あり。15国のアリ。16国三字ナシ。17国ふ。18国てアリ。19国ナシ。20イ調べ。

したれば、末の世繼ぎ給ふ心地になむ」春宮「年の始にもま1は〔参〕り2〔なん〕とせしを、今日かく參り給3へと承りて、同じくばとてなむ。仲頼4はまうけてさぶらふ心地なむする」5聞え給ふ。かくて大將殿の6大宮に對面し給ひて「久しくもなりにけるかな。后の宮に7も參りて侍りし8かど、時の盛にや侍らむ」9とて「三10宮11さと12の儀にや」大宮「あな久しや」13とて「御消息などは常に聞ゆれど、それはた聞えぬよりも覺束なくなん」「いかでそれらもかゝるついでにこそ承りぬべかなれ」大宮「幾度にかは聞き定め給へらん」春宮「對面する人には常に物するは、か14らなども聞え給はずや」大宮「承る時もあれど、さるべき15よし侍らざめれば、心ときめき16に思17ろ侍18りつるに」春宮「思ほし棄つるにこそはあなれ。聞えずとも思ほし出でやすると思へど、さもあらねば、19恥難て20 21しと云ふばかりになむ聞ゆる」大宮「言ひ知らぬが中にも、雜役の藏人などにも仕うまつりぬべきもの侍らば、參らせむと思22ろ給ふるを、やむごとなき人數多候ひ給ふと承23〔れば〕、居立の間なき心地してなむ」春宮打ち笑ひ給ひて「參り給はん程こそ24心地よ25局の心地もすべかなれ、いとさな思しそや、何の中の道とかや言ふ事もあるぞ。餘所にては常に覺束なきを、かゝるついでに承26〔はり〕定めてむ。僞りとや思す」大宮「今は情なき人類まるなる。今暮方にな

校異 1異い。2二字イニヨリテ補フ。3国ひつ、図ふ。4国が、図ら。5イとアリ。6国ナシ。7イナシ。8国二字ナシ。9図二字ナシ。10図のアリ。11図のアリ。12イにアリ。13図二字ナシ。14イう。15イと。異にも、図子ども。16イて。17異ひ。18異二字ナシ。19イ放ち。20図考異てアリ。21図て。22イひ。23二字イニヨリテ補フ。24イ心地に、国こゝらも、図倉の。25国内住。26二字イニヨリテ補フ。

む」春宮「同じくば心長閑からぬ1事、後は何せむなどこそ言ふなれ」とて、

年經れど我が身變らぬ子の日にはまつもかひなく思ほゆるかな

と聞え給ふ。大宮、

時2はかず子の日の數多聞ゆれ3ば變らぬ松とえこそ頼まね

など聞え給ふ。「今4かしこよひも」など5て立ち給ひぬ。かくて后の宮6など聞え給ふ、「このあて7と云ふ者をなむかく宣はすれども、8この宮などもかくて侍ひ給へばなむ彼處9まにもえ10侍はせぬ」后の宮「など11かうは參り給はざらん。殊更心ざしてもこそは參らすれ。さて里住はえ物すまじうこそ物すめれ。さて物し給はゞ、御後見ばかりはいとよう物してむ。此處に思ほし12勝るにやあらん、聞えて久しくなりぬるかしと聞え13にまつれよと度々宣へども、かゝらむついでにとてなむ」14「淺ましうはかなき15うちにも、萬の事かたはなるをなむ」16こ宮「いでや、殊に恥かし17くなる人もなし。18左大將殿19のばかりぞ容貌心目易く、參う上りなども賑せらるめる。さては殊なる20事あるもなかめり。大殿21のは方々にも參う上り給ふ事もなくて、惡なさをのみぞ事にはせらるめれ。なほ早う參り給へ。味氣なう責めらるゝや」など聞え給ふ。后の宮、内裏に今日捧物ながら藏人の少將を御使にて、かく聞え奉り給ふ。

【校異】1イぞ、[西]こそ。2[イ]分。3[国]ど。4[国]し今宵、[国]かしこまり。5[西]とアリ。6[西]二字ナシ。7[国]こそアリ。8[国]四。9[イ]ナシ、[異]濃。10[イ]侍。11[西]そ。12[イ]まつ。13[異]ナシ、[国]たて。14[国]宮アリ。15[異]二字ナシ。16[イ]二、[国]后の。17[国]げ。18[国]右。19[イ]ナシ。20[イ]三字ナシ。21[イ]ナシ。

今日よりは君にを見せむ筑摩野に萬代摘める今日の若菜は

などて奉り給ふ。内裏にもかねてよりさる御心ありて、黄色の山賤衣物などありて、かく聞え給ふ、

若菜摘む野邊をば知らで君にとは龜の尾山の小松をぞ引く

など聞え給ふ。

かくて春宮渡り給ふ。上達部皇子達には女1裝束の2御衣、それより下3に隨につけつゝ賜ふ。宮人男には白き褂、女には裳唐衣一4とつゝ、春宮の御供殿上人宮司まで賜はりぬ。かくて事果てゝ大將殿に歸り給ふ。御車ども5數の如くに引き續けて、君達侍從の君より始めて、6御馬にて、上達部ならぬ人は7馬にて仕うまつり給ふ。頭中將侍從の君は馬を並べ8手綱をかはして、物語りをするついでに、頭中將「世の中のかく遊びなど9は、殿上の間にて遊き10にきと思ふを、眼にこそ取りおか〔〇見カ〕されずなりにけれな。宮あこ君の御琴、君の御琴は、三千大千世界に聞え11にはあらじかし。そが中にも12そへ、と13今日の14たらしふの箏は、いみじかりつるものかな。源氏の中將仲忠朝臣15ら16見しは、身にも添17へて、かの御琴のあたりに」侍從「いかにぞ、18おはかりつる心地せられつらん」中將「かの御琴のには、さは19こそよき物とぞ聞ゆや」

【校異】1 イナシ。2 異ナシ。3 イにには、国に。4 イつ、イ具、異具。5 イ置。6 イ四字ナシ。7 イ馬アリ。8 イてアリ。9 イにアリ。10 イしを。11 イナシ。12 イそへと、国三字ナシ。13 イそふ。14 国琴の琴の聲、国考異本の祖原。15 イ宗。16 イ耳。17 国はで。18 国おほめ、国東な。19 国さて、国考異そらみ。

「1いづこ2よりこしきてうよりや」中將「いさや。戀て3う山までも」など怪しからぬ戯れしつゝ4晝まで歸り給ひぬ。かくて殿に歸り給へるに、春宮より、「一日いと嬉しかりし喜びは先づと思5ひ給へしに、今は6の世なる心地してなむ。いでや、

7君によりたゆげに袖8も濕ぢぬれば嬉しかりしもえこそつゝまね

今9だに早くを。常にか10わし11きしのま12へにな13思ひ給14うと。」など聞え給へり。大宮かく聞え給ふ。

包むべき袖の朽ちなば嬉しさもつひになき身となりもこそすれ

など聞え給ふ。また15宮より、

「何處にか包まざるべき嬉しさは身よりも殊に餘りしもせじ

袂にしもあらじや。」と宣はせた16る。あて宮、

「雲にまだ及ばぬ身より餘17ならぬ18は永き心のなきにやあるらん

と思ひ給19ふるなん。」など聞え給へり。

かくて、春宮に宮も大殿も頻め聞え給へりとて、聞え給ふ20、精進齋をしつゝ、山々寺々に不斷の21修法をな22く〔一〇七〕度、春の初參り給はむ日まで行はせ、いみじき大願を立て、あるは山林に交りて、金の御嶽越

校異 1因答へ。2因唯生む里てふ。3因ふ。4囮と宣ひて。5因う。6因考異やよし。7国かくばか。8国の。9因考異は。10囮は。11因ま。12因つ。13囮見。14囮ひそと、国ひそよ。15国春アリ。16国り。17国ナシ。18囮ナシ。19因へ。20国人々アリ。21因修。22イな。

の白山」宇佐の宮まで参り給ひつゝ願し申し給はぬ人なき中にも、源宰相は淵1河にかはりなど恋ひ焦れつ
つ、殿の内片時離れず、御前の簀子を離れで、2かき〔○草〕木につけつゝ涙を流して、かくぞ聞え給ふ。

「昔の葉も浅きも今は離き果てゝたゞつれ〴〵とながめをぞする

いでや聞えさすべき方ぞ覚え3ね。幾多の年頃思4ひ給へ恋ひつる5所甲斐なく、人惜な6ど言ふ事はかりも
聞えさせで止みぬる事。君が若や、御簾の外にても聞えさせてしがな。今暫しだに徒らになし果て給ひ7そ」
と聞え給へれ8ど御返りもなし。9左大将、「今は聞えさせむもいと畏けれども、立つ事憂き嵐の心地して
なむ。いでや、

八百万10れたる神は11ぬ〔○静〕ぎつれど君は物聞く時のなきかな

多くの年月をえこそこしらへずなりぬれ。」12など聞え給へり。あて宮見給ひて、「春13〔の〕残りはまだ多かめ
るものを」など言ひて、これかれ笑ひて御返りなし。兵部卿14宮より、「君かく15らと16る言ふやうなれど、
思17ひ給へ言ふ方なければ、いかでか思ひ給18ひ忘れむとて、

二つともふみゆく方はなきものを跡につきつゝ惑ふ19心か

あないみじや。いかさまにせむ。」と聞え給へり。平中納言、「かくのみ思ひ給20ふよりも、世に住まずもが

【校異】1 河に入りなど、国籍も知らず、国籍なる知らず。2 イく。3 国ぬ。4 国へ。5 国事の。6 国らで。
7 具こすり。8 国ど。9 国右。10 国らふ。11 国ね。12 国と。13 一字イニヨリテ補フ。14 国のアリ。15 国
ナシ。16 国か。17 国う。18 国へ。19 国国かな。20 国にん。

など思ひ給ふれど1、それさへ心にも叶はぬものにこそ。」とて2な、

「身を投げん方さへぞなき人を思ふ心に勝る3世にしなければ

いかにせん〳〵。」4(と聞え給へり。)御返りなし。5四の皇子、雨の降りたる頃、御前の紅梅の匂ふ盛りに、

「紅の涙の流れ溜りつゝ花の袂の深くもあるかな

大空さへこそ。」など聞え給ふ。頭中將、

「涙川浮きて流るゝ今さへや我をば人の頼まざるらん

袖の濡るゝは人の咎めらる6ゝはや。」7など聞え給へり。源中8將、

「荒磯海の眞砂の數は知りぬれど9かこふばかりの跡10をこそ見ね

言ふべき方こそ覺えね。」御返りなし。11(侍從)、御前の木の芽の打ち煙りたるを見給ひて、かく聞え給ふ。

「我がごとや春の山邊も焦るらんなげきの木の芽萌12らぬ日もなし

山にも滿ちぬる心地こそすれ。」など聞え給へど答へ聞え給はず。源宰相、

13もみ出14でゝ若15みて16もとめなり17な18らむさてもや人に及ばぬと見む

兵衛の良佐、

校異 1 因もアリ。2 イナシ。3 イ例、国谷。4 六字国ニヨリテ補フ。5 国三。6 イゝにや、因はや。7 因考異と。8 宰納言。9 イ通、国數。10 眞と。11 二字因ニヨリテ補フ。12 イえ。13 イ萌え。14 国づる。15 イえて、国楓。16 国とも。17 因ぬ。18 イな。

「賢き人に逢ひは1でなりぬれば我が身をも知らでぞあるらむ
と思ひ給ふるこそいみじう辛けれ。」などあり。

藤英の大内記時な2り二つなし。春宮には學士内裏の殿上許され3て、4(文5)席り6内記時さ7ゆき8し
9て、難き文面白き文を10作時に作11り、12大宮13家14おほう賢き者にし給ふ。よき人々暑に取り給15ふを
耳に16聞き入れず。「17時り18が追れる時には、這ふ19くしありけるを、20こたふ21はうちて言ふ22。頭の
髪に火點めつき、大般に流るゝを助くる23千もなし。恥を棄て24名を顧みず出で立ちて、時の上達部に見え
知られしかば25こそ時か26讒ふ人々27ともなれ。たゞそは一つは天道、28へは學生のちか29う(○力)なり。
昔天降れるかと見えし人に肩を並べ、上に見し人を下に見て、30もより31も32恩○難かりし百數を33勵らす
東宮の御學士なり。我を言ひすさぶる公卿達、朱の34きえ手等35二月に36女37はせよかし。我を取りせば昔38
そ39いまし」など言ふ程に、40右大將の大臣、春宮の大夫に消し給ふを嬉し給ふへ41ら(○表)作らせ給ふと

校異 1羽く。2知る非。3西ナシ。4一字衍ニヨリテ補フ。5国復び文、国作り。6国日。7国など。8イ
に。9国又。10国もアリ。11国れば。12[illegible]イ公行。13[illegible]は、国には。14国いみじう。15国はんと宣アリ。
16国もアリ。17ド二字異義へ。18一字[illegible]ナシ、国かに。19国虫なりとも、寶虫顯とも。20[illegible]
21国身どもなし。22国でかしアリ。23国非。24国身。25イ二字ナシ。26国二字ナシ。27国しく28[illegible]
29[illegible]ら。30[illegible]、[illegible]中下、国らと。31国ナシ。32[illegible]及び。33国見アリ。34国[illegible]、[illegible]。35国に更、国
二字ナシ。36国[illegible]アリ。37[illegible]おアリ、国[illegible]アリ。38[illegible]の御心に。39国道ふべく。40国右。41イう。

て召して、南の御殿しつらはせて候はせ給ふ。大殿御装束して會ひ給へり。物いと清らに1て詔ひなどして、御土器賜ふ。」君達皆土器取り給ひ、公卿君2たてず3流しなど4に。御表作り果てゝ嘗し候ふに、魂消え惑ひ炎5も見ゆる心地す。大内記思6ひ、昔の試策の7歩みに、かく覺えしかば、出で立ちてこ8に9は今10の11御達とも12なれ、なほこの事出だ〔○致カ〕してむと思ひて、宮あこ君にかく書きて奉る。

「物思ふに胸だに燃えぬものならば身より炎は出ださざらまし

隱れ所のなければにや。」など書きて「これ世の常に聞ゆるなり。御覽ぜさせ給ひて御返り聞え給へ」と云ふ。宮あこ君「更にかやうの物見給はずなむある。今さりともからうなん聞えむ」とて「久しう文を承らぬかな。異人にはな13讀みそと宣へばいと14惡しや」內記「暇の更に侍ら15ぬばなん。さはありとも聞ゆる事だに聞み給はゞ、學士をば仕うまつ16らす身も17いとよく習はし奉りてん」宮あこ君「物18師ごとにかく宣へばこそいと無才になりぬべけれ」など宣ひて、19宮あこ君あて宮に奉り給へど、怪しがりて棄て給20へ。忠こその阿21闍梨も大願を立てゝ、聖天〔○相傳カ〕の法を不22ごん〔○言カ〕に行ひ、加持したる水を硯23水に24して奉25り給ふ。

〔校〕1異宜。2イ絶え。3国名告り。4イす。5国燃。6イへる程、石ひ顔に、国ふに、因ふやう、因考異ふほに。7国試み。8石そ。9因ナシ。10国は此アリ。11国御邸に、因御邊に。12国侍ふアリ。13国見せ。14石惡ししや、因怪し。15石ね。16国り文、因考異らず文。17因考異二字ナシ。18イのアリ。19石四字ナシ。20石ひつ。21石闍。22石斷。23因のアリ。24因考異ナシ。24石れ。

憂きにきと思ふ我が身の悲しさを君はいかでかこゝら留めけむ

と聞え給へり。なほ佛の御徳なし。

かくて源宰相は三條堀河の程に、廣く面白き家に住み給ふ1うへに、時の2上達部のかしづき給3ひけり一4つ女十四歲にて聟取られて、また思ふ人もなくいみじき仲に5て、「この世6には更にも言はず、行く末にも草木鳥獸となるとも、友達とこそならめ」と言ひ契りて住みわたり給ふに、男7一人女子8一人9。女子は袖君男子を仕顯君と10云ふ。貴紗君をば父君片時11え見給はで12敢へず、撫で養ひ給ふ程に、殿の内豐かに家を造れる事13を14 15なかの16大殿に、上下の人17こぞたる18ごとして經給ふに、このあて宮19のおに思ほし消きてより、年頃の契りをも忘れ、愛しき妻20子の21上を22も知らで、かの殿に籠り居て、吹く風23鳥につけても訪ひ給はで、年月になりぬ。北24方思ひ歎き給ふ事限りなし。二月ばかりになりぬ。殿の内踊25く壞れ、人少なになり、池に水草26生27(え)わたり、庭に草茂り行く。木の芽花の色も昔に覺えず、朝には消し人や訪れ給ふと待ち暮らし、夜28うさりは影にや見ゆ29しと積みわた30る、涙を流して眺め渡り給

【校異】1国三字ナシ。2国帝。3図ひける、国ふ、国考異うける。4図人。5異ナシ。6国ナシ。7図子アリ。8国二。9国生み給ひぬアリ。10国考異なむ云へり。11図も、国ナシ。12国はあら。13図なむ。14国緑アリ。15イ瑠璃。16国御殿。17国絶絶ゆ。1国事なく。19図二字ナシ。20国ナシ。21国御アリ。22国ナシ。23図ども。24国のアリ。25国う、国考異くに。26国延へ。27一字図ニヨリテ補フ。28国ナシ。29図ナシ、イかし、異る。30国り。

ふに、春の雨つれ〴〵1に降る日、雨籠りて、若2君達父君を戀ひつゝ打ち泣きて居給へるを、母君あ3からしく悲しと思ほ4えて、鶯5に子を生み置きて雨に濡れたるを取らせて、かく書きて6奉らせ給ふ。7源宰相8に、

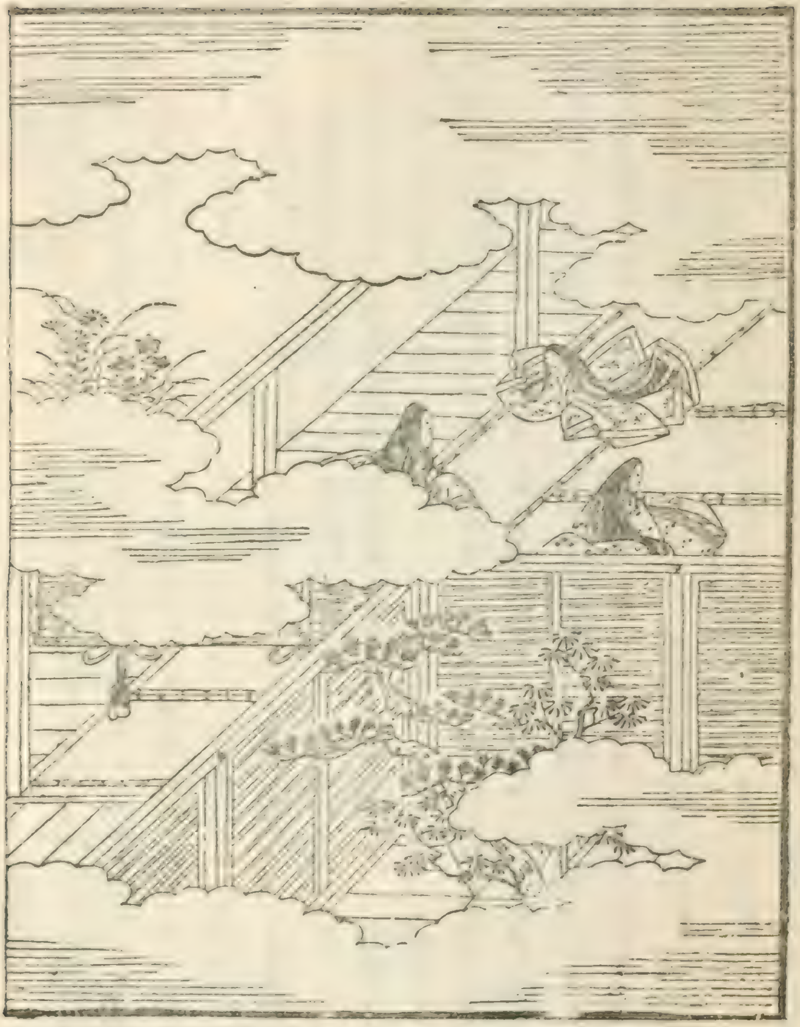
「春雨9にともにふる巣のもり憂きは濡るゝ子供を見るにぞありける

これに劣らぬ宿は見苦しうなん。さても眞砂は數知らずとか聞ゆめる。」とて奉らせ給へり。宰相げにいかに思ふらむと10思ほえて、

「住みなれし宿をぞ思ふ鶯は何に心も移るものから

など長閑に思したれ。げにいかにと思ふものからなむ。眞砂は數知らぬ時にやと宣へ。」とあり。北11の方見給ひて、涙を流して經給ふ程に、眞砂君十二歳12とで〔〇袖〕君十13四歳14なり15、16眞砂君17の18撫で養ひ給ひしのみ戀ひしく19、遊びもせず物も食はで思ふ程に、父君の我を思20ほし21時には、遊びしに片時立ち退きしをだに苦しき物にこそし給ひしか、今は22さへ〔〇前〕を渡23る歩き給へど訪ひ給はぬは、御子とも思さぬな24り。親なき人は心もはかなく才も習はで、官爵も得る事難25くこそあなれ、我こそさるべき人な

校異 1国と。2イきアリ。3イた。4イし。5イの巣アリ。6因源宰相にアリ。7因四字ナシ。8異一字ナシ。9イと。10異思ほし、国覚え。11国ナシ。12イそ。13国二。14国にアリ。15国給ふアリ。16因父。17イナシ、国は。18国父君のアリ。19イてアリ。20イは。21イしアリ。22イま。23イり。24因めアリ。25異しと。



1られなど思2ほし3 4屈して、病つきて、たゞ弱りに弱りぬ。眞砂君乳母に5言ふほに「我こそ6父君の戀ひしく7覺え給ふに、えあるまじく覺ゆれ。上に仕うまつらんと思ひつるものを」と泣く〳〵言ふ。乳母「あなゆゝしや。吾が君はなどか宣ふ。上も今はかく御德もなくなり給ひつれど、君達のおはしませばこそ行く先を頼み聞えて許多の人侍へ。おはしまさずば8やゝより初めて、何を頼みて9か仕うまつらむとこそ思さめ。辛くあ10るらしき父君に依り奉り11て、身をも徒らになさんとは思すな」と泣く〳〵言ふ。眞砂君「さは思へどえぞあるまじきや。我か失からむ12かばかりに、上によく仕うまつり給へよ」など言ひわたるに、遂に父君を戀ひつゝ失くなり給ひぬ。母君惑い焦れ給ふにかひなし。源宰相はかゝる事をも知り給はで、思ほす事のならぬをのみ思ひ焦られ、臥し沈み病13かなり、ある時は遊び14きらめきつゝ旅住みをし、思ひしめ15、この16上17をも知らで戀ひ悲しみ18をも知らぬ程に、眞砂君19七日の法事を、母君佛20書き經書き、法服21して、比叡にてし給ふ程に、宰相思ひ成し給へと御社に詣うであひ給へるに、この君の法事22をするく23かむ〔○願〕24書に、親の心變りたるにより、一人ある男子25徒らにな26したる事を面白う作れり。一山の人悲しみのゝしる。源宰相驚きて泣き惑ひ臥し轉び給へど27いひなし。多くの誦經し給ふ。さてなむ眞砂

校異 1不な。2不は。3図くアリ。4国染みつ。5不四字ナシ、異云ふには、国云ふ、げに、図云ふやう。6国父。7国思う。8国ま。9図ナシ。10不りし、国るまじき。11国ナシ。12不代り。13不に、イと。14不め、図歩。15国しアリ。16国宮。17図の、国を忘れ。18不給ふアリ、国給ふ御子の失せしアリ。19不のアリ。20不二字ナシ。21不調じ。22国ナシ。23イは。24国文。25不をアリ、国のアリ。26国り。27イか。

1の君2失きをば見り給ひける。かくて男もなき所につれ〴〵と眺め渡り給ふ。この北3方昔より容貌清ら
に心ある名取り給へり。女の君もよき程にて物し給へば、萬の人聞え給ふ中4、5右大将殿の中将の君、兵
衛の督の君、6兵部卿、7馬の8頭の君など、この北9方10を切に聞え給ふを、近く11て見給ふ事限りなし。
12先づ故君の戀ひしく覺え給ふ折々なむ、

聞くだにもゆゝしき道と思ひしを君も行きぬと見るが悲し13き

神君、

並び居て遊びしものを鳰鳥の濱の池に一人行くかな

14など15て、倚かず覺ゆれば、侍君、

思へども　悲しき物16と　池水の　長閑けき事を　鶯の子どもゝ
並び居て　憂きも辛きも　諸共に　淵にも瀬にも　離れじと　契りし物を
いつの間に　花の色々　咲きま17がふ　春の林に　移り居て　跡だに見えず
なりゆけば　聞くる聲を　眺めつゝ　嵐の風18　音にだに　聞えやすると
待ち暮らし　暮れ行く時は　飛ぶ鳥の　影や見ゆると　頼みつゝ　巣の葉茂き

【校】1國ナシ。2亡のアリ。3國のアリ。4[イ]にアリ。5國左。6國式。7國の宮のアリ。8國頭。9國の
アリ。10國に。11國にかく、國考異かく、國考異ナシ。12國眞砂。13[イ]き。14[イ]と。15國そ。16[イ]に。
17[イ]よ、[イ]ど。18[イ]のアリ。

奥山の　深く悲しと　思ひつゝ　月日の行くも　知らぬ間1に　二葉に生ひし
撫子を　來る朝ごとに　搔き撫でゝ　いつしか色の　薄2き濃3き　盛りをだにも
見むとのみ　思ひし程に　打ち延へて　親を戀ひつゝ　泣き溺めし　から紅の
海を出でゝ　黄なる泉に　下り立ちて　砂の波を　打ち背き　悲しきまでに
4つきにけり　夜々ごとに　5むばたまの　衣の下に　臥し渡り　東雲ごとに
起き居つゝ　花の木下に　遊び來し　我が身の一人　行く道に　枝なる6雪の
消ゆる間も　遅れんとやは　思ほえし　宿の板間は　荒れまさり　木の下はかく
漏りぬれど　玉の7下にも　ありしかば　8蝶鳥だに9ぞ　通ひ來し　空行く雲の
餘所にても　有りやと問10つゝ　11古る草12ゝの　峰の霞と　ならましや　猶たらちめを
思ふ13には　眺めて暮らす　春の日の　日暮しまでに　立つ雁の　數も數には
14逢ふも有るかな

とて歎き渡15る給ふ。

かくて三月の十16の宵ばかりに、初の17〔巳の〕日出で來たれば、18大將殿には、上19人の祓しに、難波へ方

校異　1 異は。2 国く。3 国く。4〔校曰、藍カ、蒼カ〕。5 図ぬ。6 国露。7 イ枝。8 [イ]てふ。9 [イ]も。10 二字イ[イ]はば、国ひて。11 [イ]深。12 イナシ。13 図やと。14 [イ]有り。15 [イ]り。16 [イ]日の日、国余日。17 二字[イ]ニヨリテ補フ。18 図左アリ。19 イへ、[イ]ナシ、国巳。

方男君達も残り少なくおはします。百五十1所ばかりの船六つ、檜2皮葺の船具して、金銀3な〔〇瑠〕璃に装1束かれ、大きなる幻4幟を打ち付け、帆5とに上げて、白き絲を太き6はなに繕ひ、大いなるはく7えにて、船の調度に用ひ揃へて、御簾どもなどもぬるものな8どして、船六に船子廿人ばかり、舵取四人装束させび形を整へ9て、10国々の11受領ども一つづゝ御船の装束どももして奉りたるに、一の御船12に大宮女御あて宮13 14ここに15あり左り北16方の御男君達17三18人19は御方々七所ながら奉り給ふ。御船一に大人十二人童四人下仕へ四人、やんごとなきを選ばれ、装束20御前ごとにか21ら〔〇瑠〕り、男22へどもも心異に整へたり。又の御船に左大将藤頭中将源中将宰相など、23 24一には御輦七所奉25る。若干の宮殿の人、あるは御船に侍ひ、あるは小船どもに乗りて渡り給ふに、時柳に到り給ひて、大宮、

名にし負はゞ紫の衣は解き26薄はで緑の鮮を経れる青柳

女御27君、

川28津なる岸が枝にある鶯を白く咲くとも先づ見つるかな

あて宮、

〔校註〕1 〔イ〕有。2 越度。3 〔イ〕瑠。4 国幟。5 〔イ〕ナシ、国手。6 〔イ〕繍。7 国え。8 国く。9 国ナシ。10 下廿字異ナシ。11 一字異考。12 国考異に。13 国に奉り給ふアリ。14 〔イ〕二。15 〔イ〕彼方の北方の御、国は大い殿の君、16 国のアリ。17 国に奉るアリ。18 国に。19 〔イ〕ナシ。20 下九字国ナシ。21 一字〔イ〕さ。22 以下卅字国ニヨリテ補フ。23 〔イ〕所卅アリ。24 国考異御舟。25 〔イ〕る。26 国考異脱ホ。29 国のアリ。28 〔イ〕津。

色かへて久しくなれど青柳のいとゞ深くも見ゆる緑か

など言ひて、長洲1み到り給2ひて、鶴の立てるを、3兵部卿の宮の御方、

千歳經る4松の5おち6ゐる今日よりや長洲てふ7るを人の知るらむ

中務の宮の御方、鶯の鳴くを聞きて、

惜しむなる春の長洲の濱邊には何を歎くぞ鶯の聲

左8大將殿の御方、

春を惜しむ鶯の音も來てながす野は9又花ぞ盛りなるらし

民部卿殿10、

打群れて長洲の濱に宿りして11花の名殘りや久しきと見む

御津にて、左衛門の督の殿12、

覺束なまだ白雲の餘所ながらみつと賴まむ事のはかなさ

藤宰13相殿14、

音にのみ聞きつる物をみつの濱見馴れてのみも思ほゆるかな

校異 1 イに。2 イふに。3 国民。4 イ田鶴。5 イ立ち、国下り。6 国考異ぬ。7 イ名。8 国近中。9 国まだ。10 国の御方アリ。11 イ春。12 国の御方アリ。13 国相。14 国の御方アリ。

1中将殿

き2み渡りはつかに今日ぞみつの瀬見つゝは過ぎし船宿りせむ

などて、岸に御靡し給ふ程に、春宮よりかく聞え給へり、

はるぐ〜と行く川ごとに慕ふとも我が敵3とは離れしもせじ

あて宮打笑ひ給ひて、「は4ゝ〔○國〕汚なくも、5はた」などて、

岸には藤の花も散り出らむ八重山吹ふ風の憂さに

とて女の装束、6ときの馬衣、御使7 8早く上りて参りぬ。かくて難波に出で給ふ程に、畿内山陽道南海道の9受領ども集ひて、おはしますべき所を有り難く面白うしなし、花の林浦のま10どに植ゑ並べ、同じき砂同じき岩有り難くをかしき様に調して、萬の御設け11をして12待ち候ふに、御船ども漕ぎ連ねて、萬の上13手船長に物の音ども吹き合はせて、14船15子ども遊び交16りておはします。17萬歳楽18の所に御制19〔献〕して待ち集る。かくて御船ども漕ぎ寄せて、御船ごとに配調申して、一度に御喚する程に、頭中将の御設の物取り具して参る。黄金の車に黄金の黄牛掛けて、乗せたる人付けたる人、皆20こう〳〵に21調じてかく聞え奉る。

【校異】1匡右の大臣の御方、図考具大将殿。2イき。3イをば、図には。4イら。5イと、図など。6図かづけ給ふ。7図に集ふアリ。8図急ぎ。9図受。10イまで。11図ナシ。12図考異二字ナシ。13異帰し。14図考船。15イごとに。16図し。17図萬。18図所。19一字イニヨリテ補フ。20図香具、図金銀て。21図てアリ。

月の輪のかけてや世々を盡くし1てむ心をやらむ甕が2たりかな

と聞えたり。あて宮、

雲にだに心をやらば大空に飛ぶ車をばよそながら見む

とて3うへ〔〇返〕し4け5る。源中將同じ樣にて6を〔〇調〕じてかく聞えたり。

戀せじ7の禊の船も漕ぎ寄らば大8海の原に解きや放たむ

と聞えたり。「物も言はで返9せほあ10れ」とて、中納言の君してかく言はせ給ふ、

み11せぎ、〔〇禊〕して見12ねより人を忘るてふ船を放たぬ風やなからむ

とて皆返し遣はしつ。又13皆返し奉りたり。14見渡しに15源宰相など、御方々の椎に居て、方々に物聞えなどし給ふを、源宰16相17羨みて、

13源〔〇並み立〕てる松の姤さを難波女に返すぐも禊するかな

あて宮、

かみ19ほか〔〇神岡〕の禊なるらん岩の上に籠れる松の生ふるきしかは〔〇岸河カ〕

源宰相「20木21え〔〇工〕の君に」とてかく言はせたり、

校異 1 [イ]け。2 [国]か。3 [イ]か。4 [因]給ひアリ。5 [イ]り。6 [イ]う。7 [イ]と。8 [国]海。9 [イ]すを、[因]すも。10 [国]はアリ。11 [イ]そ。12 [イ]ぬ。13 下七字[イ]ナシ。14 下四字[因]ナシ。15 下五字[イ]ナシ。16 [因]相。17 [イ]三字ナシ。13 [イ]なみた。19 [国]を。20 [因]木。21 [イ]く。

住1吉の松の緑と羨むかな御遊の殿舎そ戻くらむ

2木3ゝ〔〇工〕の4君、

難波女を花盛りなる程にはあだなる事のいかゞ嫌れむ

など言ふ程に、5（夜に）入りて月面白う清静かなるに、御遊び盛りに、色々の花散り敷きたる6此所に溜め満つを見着ひて、主の大臣、

色々の花錦を空さに散り敷ける満は黄入打ちて乗めしぞ

7民部卿の皇子、

散る花を留めわびつゝ錦に出でゝ惜しむ春ぞへ8去年やなからん

中務の皇子、

9錦浸み花の色々散りぬれど名残りある空と見るぞ怪しき

右の大臣、

立ち寄るも嬉しとも見ず花錦10るゝと咲きにし風の名残りと思へば

11民部卿の皇子、

〔校異〕1国め注。2国木。3国く。4集両。5二字イニヨリテ補フ。6イ補。7国式。8国様。9国赤。10国れど。11国式。

都出でゝ柳も花もみゝ1る〔○磨〕けるを錦とやなほ人の見るらむ

左衛門の督、

群れて2とぬ今日を待たぬは櫻花浦さへ浪のをればなりけり

藤宰3相、松原に潮の滿つを、

深緑滿ち干て染むる浦の松何れの潮に色優さるらん

4宰相、波に競ひて群5鳥の立つ6に、

濱千鳥友を連ねて立ちぬる7に夜る〳〵浪の8うくはなりけり

源中將、歸る雁の飛ぶ影を滿つ潮に見給ひて、

歸るともまだしら雲に飛ぶ雁を今朝こそ潮の滿ち方に見れ

など言ひて、御設けしたる國々の司どもに、女の裝9さては櫻色の細長袴など賜はせて、面白き所々10に見ぬ所なく見て歸り給ひぬ。

かくて又東宮より11は、「何時となけれど、日頃はいとゞ覺束なくなむ思ほゆるかなとてなむ。

松〔○待つ〕ならで生ひずもあるかな住吉の岸〔○來し〕12風ごとに思ふ物から」

校異 1 [イ]が。2 [イ]訪ふ、国來ぬ。3 [イ]相。4 国源アリ。5 因千アリ。6 [イ]を。7 国は。8 国浮けば、因打てば。9 因一具。10 [イ]ナシ、国も。11 [イ]ナシ。12 国影。

と聞え給へり。あて宮、

　浪越ゆる松は枯れ1つゝ作2吉の忘れ草のみ生ふとこそ聞け

と聞え給3ひけん。宰相賀茂に詣で給ひて、いみじき大願を申し給ふにも、なほ悲しう覺え給ひければ、御社より、

　妹を4おきて賀茂の社に先づ來ても血なる涙をえこそ止めね

御返りなし。5宰相主、長谷より御嶽詣と思はし立ちて出で給ふに、井手のわたりにありける山吹の面白きを折りて、かく聞え給ふ、

　「思ふ事祈りへ行けば諸共に6居てこそ告ぐる山吹の花

唐土もと7ら云ふなれば賴もしくなむ」と聞え給へり。8御返りなし。大將の主いたく歎きて、長谷に詣で給ひて、9思す事を固う大いなる願を立て給ひて、七日10ばかり籠り給ひて、日ごとに11誦經しつゝ「思ふ事成し給へらば黃金の堂建てん、金色の御像現し奉らむ。月に一度左右の御燈命のあらん限り奉らん」など申し給ひて出で給ひて、龍門12比蘇高岡寺さ13る(○拔)御嶽14詣15うの(○忍)ひて16詣で給ふ。さるまゝに、さ17ゝ(○驗)しき道を歩みも知り給はず歩み給へば、御足腫れぬ。かくても思す事の難かるべきを心細う思

校異　1異け。2因の江。3国ふ、源、国ふ、かくて源。4国考異ナシ。5国大將、国右大將の。6イゐでとぞ、国ゐでてぞ。7イか。8国されどアリ。9異思ふ。10国ナシ、因七夜。11因誦。12下七字国より先づ思さる、国よりと先づ思さる。13国か。14国に。15イし。16国詣。17国か。

しつゝ1詣で給ふ2を、肘笠雨降り雷閃めきて、落ちかゝりなんとする時に、右大将の主、三條の北方頭中将よりもあて宮に聞えさして止みなんずる事と思すに3涙止まらず思ほさる。それよりもかく聞え給へり、

思ふこと成4すてふ神も色深き涙流せばわたりとゞなる

と聞え給へり。あて宮見給ひて物も宣はず。中将の君、一摂延へかく宣へるを、御使ひのたゞに参るらむ5もいとほしければ。い6(つ)も聞え給はぬ物にもあらぬを、7二度ばかり8御消息9許し給へ。この御返事は聞え給へ、一10言思ひてこそ度々聞えしか。常にはいかゞは」と11思ひて聞え給はず。12左大将の主、かしこく祈り13さゝへて餘所ながら願し申し給ふ。「祈り成14(し)給へ15には、16いさゝことら月に従ひて奉らん」など願し申し給ひて、神と云ふ神、佛と云ふ佛17大願を立て騒くして、思ほ18え煩ひて、中将の君を三條殿へ迎へ奉り給ひて、物語りなどし給ふついでに「怪しく年月経るまゝに、徒なさのみ勝り給へば、思ひ煩ひて、宮に若し聞き入れ給ふやとて遠き所に19詣で給20ひてしかど、いかゞあらんとすらん。いでやかやうの事は、心に任せて人々のみ恨みらる21ゝ物とこそ思ひしか、この御為めにこそ身さへ徒らになりぬべき物と思ひぬれ」中将「いかなればかさ侍ら22ん。かやうの心もまだなき人にて、聞えにくゝ侍りしを、とにか

校異 1 イ詣。2 イに。3 涙ナシ。4 頭考異る。5 イこそ。6 一字イニヨリテ補フ。7 イ此。8 頭はアリ、頭考異とアリ。9 消にアリ。10 異さ、イと。11 頭思し 12 頭右。13 イをさへ、頭給ひ、頭考異をさへし。14 一字イニヨリテ補フ。15 イらば。16 イいざ今年、頭暇か事も、頭考異いさゝかことら。17 イにアリ。18 頭し。19 イ詣。20 頭へ。21 イナシ。22 異し。

くに宣ひて時々聞えさすめりしを、日頃は親達など同じ所にて、輔純等もえ物も1え宣はねばにや侍らん」右大将殿「事の近くなり2わたれば3にこそあなれ。時々ほのめきし御返も見4らずなりぬる5と、人笑へになし給ふ6な。兼雅子も数多なし。仲忠は自から出で立ち侍りなん。かたじけなくとも、おのが一7つ子にて物し8給ふとも御身は沈み給はじ。人の命を助くと思ほして、この事成し許り給へ。聞えありて御罪になるとも、それ9をな思しそ。10ある佛、いとこそ侘びしけれ」「輔純もいかでと思ひ給ふ事なり。しか11れど、数多侍る中に、らうたき物にして、暫しも放ちてはえあるましとて、宮よりも切に宣はするを、かつは畏まり聞えさするものから、え12はたし立てられぬを見給ふればなむ、とかくしなさむは難く侍るに、思す事に叶ふとて、13裏に歎かれん事なむ心苦しかるべき」大将の主「春宮にと思したるを此14(所)に聞ゆるは、客に遊ぶ裏の高く宿るばかりにはあれど、宮仕へし給ふ人必ずかの位にしもなり給はず。此所におはして、兼雅より初め15ての君に16て物し給はむには、徒らになるばかりにしも殿は思さじ。御心より起りて、男ばかりの人は物し給はずやは。17こにかは、この事かひなくなりなば、やがて徒らになりぬべきを、助け給はゞ勝りぬべくなむ。かやうの事知らぬ人のやうにな宣ひそや」などて、土器度々になりぬ。明くるまで

[校異] 1 [イ]ナシ。2 イに。3 [異]ナシ。4 [因]え。5 [異]は。6 [因]かアリ。7 [因]考異人。8 九字イナシ。9 [異]も。10 [イ]吾が。11 [イ]ナシ。12 イ出だ。13 [イ]此所。14 一字[イ]ニヨリテ補フ。15 [国]私、[因]て私。16 [イ]は。17 [国]此所には、[イ]四字ナシ。

物語りなどして、1あて宮に「かく聞え給ふ2だに覺束なかりつる御返りさへ今は宣はせぬこそいみじう辛けれ。」とて、

古への跡を見つゝも戀ひしを今行く末をいかにせよとぞ

とて、女の裝束一具かづけ奉り給ふ。中將歸り給ひてあて宮に「御3（返）事聞え給はず4とて、いみじく恨み聞え給ふなり。などかは心やりばかりに聞え給はぬ。人には深くつ5（ら）き者6としも見はれぬものぞや」など聞え給へど御返りも聞え給はず。兵部卿7宮8に、

君9がため隙とてたつる頭や積もれば戀の山となるらん

御返りなし。平中納言殿より、

打延へて落つる涙や袖の上に戀の滿ち來る海となるらん

御返りなし。三の皇子、四月ばかりにかく聞え給へり、

「朝立つ10うらの雲は夏わかみいかで降れると知る人のな11さ

これをだに御覽じ12辨かぬこそはいみじう辛けれ。」など聞え給ふ。頭中將の君13に、近き14侍には15きてぬ

〔校異〕1〔国〕四字ナシ。2〔イ〕二字ナシ。「かく聞え給ふ」ヲ地ノ文章トナス。3一字〔山〕ニヨリテ補フ。4異二字ナシ。5一字〔国〕ニヨリテ補フ。6〔イ〕に。7〔国〕のアリ。8異イより。9イにより。10イ〔イ〕頭。11〔イ〕き。12〔国〕咎め、〔国〕考異止め。13〔イ〕ナシ、〔国〕は。14〔国〕社。15異來て見、〔イ〕聞え歟、〔国〕詣で。

所なく、越の白山1さで參2かに、道も知らぬ山に惑ひければ、途よりかく聞ゆ、

　厭むる神もやあると越路なるまたは知らねば3迷ふ頃かな

と聞え給へり。御返りなし。源中4將5に、「聞えさせで久しうなりぬれ6ど、覺束な7ら8のみなり勝9まこそいみじう侘びしけれ。いでや行末覺えぬ人にもこそな。いみじく惑はし給ふかな。」とて、

　我をかく10など徒らに11なしつらん後を頼まむ物と知る／＼

御返りなし。藏人の12源少將、宇佐の使にさ13られて下るに、それより、

　岩淸水宇佐まで14行かず逢ふ事をなほ答へずば神15を恨みむ

御返りなし。侍從の君、

　戀をのみ沸りて落つる淚川身を16かき〔〇浮〕舟のこがれ增すかな

兵衞の佐、

　山も野もなほ憂しと云へば白眞弓いるべき方の思ほえぬかな

また藤英の大內記、

　夏草に置く露よりもはかなきは君にか17くれる命なりけり

校異 1イま。2イる。3国惑。4異納言。5アナシ、国は、因より。6アば。7国う。8因考異二字ナシ。9アる。10ア二字ナシ。11アやはアリ。12国ナシ。13アさ。14因許す。15国も。16イう。17イか。

思こその阿闍梨、

世の中を行き離りにし身なれども隔てふ山をまだ1ぞ踏み見ぬ

誰々も御返りなし。かくて春宮より、

恨みつゝ空しゝならば我さへや厭去らず鳴く蝉となるべき

あて宮、

松になく蝉としならば雲の上の2しもべの位何にかはせん

又宮より、

「3我砕く心の願は4雲となり落つる涙は5海となるかな

有り難く6も思はせ給ふ物かな。世の例にもなりぬべしや。」とて奉れ給ふ。あて宮、

萬歳の経く亀の甲の上にいかなる塵か山と積もりし

宮より、

「亀の尾の山には誰も到りなん君をまつにぞ老いもしぬべき

紛の中ならぬ人さへ7(憂き瀬は多かるを、思ひ知らせ給はじや。」など書きて奉れ給ふ)。あて宮、

山よりも到り難きは風8たゝみ危うき9限のみあればなりけり

〔校異〕1〔イ〕も。2〔イ〕役所。3〔考〕わが、〔考異〕割り。4〔国〕山。5〔考〕考異雨。6異ナシ。7下廿六字〔国〕ニヨリテ補フ。8〔国〕高み、〔イ〕立たじ。9〔国〕海の。

など聞え給ふ。

源宰相思ほし煩ひて、山林に交りて、山々寺々に不斷の1修法行はせつゝ聞え給へど、御返りなしと歎く事限りなくて、さ言ひてあらむやはとて、かく聞え給ふ、

　帆を上げて岩より舟は通ふとも我が2瑞垣は道もなきかな

御返りなし。又宰相、

　逢ふ事の難くて止まば3君はなほ人を恨みて石となりなん

御返4事なし。思ひ惑ひて兵衛5君を局に呼びて宣ふ、「など6る今は夢ばかりの御返もなき。御參りはいつばかりぞ」兵衛「くはしくはえ承らず。今は誰にも、時々の御返も聞え給はねば、さやうに思ほしたる事ぞや。日を定められぬ7事ばかりにこそあなれ」「いでや、いか樣になすべき。吾が佛8授け給へ。かくておはします時だに死ぬる心地する物を、まして參り給ひなば、やがて死に果てぬべし。いかで、さらぬ前に9こそながらも10言聞えさせん。とかく年頃になりぬれば、思ほし疎むべくもあらぬを、よきに聞え給へ」兵衛「あな恐ろし。いつとても、さるべき折はなけれど、この頃は宮大殿御方々おはしまし、夜はや11りて此方に大殿籠れば、兵衛など12に近くはえ侍はず13や。すべて今はかひなし。早や思し忘れね」源宰相「吾

1 異修。2 イ水がさ、ホ水蒸。3 イ吾身、異我。4 異ナシ。5 異のアリ。6 イ異か。7 イ理り。8 イ助。9 イよ。10 異考異聲。11 イが。12 イは、ホも。13 イナシ。

か侍。などかくいみじき事は1し給ふ。何れの世にか忘れ聞ゆべき。今は何心もなし。たゞ幾多の年頃思2ひ給へ焦るゝ事を、かくたなむと3こそながら聞えてし4などのみなん思ふ。まろをかくながら殺し給ひても、5君の御前とこそ6あらめ。同じくば殺し給はで。殿に7物しき人に思はされ給はん8とは、命までにより9ならじ。官(つかさ)か10ふなり〔○博〕賜はり給はゞこそあらめ、殿にこそはえ侍11ひ給はざらめ、それは12な13思し14う。なほ／＼物聞えむ。計(たば)り給へ。おぼろげにてはかく聞えじ。身の内に火の燃ゆる心地すればぞや。助け給へ」と血の涙を流して宣へば、兵衛、「わりなき事になむ侍15り。年頃かくのみ聞え給ふを、さもありぬべき御宿世16の見えば、必ず身に從ひになるとも17に思う給へしかど、思18ろ難くべくもあらず、いと恐ろしければ、すべき19なく20侍21り。22若し23も候(さぶら)はゞ、今かくたなむと聞えさせむ」。宰相籠りて御文聞え給ふ。「今に聞えさせじと思ひ給ふれど、24理なしとか云ふなる身より思25ひ給26ひ餘りぬるを、逃る方なければなむ。かういみじき目を見給へ餘りぬるよりは、死ぬるものにもがなと思ひ給ふれど、それもかく27ながらは28難なき心地なんする。」とて、

「思ふ事難くて死なば死出の山路とやならんふ29く〔○嘆〕かれる胸

〔校異〕1 内宜。2 内ら。3 イよ。4 内かなと。5 異みち。6 内な。7 内考異顔も。8 内に。9 内あ。10 イうふ。11 内二字ナシ。13 異ナシ。13 異同、内思は。14 イ内そ。15 異る。16 内ナシ。17 イと。18 内ひ。19 内方アリ、異径アリ。20 内なむアリ。21 内る。22 異ナシ。23 内ナシ。24 内考異背。25 内う。26 内へ。27 イ長くば。28 異頬か。29 内た。

いかで夢の中にもかくなむと聞えさせて止みぬるものにもがな。吾が君や、いかにせむ。」とて、兵衛の君に、蒔絵の置口の箱一具に、綾絹畳み入れ、夏の装束綾襲にて入れて、かく言ひ1て取らせ給ふ、

燃えさ2りぬ思ひ籠めたる身を熱み3縫へる衣を暑しとな見そ

とて取らせ給ふ。兵衛とかく聞えて参う上りて、あて宮にこの御文を奉る。見給ひて物も宣はず。兵衛「いみじく惑ひ焦られ給ふめるを、此度ばかり、只一行聞え給4ば、思ひ死に死5(に)給ひなば恐ろしくもこそ」と聞ゆれど、聞き入れ給はず。源宰相心魂を砕きて思ひ歎く事限りなくて、兵衛の君を呼びてかく聞え給ふ。

「湧くがごと物思ふ人の胸の火に落つる涙の瀧を増すかな

今は聞えさすべき方こそなけれ。」とて、兵衛の君に、をかしげなる沈の箱6一具に、黄金一箱づゝ入れて取らせ給ふとて、

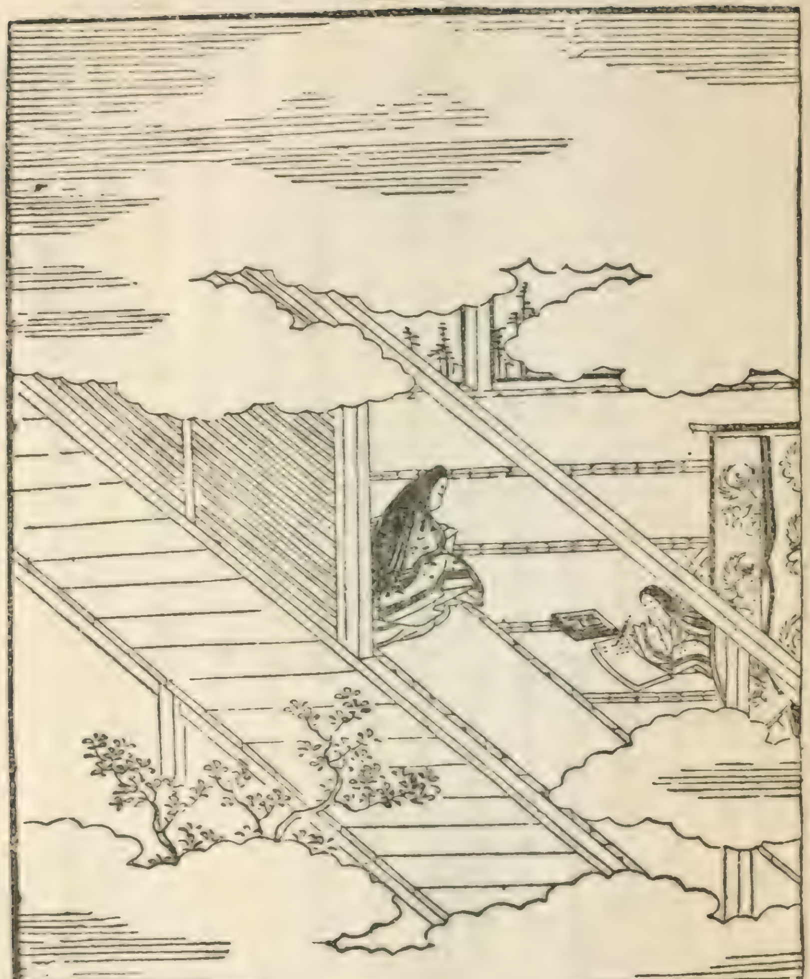
年を経て頼む人だに情なきに箱の黄金も何にかはせん

兵衛、

数知れる黄金は我も何せむ7と量なしてふ戀をこそ思へ

とて賜はらで参う上りて、あて宮にこの御文奉るとて「なほこの度ばかり一行聞えさせ給へ。此度さへ宣は

【校異】1異ナシ。2因ら。3涙脱げ。4イへ。5一字イニヨリテ補フ。6因二。7イに。



すば、1やがて死ぬべしと惑ひ焦れ給ふを見給ふれば、いといみじくなん」。あて宮久しく思し煩ひて、かの文の端にたゞかく書き給へり。

涙をばいかゞ頼まむまた人の目にさへ浮きて見ゆとこそ聞け

と書き付け給へり。宰相喜び給ふ事限りなし。立ち返りて聞え給へり、

「年を經て歎かぬ人は浮かばぬをまたかゝる目は誰か見るらむ

あらじとなん覺ゆる。」とて奉れ給ふ。「此度ばかり2と宣はすれば、隙を伺ひて、おぼろげならず聞えて御覽ぜさせ3つ4れ。今はすべき方もなし。かけてもな頼ま5せそよ。思し定めぬ時だにある物を、今は世は逍遙6なるとも、思ほし返すべきにもあらず。身を捨てゝと思ほすとも、簀子7にはめられて君達、徘徊の廻りには宮大殿より初め奉りて、御方々隙なくおはしますには、飛ぶ鳥と云ふとも翔り給ふべくもあらず。見奉れば、いみじくいとほしと思8る給ふれど、計り聞ゆべき9方もなくなむ。中々10にかゝる事を何に承り始めけん」宰相死に入りて息もせず、頂より黒き煙立ちて、蒼くなり赤くなりて、たゞ息のみ通ふ。兵衛涙を流して上りぬ。かゝる事を源中將11兵部卿など聞き給ひて、大願を立て給へど、何とも知らせ給はず。かくて辛うじて息出でゝ、息の下に物言ひなどす。大殿も皆歸りな12らし給ひぬる13は隙に、白銀の箱に黄

校異 1 因考異三字ナシ。2 異ナシ。3 異二字ナシ。4 因一字ナシ。5 因れ。6 異にアリ。7 異にはしいれて、因には廻りて、因の廻りには。8 国う。9 因考異かひ。10 異ナシ。11 国兵。12 因ど。13 因ナシ。

金千両を入れて、兵衛の君にかく言ひて遣り給ふ、

　死ぬる身を惜しみかねてぞ君にやる千々の黄金は命延ふとか

兵衛、いみじかりし事を見て、哀れ1と悲し2思ひて、かく言ひ3返す、

　「雲の上に星の位は昇れども4願ひ返すには延びずとか聞く

とてなむ。まめやかには此所にもいといみじくなむ」とて返しつ。源宰相時のかはるまで思ひ入りて、赤く黒き涙を滝のごとく落して、千両の黄金を、三十両づゝ白銀の鋺の壺に入れて、七大寺より初めて、らうけ所、ひろくよてらるを〔〇比叡高雄〕に7誦経す。その心ざしたゞ此の事なり。大徳仏師8興力し給はゞと思ふ源宰相なほすべき方覚えねば、比叡に上りて、あ9なか中に験具き10所に四十九所に、よき阿闍梨四十九人を語りて、阿闍梨一人に伴僧六人具して、四十九壇に聖天11供を、布施供養豊かに、うるはしき衣を調じて着せつ12と行はせ、自13しは中堂に七日七夜かせの齋をして、五體を投げて、この事成し給へと行ひ給14ふ。かゝるに、かのまさ15と〔〇真砂〕君の母君16〔に〕聞え給ふ人々、あるはたゞ入りに入らむ、あるは尼まんなどし給ひければ、いかで人も寄らざらむ所にあらむとて、志賀の山本にぞありける。人の心に入れて語りた

1イに。2イとアリ、或ハアリ。3〔岡〕にアリ。4〔岡〕呼び。5イ〔岡〕え。6イ〔岡〕か。7文。8異より〔岡〕。9イる。10〔岡〕二字ナシ。11イ人。12イつ。13行ら。14行ひけるに、異考異ひける。15イ行。16一本イニヨリテ補フ。

りける所の、山近く水近く、花1も紅葉2も鳥の色々の草木植ゑ渡したる所に住み給ひし殿を變へて、忍びて渡り3て住み給ふ。女どち大人一人童一人下仕へ一人して、行をして、ある時4には箏琴を搔き鳴らして經給ふに、秋深くなり行く頃の夕暮に、秋風肌寒く、山の瀧心凄5く、鹿の音遙かに聞え、6前の7草8、あるは色の盛りあるは花の9いたなどして、哀れなるに、母北の方袖君御簾を上げて、出居の簀子に10みた11る〔○御達〕12など居て、北の方琴袖君琴乳母など搔き合はせて、北の方、

　秋風の身に寒ければ情もなき13（男鹿の聲の遠ざかり行く）

袖君、

　見る人もなくて散りぬる山里14 15（16の千種の花は世をば恨みし）

乳母、

　蜩の鳴く山里の17ゆかくりは18（物思ふ袖に露ぞ置き添ふ）

19言ひつゝ打ち泣きて居給へるに、源宰相20かの事果てゝ歸り給ふに、頭中將21仲忠も志賀に籠りて、同じ

校異 1イナシ。2イども。3異ナシ。4イナシ。5異し。6国御アリ。7因木アリ。8イ木アリ。9イ咲き歟、国散り、因考異咲き。10異御。11イち。12イ並み。13下十一字国ニヨリテ補フ。14イの歟。15下十一字国ニヨリテ補フ。16因考異は梢淋しく見る紅葉かな。17イ夕暮歟、イゆかしさ、国夕暮。18下十一字国ニヨリテ補フ。19因とアリ。20国二字ナシ。21因二字ナシ。

やうなること1(し)て歸り出づる2比叡3辻にて、源宰相見つけ4て、「何處よりぞや」と宣へば、頭中將

5(入りぬべき道)や6〳〵と見え7う8りふやの山を立ち歸らしつる

源宰相9打ち笑ひて、

10おなしもの11をすかりな12くせともかひ13なき山は我もまだ見ず

を14はしか15たん紅葉折りて、山土産にせんとて見給ふに、この家の垣根の紅葉、唐紅を染め返したる錦を懸け16て渡したると見ゆ。源宰相、「情ある枝は彼處にぞあらむ」とて、先づ押し折るとて

濃き枝は家土産にせん17常なくて止みにし人や色に見ゆると

中將、

山土産も見すべき人はなけれども我が折る枝に風も避きなむ

とて折りて立ち給へるに、なほこの18家見と聞かず面白し。人々え過ぎ給はで、源宰相、

旧道へ急ぎて歸る秋山に強ひて心の留まるやなぞ

中將、

校異 1一字[イ]ニヨリテ補フ。2[イ]にアリ。3[国]のアリ。4[イ]給ひアリ。5下六字[国]ニヨリテ補フ。6[イ]や、[国]道芝。7[国]の。8[国]補華、[国]考異瓜生。9[国]考異孔字ナシ。10[国]露霜、[イ]おとなしも。11下八字[国]置き添ふ枝を明けど。12一字イら。13[イ]き、[国]ある。14[イ]か。15[イ]り。16[イ]ナシ。17[国]情。18[イ]泉、異家見も、[国]家見れど、[国]考異家見。

一人のみ蓬の宿に1數よ2れば錦織有く山邊にを3いん

とて、この家に入り4給ひて見入るれば、籬の尾花色深き袂にて折れ返り招く。源宰相思す事は成らず、年頃の妻子はいかにしけむ方も知らで、萬に哀れに思ほゆれば、

夕暮の籬に招く袖見れば衣縫ひ著せし妹かとぞ思ふ

妹が門の聲振に北の方聞き給ひて、「哀れ5（に）も失ひたる人こそあなれ」北の方、「あなむくつけや。それは鬼の聲ぞせむ。これは人の聲にこそあなれ」とは宣へど、「それなりけり。げに似たる聲かな」と宣ふに、なほかく哀れに覺ゆれば、北の方、

古里の辛き昔を忘るとて變へたる宿も袖は濡れけり

袖君、

立ち寄りし籬を見つゝ慰めし宿をか6くてぞいとゞ悲しき

と7ぞこれかれ打ち泣きつゝ居給へる8と、中門押し開けて二所並び9立ち給へるを見給ひて、「むくつけ10くこのわたりにありつらん。あなかま人々11言ひそ」とて、御簾取り下して入り給ひぬ。人々近く立ち寄り給へば、さすがに人は住むものから、咎めず。簀子近く寄りて、宰相、

校異　1［イ］ふす歟、［国］臥す。2［イ］りは歟、［イ］れど、［国］りは。3［イ］居、［内］疑。4［内］考異居アリ。5　一字［国］ニヨリテ補フ。6［国］へ。7［内］て。8［イ］に。9異二字ナシ。10異し。11［イ］な歟、［内］なアリ。

夕暮のたそがれ時はなかりけりかく立ち寄れど問ふ人もなし

とて上りて居給ひぬ。皆様聞き知り給へる人のみあれば、物も言はせず。宰相、「などか物宣ふ人もなき。若し片輪人の住み給ふ所か」とて、

「山彦も答ふる物を夕暮に旅の空なる人の聲には

怪しく、などか世離れたる住居はし給ふ。思ふ心なき人々す1かすや」など宣ふ。姉君、「夜晝戀ひ泣き給ふ父君の、夢に見え給ふを、いかゞい2ふ「〇答」へ聞えざらん」とて、御簾など3出だすとて、4はら5はた「〇圓座」に書きつ6ゝ、

「旅7らくは我も悲しき世を8くしと知らぬ山路に入りぬと思へば

同じ山路にとか言ふなる」9 10出だして、暫し11ばかりありて、透箱四つに、12菓実13据ゑて、紅葉折り敷きて、松の14こ葉物盛りて、菌などして、尾花色の強15飯など参る程に、雁鳴きて渡る。北の方土器にかく書きて出だし給ふ、

秋山に紅葉と散れる旅人を更にも16くりと告げて行くかな

【校異】1宮考異み所。2〔引〕ら。3〔イ〕掃に。4〔イ〕わ。5〔イ〕ふ賤、〔国〕ふ。6〔イ〕く。7三字イては、〔国〕てゝは、〔国〕と云へば、〔国〕考異てへば。8〔イ〕我。9〔国〕など言ひアリ。10〔国〕三字ナシ。11〔国〕三字ナシ。12〔イ〕御実、〔国〕よしづき、〔国〕考異はしつき。13〔国〕たる様に。14異ナシ、〔国〕實。15〔イ〕飯。16〔イ〕か。

源宰相、

旅と云へ1ど雁も紅葉も秋山を忘れて過ぐ2す時はなきかな

北の方、

秋果てゝ落つる紅葉と大空に雁てふ音をば聞くもかひなし

など言へど氣色も見せず、怪しくをかしき所3かなとは見給へど、思ふ心のいみじければ、それを思ふにやあらん、と思ひ遣り給はず。源宰相5に「いかゞ見給ふ。心もなくは見えずなん」中將「更にも言ふかな。5うしむじや（○有心者カ）な6り。語7ひら置きて、時々は紅葉見る所にし給へ」宰相「いでや、見る人に心移りては、身も徒らに、年頃哀れと思ひし人のなりけむ方も知らず、らうたしと思ひし子をも失ひてしかば、今はさる心をぞ思はぬ」か8（く）言ふ程に、鹿遙かに鳴く9。宰相、

鹿の音に戀ひまさりつゝ惑ひにし妻さへ添ひて思ほゆるかな

頭中將打ち笑ひ10て、「珍らしくも古里を思し出づるかな。うる11さき12かせなりや」とて、

色13かへの妻の14まに〳〵鳴く鹿15は君待つ人16は劣らざるらむ

校異 1[丙]ば。2[丙]る。3[丙]考異二字ナシ。4[丙]ナシ。5[丙]考異恨むに、[丙]考異こしむし。6[イ]る。7[国]らひ。8一字[イ]ニヨリテ補フ。9[イ]をアリ。10[丙]考異ナシ。11[丙]せ。12[イ]鹿ヲ云歟。13[国]深き木々。14[国]ひま。15[イ]に歟。16[国]に。

など夜一夜言ひて、曉に歸るとて、物など宣へども1人も答へず。源2中將「など3我等4思ふ心いみじかりけりと思へば、此所を見棄てゝ歸るこそ5いかならましな」中將「仲忠は思ふ心もなけれど、物の心もなど言ふやう6にあるにや」とて歸りぬ。かくて源宰相、かの四十九壇の7・修法に加持したる香水を硯の水にて、あて宮に、

「言の葉も身も限りにはなりぬれど涙は盡きぬものにぞありける

いでや、今までかう聞えさすべうもあらざりしを、今一度御返りをだに見給8ひて、9黄なる泉の10道にもと思11ひ給へ12出てなん」とて、兵衛の君にいみじく悲しき事を言ひて取らす。兵衛あて宮の湯殿13出で給へるに詳しく聞えて來れば、あて宮失くな14りぬとのゝしりしを哀れと聞し召して、返事や一行せましと思せど、聞えこそあれとて物も宣はず。

今案菊宴傷第十六卷歟
あてみやの事詳也

▽文化四丁卯六月十八日校合畢

〔同　十二年四月三日以本居氏本校合畢橡廬園

【校異】1 国二字ナシ。2 関宰相。3 国わが。4 石がアリ。5 石はかなか。6 異三字ナシ。7 関修。8 関へ。9 異殊がか。10 国道。11 関ら。12 国ナシ。13 国にアリ。14 関らばやと宣ひ知らせし。

かくて、あて宮東宮に参り給ふ事十月五日と定まりぬ。聞え給ふ人々惑ひ給ふ事限りなし。その中にも、源宰相、御兄の侍従は臥し沈みて、たゞ死ぬべしと惑ひ焦られ1て、2いみじう悲しき事3も書き連ねて、日4に書き盡くし聞え給へ5り。御返なし。惑ひ焦らるゝ中にも源侍従心一つに思ひて、臥し沈みて湯も水も絶えて死ぬべきに、大宮いと悲しと思して「など云ふかひなく6なりまさり給ふぞ。あてこそを関りいと切に召せば、何かはと思ふを、数多物し給へど、中将とそことをこそは、宮にも上7許されなどし給8ひつれば、さらむ折にも宮の内の事をも後見10 11たし。12この御13事をばそこに預け奉らむとなん思ふを、かく徒ら人にていますかる14ゝかいみじく悲しき事」と泣き惑ひ給ふ。いとゞしきに15かけて16も、宣ひ17つゝ物も18覚え19ず、あるかなきかにてぞ聞20ゆる。「月日の経るまゝに、かくのみなり勝り侍らば、なほえ侍るまじきにこそ侍るめれ。官爵をも人と等しく賜はり御覧ぜられむ21もは22になひも、御前の限りは仕うまつらんとこそ思ひ侍りつれ。かくながら止み侍りぬべきがいみじう悲しき事。数多おはしませども、

校異 1 初給ひアリ。2 宮考異四字ナシ。3 初どアリ。4 国ごとアリ。5 宮ど、宮考異れど。6 初はアリ。7 初にもアリ。8 宮へ。9 初め顧。10 初据ゑアリ。11 宮すべ。12 宮たゞアリ。13 国上。14 イ初ナシ。15 国つ。16 宮物。17 宮續くる事。13 宮考異思は。19 宮考異給はアリ。20 宮え給ふ。21 下六字国と思う給へる本意に叶ひ(宮てアリ)。22 初イちアリ。

中の御殿の姫君になむ1仕うまつらんと思2ひ給3ひつる。御宮仕への程などには、雑役をだにとこそ思ひ給ふる時しまれ、徒ら人になりぬる4ゝ事」泣5り〳〵聞6え、宮大殿に「侍従のいと頼もしげなう見ゆるに思ひこそ煩ひぬれ。いかならむとすらん」大殿「7うがいとほしき事8なるとこれしもかくあらん。我が子と云ふもの、いと面伏せ人笑へなるはなきが中に、これは成り出でぬべく、門9をも廣げ氏をも繼10(ぐ)べきしもかくあればいみじくなむ。すべて世11中いと騒がし12色これが煩ふやうに13皆人あな14り。源宰相も死15(ぬ)べしとなむ言ふなる。今年の16事としてかくなむあ17る。怪しく騒がしかりぬべき年とて、春の始より18人19盡くし給ひて、御嶽熊野詣、やむごとなき上達部、20おも立ちて山踏し給へる年にこそあれ」と宣ふ。

かくて御參り近くなりぬ。御12せう(〇調)度御22用意を麗しく淸らに調ぜられ、御供人大人四十人、23宮四位24の宰相の娘、髮丈に餘り長よき程に25、手書き歌詠み箏琴彈き、人の答する事皆上手、年二十餘の中26唐綾た27か絹28人交ぜず、皆赤色。童六人五位の女十五歲の内、容貌する行事大人の如し。29裝束唐綾の赤

校異 1イいかでアリ。2[因]考異う。3[因]へつ、[因]考異へ。4イ事と。5イ[イ]く。6イゆ。7イそ。8[因]など、なりと。9[イ]思ひ。10一字[因]ニヨリテ補フ。11[因]りアリ。12[イ]くなり、[国]宮、[因]かなり、[因]考異かり。13[国][因]考異なんアリ。14[イ]る。15一字[因]ニヨリテ補フ。16[イ]如く。17イなアリ。18[因]いと。19[イ]つゝしみ、[国]つゝしみ給ひ。20[イ]思ひ、[因]下り。21イ[イ]て。22[イ]装。23[国]皆。24[国]あるは。25[因]てアリ。26[国]装束アリ。27[国]だ、[因]だの。28[国]一つ。29[因]装。

色の五重襲の表の衣、同じ色の袿、蘇芳襲の唐衣着たり。下仕へ八人、手振の袖1は交ぜず、檜皮色にもみぢ2(もみぢ〔〇紅葉〕襲、侍の女ひすまし二人、皆かくの如し。かくて其3時になりて御車数の如4し、御供の人品々装5ひ着て、日の暮るゝを待ち給ふ程に、仲忠6ら〔〇忠〕の中将の御許より、蒔絵の置口の箱四7重に、沈の薫物より初めて、8薫9物10にて釣鍋の11ゝ、12あをの御調度13よき御硯箱14釵子元結櫛箱より初めて、ありが15たくて、御鏡、畳紙、たふまろより初め16て一17具、黄金の箱白銀の御箱に18薫物の合せ薫物入れて、沈の御調に白銀19青20ひとりかひ沈の灰入れて、黒方21に薫物の炭のやうにして、白銀の髪取の小さきに入れなどして、細やかに美しげに入れて奉るとて、御髪の箱にかく書きて奉22りたり、

唐櫛笥明暮物を思ひつゝ皆空しくもなりにけるかな

とて、孫23は宮の君に夏冬の装束して心ざす。御使さし置きて帰りぬ。かくて源中将夏冬の御装束ども装など置しうして、沈の置口の箱四に畳み入れて、色など清らにて、かく聞え給へり、

人知れず染めわたりつる袖の色も24げに幾入と見るぞ悲しき

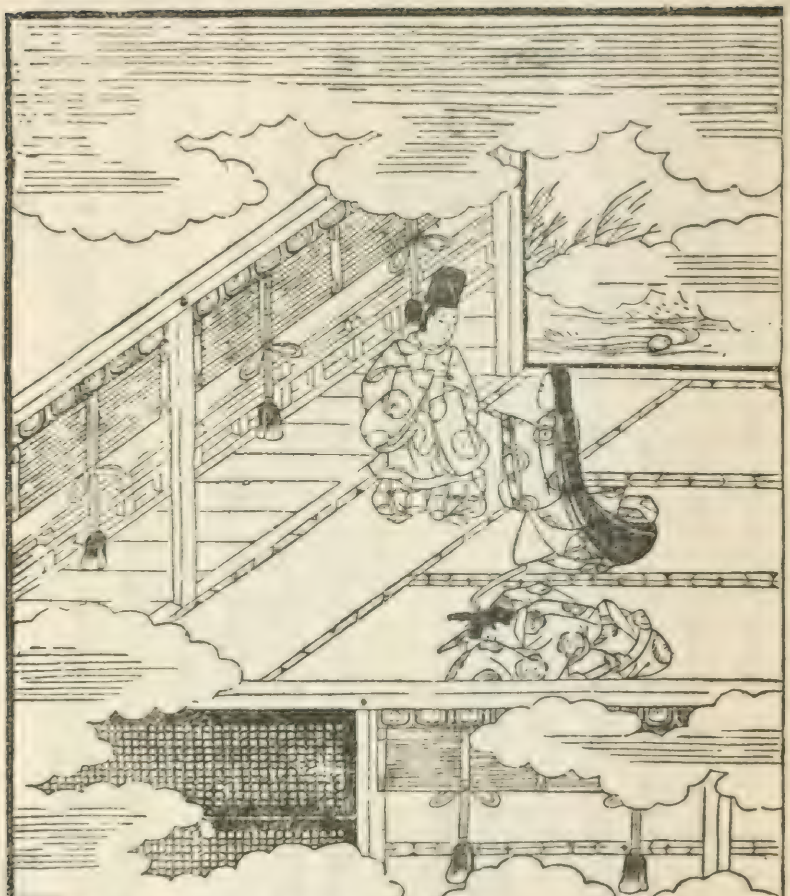
校異 1 異補せ。2 一字因ニヨリテ補フ。3 因日。4 因く。5 因東き。6 因ら。7 因つ。8 因四つ。9 因のアリ。10 因御裳り。11 因具。12 因銀髪上、宮御櫛匣。13 因四つ。14 因さつ。15 一字因ニヨリテ補フ。16 因考異ナシ。17 因具。18 因府。19 因のアリ。20 因一番、内火取に。21 イを。22 因れ。23 因わ、因王。24 イ今日。

とて奉り給へり。宮大殿見給ひて、「1え知らず麗しきものどもかな」とて、「留むれば2あり3、返せば情なし。物は警策なる4えう〔○要カ〕の物なり。なほ留めつるなり」とて笑ひ給ふ。源宰相さるいみじき心地に5え聞6き過ぐし給はで、兵衛の君に装束して心ざし給ふとて、

「燃ゆる火も泣く音にのみぞぬるみにし涙盡きぬる今日の悲しさ

7など聞え給ふべき際あらばかく聞え給へ。萬の事、8忌れ聞えねど、物も覺えず。」となむ宣へりける。かかる程に、「侍従の君、人面も知らず、口惜しうなりぬ」とのゝしる。宮大殿、かつは思し騒ぎ、かつは9ま10つり〔○參〕の事思し急ぐ。大宮局にさし覗き給ひて、「只今はいかにぞや。この11ま12つり〔○參〕の事13くも物すとて、え見奉らずや」侍従「限りにこそあめれ。今一度かの御方に對面14を賜はらずなりぬる事」と聞ゆ。宮「あな15ゆゝしや、などかさあらむ。16さ17まれ、今物し給へ18と、さ物せむか19くし。今日はと思へど、あないみじや」とて、涙を流し給ひて、あて宮に「侍従のいと心細く物しつるを、渡りて見給へ。物の始に、いとうたてと思へど、對面せんと物しつれば」など宣ふ。あて宮心憂しとは思せど、宮聞え給へば渡り給ふ。宮大殿の住み給ふ北の御殿に臥し給へり。あて宮、その頃御容貌の盛りなり。長五尺に今少し足ら

校異1〔イ〕言ひ。2〔国〕憚りアリ、〔図〕事アリ。3〔図〕顔なりアリ。4〔国〕や、〔図〕考異こ。5〔図〕ナシ。6〔図〕え。7〔図〕二字ナシ。8〔イ〕忘。9〔国〕御アリ。10〔イ〕ゐ。11〔図〕御アリ。12〔イ〕ゐ。13〔図〕ど。14〔図〕ナシ。15〔図〕考異いみじ。16下四字〔イ〕例様に。17一字〔国〕ば。18〔イ〕ナシ。19イナシ。



ぬ程、いみじ1き姿をかしげに、御髪の麗しくをかしげに清らなる、黒紫の衣を着せること、生ひたる限り末まで到らぬ筋なし。日出たきこと限りなし。今日はまして心殊に見え給ふ。兵衛の君孫2は（○王）の君ばかり御供にておはしたり。侍従の君見奉り給ひて、とみに物も聞え給はず、辛うじて「今日や参り給ふ。御送りをだにえ仕うまつらずなりぬる事。生きて又3御對面賜はらん事難くもあるかな」と涙を流して聞ゆ。あて宮「心にもあらずのみなむ。いでや、などかはかくのみは物し給ふらむ」侍従「なほえ侍るまじきにこそ侍るめれ。萬の事心細く悲しき事」と聞ゆ。あて宮「さ4ろ思し入れそ」とて立ち給5ふ。

臥し轉び唐紅に泣き流す涙の川に沸る胸の火

と書きて小く押し揉みて、御懐に投げ入る。あて宮散らさじと思して、取りて立ち6たり給ひぬるを見るまゝに、絕え入りて息もせず。宮大殿、あるが中にもかなしき7かゝるよりも、萬の故障を凌ぎて思ひ立ち給へる御參り延び8ん事、この度せずなりなば、終にせずなりなん事と覺すに、たゞ惑ひに惑ひ給ふ。「あなかま。轄し物な9見そ」とて、君達男女集ひ給ひて、惑ひ騒ぎ給ふをも知らず、外には御車どもを装束き設けたり。皆人物も覺えず、さかしき人もなし。源宰相も、參り給ひぬと聞きて絕え入り給ひぬれば、大殿には騒ぎ滿ちてのゝしる。上達部皇子達物思ほし歎く中に、たゞ源氏の中將藤の中將いみじう悲しと思ひなむ

校異1囯く。2[イ]王。3イナシ。4イ[イ]な。5国へば、囡へるを引き留めて侍從。6[イ]さっ7イ子のアリ。8国なアリ。9イ言ひ。

から、世中ははかなきものなり、かく參り給ひぬとも限りと思はじと心強う思ひて、御送りもせむと思ひて
いましたり。頭少將も臥し沈みて久しくなりぬるを、かねてより思ふやう、いかでこの參り給はん御送りをも
仕うまつらむ、いさゝかなる事も殿のし給ふ度ごとに參らぬはなきを、やむごとなき事にしも參うでざらむ、
數ならぬ身に思ふまじき事1と思ひ初めたるが過2こそあ3れなど思ひて參りたり。かく皆集ひて御車寄
せて、時なりぬと聞し召すまゝに、4宮大宮くだうう〔○百濟〕の色して6臥して、顏を立て給へどかひな
し。あて宮7大殿のかく思し歎き、殿の人の參らせじとのみ思ふが聞かむ事など思して、いみじく惜しき事
をのみ聞8えつれど、耳にも聞き入れ給はぬ9 10心ながら、かく聞え給ふ。

「別るとも消ゆべきものか瀬川行く末もある物と頼らなむ

など思し入11りそや。いといみじく白雲へつゝ、心憂しとは思ふ物から、いとほし。12と13など書きて「これ、
かの君に奉れ」と宣ふ。兵衞の君「大殿宮君達なくおはしまし、かの君は云ふかひなくなり給ひぬるもの
を」と聞ゆ。あて宮「たゞはとて奉れ」と宣ふ。兵衞よき折持て參りて、お前に宮大夫に聞え給ふ、この頭か
く煩ふを、物14眠らせつれば、女15となむ言ひつる。たゞ今何業をかはせむ」忠こそ阿闍梨の御許に御文
遣はす。歎きて參り給16つり。内に召し入ると17て、宮女君達し18て〔○退〕き給へ19る、20物覚えの君の御

【校異】1圀ナシ。2イにアリ。3圀なアリ。4圀侍從。5圀ら。6イうつアリ、圀うつぶしアリ。7イにアリ、
圀もアリ。8聞き見。9圀御アリ。10イ心地。11圀るぞ。12圀ナシ、圀や。13イ二字ナシ、圀や共と。
14圀聞は。15圀のアリ。16圀へ。17圀ナシ。18イ〻。19圀り。20圀折なれば兵衞近く參り寄りてアリ。

手に、この御文を押し入れて、指の先して、腕に書きつ1「これ2は御方の御文なり」侍從死に3果つるに、4露ばかり落しいる。大殿「忠こその御験あり」と喜び給ふ事限りなし。かく瞬くを見給ひて、明日は5まろとも今宵參らせんと思して、大殿君達6が立ち給ひぬる程に、この御文見て物7はつかに言8ふ。喜び給ふ事限りなし。かくて御車二十、絲毛9六10に黄金造り十11に12こるい車13一下仕へ車二。御前、四位卅人五位三十人六位數知らす、皆よき人なり。かくて參14り、すなはち參う上り給ひぬ。御供の人能出給ふ。源少將木15（〇エ）の君に會ひて、頓に物も云はで涙を流す事限りなし。「年比いとも畏くて、物馴れたるやうに御覽ぜられつるを、何の報にかありけん、拙き身にお16ほせなき心つきて、今まで侍17るべくも覺えざりつれど、御送りをだに仕うまつりてこそとて。いでや、君に對18面する事さへ限りに覺ゆるこそいみじう悲しけれ」とて、

今はとて振出る時は紅の涙止まらぬものにぞありける

とだにさかしうも言はで、泣き惑ふ事限りなし。木19（〇エ）の君「心細くも宣ふかな。年頃はげに心ざしありて20きえ給ふと見奉りつれど、かく參り給ひぬるがかひなき事。いでや、一所にもあらず、いとほしく

校異 1 团く。2 团ナシ。3 团侍。4 イ湯アリ、因御湯アリ。5 イ罷出、因能出る。6 团ナシ、因の。7 团僅。8 团ひ。9 因考異十。10 因つ。11 因一、因考異なり。12 イ髫髮。13 因考異二。14 团る。15 团く。16 团ふけ。17 团りぬ。18 因面。19 团く。20 团イ聞。

ぞ承はるやと1聞く、

深き色に君しもなどか振出べき誰も止まら2ぬ涙ならぬを

世の常に思しなせかし」少将云ふばかりなく泣き惑ひて、歸りてすなはち法師になりにけり。

〔書詞〕これはあて宮の内裏に参り給へる。3これは御車4ども引き立て5たり。下り給へ6る。大人7は童群れて歩め8る。これ9に御局。10かへ〔〇上〕に参う上り給へ11る。孫王の乳母御使に來たり。源少将木12て〔〇工〕の君13かと物語りし14給ふ。

かくて宮参り給ひにしより、参う上り給はぬ夜なく、御局に宮渡り給はぬ日なし。萬の事せぬ業なく上手に物し給へ15る、御遊び敵にし給ふ。宮に侍ひ給ふ人々、大将殿、大宮の御兄弟、同じ后腹の16小宮と聞ゆる、左大臣17の18御君、19右大臣殿の大君、右大將殿大君、平中納言20、かく侍ひ給ふ中に、21小宮右大将殿なむ時22におはしましける。異人はよろしく23、左大臣殿24あるが中に年老い容貌25も憎26し、27時なし。心の悪な28き事二つなし。29君達また30むれ給はず。かくて、あて宮参り給ひて、また人ある31ものとも知り給

〔校異〕1〔イ〕聞えて、〔国〕考異て〔〇コレハ地ノ文章ナリ〕。2〔国〕ん。3〔イ〕三字ナシ、〔国〕所。4〔国〕考異二字ナシ。5〔イ〕二字ナシ。6〔イ〕り。7〔国〕ナシ。8〔国〕り。9〔イ〕は。10〔イ〕う。11〔イ〕り。12〔イ〕く。13〔イ〕ナシ。14〔イ〕たり。15〔国〕れば。16〔国〕四の。17〔イ〕殿アリ。18〔国〕大い。19〔国〕下七字ナシ。20〔イ〕の君アリ、〔国〕殿の君アリ。21〔国〕四の。22〔国〕々。23〔国〕おはしませどアリ。24〔国〕のアリ。25下三字〔国〕醜く。26一字〔イ〕き、〔国〕く。27〔国〕あへ。28〔イ〕さ。29〔国〕達す。30〔国〕生。31〔イ〕二字ナシ。

はず、打ち延へ參う上り給ふ。稀に人の宿直の夜は、夜更くるまでこの御局にのみおはしまして、御遊びなどし給1ひて、かくて二日ばかり有りて、參う上り給へるつと2（めて）、春宮、

珍らしき君に逢ふ夜は春霞天の岩戸を立ちも籠めなむ

と宣ふ。あて宮寢給3あて宮4へるやうにて物も聞え給はず。かゝる程に5姙じ給ひぬ。

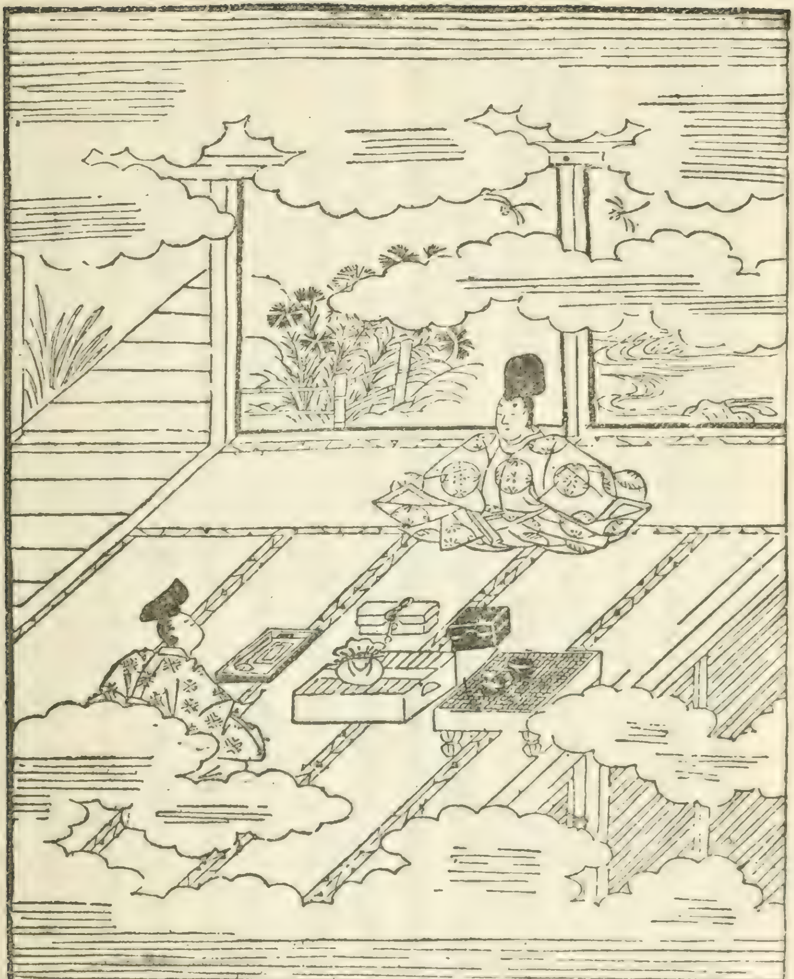
【畫詞】此所は6大將殿の御局7見に8、あて宮9中納言10君年十九、孫11わ（〇王）の君二十一、帥の君十七、宰相12 13御許十八、兵衛の君廿、中將14小辨15小大夫の御木工の君少將の御、16少納言左近右近17衛門など云ふ人いと多かり。18こない〇髫髮など御前に侍ふ。左大辨の君參り給へり。そこに宮おはしまして、19箏の20御琴遊ばす。あて宮と御21琴あそばす。大將の大殿御局に參り給へり。宮「なほ此所に」など宣はすれば、御前に侍ひ給ふものなど22こし給23ひて、「仲純はなどか久しく參らぬ」大將、「日頃淺ましく病に沈み侍りて、交24 25さら26 27にてなむ侍る。萬の神佛に願を立て侍れど、今は頼むべくも侍らず」宮「らうたき28かな。おほ29（や）け（〇公）にも仕うまつりぬべく見えつるものを。實忠の

【校異】1〔イ〕ふ。2二字イニヨリテ補フ。3〔イ〕三字ナシ。4〔イ〕ひた、〔イ〕ひつ。5〔国〕孕み、〔イ〕臥し。6〔次〕東宮アリ。7〔次〕ナシ。8〔次〕參り給ふアリ、〔次〕御年十五アリ。9〔イ〕のアリ、10〔次〕のアリ。11〔イ〕王。12〔イ〕のアリ。13〔国〕の君。14〔次〕の御。15〔次〕御。16〔次〕三字ナシ。17〔イ〕右アリ。18〔イ〕う。14〔イ〕箏。20〔国〕異本碁。21〔イ〕碁。22〔イ〕聞え。23〔次〕ら。24下二字〔次〕らは。25一字〔イ〕は。26下二字〔国〕で。27一字〔イ〕ず。28〔イ〕事アリ。29一字イニヨリテ補フ。

御前もさ1う云ふなる。怪しう人の愛子どもなどかゝらむ」と宣ふ。

かくて2二月中の十日、年の始の庚申出来たるに、春宮の君達御局ごとに3、あて宮さ4しめ5〔前〕より、殿上帯刀の陣に庚申物出ださむと思す6、よき折なりとて殿に聞え奉れ給ふ。宮の御前には、金の御壺に黄金の毛打、白銀の折敷三十黄金の御盃。御に7つ〔〇〇〕の打敷は花8ふ緞に縫重ねたり。檜破籠五十9、ただの御膳五十10荷。御膳は御方々にし給ひ、たどのは殿に仕うまつる受領どもに仰せ給へれば仕うまつれ11る。掛物は政所より、四目石ばかり、12檜皮の木の瓜十、果林の木に13実附つけたる中取十に据ゑ、一尺三寸ばかりの14わた木の15もるに、生物乾物鮑鮨貝つ物長高く麗しく盛りて、16 17はとはきひとはきの脚付けたりし18玉山どもも据ゑて、一石入る19瓶十に酒入れ、菲代20に銭三千貫、紙屋机に積みて、色々の色紙積みて21十。22たる厨殿の机に絹の紙、綾錦香衣など積みて菲代にしたり。かづけ物、女の装束23くり褂など設けられたり。大宮君達参り給へり。物ども一度に持て連ねて参る。見物なり。内裏より24贄、宿に入れて、よそ御酒の大御酒など召して、殿人木工寮を国庭にて、これは25にての26と雅なり。宿物

〔校異〕1イナ〇、国は。2異本かはりてアリ。3国まかなひし給ニアリ。4国ら。5一字イニヨリテ補フ。6国にアリ。7疏い。8国文、国容。9国荷アリ。10国ナシ。11見ゆ。12国入れる檜。13イ袴の、国紛い。14国鳴。15国物、国鳴。16下八字国根朴の木に姫。17下二字イナシ。18至考異同ら。19国桶。20国の。21国中。22国冷。23イ誰。24国白き。25国思こそ。26国考異そめう、国考見けふ〔〇〇〕実カ」。



にとて」など宣はせたり。源中將の許より、沈の割籠十荷。入れたる1ゝの、飯には白粉篩ひて入れ、敷き物袋など目出たうし2く奉れ給へり。3頭中將白銀の透箱十、合薫物、沈のつ4か〔○鶴〕したる5透箱6銀黄金の硯箱など揃へ、唐の錦のいと淸らなる、沈の7箱に白銀黄金の筋やりて、白銀の碁石笥に白き8なる紺瑠璃の石9つゝもりて、雙六の盤てうとかくのごとくにて、樣變へて、碁代の錢白銀にて、同じ箱にて奉れたり。大殿見給ひて、「怪しく煩ら10(は)しき業せらるゝ中將達かな」と宣ふ。かくて、内裏に設けられたる御調度などは、あるべき11に12まくらせ給ふ。13よろには割籠三十荷ばかり、頭中將の奉れたる透箱一14てながら15(奉れり)。裏親16の所割籠17五代など添へたり。18小宮の御方に、殿に設け19くれたりし箱、御割籠添へて奉れ給ふ。殿上より初めて宮の内所々の帶刀の陣まで、割籠20五代など淸らにして賜ふ。内裏の殿上藏人所21まで侍從所衛府の陣まで、中取脇22脇23碁代の錢紙賜ひ渡しつ24ゝ。かくて、上の御使の藏人に、白張袴かづけ、御返り25(には、「畏まりて承りぬ」)。26此の＝27きうの下しの多く候ひけるをなた28もの時過ぎ去〔○ざか〕りせばと見給ふると」聞え給ふ。中將達の使にも白張袴かづけて、御消息言ひに遣はす。

校異 1イ物。2國て。3國藤。4國る。5國硯。6國白銀のアリ。7國絵。8國玉。9國作。10一字イニヨリテ補フ。11國まゝアリ。12イまつ、國まい、國奉。13國宮。14國具。15三字國ニヨリテ補フ。16國ナシ。17國非。18國四の。19國ら。20國碁。21國二字ナシ。22國のアリ。23國にアリ。24國ナシ。25下九字國ニヨリテ補フ。26下九字國ナシ。27一字國考異め。28國こ。

内にも宮殿上人集まりて、1●攤打ち遊びするに、2●聲いと3●近き御局なれば、宮渡り給へるに、あて宮起き4●居給へり。「あないざとや」など宣ふ程に、雁多く連れて渡る。「5●都の雁は何地ぞや」と宣ふ。中將仲忠、

連れて行く雁が音聞けば飽かでのみ春の宮よりか6△つ〔〇歸〕るとぞ聞く

宮の御7●歌、

飽8△りでのみ別るゝ雁の手向には花の錦も閉ぢられぬかな

左大將、

青柳のいとゞ惜しとて鶯の雁の手向9（も）閉ぢずやあるらん

源中將、

歸り行く雁の羽風に散る花10●のおのが手向の錦とや見む

中將實頼、

故郷へ翼休めず飛ぶ雁も今宵は此所を過ぎず鳴くなり

左兵衛11佐、

白雲の雁の手向の錦とや山の羽風に織り亂るらむ

〔校異〕1 因考異恭。イ上。3 イ高。4 イナシ。5 イイ宮、此。6 イへ。7 イナシ。8 イか。9 一字イニヨリテ補フ。10 イイを。因のアリ。

左近1中將、

　續びて別るゝ雁の古里2は今や飛ぶらん天の羽衣

中將祐純、

　花を3織る春は惜しめれど鳴く雁のか4くれる數を知る人のなき

左衞門5佐、

　鳴く聲に浮べる雲の行き交ひて何處に待つと契りおきけん

などこれかれ言ひて、6夜くる平明女の裝か7へて、8御簾、9開くる平明10參らせ給ふ。源中將の沈の細簡、片つ11くはた二籠藏のた彈の御許へ奉り給ふ。

頭注 此所12にあて宮。御遣いと多かり。御前面すき物語いと多かり。左大臣殿13御前いとよ14(か)〔○近〕し。殿上人15のゝしるを聞きて「御の夏犬なれば、集まりてかまし〔○聲カ、欄カ〕16せにはあらずや」物かづき17したるを見て、「二條18なり19多くしてとめるかな」20こと言ひて居給へり。兩中し給はず。「御遊白き衣の襲けたる薄色の裏など着て、殿上人ばかりぞ居たり。若年卅21ばかり、參覧し。い

校異 1國のアリ。2囝ヤ。3國礼。4国へ。5國のアリ。6五字國ナシ。7國づく。8國二字ナシ。9五字囝ナシ。10國囲、ども御方々にアリ。11囝ら。12囝に。13國の君のアリ。14一字イニヨリテ補フ。15國のアリ。16國夜。17囝ナシ。18國の。19囝イおぼ〳〵しく。20囝など。21囝八アリ。

かめしく太り給へり。此所1に大殿。殿上人三十人ばかり、物かづけ給へり。これ2（は）右大將殿の御局3は、4今暮の御5腹年十八。かた6（ち）淸らなり。御達二十人ばかり、裳唐衣著て侍ふ。庚申し給へり。殿上にわ7か〔〇割〕鬚8共荷。碁代に錢廿貫出だし給へり。な9（ま）めきてし給へり。青き透箱陸奧紙、青紙など積みて出だし給へり。これは10小宮の御局。11（宮）おはします。御年廿。御達いと多かり。大人十五人童四人。庚申し給へり。これは12中納言殿の御局。君年13て六14歲。容貌いとをかし。御兄弟の藏人式部の丞居15たり。「目出たくも大將の君16おほかする17ぞや。」式部「彼は心異なる人ぞや。誰もえ竝び給はじ」と云ふ。

18源少將は山に籠り19にし日より、こ20ゝ〔〇穀〕を絕ち鹽21絕ちて、木實松の葉を食きて、六時間なく行ひて、淚を海と堪へ、嘆を山と負して嘆き亘るを、帝より初め奉りて、惜しみ悲しまぬ人なし。中に大將殿22の「思ふ23心やありけん。あはれ」など宣ふ。高き山を尋ねつゝ、殿上人君達24訪ひ給ふを、自ら25におはしつゝ訪ひ給ふを、頭中將源中將兵衛26佐などは、27をかしき28弄びしも29のを、をかしと30少將を31呼び

校異　1国は。2一字团ニヨリテ補フ。3团ナシ。4イ今宮、国大宮、因大い君。5国方。6一字イニヨリテ補フ。7团り。8团廿。9一字イニヨリテ補フ。10国四の。11一字因ニヨリテ補フ。12因平アリ。13团十。14国ナシ。15因給へ。16团をほかする、团をほりする、国おほすかる、因おほする、因考異おもほする、因考異おほかなる。17团イかな。18因かくてアリ。19因ナシ。国く。21因をアリ。22因ナシ。23因考異御アリ。24五字因ナシ。25团も。26因のアリ。27因うるは。28因御遊び相手なり。29团五字ナシ30因惜しみてアリ。31国戀ひ。

て、花摘べかてら水の尾におはしたり。少將よろ1（こ）びて對2面して物など言ふ。人3に淚を落さぬはなし。頭4中將一言5ろ侍、などか6らく思はぬ樣にては物し給ふ。な7る（○侍）思等片時世に經べき心地もそれども、朝に仕うまつらんと思ふ心深ければ、暫し交らひ侍れと、かくておはするを見奉り侍れば、先づ悲しくなむ」とて、

打ち見れば淚の川と流れつ8ゝ9別れ10ても淵瀨を知らぬ身11なれば

少將、

世の中12に思ひ13出でにしむこそ深き山邊の瀨なりけれ

源中將、

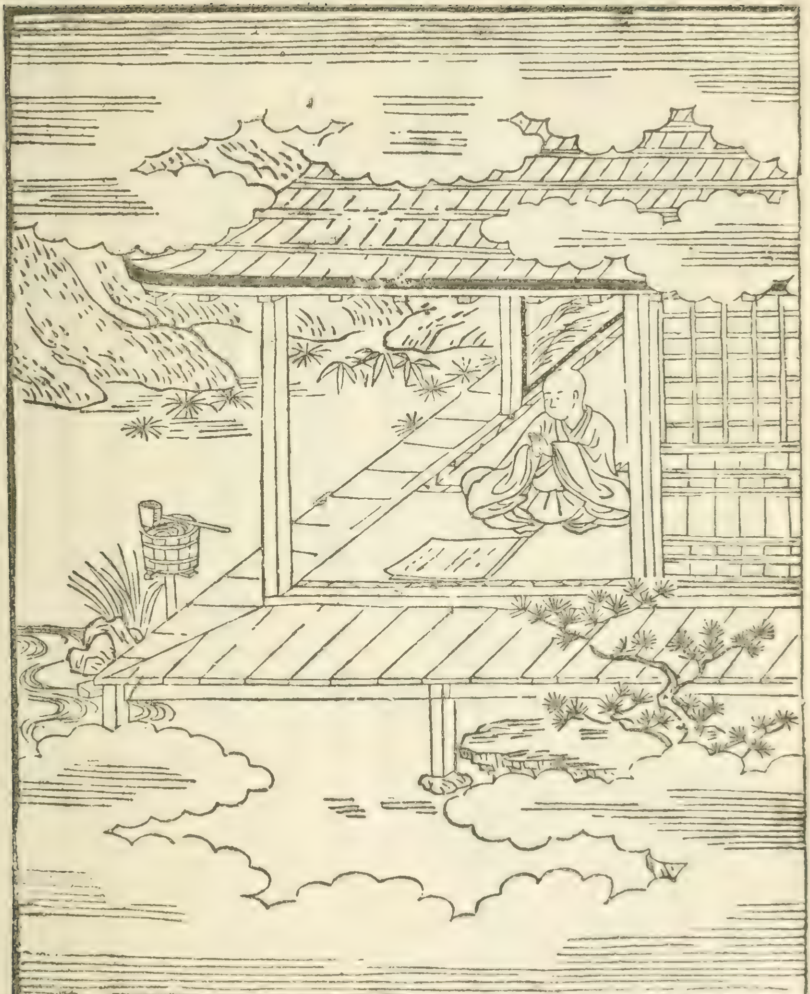
鶯の遊びし花の枝には深山の奇の生ひんとや見し

と泣く〳〵物語して歸りぬ。大將殿の引出物し給ひ14つるにも厭15ひし給ひて、物語などして歸り給ふにつけて、あて宮の御許にかく聞え給へり。

紅の袖ぞ吾身と思ほえし今は墨くも染むる淚か

これたらぬはなきこそいみじ15く（ゝ）」など聞えたり。あて宮樣しくもなりにけるかな、物言ひし時名もせずな

[校記]1 一字イニヨリテ補フ。2 因而。3 爲ス。4 因のアリ。5 因か。6 因か、因ナシ。7 因か。8 因る。9 下三字因我。10 下三字因藏思ふ。11 因は。12 イぞ。13 因イ入り。14 因へ。15 因曲。16 因さ。



りにしを、かく哀れになりにたる事、今は何かはと思して、

今はとて深き山邊に羅染の袂は濡れぬ物とこそ聞け

と宣へり。少将見て涙を流して、此の御文を伏し拜みて、思へば、我がこゝ1ちの年2皆に從ひて3聞えしかど4も、一文字の御文書き給はゞ5ん、御顏をだに見ざりしかど6、我が佛7道の叶ければ、參り給ひて後一行にても見るなりと思ひて、長き寶にすべし。

〔山寺〕8水の尾9と高き山の頂に、西塔の檜隈など10あり、外にをかしげなる路あり。此所に藤上人いましたり。少将11 12あまり13の峻岐かにて對14面し給へり。山の上より大いなる瀧布に落ちたり。弟子一人は若うより上に使ひつけ給へる15童子一人16、17それも18内舍人に使ひ給へる。色々の花の木茂く生ひたり。こと19はり〔○小島〕目に近く巣20立てり。少将堂を造りて念21じたり。一澤湯に入れて22時せさせたり。

23宰相24も參り25にしよし26さゝ果てゝ、ふよ27り〔○不盆〕になり28にければ、29坂内に、東坂本に小野と

〔校異〕1 [illegible]ちカ、[illegible]ら。2 イ頃日。3 [illegible]來。4 [illegible]ナシ。5 [illegible]す。6 西考異もアリ。7 [illegible]のアリ。8 西此所にアリ。9 [illegible]ナシ。10 イりなる、[illegible]る中。11 西考異のアリ。12 [illegible]阿闍梨、イ[illegible]、[illegible]。13 西考異ナシ。14 [illegible]面。15 [illegible]童。16 [illegible]はアリ。17 [illegible]こ。18 [illegible]ナシ。19 [illegible]ナシ。20 [illegible]くれた。21 [illegible]あし。22 [illegible]。23 [illegible]かくてアリ。24 [illegible]ナシ、[illegible]は。25 [illegible]給ひアリ。26 [illegible]聞き。27 イう。28 [illegible]給ひアリ。29 [illegible]大殿打ち驚き給ひ。

云ふ家に1行きて、大願たて、萬の神佛に祈りて、泣き焦(こが)れつゝ惑ひ2ければ、辛うじて生きたれど、あ3つしやうにもあらず、宮仕へもせで、たゞつれ〲とあり經4れど悲しく覺ゆれば、小野より兵衛の君の許にかく聞えたり、

「かくばかり消ゆる我身に年を經て燃ゆる5思ひの絶えずもあるかな

何れの世にか思ふ給へ慰めむ。あないみじや。」と聞えたり。あて宮見給ひて、哀れと思せど、物も宜はず。

源宰相悲しく覺ゆれば、三月晦日(つごもり)がたにかう聞ゆ、

かけて云へば　塵6も碎くる　魂に　深き思ひの　盡きしより　7(8入り)江の床(とこ)に
年を經て　列(つら)を並べて　住む鳥の　行方(ゆくへ)も知らす　鴛鴦(をし)の子の　立ちけん方も
思ほえ9で　黄なる泉に　消えかへり　涙の川に　浮寐して　今や今やと
賴み來(こ)し　君が心を　限りぞと　思ひし日より　山里に　獨り眺めて
燃えわたる　深き10山邊と　滿つ潮は　袖の濕るまで　湛へ11ども　みるめ求めん
方もな12く　今はかひなき　心地して　名殘ぞ物は　悲しかりける

など聞えけれど御返なし。13なく覺束なけれ14ば、更に忘れ聞えず、15なり〲につけてなほ聞えけり。交(まじ)

〔校異〕1因お。2イ給ひアリ。3イり。4因なほ。5イ煙、円心。6国と。7二字円ニヨリテ補フ。8国古る。9因ず。10因海。11円て。12因考異し。13イか。14因考異ど歟。15イを

らひもせず、宮の御許へも參らず、眺め給へり。

〔評〕此所は源宰相小野におはす。兄弟の中將1はいましたり。大殿御文あり。

かくて侍従の君も參り給へ、2り2日もなくなり給ひにしかど、御消息にかゝりて、ありつる御思ひは月日に添へて勝り、身は唯々〳〵なりつゝ、え堪ふまじく覺ゆれば、あて宮にかく聞え給ふ、

「云ひも見てもつひに止まらぬ水の泡7を水脈りてこそあるべかりけれ」

かくまで聞えて、あるまじく覺えしかば、聞え初めて、侍らざらむ世にも思し出でむこそ、いとも8いみじう猥にしければ、いでや、君が君の御爲めには、身の徒らになりぬるも思ひ給へず。今一度の御返り御返事にも、ずなりぬるを思ひ給へ、10つらなむ」と聞えたり。あて宮見給ひて、あるが中に、いかでと思ひ聞えし人の、怪し11く心の見えしかば、「宇し」と12は覺え給へ「〇ひかゞしかど、かう心細く言へる事、心憂く、などこの君にしもかく思されけんなど思して、かく聞え給ふ。

「同じ野の露は何れと分かねども先づ消ゆとのみ聞くが苦し13き

かく來はるもいとほしうなむ。」と聞え給ふ。侍従見給ひて、文を小さく押し14包みて、湯して飲み入れて、紅の涙を流して絶え入り給ひぬ。賢の中將ら15て、思ひ焦れ給ふ事限りなし。あて宮聞し召して、いみ

〔校〕1 岡も、岡ナシ。2 日る。3 イ缺。4 貴はかアリ。5 冚く。6 イ蒼、同出。7 頃め。8 イ〳〵アリ。
9 冥加。10 同ナシ。11 イき。12 冥ナシ。13 イき。14 イ輪く。15 爰る。

じく悲しと思す。かゝりけるものを、年頃心苦しくのみ宣ふ時、など答へざりけん。はかなかりける世の中に、辛しと思1ひ給2へけん事など思ひて、いみじく泣き給ひて、「罷出なむ」と聞え給ふ。宮「怪しくなどかくしも思ほす。數多物せらるゝ御子にこそあめれ。いたくな3くげ〔○歎〕き給ひそ。服などはあからさまにいでゝ著給へかし」など聞え給へど、なほ常に聞え給ひし事のみ思ほえて、いといと思す事限りなし。

かくて4兵部5卿の主、あて宮の御爲めにとて家を造りて、調度を設けて、心一つによき日を6取りて、御迎7ひにとて、子ども家の人率て出で立ち給ふ。ある人「あて宮は春宮に參り給ひにけり」と云ふに、治部8卿の主、家の中ゆ9つり滿ちて、怒り腹立ちて云ふ10ほこ「いかでか、天下に國王大臣にもいますが11れども、諸人の12きざしおきて、13緣の方に家を造り關を建てゝ日を待つほど、かくはせさせ給ふべき。ます14を〔○貢〕擢き身にはありとも、おのが妻15り16かねを人に掘らせしめてはありなむや。政事畏き世に、17これ〔○訴〕へ奉らむ」とて、訴文を作りて、18文挿に挿みて出で立ち給ふ。若干の子ども、少將より初めて、「宮仕へを仕うまつりつゝ、官爵の欲しき事は一所の19御爲めなり。かくあるまじき事を申されば、人の

校異1〔イ〕ふ。2〔イ〕ひ。3〔イ〕な。4〔国〕治。5〔次〕のアリ。6〔次〕選。7〔イ〕へ。8〔次〕のアリ。9〔イ〕すカ、〔国〕す。10〔イ〕ほど、〔次〕やう。11〔次〕ると。12〔次〕聞え。13〔次〕御爲め、〔次〕考異男方。14〔イ〕けカ、〔国〕げ。15〔イ〕ナシ。16〔イ〕ナシ。17〔イ〕う歟、〔イ〕か、〔国〕う。18〔イ〕文。19〔イ〕定め。

国境までも追ひ遣はされ、流罪の罪ともならばいかゞせん」と1手を摺る〳〵申す。治部卿の主太刀を抜きかけて「汝等が首を只今取り2て、汝3は我が敵とする大臣の方によりて、討らしむる奴なり」と言ひて、太刀を抜きさらめかして、片端より追ひ排ひて、冠を後様にし、表の袴を逆様に著、片足に足二つをさし入れて、夏の袍に冬の下襲を著、4日競ひて、飯匙を5皿に取り、靴片足草6鞋片足、踵をば鼻に穿きて、徒7から参りて、帝の御前に出で給へるに、立ちて、白き鬢髭の中より紅の涙を流して訴へ申す、文を見給ふに、言ふ限りなく辱なき事を8譲れり。驚き給ひて、治部卿の主9伊豆の権守、兵庫の少将を長門の権介に、蔵人の民部丞などそこばく10らの子ども放ち遣はされ渡し給ひて追ひ遣はす。少将泣き歎く事限りなし。

図画 此所は治部卿廊立ちて、太刀を抜きて子ども追ひ棄てたる所。女ども太刀を取りて、11五体を12 13地14ちて投げる。男六人女四人手を摺りて手に物云ふ。これは流されたる15ろ、驛車に乗りて行く。子ども結牒に乗りて行く。非違の別当な16して追ひ遣れり。

かくて致仕の大臣、かゝる事を聞きて、水もす17らら18せ泣く〳〵云ふ19ほどに、「我昔より食ふべき物20も食はず、著るべき物21をも著ずして、天の下22誇られを取り、世界に名を施して財寶を蓄へし事は、死ぬべ

校異 1 国て過る。2 国なん、国てむ。3 国等アリ。4 国禍負。5 イ易。6 国鞋。7 国から、国より。8 国作。9 国をアリ。10 イ引く。11 国額。12 下六字国土につけて歎く。13 一字国土。14 下二字国に。15 国り。16 イどアリ。17 国す。18 国で。19 国やう。20 国をアリ。21 国ナシ。22 国にアリ。

きいの1り(〇命)なれど、難き事も財寶(たから)持(も)たる人は心に叶ふものなり。今2を大臣の位を譲りて、たゞ思ふ事この事一つなり。そ3の叶はずば今は我が財寶あるにかひなし」とて、七條の家四條の家4え初めて、かたはらより火をつけて、片時に焼き亡ぼして山に籠りぬ。

かくてあて宮出でさせ給へる5ほとめて、6大進を御使にて、「夜の間(ま)もいかにと覺束なく、急ぎ聞え給ひしかな。」とて、

夕されば宿りし花もうつろひて思ひ消ぬべき秋の夜の露

とあり。あて宮、

色々の花のなか7るる白露は萩の下葉を思ひしも8出じ

とて、御使に紫苑(しをん)色の綾の細長、袴一(ひと)9具(ぐ)かづけ給ふ。月たちて又宮より、

逢ひも見で月日隔つる我中に衣ばかりを何恨みけん

あて宮、

年月も衣(きぬ)も間(ま)には多くとも心ばかりは隔てざらなむ

又宮より、

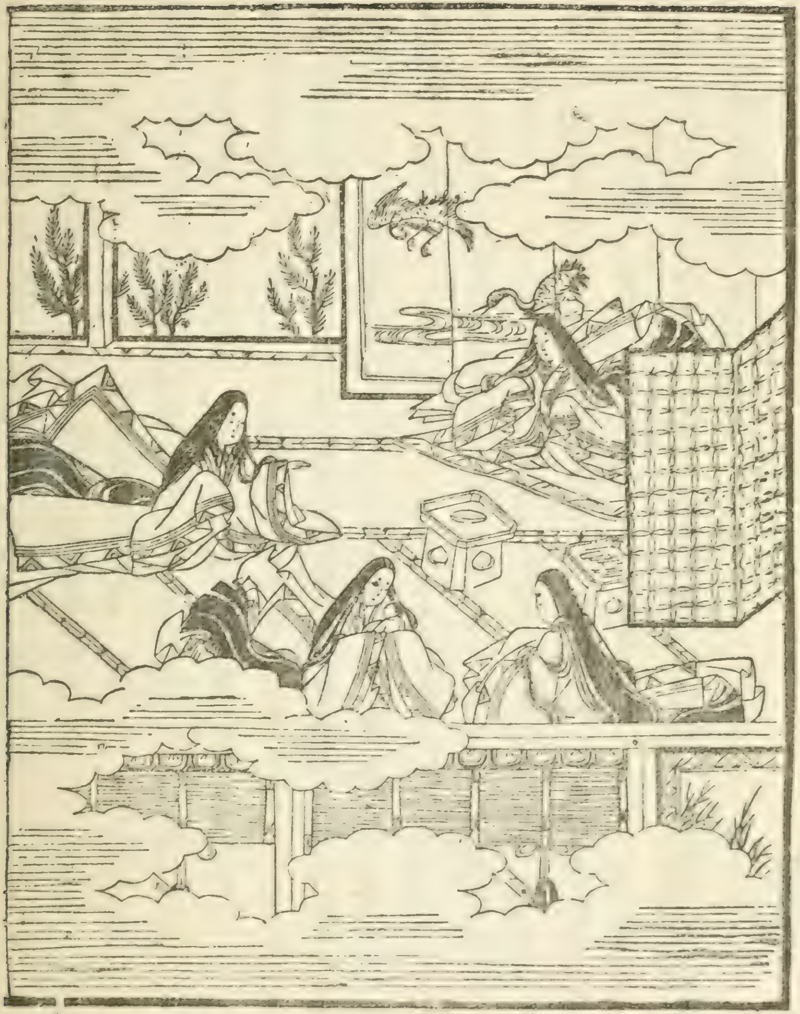
餘所にのみかく永らふる袖よりも人待つ瀧の落ちぬ日ぞなき

〔校異〕1イち。2〔イ〕は。3〔イ〕れカ、〔考〕れ。4〔イ〕を、〔考〕考異より。5イつ。6〔国〕宮の亮。7〔国〕な。8〔イ〕せ。9〔考〕具(くだり)。

待つ瀬といかゞ頼まん由をだにねをとゞめてし別る〔○我身カ〕と思へば

かくてあて宮の御産屋の設け2てふみ。大人童皆白き装束をし3、大宮などあ4昔此方におはして待ち給ふに、十月朔日に男宮生れ給ひぬ。宮より御使立ち帰り5、春宮6母7后おはす。大殿右大將などの御兄妹におはします。その后の宮内裏の所喜び給ふ。皇子の8君御年廿になり給ふ事、人々參り給ひて久しうなりぬるに、まだかゝる事なかりつるを思しつるに、御らひよき所にしも生れ給へる事かなと思して、三日の夜内裏の后の宮より御産養、白銀の透箱十二、御衣十襲、御襁褓十重、沈の衝重9はたに白銀の10けし〔○瓶〕匙坏ども皆同じ物、11いといかめし12うて、錢百貫、大いなる檜破子に13面器入れて、宮の亮を御使にて、后14宮の御消息大宮の御許に、「いと珍らしき事を、先づそれよりしも始め給15ひつるをなむ思ふやうなる心地して嬉しく思ひ給へる。いと羨ましげなる人16々に背物にせさせん。17せき〔○堰カ〕米の下し少し賜はせよ。まことこれは夜居の人々18目覚ましに賜へとてなむ。」と聞え給へり。御使の源に、女の装束もたせて參れる男どもに、きぬ布など品々に賜ひて、黄金の壺の大きなるに、かの御産の米一壺入れて奉れ給ふ。御返り、一畏

〔校異〕1イ宮アリ、2因三字ナシ、イてふゝう、因し給ふ。3因考異てアリ。4因ナシ。5因參るアリ。6因の御アリ。7因后宮。8因宮。9因二十。10因は。11因すみ物アリ。12因來代め。13因來代。14因のアリ。
15因へ。16因ナシ。17因す。18因のアリ。



まりて承りぬ。1珍らしき人は先づ此所にしも物し給ふを、いとも畏く思2ひ給3ふるに、思すやうに4宣はせたるをなむいともく嬉しく思ひ給5へつる。夏6衣は程多くすき〈〇食きカ、過ぎカ〉て、残り少うなり侍りにける7べき世になむ。」と聞え給ふ。

后の宮瑠璃の壺9小さき10皿に入れて、春宮の御局ども11「12これ肴物にし給へ」とて奉13り給へり。14小宮より初めて皆食き給15へ。御使に物かづけ、御消息をかしき様に聞え給ふ中に、大殿の君は投げ散らして宣ふ「誰かその経の食み残しは欲しき。蔦の集め16を生みて、宮の御子と云へば直言17ろとても集め給ふ」など、后の聞れぬばかり口香ち聞りて、かく聞えて返し奉れ給16へ。「19讃ぞずとも頭大きなる子は多く生み侍りぬべくなむ」とて返し奉る。后宮聞し召して、「あはれの人や。心憂く物し給10ひつるかな」と宣ふ。

かくて五日の夜、院の后の宮より同じごといかめしうし給へり。所々より21、

〔〇以下刊本ニナシ、刊本ハ梅ノ花笠ノ巻ノ末ニ三葉程誤リ入レタリ。今諸本ニ従ヒテ此所ニ改メ載ス。異ヲ正本トシテ丑ニヨリテ校シ、又刊本（略符[illegible]）梅ノ花笠ノ巻末ノ文等ヲ参照シテ校異ヲ記セリ〕

校異 1以下十八字[illegible]異ナシ。2[illegible]ら。3[illegible]へ。4イとアリ。5イふ。6丑より。7イ世、[illegible]頭。8[illegible]もアリ。9[illegible]のアリ。10イ皿。11イイにアリ。12[illegible]異二字ナシ。13イれ。14[illegible]四の、[illegible]考異五の、（[illegible]）二の。15イひつ。16イ子アリ。17イか。18イひつ、[illegible]ふ。19[illegible]かうせ。20イ、。21[illegible]もアリ。

いと清らに1數多2に〔○碁〕代などいと多くて、上達部皇子達いと多く物し給へり。御衣御襁褓などみ3る〔○皆〕かづゝき給ふ。七日の夜春宮よりいと清らにいかめしくて、權亮を御使にて御文あ4る。大宮御返6聞え給ふ。7又右大將殿より御前に紫檀の御重甘、8沈の飯笥御坏ども轆轤に挽きて、御衣9襁褓など10か例のごと大11い殿12 13ほと〔○劣〕らずし給へり。頭14中將白銀のいかめしきほと15（ぎ）〔○街〕に七種の御粥入れて、16透しの長び17心〔○櫃〕に据ゑて奉18れ給へり。源19氏20中將又樣變へて21まう22（け）給へり。内裏春宮の殿上人殘る23らなく集ひたり。上達部皇子達さながら劣らず、御前の者云ふばかりなし。碁代二百五十貫積みて、大きなる櫃に入れて出だされたり。上下合はせて二百餘人ばかりあり。上臈24は五貫中臈は三貫下臈は一貫づゝ賜ふ。夜一夜歌ひのゝしりて、皆上達部皇子達より初め奉りて、清らなる25物に御衣26御襁褓添へてかづ27き給ふ。かくて大宮御臍の緒切り給ふ。左大辨殿28北29方御乳付、内藏助の30大貳御湯殿、御文式部31の大輔、御乳母三人、一人は王家統、二人32は大貳の女。御乳付に贈り物夏冬33の御裝束よき衣34綾箱に疊み入れて、式部大輔に女の裝一35具よき馬二つ牛二36。

校異 1図てアリ。2国ご。3国な。4図け。5国り。6国事アリ。7図国ナシ。8図読。9図御アリ。10国は、図ナシ。11図將。12国にアリ。13国お、イを。14図のアリ。15一字イニヨリテ補フ。16イ蘇枋。17イつ。18国り。19図ナシ。20国のアリ。21下三字図考異參らせ。22一字イニヨリテ補フ。23図国者。24国にアリ。25国二字アシ。26国に御アリ、図御アリ。27国け。28図イのアリ。29図国のアリ。30国御許。31図国ナシ。32図が、国ナシ。33図の、国二字ナシ。34図ナシ。35図具。36図国二ツアリ。

〔前田〕1中の大殿、帳立て、あて宮白き御衣著て臥し給へり。乳母も白き綾の袿一襲、白き綾の裳唐衣著3つゝ年廿4の人容貌よし。此所5に人々の奉れ給へる物どもいと多かり。人々物食ふ。大宮女御の酒おはす。物𢌞6り散米したり。式部大輔文讀めり。辨7殿の北8方御乳付に參り給へり。左衛門の尉弓引き給へり。此所は湯殿の所。9介の10大殿生絹の袿湯卷して湯殿に參る。白銀の缶据ゑて御湯殿參る。御むかへ湯11内侍のすけの大殿參り給ふ。とれかれ上達部皇子達殿上人此方におはす。白銀の衝に菲代の餅入れ12つゝ、上達部の御前には13五衝、14殿上人五位には三衝、六位などには一衝づゝ。是15宮の御徒に16物かづけた17り。人18に立ち給へ、19ると、品々物かづ20け給へ21る。

かくて月日經て、宮より頻に召しければ、十二月ばかりに參り給ひぬ。翌くる年の二三月より、又22始め給ひて、男皇子生まれ給ひぬ。御産養前の同じ23事なり。曹しありて24春宮に參り給ひぬ。かくて時めき給ふ事限りなし。

〔○以上国異ニヨリテ補フ〕

文化十二年卯月四日以本居氏本校合畢雅章園

〔校異〕1国此所はアリ。2国てアリ。3国たり。4国ばかりアリ。5国は。6国考異る。7国のアリ。8国のアリ。9国御使。10国御許。11国はアリ。12国てつゝ、国て積む。13国二字ナシ。14国参頭アリ。15国はアリ。16国両御アリ。17国べ。18国々。19国るも、寅り。20国き。21国り。22国学み。23国ごと。24国ナシ。

昭和六年二月二十日印刷
昭和六年二月廿五日發行

日本古典全集
第三期【非賣品】

うつぼ物語
第二

編纂者　正宗敦夫

東京府北豊島郡長崎町一六二
發行者　合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長島東一

裝幀者　廣川松五郎

東京府北豊島郡長崎町一六二
印刷者　不二良版印刷所
高瀬潤吉

發行所
東京府北豊島郡長崎町一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03021 4522

PL
787
U7
1929
v.2